

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第567集

の ^{ざわ} 野沢 I・II 遺跡・戸 ^と ^{ざくら} 桜遺跡・
ふな ^と 舟渡 I 遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査
および緊急地方道路整備事業更木地区関連遺跡発掘調査

2010

岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部
(財)岩手県文化振興事業団

野沢Ⅰ・Ⅱ遺跡・戸桜遺跡・ 舟渡Ⅰ遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査
および緊急地方道路整備事業更木地区関連遺跡発掘調査



遺跡全景(南から)



野沢Ⅱ遺跡から出土した土師器・須恵器



野沢Ⅱ遺跡2号住居跡(土鈴出土状況)



野沢Ⅱ遺跡出土土鈴(左・正面、右・底面)

序

岩手県には旧石器時代から連続と続く数多くの遺跡が残されています。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業および緊急地方道路整備事業に関連して平成20年度に発掘調査を行った北上市更木新田地区に所在する野沢Ⅰ遺跡・野沢Ⅱ遺跡・戸桜遺跡・舟渡Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に平安時代の集落跡が存在していたことが明らかになりました。他には縄文時代の陥し穴状遺構や石甌などの遺物が見つかっており、縄文時代の狩猟場であったことも判りました。

この報告書が広く活用され、新学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室・同土木部、および北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成22年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧 雄

例 言

- 1 本報告書は、岩手県北上市更木新田地区に所在する野沢Ⅰ遺跡・野沢Ⅱ遺跡・戸椋遺跡・舟渡Ⅰ遺跡(岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)・舟渡Ⅱ遺跡(岩手県南広域振興局北上総合支局土木部)の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業および緊急地方道路整備事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室および岩手県南広域振興局北上総合支局土木部との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
- 3 経営体育成基盤整備事業に関わり調査した遺跡は、野沢Ⅰ遺跡・野沢Ⅱ遺跡・戸椋遺跡・舟渡Ⅰ遺跡の4遺跡であり、緊急地方道路整備事業に関わり調査した遺跡は舟渡Ⅱ遺跡である。舟渡Ⅱ遺跡は両事業にまたがって調査されたが、本書での調査報告もそれぞれ分けてある。
- 4 野外調査および室内整理期間、担当者は以下の通りである。

経営体育成基盤整備事業更木新田地区(岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)

遺跡名	遺跡番号 (遺跡略号)	調査期間	調査面積	調査担当者	整備期間	整理担当者
野沢Ⅰ遺跡	ME46-1386 (NZⅠ-08)	平成20年9月1日 ～10月16日	656㎡	須藤 拓・小林弘卓	平成20年11月1日～ 平成21年3月31日	小林弘卓
野沢Ⅱ遺跡	ME46-2306 (NZⅡ-08)	平成20年4月9日 ～10月16日	11,313㎡	須藤 拓・小林弘卓 島巻達人・北村志昭	平成20年11月1日～ 平成20年12月31日	須藤 拓
戸椋遺跡	ME46-1354 (TZ-08)	平成20年6月16日 ～7月31日	2,295㎡	溜浩二郎・吉田幸治	平成20年11月1日～ 平成20年12月31日	吉田幸治
舟渡Ⅰ遺跡	ME46-1390 (FTⅠ-08)	平成20年4月11日 ～7月4日	7,150㎡	溜浩二郎・吉田幸治	平成20年12月1日～ 平成21年1月31日	溜浩二郎

緊急地方道路整備事業更木地区(岩手県南広域振興局北上総合支局土木部)

遺跡名	遺跡番号 (遺跡略号)	調査期間	調査面積	調査担当者	整備期間	整理担当者
舟渡Ⅱ遺跡	ME46-1390 (FTⅡ-08)	平成20年6月2日・ 8月1日～8月12日	453㎡	溜浩二郎・吉田幸治	平成20年11月1日～ 平成21年11月30日	溜浩二郎

- 5 本遺跡の調査成果は、すでに『平成20年度発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集)において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 6 基準点測量・航空写真撮影・および遺物の鑑定、保存処理は次の機関に依頼した。
 - 基準点測量：(株)キタテック
 - 航空写真撮影：東邦航空
 - 石材鑑定：花崗岩協会
 - 火山灰同定：(株)火山灰考古学研究所
 - C14年代測定(AMS測定)：(株)加速器分析研究所
 - 木製品保存処理：岩手県立博物館
- 7 野外調査、室内整理にあたって次の方々の御協力・御指導をいただいた(敬称略)。
 - 山下和寿、北上市教育委員会

8 各章における図版作成、原稿執筆は以下の通りである。

章	図版作成・原稿執筆	備考
第 I 章	岩手県東南広域振興局北上総合支局農村整備課、岩手県東南広域振興局北上総合支局土木部	
第 II 章	滋浩二郎	
第 III～V 章	須原 拓・小林弘幸	分冊については文末に明記
第 VI～VIII 章	吉田康治	
第 IX 章	1 (株) 加速器分析研究所 2 (株) 火山灰考古学研究所	
第 X 章	須原 拓	

報告書内での記載方法については、「例言」、「凡例図(第7図)」、および本文第三章-3の記載を基本とするが、章ごとにより多少の差異がある。その点については各章執筆者に文責がある。

なお、編集は須原が行っている。

- 9 上色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）を使用している。
- 10 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行1：25,000「戸沢」「口内」を使用している。
- 11 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡周辺の地理的環境	1
1	遺跡の位置	1
2	地形と地質	2
3	遺跡周辺の歴史的環境	7
III	調査の経過と方法	11
1	調査の経過	11
2	野外調査の方法	13
3	室内整理の方法	14
IV	野沢 I 遺跡	16
1	遺跡の立地	16
2	基本層序	16
3	調査の概要	16
4	検出遺構と出土遺物	19
5	ま と め	24
V	野沢 II 遺跡	25
1	遺跡の立地	25
2	基本層序	25
3	調査の概要	39
4	検出遺構と出土遺物	39
5	ま と め	136
VI	戸 桜 遺 跡	144
1	遺跡の立地	144
2	基本層序	144
3	調査の概要	144
4	検出遺構と出土遺物	147
5	ま と め	148

VII	舟 渡 I 遺 跡 (県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)	150
1	遺 跡 の 立 地	150
2	基 本 層 序	150
3	調 査 の 概 要	152
4	検 出 遺 構 と 出 土 遺 物	152
5	ま と め	155
VIII	舟 渡 I 遺 跡 (県南広域振興局北上総合支局土木部)	159
1	遺 跡 の 立 地	159
2	基 本 層 序	159
3	調 査 の 概 要	159
4	検 出 遺 構 と 出 土 遺 物	159
5	ま と め	159
IX	自 然 化 学 分 析	161
X	調 査 の 成 果	169
	報 告 書 抄 録	253

図版目次

第1図	遺跡位置図	3	第41図	2号住居跡出土遺物(2)	60
第2図	周辺の地形と調査範囲①	4	第42図	2号住居跡出土遺物(3)	61
第3図	周辺の地形と調査範囲②	5	第43図	3号住居跡	62
第4図	地形分類図	6	第44図	3号住居跡出土遺物	63
第5図	周辺の遺跡分布図	10	第45図	4号住居跡	64
第6図	グリッド配置図	12	第46図	4号住居跡出土遺物	65
第7図	凡例図	15	第47図	5号住居跡(1)	67
<野沢I遺跡>					
第8図	基本土層	16	第48図	5号住居跡(2)	68
第9図	野沢I遺跡遺構配置図	17	第49図	5号住居跡出土遺物	69
第10図	1号焼上遺構、1~5号土坑、1・2号溝	18	第50図	6号住居跡、7号住居跡(1)	71
第11図	3~7号溝	20	第51図	7号住居跡(2)、1号住居跡遺構	72
第12図	4・5号溝出土遺物	21	第52図	7号住居跡出土遺物	73
<野沢II遺跡>					
第13図	基本土層	26	第53図	1号住居跡遺構出土遺物	74
第14図	調査区全体図	28	第54図	1~3号掘立柱建物跡	76
第15図	遺構配置図(A区)	29	第55図	1~5号焼成遺構、7・8号土坑	78
第16図	遺構配置図(B区)	30	第56図	焼成遺構出土遺物	79
第17図	遺構配置図(C区)	31	第57図	9~15号土坑	83
第18図	遺構配置図(D区)	32	第58図	16~22号土坑	86
第19図	遺構配置図(E区)	33	第59図	23~30号土坑	89
第20図	遺構配置図(F区)	34	第60図	31~39号土坑	93
第21図	遺構配置図(G区)	35	第61図	40~46号土坑	96
第22図	遺構配置図(H区)	36	第62図	47~53号土坑	98
第23図	遺構配置図(I区)	37	第63図	54~58号土坑	101
第24図	遺構配置図(J区)	38	第64図	土坑出土遺物	103
第25図	1~6号土坑	40	第65図	竇間状遺構、1・4・5号溝	105
第26図	2・3号土坑出土遺物	41	第66図	2・3号溝	107
第27図	遺構外出土縄文、弥生土器(1)	44	第67図	9号溝出土遺物	109
第28図	遺構外出土縄文、弥生土器(2)	45	第68図	6~12号溝	111
第29図	遺構外出土縄文、弥生土器(3)	46	第69図	13~20号溝	114
第30図	遺構外出土石器(1)	48	第70図	21~29号溝	118
第31図	遺構外出土石器(2)	49	第71図	30~37号溝	121
第32図	遺構外出土石器(3)	50	第72図	38号溝	123
第33図	遺構外出土石器(4)	51	第73図	38・39号溝	125
第34図	遺構外出土石器(5)	52	第74図	40~47号溝	128
第35図	1号住居跡	54	第75図	48~50号溝、1号性格不明遺構	130
第36図	1号住居跡出土遺物	55	第76図	旧河道断面	132
第37図	2号住居跡(1)	56	第77図	遺構外出土土師器、須恵器	137
第38図	2号住居跡(2)	57	<戸板遺跡>		
第39図	2号住居跡(3)	58	第78図	基本土層	144
第40図	2号住居跡出土遺物(1)	59	第79図	遺構配置図	145
			第80図	1~4号溝	146
			第81図	1号陥し穴	148

第82図 出土遺物	149	第89図 出土遺物(3)	158
<舟渡I遺跡(農林部農村整備室)>		<舟渡I遺跡(土木部)>	
第83図 基本土層	150	第90図 基本土層	159
第84図 遺構配置図	151	第91図 調査区全体図・出土遺物	160
第85図 1~4号溝、1号柱穴状上坑	153	<自然科学・考古学分析>	
第86図 5・6号溝	154	第92図 ロクロ・ビットを伴う竪穴住居跡(1)	171
第87図 出土遺物(1)	156	第93図 ロクロ・ビットを伴う竪穴住居跡(2)	172
第88図 出土遺物(2)	157	第94図 北上市域の焼成遺構集成	175

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	9	第14表 石製品観察表	143
<野沢I遺跡>		第15表 鉄製品観察表	143
第2表 遺構名変更表	19	<戸桜遺跡>	
第3表 野沢I遺跡SKP計測表	24	第16表 遺物観察表	149
第4表 遺物観察表	24	<舟渡I遺跡(農林部農村整備室)>	
<野沢II遺跡>		第17表 縄文・弥生土器	158
第5表 遺構名変更表	27	第18表 古代土器観察表	158
第6表 層別縄文・弥生土器出土量	43	第19表 石器観察表	158
第7表 遺構別遺物重量表	53	<舟渡I遺跡(土木部)>	
第8表 野沢II遺跡SKP計測表	133~135	第20表 縄文土器観察表	160
第9表 縄文土器観察表	138~139	<自然科学分析・考古学分析>	
第10表 石器観察表	140	第21表 放射性炭素年代測定結果	162
第11表 古代土器観察表	141~142	第22表 火山灰同定分析結果	168
第12表 土製品観察表	143	第23表 古代土器I線部計測表	170
第13表 木製品観察表	143		

写真図版目次

<野沢Ⅰ遺跡>		写真図版39 畝間状遺構(2) …… 218		
写真図版1 遺跡全景、基本層序 …… 180	写真図版40 溝(1) …… 219	写真図版41 溝(2) …… 220		
写真図版2 1号埴土遺構、1~3号土坑 …… 181	写真図版42 溝(3) …… 221	写真図版43 溝(4) …… 222		
写真図版3 4・5号土坑、1・2号溝 …… 182	写真図版44 溝(5) …… 223	写真図版45 溝(6) …… 224		
写真図版4 3~7号溝 …… 183	写真図版46 溝(7) …… 225	写真図版47 溝(8) …… 226		
<野沢Ⅱ遺跡>		写真図版48 溝(9) …… 227		
写真図版5 調査区 …… 184	写真図版49 溝(10) …… 228	写真図版50 溝(11) …… 229		
写真図版6 基本層序 …… 185	写真図版51 溝(12) …… 230	写真図版52 溝(13) …… 231		
写真図版7 1号住居跡(1) …… 186	写真図版53 溝(14) …… 232	写真図版54 性格不明遺構、凹河道、柱穴状土坑群 …… 233		
写真図版8 1号住居跡(2) …… 187	写真図版55 野沢Ⅰ遺跡出土遺物、野沢Ⅱ遺跡2・3 土坑、遺構外出土縄文土器(1) …… 234	写真図版56 遺構外出土縄文土器(2) …… 235		
写真図版9 2号住居跡(1) …… 188	写真図版57 遺構外出土縄文土器・弥生土器 …… 236	写真図版58 遺構外出土石器(1) …… 237		
写真図版10 2号住居跡(2) …… 189	写真図版59 遺構外出土石器(2) …… 238	写真図版60 1・2号住居跡出土遺物 …… 239		
写真図版11 3号住居跡 …… 190	写真図版61 2号住居跡出土遺物 …… 240	写真図版62 3~5号住居跡出土遺物 …… 241		
写真図版12 4号住居跡(1) …… 191	写真図版63 7号住居跡、1号住居状遺構、埴成遺構出土遺物 …… 242	写真図版64 埴成遺構、土坑、溝、遺構外出土遺物 …… 243		
写真図版13 4号住居跡(2) …… 192	写真図版65 遺構外出土遺物 …… 244	<戸板遺跡>		
写真図版14 5号住居跡(1) …… 193	写真図版66 調査区、基本土層、1号陥し穴 …… 245	写真図版67 1~4号溝 …… 246	<舟渡Ⅰ遺跡(農林部農村整備室)>	
写真図版15 5号住居跡(2) …… 194	写真図版68 調査区全景、現況 …… 247	写真図版69 基本土層、1~3号溝、1号柱穴状土坑 …… 248	写真図版70 4~6号溝、遺物出土状況、調査風景 …… 249	写真図版71 出土遺物(1) …… 250
写真図版16 5・6号住居跡 …… 195	写真図版69 基本土層、1~3号溝、1号柱穴状土坑 …… 248	写真図版72 出土遺物(2) …… 251	<舟渡Ⅰ遺跡(土木部)>	
写真図版17 7号住居跡(1) …… 196	写真図版70 4~6号溝、遺物出土状況、調査風景 …… 249	写真図版73 調査区、基本土層、出土遺物 …… 252		
写真図版18 7号住居跡(2) …… 197	写真図版71 出土遺物(1) …… 250			
写真図版19 1号住居状遺構 …… 198	写真図版72 出土遺物(2) …… 251			
写真図版20 掘立柱建物跡 …… 199	<舟渡Ⅰ遺跡(土木部)>			
写真図版21 埴成遺構(1) …… 200	写真図版73 調査区、基本土層、出土遺物 …… 252			
写真図版22 埴成遺構(2) …… 201				
写真図版23 埴成遺構(3) …… 202				
写真図版24 土坑(1) …… 203				
写真図版25 土坑(2) …… 204				
写真図版26 土坑(3) …… 205				
写真図版27 土坑(4) …… 206				
写真図版28 土坑(5) …… 207				
写真図版29 土坑(6) …… 208				
写真図版30 土坑(7) …… 209				
写真図版31 土坑(8) …… 210				
写真図版32 土坑(9) …… 211				
写真図版33 土坑(10) …… 212				
写真図版34 土坑(11) …… 213				
写真図版35 土坑(12) …… 214				
写真図版36 土坑(13) …… 215				
写真図版37 土坑(14) …… 216				
写真図版38 土坑(15)、畝間状遺構(1) …… 217				

I 調査に至る経過

戸桜・野沢Ⅰ・Ⅱ遺跡は、経営体育成基盤整備事業更木新田地区(以下、更木新田地区)の施行に伴い、その事業区域内に位置することから、工事施行前に発掘調査を実施することとなったものである。

また、舟渡Ⅰ遺跡については、更木新田地区と緊急地方道路整備事業主要地方道北上東和線(仮称)平成橋工区(以下、平成橋工区)の両事業区域内に位置することから、共に平成20年度に発掘調査を実施することとなった。

更木新田地区は北上川左岸に位置し、花巻市東十二丁目の一部と北上市更木からなる受益面積89haの拓けた肥沃な水田地帯であるが、現況は10a程度の小区画水田や幅員狭小な農道、用排水兼用の土偶溝で排水不良等が原因の湿田となっているため、大区画は場整備事業を実施することで農作業機械の大形化や耕地の汎用化を可能にし、更には効率的で安定した経営体への農地集積、高生産性農業の確立、農村環境水準の向上に資することを目的として整備を行っているものである。

また平成橋工区は、北上北工業団地及び北上流通団地への物流機能の向上、岩手県立中部病院へのアクセス機能の充実、通勤・通学の安全性の確保を図るため、新たに北上川を渡河するための橋を計画し、更木新田地区と連携して整備を進めているものである。

更木新田地区及び平成橋工区の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、北上地方振興局農林部農村整備室(現県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)から平成17年10月11日付け北地農整第460号により岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課(以下、生涯学習文化課)へ試掘調査を依頼したのが最初である。以降、数度にわたり試掘調査が行われ、平成橋工区を含めた更木新田地区に分布する舟渡Ⅰ・戸桜・野沢Ⅰ・Ⅱの4遺跡について発掘調査が必要である旨の回答があった。

この結果を踏まえ、生涯学習文化課のもと財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し発掘調査を実施したものである。

(岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室・土木部)

II 遺跡周辺の地理的環境

1 遺跡の位置

野沢Ⅰ遺跡・野沢Ⅱ遺跡・舟渡Ⅰ遺跡・戸桜遺跡が所在する北上市更木新田地区は北上市北東部の北緯39度20分49秒～39度21分09秒、東経141度08分44秒～141度08分58の地点に位置し、北上山地の北西端部、北上川左岸に立地する。遺跡は国土地理院発行の5万分の1地形図「花巻」NJ-54-13-16(盛岡16号)および「北上」NJ-54-14-13(一四13号)の図幅に含まれる。

北上市は県都盛岡市から南方約47kmの距離にあり、総面積は437.55㎡。北に花巻市、南に金ヶ崎町、東に奥州市、西に西和賀町が隣接する。古くから交通の要衝として栄え、藩政時代の黒沢尻は北上川舟運の南部藩最南端の高港であった。平成3年4月に旧北上市、和賀町、江釣子村の3市町村が合併し、現在の北上市となった。

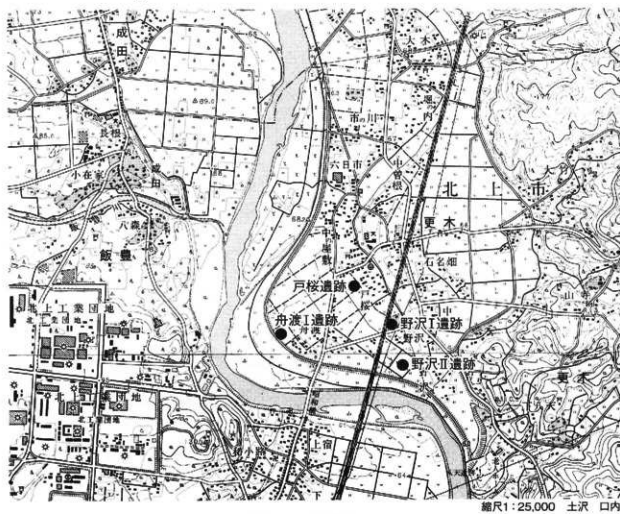
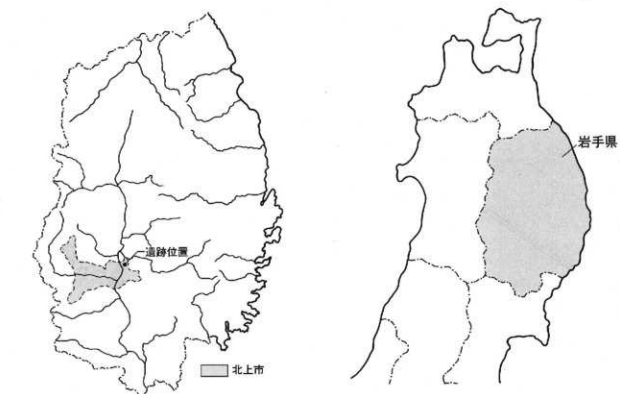
2 地形と地質

遺跡は北上市と花巻市の東側を蛇行し、南流する北上川左岸に立地し、地形的には北上川河谷平野に載る。この平野は北上川の流路変遷の過程を示す谷底平野及び氾濫平野や自然堤防、旧河道などで構成され、一様に低平ではない低地が発達している。この北上川河谷平野を境にして東西で地形は大きく異なり、対照的な様相を呈する。北上川より東側は早池峰山(標高1,914m)を最高峰に剣ヶ峰(1,827m)・中岳(1,679m)・鶏頭山(1,445m)・毛無森山(1,427m)などの高山が東西に連なった「早池峰連峰」を形成する北上山地が広がるが、遺跡周辺は北上山地の西縁丘陵地域で、比較的なだらかな山地が広がり、水乞山(287m)・物見山(294m)・明神岳(356m)・館山(329m)などの低山が概ね標高300m前後、丘陵地は標高150～300mの中小起伏山地帯が広がっている。また地質は花崗岩類・蛇紋岩・安山岩で構成される古生層と砂層・頁岩で構成される鮮新層を基盤とする山地や丘陵地が入り組んで発達している。対して北上川西側は、急峻で起伏の大きな奥羽山脈が分布し、その東側の断崖崖下には奥羽山脈から発した急勾配の支流が北上川へ合流する。ゆえに砂礫の堆積は著しく、扇状地性台地が発達している。

表層地質においても地形同様に北上川河谷平野を境として東西で対照的な様相を呈している。北上山地側では第三紀の安山岩質岩石が大部分を占め、奥羽山脈側では沖積世の砂礫層を挟むように第四紀のロームが広がっている。遺跡のある北上川河谷平野は未固結堆積物である沖積世の砂礫層で構成されている。

参考文献

- 岩手県企画開発室(北上山系開発) 1976 「北上山系開発地域 土地分類基本調査 花巻」
 岩手県企画開発室(北上山系開発) 1976 「北上山系開発地域 土地分類基本調査 北上」



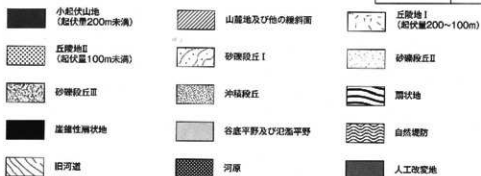
第1図 遺跡位置図



第2図 周辺の地形と調査範囲①



第3図 周辺の地形と調査範囲②



第4図 地形分類図

3 遺跡周辺の歴史的環境

(1) 北上市の遺跡

平成17年3月現在、岩手県教育委員会が作成した『岩手県遺跡情報検索システム（花巻・北上地方振興局管内）』によれば、北上市内では498箇所の遺跡が登録されている。時代別の内訳は旧石器時代3箇所、縄文時代239箇所、弥生時代3箇所、古墳時代が3箇所、奈良・平安時代153箇所、古代19箇所、中世55箇所、近世8箇所等となっており、縄文時代の遺跡が全体の半数近い約48%を占める。遺跡のある北上川の沖積平野上には主に古代の集落遺跡が多く、東側の北上山地縁辺部にあたる丘陵地上には縄文時代の遺跡や中世城館があり、全体としては、沖積平野に占地する縄文時代の遺跡は段丘あるいは山地に位置する遺跡に比べて少ない傾向にある。

(2) 周辺の遺跡

更木地区とその周辺には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多く分布している。特に平安時代の集落跡や中世城館跡が多く見受けられるが、そのなかには縄文時代・弥生時代などを含む複合遺跡もあり、古来より人々が生活の場として利用し続けていたことがわかる。周辺の遺跡分布図（第5図）には今回調査を行った遺跡周辺に分布する北上市に所在する83遺跡を掲載した。

今回、調査を実施した野沢Ⅰ遺跡・野沢Ⅱ遺跡・舟渡Ⅰ遺跡・戸桜遺跡からは、縄文時代の陥し穴状遺構や平安時代の竪穴住居跡などが検出され、縄文時代には狩場、平安時代には生活の場として利用されていたことがわかった。ここでは、更木地区とその周辺の遺跡を中心に時代ごとに概観していきたい。

縄文時代の遺跡で注目されるのは、国指定史跡になっている八天遺跡である。八天遺跡は、縄文時代中期後半から後期にかけての集落跡であり、巨大な円形の大形住居跡や仮面に用いられたと思われる土製の耳・鼻・口といった土製品、大量の焼人骨が発見されている。特に円形大形住居跡は、円形住居としては縄文時代最大級の例である。また、更木地区とは離れるため図には示していないが、北上市の著名な縄文時代の遺跡として、樺山遺跡と九年橋遺跡が挙げられる。樺山遺跡は、北上市稲瀬町に所在し、縄文時代中期の配石遺構群として知られている。九年橋遺跡は、縄文時代晩期後半の遺跡とされ、日常生活を営んでいた痕跡があまりみられないのにも関わらず、大量の土器が出土していることが注目される。土器には日常的に使用されたものと祭祀用のものがあり、他にもさまざまな道具が出土している。更木地区の周辺には、他にも童子洞遺跡、神行田遺跡、根岸遺跡など多くの縄文時代の遺跡が見つかった。

弥生時代から古墳時代・奈良時代には目立った集落跡は見受けられないが、律令国家の支配下に置かれる9世紀以降になると再び北上川流域を中心として多くの集落が営まれるようになる。平安時代の集落跡は9世紀から10世紀にかけてのものが多く、今回調査した遺跡もこの時期に相当し、他にも秋子沢遺跡、下川端遺跡、西川日遺跡、堰向Ⅱ遺跡などの集落跡が存在する。秋子沢遺跡では、竪穴住居跡が16棟検出されており、土師器・須恵器の他に緑釉陶器の破片や刀子、鉄製紡錘車などが出土している。須恵器には、「永」「十」などと墨書されているものもあり、当時の有力者が住む大規模な集落跡であったことがうかがえる。西川日遺跡では竪穴住居跡や掘立柱建物跡など多くの遺構が検出されている。遺物は土師器や須恵器があり、1棟の竪穴住居跡からは上錘が300点近く出土して

いる。環向Ⅱ遺跡でも堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されており、土師器や須恵器の他に施釉陶器や硯など特徴的な遺物が出土しているため、隣接する西川目遺跡とあわせて当時の拠点的な集落であったとされる。また、11世紀には国見山廃寺を中核として寺院が建てられるが、更木地区周辺の古代寺院跡としては大竹廃寺跡と白山廃寺跡がある。大竹廃寺跡は更木地区大竹の標高180mの山頂付近に所在し、桁行5間、梁間4間の巨大な堂宇の跡が検出された。金堂跡と推定されているその堂宇からは、土師器や須恵器、須恵系土器などの遺物の他に鉄鍔も出土している。白山廃寺跡は、白山権現の十一面観音像を鎮守とした寺院である。移動されている礎石もあるが、桁行き約11間、梁行き約5間、礎石が径4尺という瓦葺きの経蔵をもった11世紀頃の寺院であることがわかっている。

中世になると梅ヶ沢館、天王館、下欠野館、三坊木館など中世の城館が多く築かれるようになる。天王館では空堀・主郭・腰郭が、下欠野館では主郭と堀跡が確認されている。また、更木地区には和賀郡を治めていた中世領主である和賀氏の本城であったとされる更木館があったが、開土工事によってその形状が失われているため詳細は不明である。和賀氏は黒岩城から更木館に移り、最後に二子の地に城を構えたといわれている。それが、和賀氏の最後にして最大の城館であった二子城跡(飛勢城跡)である。今回、更木地区と北上川を挟んで対岸にある成田地区で調査した成田岩田堂館遺跡のある地域も、二子城跡の搦手としての機能を果たしていたとされ、古くから馬場野という地名も残っている。また、和賀氏の家臣であった成田藤内の居館があったと伝えられており、建物跡も検出されている。二子城跡は、天正18年(1590年)の奥州仕置によって、和賀氏が追放されるまで本城としての役割を果たしていた。周辺には家臣屋敷や寺社、城下町も存在し、政治的・経済的にも重要な役割を担っていたと考えられている。県内最大の中世墓である五輪壇遺跡は、和賀領主の墓である可能性が高いとされている。土壇の上には五輪塔が建てられ、その土壇の中に何体もの火葬骨がおさめられている。そして、その土壇を囲むように二重の堀が巡るといって大規模な墓である。中世の墳墓には、他にも上川端塚群、四十九里Ⅲ遺跡などがある。上川端塚群は、方形や円形の塚が8基以上現存しており、北葬墓で中世末～近世前半のものだと推定されている。

近世においては、調査例が少なく、調査されていても遺跡内に散在する程度で詳細は不明な場合が多い。ここでは、成田・二子地区にある一里塚についてふれておきたい。県指定史跡の二子一里塚と成田一里塚である。この二つの一里塚は、慶長9年(1604年)に江戸幕府によって全国の主要道路を整備した際に築かれたもので、塚が対になった状態で当初の原形を保ったまま残っている。特に成田一里塚には、塚を築いたときに植えられたとされるエノキが残っており貴重である。全国的にも珍しく、当時の交通史を考えるうえで重要な遺跡である。

参考文献

- 北上市 1968 『北上市史』第1巻 原始・古代(1)
 北上市立博物館 1984 『縄文人の祈り―神山・八天・九年橋―』北上川流域の自然と文化シリーズ(6)
 北上市立博物館 1986 『古代仏教の薫地 国見山極楽寺』北上川流域の自然と文化シリーズ(8)
 北上市立博物館 2000 『和賀氏一族の興亡』(総編) | 岐路の世界と一所懸命の拠点―城館の時代 | 北上川流域の自然と文化シリーズ(21)

第1表 周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物など
1	成田Ⅰ	散布地	古代	土師器、須恵器
2	成田Ⅱ	散布地	古代	土師器、須恵器
3	成田Ⅲ	散布地	平安	土師器
4	小学校西	集落跡	平安	土師器、須恵器、方頭大刀残欠
5	成田一里塚	一里塚	近世	一里塚2基
6	下成田	散布地	平安	縄文土器、須恵器
7	成田館	城跡跡	中世	-
8	成田	散布地	古代・縄文	縄文土器、土師器、須恵器、土坑
9	成田岩田堂	散布地・城跡跡	縄文・古代・中世	縄文土器、石器
10	二子城跡	城跡跡・散布地	中世・縄文	堀、帯郭、縄文土器、陶磁器
11	伊勢	散布地	近世	-
12	秋子沢	集落跡	平安	竪穴住居跡、土師器、須恵器
13	福船	散布地	平安	土師器、竪穴住居跡
14	上川嶋塚	墳墓	中世	墳丘
15	上川嶋Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器
16	上川嶋Ⅱ	散布地	古代	土師器
17	五輪塚	墳墓	中世	土壇、奥溝
18	南田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
19	南田Ⅰ	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器、竪穴住居跡
20	蓮向Ⅰ	散布地	縄文・古代	土師器、須恵器、石匙
21	蓮向Ⅱ	集落跡	古代	土師器、須恵器
22	鳥城Ⅰ	集落跡	古代	土師器、須恵器
23	鳥城Ⅱ	散布地	古代	土師器
24	鳥川Ⅲ	集落跡	古代	土師器、須恵器
25	明神Ⅰ	散布地	古代	土師器
26	明神Ⅱ	散布地	古代	土師器
27	高屋Ⅰ	散布地	古代	須恵器
28	高屋Ⅱ	散布地	古代	須恵器
29	二子一里塚	一里塚	近世	一里塚2基
30	中島	散布地	古代	土師器
31	岡島	散布地	古代	土師器、須恵器
32	福野野	散布地	古代	土師器
33	下川嶋	集落跡	平安	土師器、須恵器
34	沢引	集落跡	平安	土師器、須恵器
35	中村	集落跡	平安	縄文土器、土師器、須恵器
36	野田Ⅰ	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器(後・晩期)、弥生土器、土師器、須恵器
37	中庭Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
38	中庭Ⅳ	散布地	古代	土師器
39	千刈	集落跡	平安	弥生土器、土師器、須恵器
40	大木塚の内	散布地	平安	土師器
41	大竹廣寺跡	寺院跡	平安	土師器、須恵器、鉄鏡
42	山口	散布地	平安	土師器
43	小川園敷	散布地	平安	土師器、須恵器

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物など
44	布の川Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器
45	布の川Ⅱ	散布地	平安・近世	土師器、陶磁器
46	六日市	散布地	平安・近世・弥生	土師器、陶磁器、弥生土器
47	中の屋敷Ⅰ	散布地	平安	土師器
48	中の屋敷Ⅱ	散布地	平安	土師器
49	石名畑	散布地	平安	須恵器
50	大森	散布地	平安	土師器、須恵器
51	釜子洲	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器
52	錦山	散布地	縄文	縄文土器、石器
53	芝木館	城跡跡	中世	礎石、堀切
54	戸塚	散布地	平安・近世・弥生・縄文	土師器、陶磁器、弥生土器、縄文土器
55	舟渡Ⅰ	散布地	縄文・平安	土師器、石器
56	舟渡Ⅱ	散布地	近世	陶磁器(地味器)、置敷跡、墓があったとされる
57	野沢Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器(後期)、土師器、須恵器
58	中宿	散布地	縄文	縄文土器、石皿、石斧
59	野沢Ⅱ	散布地	平安	土師器
60	八天北	散布地	平安	土師器
61	駒ヶ沢塚	城跡跡	中世	-
62	羽久保塚	城跡跡	中世	-
63	天王宮	城跡跡	中世	空堀、土郭・櫓
64	下穴野塚	城跡跡	中世	土郭、堀
65	八天	集落跡	縄文	縄文土器、石器、竪穴住居跡、土敷島
66	平沢堀ノ内	城跡跡	中世	堀
67	三坊木	散布地	平安・縄文	縄文土器、土師器、須恵器
68	二坊木塚	城跡跡・散布地	中世・縄文	縄文土器、土師器、須恵器
69	津沢Ⅰ	散布地	古代	土師器、須恵器
70	津沢Ⅱ	散布地・城跡跡	縄文・中世	縄文土器(中期)
71	神行団	散布地	縄文	縄文土器(中期・晩期)、石器
72	羽島Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、かわらけ
73	羽島Ⅱ	散布地	古代	土師器、須恵器
74	白山廣寺跡	寺院跡	平安	布目瓦、かわらけ、礎石礎物跡
75	栗岩城跡	散布地・城跡跡	縄文・中世・平安	縄文土器(中期)、かわらけ、陶磁器、瓦、土師・外郭
76	栗岩宿	集落跡	縄文・弥生・平安	縄文土器、弥生土器、かわらけ、常滑
77	横岸	散布地	縄文	縄文土器、陶製石押、石押、石匙
78	菅田	集落跡	縄文・古代	縄文土器、フレーク、土師器、須恵器、かわらけ、竪穴住居跡
79	四十九里Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器
80	四十九里Ⅱ	散布地・墳墓	縄文・中世	石皿、塚
81	四十九里Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
82	大平沢	散布地	縄文	縄文土器、フレーク
83	万内	散布地	縄文	石匙、フレーク



第5図 周辺の道跡分布図

1:25,000

Ⅲ 調査の経過と方法

1 調査の経過

- 4月9日 野沢Ⅱ遺跡・舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室分)
調査開始。現場設営・環境整備。
- 4月10日 基準点設置。
(調査区が広いので、調査の進行状況に応じ、順次打設した。)
- 6月2日 舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局土木部分)調査開始。
(ただし6月3日～7月31日は調査を中断した。)
- 6月16日 戸桜遺跡調査開始。
(ただし6月22日～7月5日は調査を中断した。)
- 6月17日 舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室分)航空写真撮影実施。
- 7月4日 舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室分)終了確認。
舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室分)調査終了。
- 7月7日 戸桜遺跡調査再開。
- 7月19日 野沢Ⅱ遺跡遺跡現地説明会(午後1時30分から。参加者65名。)
- 7月28日 野沢Ⅱ遺跡部分終了確認。戸桜遺跡終了確認。
- 7月30日 野沢Ⅱ遺跡航空写真撮影実施。
- 7月31日 戸桜遺跡調査終了。
野沢Ⅱ遺跡にて、事業団事業「子供たちへの招待状事業」対応。
(小学2年1名・6年1名・保護者1名)
- 8月1日 舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局土木部分)調査再開。
- 8月4日 野沢Ⅱ遺跡にて、事業団事業「子供たちへの招待状事業」対応。
(小学6年1名・保護者1名)
- 8月5日 野沢Ⅱ遺跡にて、事業団事業「子供たちへの招待状事業」対応。
(小学6年1名・中学1年1名・保護者1名)
舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局土木部分)航空写真撮影実施。
- 8月12日 舟渡Ⅰ遺跡(県南広域振興局北上総合支局土木部分)調査終了。現場撤収。
- 9月1日 野沢Ⅰ遺跡調査開始。
- 9月25日 野沢Ⅱ遺跡航空写真撮影実施。
- 9月30日 事業団理事長視察。
- 10月6日 野沢Ⅰ・Ⅱ遺跡調査終了確認。
- 10月14日 野沢Ⅰ遺跡航空写真撮影実施。
- 10月16日 野沢Ⅰ・Ⅱ遺跡調査終了。現場撤収。
(*終了確認はいずれも委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの3者による)

2 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

平面直角座標第X系のX = -73,100,000、Y = 26,500,000を原点として100×100mの大グリッドを設定し、これを25等分し、4×4mの小グリッドとしている。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向へI～Ⅴ、東方向へA～K、小グリッドの呼称は南方向へ1～25、東方向へa～yとしている。したがって例えば、小グリッドの呼称はIA1aとなる。

(2) 基準点の設定

遺構の実測に利用するため調査区内に基準点および補助点を打設した。打設については株式会社キタテックに委託した。各基準点および補助点の成果値と杭高は各グリッド配置図(第6図)に示した通りである。これらはいずれも世界測地系によるものである。

(3) 表土除去と遺構の検出

各遺跡の調査に先立って、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の水田・畑・未舗装道路などに盛土・耕作土が厚く堆積し、その下層に古代の遺構・遺物が包蔵されている層が確認されたため、表土除去は重機で行い、その後人力による遺構検出を行った。また、古代の遺構・遺物がない箇所についてはさらに重機で下層まで掘り下げ、縄文時代の遺構・遺物の有無を確認した。

(4) 遺構の精査と実測

検出された遺構については竪穴住居跡は4分法、土坑類・焼土遺構などは2分法で精査し、溝は適宜に土層観察用の断面ベルトを残し、埋土の堆積状況の確認を行いながら掘り下げた。なお、野沢I・II遺跡の遺構名については遺構数が多いので、精査着手順に「SI」「SK」「SD」などを付し番号付けを行った。柱穴状土坑については検出時に柱痕の有無を確認した上で、基本的には断面は実測せず完掘した。遺構名は便宜的にであるが「SKP」を付し、番号付けを行った。平面図の作成は株式会社CUBICの遺構実測支援システムを使用して行った。

(5) 遺物の取り上げ方

遺物の取り上げは遺構内と遺構外に大別し、遺構内出土遺物については遺構名と相対的層位(検出面・上位・中位・下位・底面)を記し、遺構外出土遺物についてはグリッドおよび出土層位を記して取り上げた。また、取り上げに際しては事前に必要に応じて写真撮影を行っている。

(6) 写真撮影

調査記録用に35mmモノクロームとカラーズライド各1台(野沢I遺跡、野沢II遺跡はカラーズライドの代わりにデジタルカメラ)、モノクローム6×7cm判カメラを使用した。また、調査時の補助として小型のデジタルカメラを使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、調査期間中にセスナ機による航空写真撮影を実施した。

3 室内整理の方法

(1) 作業経過

各遺跡の室内整理期間は例言に示したとおりである。出土遺物の洗浄と仕分けは野外調査と平行して現地で行うか、あるいは調査終了後に室内で行った。また、土器の接合・復元作業・実測図作成・拓影作成などの作業は室内において、各遺跡作業員1～2名で行った。整理担当者はこれらの作業の確認・点検と平行して、図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

(2) 遺物

現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、続いて接合・復元を行った。その過程で本書に掲載するものを抽出し、それらの実測図を作成、トレースした。抽出にあたっては遺構内の遺物については小破片でもなるべく掲載するようにした。遺構外の遺物については出土地点・層位などを考慮して選別した。実測と平行して、掲載遺物の写真撮影を行い、合わせて登録作業を行った。

(3) 遺構

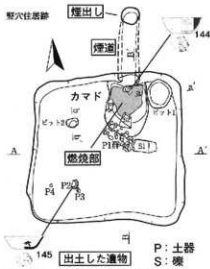
野外調査において遺構実測支援システムを使用して作成した平面図と手作業により作成した断面図とをパソコン上で合成しながら遺構の検討を行った。その後、合成が済んだ遺構図からパソコン上で図版作成を行った。また、野外調査で撮影した遺構の写真も整理し、台帳登録をしている。また野沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の遺構名については名前を変更した(第2・5表参照)。ただし、柱穴状土坑は数が多く、混乱をきたすので、野外調査のままにしている。

(4) 掲載図

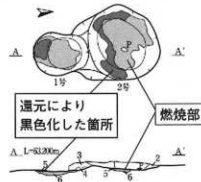
掲載している遺構の縮尺は平面図・断面図ともに堅穴住居跡・住居状遺構は1/40、土坑・焼成遺構・溝状遺構・柱穴状土坑は1/100・1/500を基本とした。また、遺物は土器・木製品は1/3、剥片石器2/3、礫石器1/3を基本とした。ただし、一部異なるものもあるため、各図にスケールおよび縮尺を付した。また、遺構図中において土器は「P」、石器・礫は「S」と表記した。スクリーントーンの使用は凡例図(第7図)のとおりであるが、これ以外の使用については使用箇所を用例を表記した。なお写真図版については縮尺不定である。各遺構の計測値表記については土坑類は長軸×短軸、堅穴住居跡は同時期に使用されているカマドの主軸(煙道部)方向に平行する面×主軸と直交する垂線を有する面である。

掲載遺物に関しては観察表を付した(第8～20表)。法量の計測基準については第7図の通りである。野沢Ⅰ、Ⅱ遺跡の遺物観察表における、焼成については断面を観察し、4段階(良好・やや良好・やや不良・不良)に分けた。また色調は外面について観察し、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993)の色調名を利用した。残存状態の良いものについては容量を計測し、観察表備考欄に記した。なお、容量計測においては島原・村田氏の計測方法を利用した。(島原・村田2007)

遺構

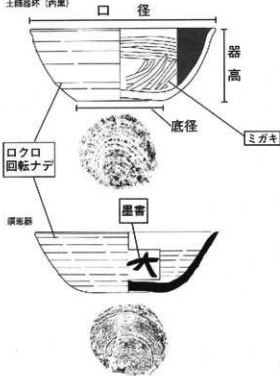


焼成遺構

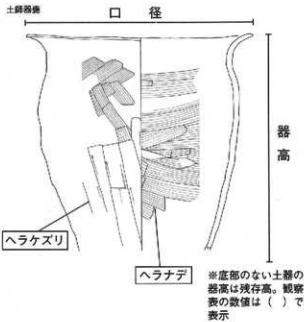


遺物

土師器杯 (内黒)

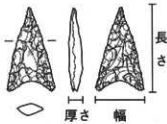


土師器甕

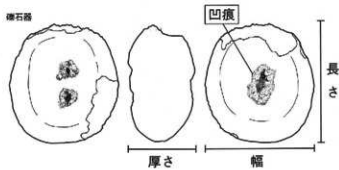


※縄文・弥生土器の計測は土師器甕と同じ

網片石器



礫石器



第7図 凡例図

IV 野沢 I 遺跡

1 遺跡の立地

遺跡は北緯39度20分18秒～39度20分14秒、東経141度9分0秒～141度9分3秒の範囲に位置する。北上市と花巻市の東側を蛇行し南流する北上川左岸に立地し、地形的には北上川河谷平野に載る。標高は31m前後を測る。また、調査前は水田であった。

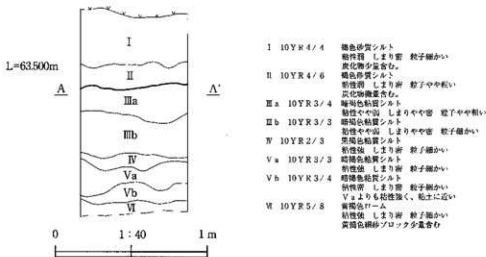
2 基本層序(第9図)

IV I 12 e グリッドに位置する調査区東側壁面を基本土層とした。基本的には隣接する野沢II遺跡と類似する地層であるが、全て一致するわけではない。

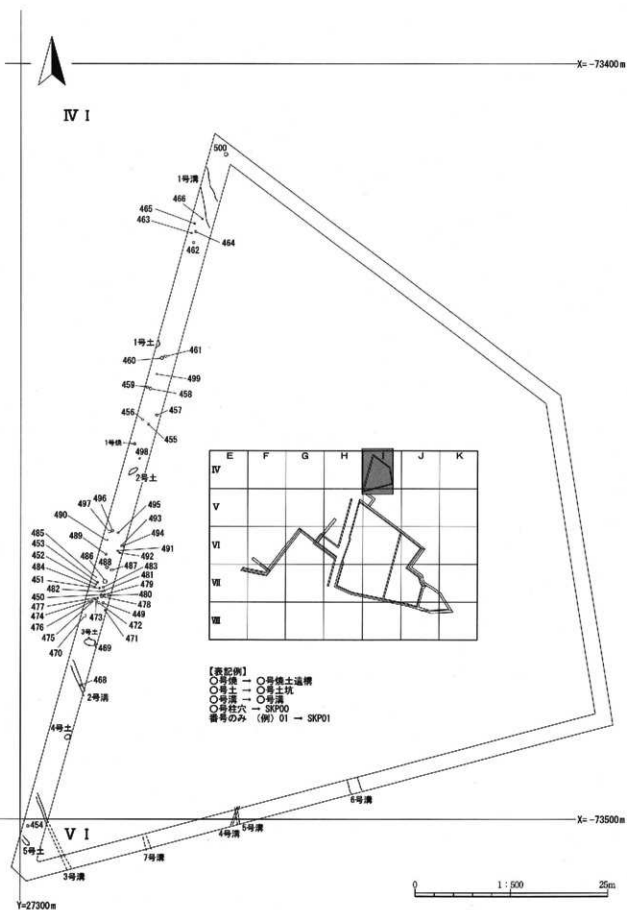
第I層は耕作土であるが、現代のものではないと思われる。野沢II遺跡の第II層と類似している。したがって野沢II遺跡の第I層相当の地層は、本遺跡では近年のほ場整備工事の際に、削平したものである。第II層は北上川の洪水の影響を受けた堆積層と思われ、砂質で炭化物などが混入する。野沢II遺跡のII b層と類似する。第III a・III b層は野沢II遺跡の第IV層に土質や混入物の様相が類似するものの、色調が異なる。第III a層上面で遺構を検出している。第IV層は黒褐色の薄い層で野沢II遺跡の第V層と類似する。野沢II遺跡では、この層上面から縄文時代の遺構を検出したが、本遺跡においては、遺構、遺物ともに見つかっていない。第V a・V b層は暗褐色を呈し、非常に粘性の強い層で、粘土に近い土質である。この層は野沢II遺跡では確認できない堆積層であるが、あえて言えば第VI a・VI b層と類似する。第VI層は黄褐色ローム層で野沢II遺跡の第VI層に類似する。

3 調査の概要

今回は、田区の外周を台形状に一周する水路分が調査対象地である。一辺の長さが20～40m、幅2

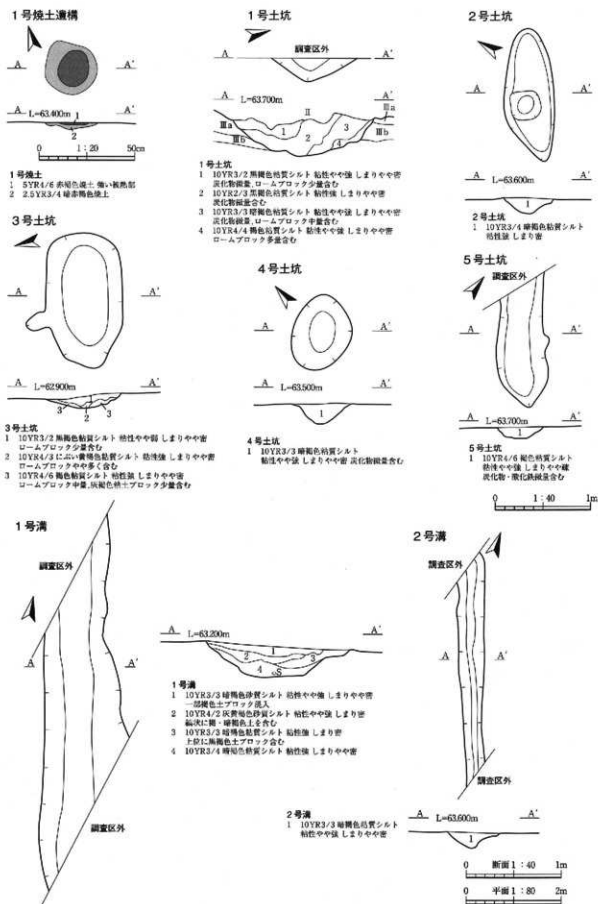


第8図 基本土層



第9図 野沢 I 遺跡遺構配置図

3 調査の概要



第10図 1号焼土遺構、1～5号土坑、1・2号溝

～3mの限られた中で遺構・遺物検出を行った。

調査で見つかった遺構は、土坑5基、焼土遺構1基である。遺物は伴わなかったが、隣接する野沢Ⅱ遺跡と同様の形態を呈する遺構から土師器などが出土しており、古代と推定される。他に時期不明の溝6条、柱穴状土坑47個がある。また調査区内の北西から南東にかけて比較的大きな旧河道がはしており、深さも現地表面から3mをこえていた。旧河道部分では検出面上、埋土中ともに他の遺構や遺物は検出しなかった。

なお、本報告に際し、遺構名は第2表の通りに変更している。

出土した土器は、4・5号溝から土師器・須恵器の小片数点と、遺構外のⅠ層中から陶磁器の小片2.2gが出土したのみである。

4 検出遺構と出土遺物

(1) 焼土遺構

1号焼土遺構(第10図、写真図版2)

<位置・検出状況> ⅣⅠ13dグリッドに位置し、Ⅲa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 径約30cmの円形に焼土が広がる。

<焼土・底面> 焼上面はほぼ平坦である。中央部の被熱が著しく赤褐色を帯びている。焼土の厚さは最厚4cmを測る。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

(2) 土坑

1号土坑(第10図、写真図版2)

<位置・検出状況> ⅣⅠ10eグリッドに位置する。検出面はⅢa層であるが、実際に調査を行った際はⅢb層中での検出となった。そのため、確認できたのは遺構の下位部分にとどまる。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外にかかり、上述のような検出状況であったため、全容は不明な部分が多いが、円形を呈するものと思われる。最も残存しているのは調査区境にみられる断面で、ここにおける規模は開口部径1.5m、深さは最深40cmを測る。

<埋土> 4層に細分される。黒褐色土と暗褐色土を主体とし、北側から流入したものと思われる。

<底面・壁> 底面にはやや凹凸が認められる。断面形は深皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。

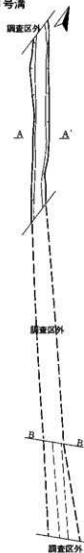
<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

報告遺構名	旧遺構名
1号焼土遺構	SN07
1号土坑	SK71
2号土坑	SK60
3号土坑	SK73
4号土坑	SK72
5号土坑	SK59
1号溝	SD59
2号溝	SD53
3号溝	SD52・55
4・5号溝	SD57・58
6号溝	SD56
7号溝	SD54

第2表 遺構名変更表

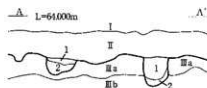
3号溝



3号溝

- 1 10YR4/3 赤褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密
粘性強 しまりやや密

4・5号溝



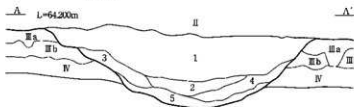
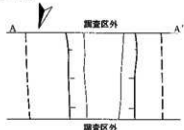
4号溝

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物層を含む
2 10YR5/2 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密

5号溝

- 1 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性なし しまりやや密 大粒径
2 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密

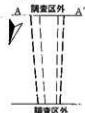
6号溝



6号溝

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密
2 10YR4/2 赤褐色粘質シルト 粘性弱 しまりやや密
3 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密
堆色土粒層を含む
4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
褐色土粒層を含む
5 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
褐色土ブロック多量含む

7号溝



7号溝

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密
2 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 黒褐色土混入



第11図 3～7号溝

2号土坑(第10図、写真図版2)

<位置・検出状況> IV I 14 dグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。

<重複関係> なし。

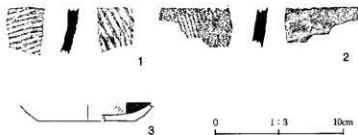
<平面形・規模> 楕円形を呈し、規模は開口部1.4×0.5m、深さは最深16cmを測る。中央には径25cmのビット状に窪む部分があり、深さは最深20cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。



第12図 4・5号溝跡出土遺物

3号土坑(第10図、写真図版2)

<位置・検出状況> IV I 20 cグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 楕円形を呈し、規模は開口部1.45×0.8m、深さは最深15cmを測る。

<埋土> 3層に細分される。黒褐色粘質シルトが主体である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

4号土坑(第10図、写真図版3)

<位置・検出状況> IV I 23 bグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 楕円形を呈し、規模は開口部0.8×0.6m、深さは最深21cmを測る。

<埋土> 暗褐色粘質シルトの単層である。

<底面・壁> 底面は中央が窪む。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

(3) 溝

1号溝(第10図、写真図版3)

<位置・検出状況> VI 4 f~6 gグリッドに位置し、Ⅲa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではやや蛇行するものの概ね直線に延びる。軸線方向はN-13°-W、規模は検出部分で長さ5.3m、幅1.2~1.7m、深さは最深40cmを測る。

<埋土> 4層に細分される。上位には砂質土が流入する。

<底面・壁> 底面は南東に向かって低位となる。断面形は椀状を呈し、上位ではやや外傾して立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の南東延長線上に6号溝が位置している。調査外区域を大きく含むため詳細は不明だが、規模・形状等も近似することから本遺構と同一遺構の可能性がある。

2号溝(第10図、写真図版4)

<位置・検出状況> V I 20 b ~ 21 c グリッドに位置し、Ⅲ a 層で検出した。

<重複関係> SKP468と重複する。本遺構の精査後底面で検出したため、本遺構の方が古いと思われる。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では概ね直線に延びる。軸線方向はN-22°-W、規模は検出部分で長さ4.5m、幅40~60cm、深さは最深16cmを測る。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の南東延長線上に7号溝が位置している。規模・形状等からも本遺構と同一遺構と考えられる。

3号溝(第11図、写真図版4)

<位置・検出状況> IV I 25 a ~ V I 2 b グリッドに位置し、検出面はⅢ a 層であるが、調査区外を一旦挟んで南東側は、Ⅲ b 層中での検出となったため平面上では確認できず、調査区境の断面により確認し、推定したものである。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では概ね直線に延びる。軸線方向はN-24°-W、規模は検出部分で長さ10.7m、幅25~40cm、深さは最深31cmを測る。

<埋土> にぶい黄褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は南東方向に向かって低位となる。断面形はU字状を呈し、直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

4号溝(第11図、写真図版4)

<位置・検出状況> IV I 25 h ~ V I 1 g グリッドに位置する。検出面はⅢ a 層であるが、調査においてはⅢ b 層中での検出となったため平面上では確認できず、調査区境の断面により確認し、推定したものである。

<重複関係> 5号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 上述のような検出状況のため詳細は不明である。調査区境にみられる断面をもとに推測すると、軸線方向はN-20°-Eにある。規模は長さ2.7m以上、幅25cm程度が推測される。深さは最深31cmを測る。

<埋土> 上位の暗褐色土と下位の黒褐色土の2層に分別される。

<底面・壁> 調査区境の断面より、底面は南方向に向かって低位となるものと思われる。断面形はU字状を呈し、直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。
 <時期> 不明である。

5号溝(第11図、写真図版4)

<位置・検出状況> IV・V I 25 h グリッドに位置する。検出面はⅢ a層であるが、調査においてはⅢ b層中での検出となったため平面上では確認できず、調査区境の断面により確認し、推定したものである。

<重複関係> 4号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 上述のような検出状況のため詳細は不明である。調査区境にみられる断面をもとに推測すると、軸線方向はN-9°-Wにある。規模は長さ2.3m以上、幅30cm程度が推測される。深さは最深17cmを測る。

<埋土> 上位の褐色土と下位の暗褐色土の2層に分別される。

<底面・壁> 調査区境の断面より、底面は南方向に向かって低位となるものと思われる。断面形は歪なU字状を呈し、直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> 埋土中より土師器片が3点出土している。

<時期> 不明である。

6号溝(第11図、写真図版4)

<位置・検出状況> IV I 24 k ~ 25 I グリッドに位置する。検出面はⅢ a層であるが、調査においてはⅢ b層中での検出となったため遺構下部のみが確認された。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では概ね直線に延びる。軸線方向はN-15°-Wにある。規模は検出部分で長さ1.8m、幅は調査区境の断面から2.8mが推測される。深さは最深80cmを測る。

<埋土> 5層に細分される。上位の暗褐色土が主体で、中位には黄褐色砂質土、下位には黒褐色土が堆積する。

<底面・壁> 底面は北に向かって低位となる。断面形は皿状を呈し、底面から緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の北西延長線上に1号溝が位置している。調査外区域を大きく扶むため詳細は不明だが、規模・形状等も近似することから本遺構と同一遺構の可能性がある。

7号溝(第11図、写真図版4)

<位置・検出状況> V I 25 e グリッドに位置する。検出面はⅢ a層であるが、調査においてはⅢ b層中での検出となったため平面上では確認できず、調査区境の断面により確認し、推定したものである。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 上述のような検出状況のため詳細は不明である。調査区境にみられる断面をもとに推測すると、軸線方向はN-18°-Wにある。規模は検出部分で長さ1.9m、幅45~70cmが推測される。深さは最深38cmを測る。

<埋土> 2層に細分されるが、いずれも暗褐色土である。

<底面・壁> 底面は北西に向かって低位となる。断面形は歪な碗状を呈し、直角に近い角度で立ち上がる。
 <出土遺物> なし。
 <時期> 不明である。
 <その他> 軸線の北西延長線上に2号溝が位置している。規模・形状等からも本遺構と同一遺構と考えられる。

5 ま と め

野沢Ⅰ遺跡から検出した遺構群は伴う遺物が少なく、性格、時期ともに不明なものが多い。しかし溝は、野沢Ⅱ遺跡から続くものと推定され、また土坑群は野沢Ⅱ遺跡から検出された土坑とほぼ同形態のものが多い。したがって、本遺跡は野沢Ⅱ遺跡と同一の性格をもつ遺跡と考えられ、遺構群は野沢Ⅱ遺跡で見つかった古代集落に関連するものと思われる。

第3表 野沢Ⅰ遺跡SKP計測表

SKP名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	SKP名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	SKP名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
SKP449	29	28	—	SKP466	19	16	9	SKP484	19	15	6
SKP450	24	23	—	SKP468	31	19	20	SKP485	17	—	20
SKP451	19	16	—	SKP469	51	—	15	SKP486	54	50	13
SKP452	19	17	—	SKP470	39	—	25	SKP487	37	25	15
SKP453	20	19	—	SKP471	23	17	23	SKP488	42	29	15
SKP454	34	33	52	SKP472	32	28	10	SKP489	27	22	12
SKP455	26	23	7	SKP473	29	25	20	SKP490	14	—	11
SKP456	30	23	23	SKP474	16	15	20	SKP491	19	16	13
SKP457	34	27	13	SKP475	16	13	14	SKP492	18	17	27
SKP458	38	27	17	SKP476	14	11	8	SKP493	22	18	10
SKP459	29	27	19	SKP477	19	13	23	SKP494	29	16	25
SKP460	41	40	19	SKP478	55	35	18	SKP495	22	17	26
SKP461	35	30	15	SKP479	22	17	27	SKP496	35	27	11
SKP462	32	27	15	SKP480	30	25	20	SKP497	41	32	11
SKP463	21	18	13	SKP481	22	22	23	SKP498	22	21	49
SKP464	29	25	22	SKP482	16	15	18	SKP499	22	19	22
SKP465	20	19	11	SKP483	29	23	10	SKP500	49	45	17

※ SKPの番号は野沢Ⅱ遺跡のSKPと連番になっている。

第4表 遺物観察表

掲載番号	遺構名	種別・器理	部位	分類	法量(cm)			調整技法			焼成	色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
1	4・5溝	須恵器 甕	胴部片	—	—	—	—	タタキ	タタキ	—	良好	灰	
2	4・5溝	須恵器 甕	胴部片	—	—	—	—	回転ナデ	タタキ	—	良好	灰	
3	4・5溝	土師器 甕(内黒)	底部片	—	—	—	—	ミガキ	回転ナデ?	糸切り	良好	明黄褐	

V 野沢Ⅱ遺跡

1 遺跡の立地

遺跡は北緯39度20分14秒～39度20分9秒、東経141度9分9秒～141度8分48秒の範囲に位置する。北上市と花巻市の東側を蛇行し南流する北上川左岸に立地し、地形的には北上川河谷平野に載る。標高は31m前後を測る。また調査前は水田であった。

2 基本層序

調査区域は東西約200m、南北約150mの広範囲にわたっており、調査区が広いため土層の堆積様相が場所によって異なる。そのうちの5箇所の基本層位を図示した(第13図)。

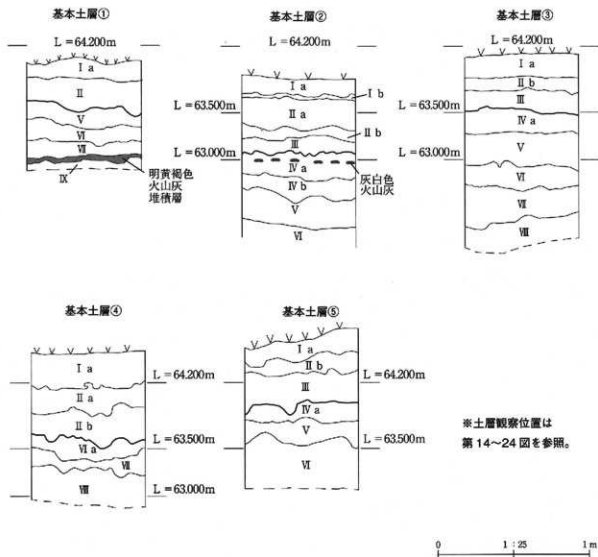
遺構検出は、古代がⅣa層上面、縄文時代がⅥ層上面である。また溝などの古代以降に帰属する遺構はⅣa層で検出したが、本来それよりも上位層に位置するものと考えられる。調査区域全体では、近現代の擾乱(Ⅰ・Ⅱ層)によりかなり削平の及ぶところもあり、上記の検出層が残っていない場所もある。また古代検出面より上層のⅢ層からは土師器・須恵器が含まれるので古代の遺物包含層と考えている。ただし縄文土器や弥生土器も混入しており、純粋な包含層であるかは定かでない。

古代の遺構はⅣa層上位層で検出した。遺構はⅢ層との境界付近ではなく、それよりもやや下がったところで見つかり、従ってⅣa層はさらに細分できる可能性がある。ただし調査時の土層観察においては、その細分層を識別できなかったため、ここでは古代遺構検出面からやや上位まで含めて同一層とした。また遺構検出面付近からは灰白色の火山灰がブロック状に点在しているのが認められた。火山灰は同定分析を行っており、その結果から西暦915年に降下したものと推定される十和田aテフラであることが判明している(第Ⅸ章参照)。

縄文時代の遺構はⅥ層上面で検出した。ただし遺構の分布は調査区域の北端に相当するⅤⅠ、ⅤⅡ、ⅣⅢグリッドのみで見つかったにすぎない。また遺構検出面より上の位置にあたるⅤ層からは縄文土器や石器が見つかり、遺物包含層と判断するが、出土量は微量で、全く出土しない場所が大半を占めている。縄文時代の遺構の底面あるいは壁面に相当するⅥ層下位には明黄褐色火山灰層がブロック状に堆積しており、同定分析結果で十和田中探テフラであることが判明した(第Ⅸ章参照)。ただしこの層の前後から遺物は見つからない。

野沢Ⅱ遺跡の土層堆積で特徴的なのは、Ⅱ～Ⅴ層中に炭化物が多く混入する点である。遺構・遺物の有無にかかわらず混入するため、本来、遺構プランの検出の際に目安の一つとなるべき、炭化物の広がりや当てにならず、遺構検出が困難であった。人為による遺構が無い場所の堆積土から炭化物が多くみつかる理由は定かではない。北上川の洪水と何らかの関係があるのだろうか。

調査時、土層観察の際は遺物や炭化物の混入しないⅥ層・Ⅶ層まで掘り下げている。これより下位は同じ砂質シルトあるいはローム層であり、砂礫層はさらに下であると考えられる。

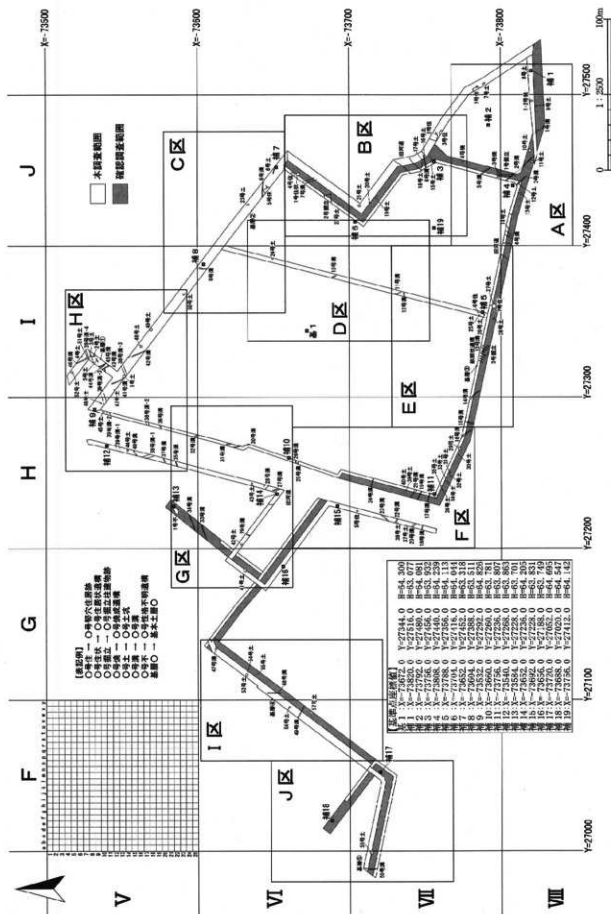


- I a 10 Y R 4 / 2 灰黄褐色砂質シルト 粘性强 しまりやや密 粒子細かい 酸化鉄少量含む。(新沖土)
- I b 10 Y R 4 / 3 濃い黄褐色砂質シルト 粘性强 しまりやや密 酸化鉄多量含む。
- II a 10 Y R 4 / 3 濃い黄褐色砂質シルト 粘性强 しまり密 酸化鉄多い
- II b 10 Y R 3 / 4 暗褐色砂質シルト 粘性强 しまり密 礫物多量、粘土・炭化物微量含む。
- III 10 Y R 3 / 2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密 粒子やや細かい 礫物多量含む。
- IV a 10 Y R 4 / 4 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物微量含む。下部で灰白色火山灰のブロックが埋積する。
- IV b 10 Y R 3 / 4 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまり密 粒子細かい 炭化物微量含む。V層との移行層
- V 10 Y R 2 / 3 黒褐色粘質シルト 粘性强 しまり密 粒子細かい 粘土・炭化物少量含む 純土・強土層が混入する層(土層は少量)
- VI 10 Y R 3 / 3 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまり密 粒子細かい (縄文時代最晩期出露)
- VI 10 Y R 4 / 4-5 / 6 褐色-黄褐色砂質シルト 粘性やや強 しまりやや密 粒子やや細かい 礫物によっては砂質シルトに近い。
- VII 10 Y R 5 / 4 濃い黄褐色ローム 粘性强 しまり密 粒子細かい 下部に明黄褐色火山灰のブロックが埋積する。

第13図 基本土層

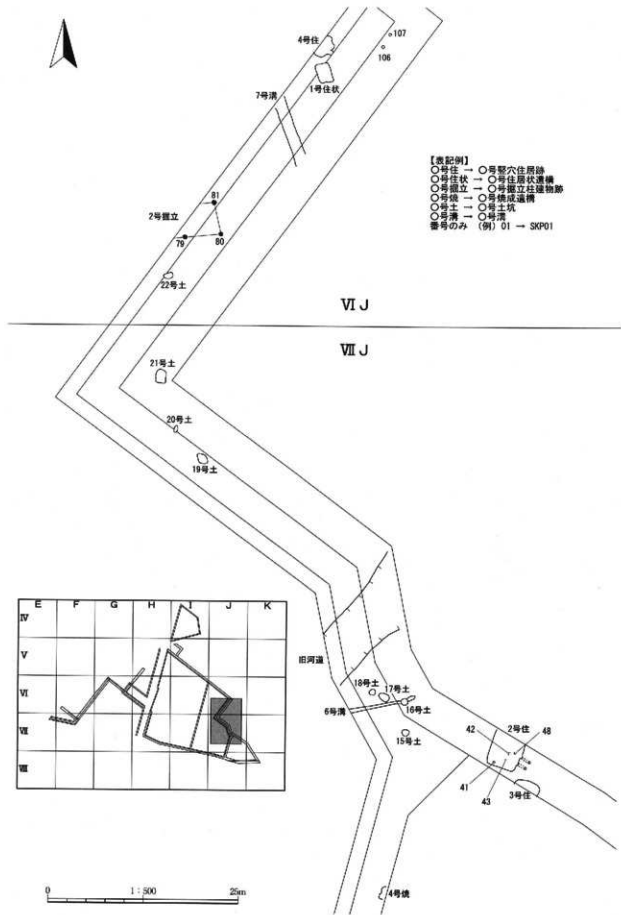
第5表 遺構名変更表

区域	報告遺構名	旧遺構名	区域	報告遺構名	旧遺構名	区域	報告遺構名	旧遺構名
A	1号竪穴住居跡	SI02	F	30号土坑	SK25	E	14号溝	SD11
B	2号竪穴住居跡	SI04	F	31号土坑	SK29	E	15号溝	SD13
B	3号竪穴住居跡	SI05	F	32号土坑	SK31	F	16号溝	SD12
B	4号竪穴住居跡	SI06	F	33号土坑	SK26	F	17号溝	SD15
C	5号竪穴住居跡	SI07	F	34号土坑	SK33	F	18号溝	SD15B
E	6号竪穴住居跡	SK102	F	35号土坑	SK32	F	19号溝	SD16
E	7号竪穴住居跡	SI08	F	36号土坑	SK34	F	20号溝	SD21
B	1号住居状遺構	SK101	F	37号土坑	SK40	F	21号溝	SD17
A	1号竪立柱建物跡	SB01	F	38号土坑	SK41	F	22号溝	SD17B
B	2号竪立柱建物跡	—	F	39号土坑	SK35	F	23号溝	SD25
E	3号竪立柱建物跡	—	F	40号土坑	SK36	F	24号溝	SD18
A	1・2号焼成遺構	SN03・04	G	41号土坑	SK46	F	25号溝	SD27
A	3号焼成遺構	SN02	G	42号土坑	SK47	F	26号溝	SD26
A・B	4号焼成遺構	SN01	G	43号土坑	SK52	G	27号溝	SD34
F	5号焼成遺構	SN05	H	44号土坑	SK51	G	28号溝	SD36
H	1号土坑	SK67	H	45号土坑	SK38	G	29号溝	SD33
H	2号土坑	SK58	H	46号土坑	SK54	G	30号溝	SD24
H	3号土坑	SK55	H	47号土坑	SK68	G	31号溝	SD23
H	4号土坑	SK64	H	48号土坑	SK56	G	32号溝	SD22
H	5号土坑	SK66	H	49号土坑	SK69	G	33号溝	SD32
C	6号土坑	SK19	C・H	50号土坑	SK57	G	34号溝	SD31
A	7号土坑	SK01	H	51号土坑	SK61	G・H	35号溝	SD37
A	8号土坑	SK09	H	52号土坑	SK63	H	36号溝	SD20
A	9号土坑	SK08	I	53号土坑	SK48	H	37号溝	SD38
A	10号土坑	SK04	I	54号土坑	SK49	H	38号溝-1	SD40
A	11号土坑	SK03	I	55号土坑	SK50	H	38号溝-2	SK42
A	12号土坑	SK06	I	56号土坑	SK43	H	38号溝-3	SD47
A	13号土坑	SK05	I	57号土坑	SK45	H	39号溝-1	SD41
A	14号土坑	SK07	J	58号土坑	SK44	H	39号溝-2	SD19
B	15号土坑	SK11	E	竅間状遺構	竅間状遺構	H	39号溝-3	SD46
B	16号土坑	SK10	A	1号溝	SD01	H	39号溝-4	SD45
B	17号土坑	SK12	A	2号溝	SD02	H	40号溝	SD39
B	18号土坑	SK13	A	3号溝	SD03	H	41号溝	SD42
B	19号土坑	SK14	A	4号溝	SD05	H	42号溝	SD49
B	20号土坑	SK15	A	5号溝	SD01-2	H	43号溝	SD43
B	21号土坑	SK16	B	6号溝	SD04	H	44号溝	SD48
B	22号土坑	SK17	B	7号溝	SD06	H	45号溝	SD50
C	23号土坑	SK20	C	8号溝	SD10	H	46号溝	SD44
C・D	24号土坑	SK18	C	9号溝	SD51	I	47号溝	SD35
E	25号土坑	SK23	D	10号溝	SD07	I	48号溝	SD29
E	26号土坑	SK22	D・E	11号溝	SD08	I	49号溝	SD30
E	27号土坑	SK21	D・E	12号溝	SD09	J	50号溝	SD28
E	28号土坑	SK24	E	13号溝	SD14	G	1号性格不明遺構	SK02
F	29号土坑	SK30						

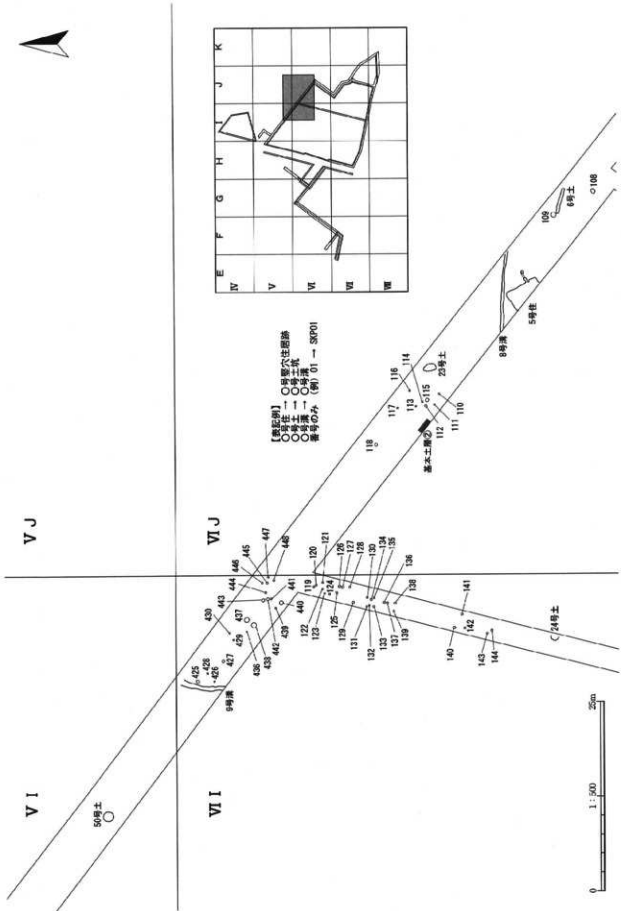


【確認調査範囲】			
1	X=73072.0	Y=27012.0	B=94.200
2	X=73072.0	Y=27012.0	B=93.851
3	X=73072.0	Y=27012.0	B=93.501
4	X=73072.0	Y=27012.0	B=93.151
5	X=73072.0	Y=27012.0	B=92.801
6	X=73072.0	Y=27012.0	B=92.451
7	X=73072.0	Y=27012.0	B=92.101
8	X=73072.0	Y=27012.0	B=91.751
9	X=73072.0	Y=27012.0	B=91.401
10	X=73072.0	Y=27012.0	B=91.051
11	X=73072.0	Y=27012.0	B=90.701
12	X=73072.0	Y=27012.0	B=90.351
13	X=73072.0	Y=27012.0	B=90.001
14	X=73072.0	Y=27012.0	B=89.651
15	X=73072.0	Y=27012.0	B=89.301
16	X=73072.0	Y=27012.0	B=88.951
17	X=73072.0	Y=27012.0	B=88.601
18	X=73072.0	Y=27012.0	B=88.251
19	X=73072.0	Y=27012.0	B=87.901
20	X=73072.0	Y=27012.0	B=87.551

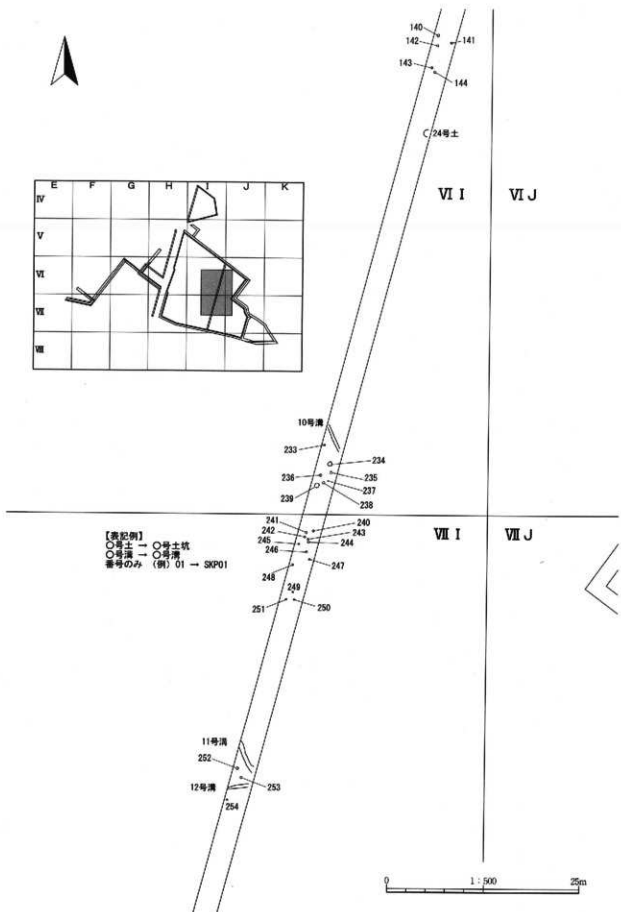
第14図 調査区全体図



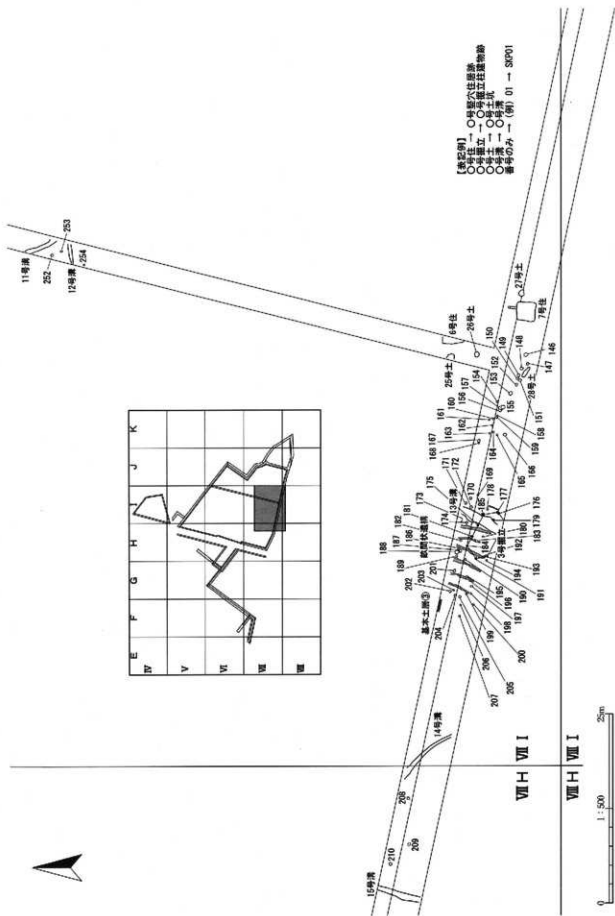
第16図 遺構配置図(B区)



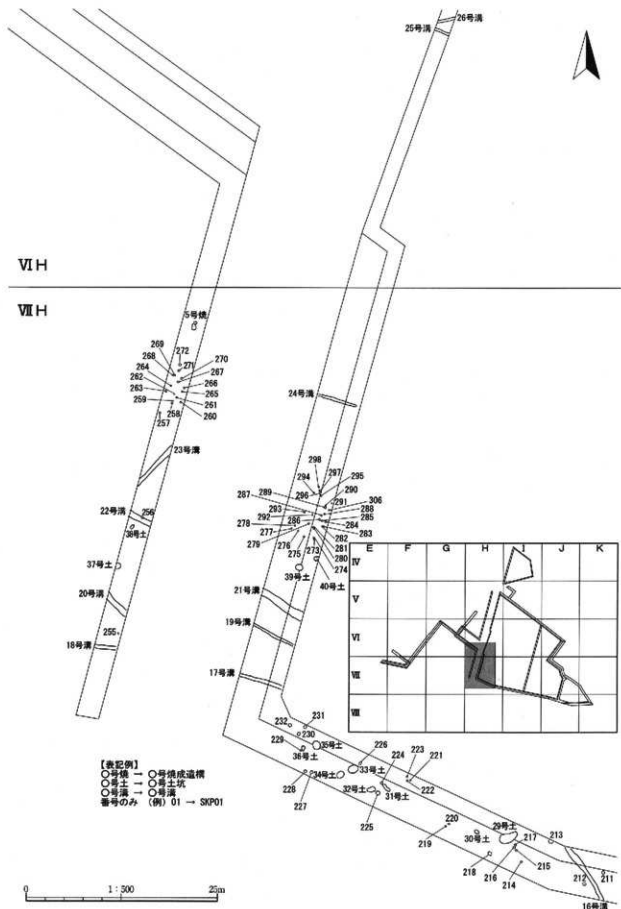
第17図 遺構配置図(C区)



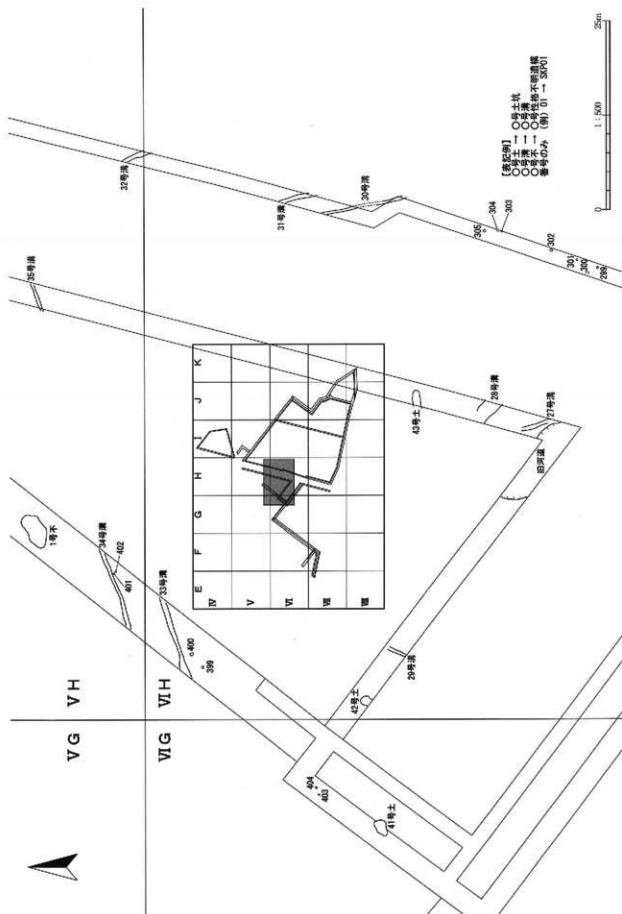
第18図 遺構配置図(D区)



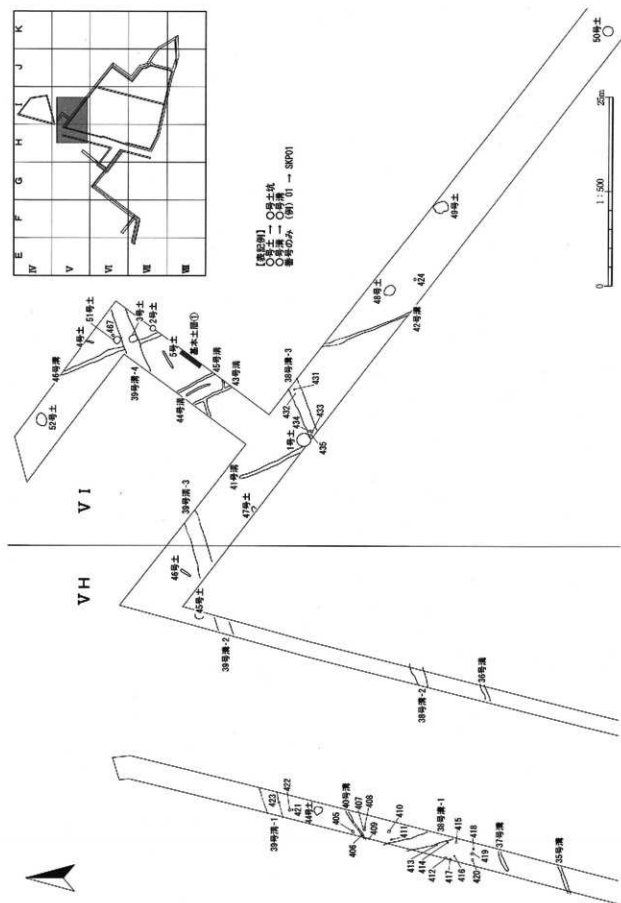
第19図 遺構配置図(E区)



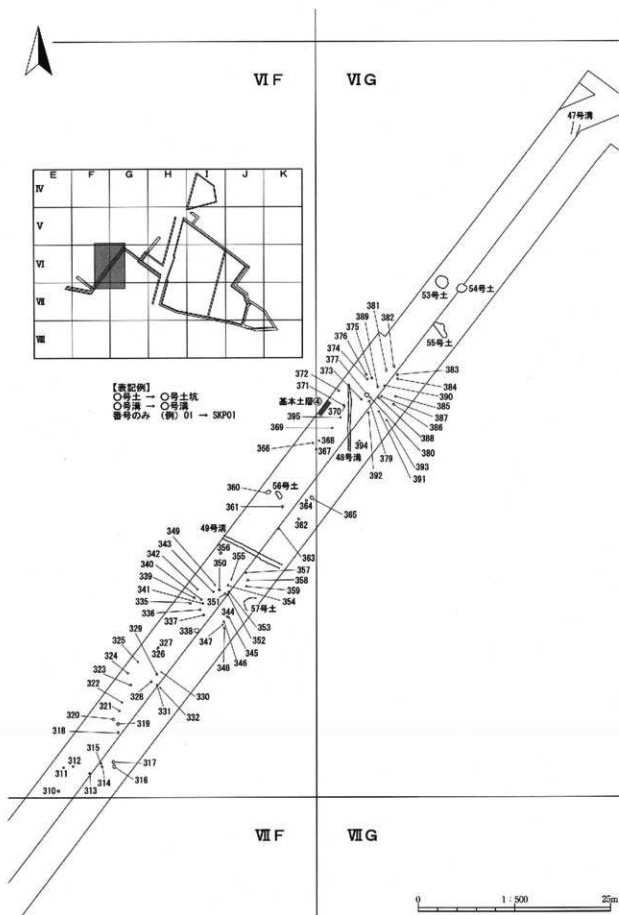
第20図 遺構配置図 (F区)



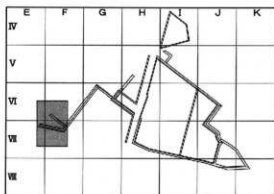
第21回 遺構配置図(G区)



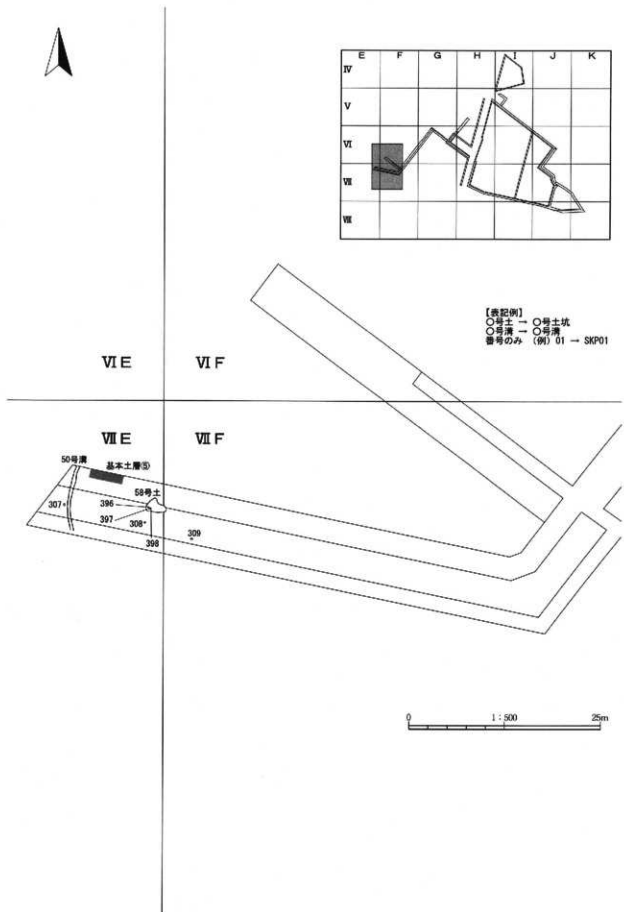
第22図 遺構配置図(H区)



第23図 遺構配置図(Ⅰ区)



【表記例】
○号土 ー ○号土坑
○号溝 ー ○号溝
番号のみ (例) 01 ー SKP01



第24図 遺構配置図(J区)

3 調査の概要(第14～24図)

今回は田区を外周するように設置される水路分が調査区である。したがって調査区幅2～9mの限られた中で遺構・遺物検出を行った。見つかった遺構は、縄文時代の土坑6基、平安時代(9世紀後半)の竪穴住居7棟、住居状遺構1棟、土坑52基、焼成遺構4基、畝間状遺構と、おそらく近世以降と推定される掘立柱建物跡3棟、時期不明の溝50条である。このように複数の時代の遺構が見つっているが、最も多いのは平安時代に帰属する遺構である。

出土遺物は大きコンテナ(40ℓ)で9箱分出土した。内訳は土器が縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器で、土師器が主体で、9世紀後半に帰属するものが多い。また9世紀ごろのものと推定される土鈴1点が出土している。

なお、本報告にあたり、調査時に記した遺構名を第5表のとおりに変更した。

4 検出遺構と出土遺物

①縄文・弥生時代

今回の調査で縄文時代に帰属する土坑6基を検出した。また遺構外から縄文土器・弥生土器、石器が出土している。

土坑

1号土坑(第25図、写真図版24)

<位置・検出状況> V I 13 d グリッドに位置する。V層上面で検出した。

<重複関係> 38・41号溝と重複する。いずれの遺構よりも本遺構の方が古い。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は1.87×1.78m、深さは最深40cmを測る。

<埋土> 2層に分けられるが、黒褐色粘質シルト(1層)が主体であり、底面付近に暗褐色粘質シルトが薄く堆積する。

<底面・壁> 基本層序Ⅶ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。外へと広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、遺構検出面が他の縄文時代の遺構と同じであることや埋土の様相から縄文時代の遺構と判断した。(須原)

2号土坑(第25・26図、写真図版24・55)

<位置・検出状況> V I 8 h グリッドに位置し、V層で検出した。検出当初は、焼土塊が散在していたことから焼成遺構的なものと捉えたが、精査の結果、これらが現地性でないこと、定形的な掘り込みを有することから、土坑と判断した。

<重複関係> なし。

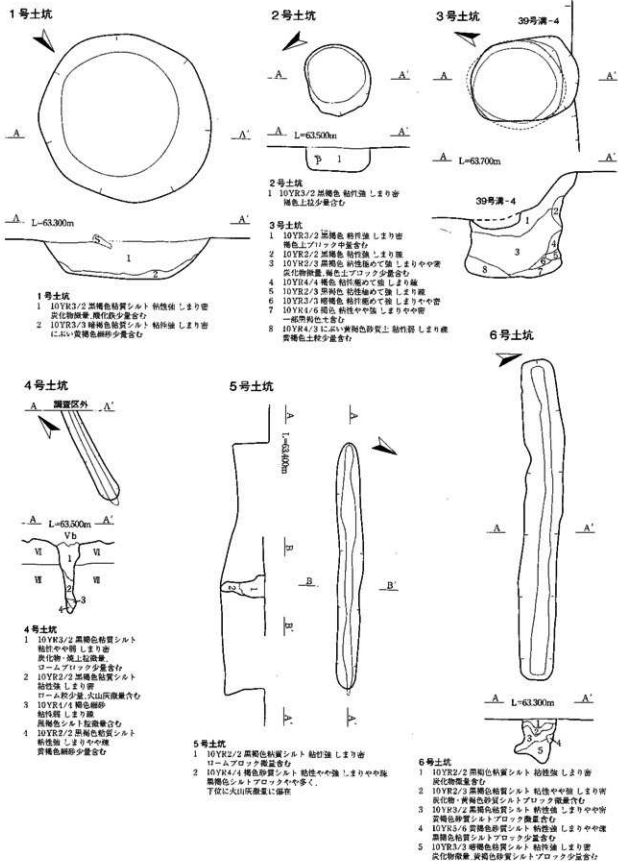
<平面形・規模> やや不整であるが円形を基調とし、開口部径0.65～0.75m、深さは最深25cmを測る。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。壁はほぼ直角に立ち上がる。

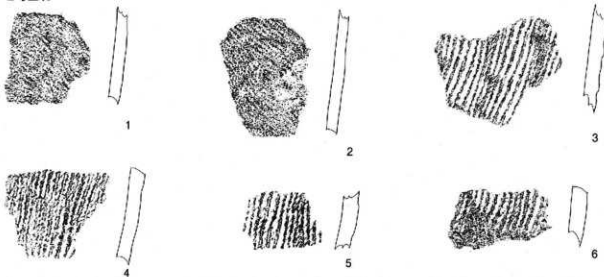
<出土遺物> 埋土及び周辺から同一個体と思われる縄文土器片が出土している。

4 検出遺構と出土遺物

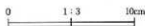


第25図 1~6号土坑

2号土坑



3号土坑



第26図 2・3号土坑出土遺物

<時期>出土遺物から、縄文時代の遺構と思われる。

3号土坑(第25・26図、写真図版24)

<位置・検出状況> VI 8 g グリッドに位置する。39号溝-4 精査時において、底面に黒褐色土の円形プランが広がることから、本遺構の存在を認識した。検出面はV層面に対応する。

<重複関係> 39号溝-4と重複する。上述のように、平面関係において本遺構が切られているため、本遺構の方が古い。

<平面形・規模> 現況は歪だが、本来は円形を呈するものと思われる。開口部径1.1m、底部径0.9~1.0m、深さは最深1.1mを測る。

<埋土> 8層に細分される。層位状況から、少なくとも下位は人為堆積と考えられる。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。断面形は中位より下位が外側に広がる袋状を呈する。

<出土遺物> 埋土上位から縄文土器片が数点出土している。

<時期・用途> 出土遺物や形状がフラスコ状を呈することから、縄文時代の貯蔵穴と思われる。

(小林)

4号土坑(第25図、写真図版24)

<位置・検出状況> VI 6 g グリッドに位置する。VI層上面で検出した。本遺構は北側半分が調査区外に及んでいる。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 溝状を呈し、規模は1.02m×0.20m、深さは70cmを測る。軸線方向はN-12°-

Eである。

<埋土> 4層に分けられ、黒褐色粘質シルトが主体である。2層に火山灰が混入するが、これは本遺構の壁面となるⅤ層下位に堆積していた火山灰が混入したと思われる。

<底面> 基本層序Ⅴ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は長軸方向は直立気味で、端部はややオーバーハングしている。

<出土遺物> なし。

<時期・用途> 出土遺物がないが、遺構検出面が他の縄文時代の遺構と同じであることや埋土の様相から縄文時代の遺構と判断した。また形状から陥し穴と思われる。

5号土坑(第25図、写真図版25)

<位置・検出状況> V I 9 f・9 gグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 溝状を呈し、規模は2.60m×0.27m、深さは47cmを測る。軸線方向はN-61°-Eである。

<埋土> 2層に分けられる。埋土上位は黒褐色粘質シルト、埋土下位は褐色砂質シルトを主体とする。2層に火山灰が混入するが、これは本遺構の壁面となるⅤ層下位に堆積していた火山灰が混入したと思われる。

<底面> 基本層序Ⅴ層面を底面とした。ほぼ平坦であるが、東側が下がっている。壁は長軸方向は直立気味で、東端部はややオーバーハングしている。

<出土遺物> なし。

<時期・用途> 出土遺物がないが、遺構検出面が他の縄文時代の遺構と同じであることや埋土の様相から縄文時代の遺構と判断した。また形状から陥し穴と思われる。

6号土坑(第25図、写真図版25)

<位置・検出状況> V I J 13mグリッドに位置する。Ⅳ層下面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 溝状を呈し、規模は3.40m×0.38m、深さは47cmを測る。軸線方向はN-77°-Wである。

<埋土> 5層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とする。南側の壁がいびつに膨らんでおり、3・5層土が混入する。これは壁の崩落後に埋没したためと思われる。

<底面> 基本層序Ⅵ層面を底面とした。ほぼ平坦で東側が下がる。壁は直立気味である。

<出土遺物> なし。

<時期・用途> 出土遺物がなく、また本遺構は他の縄文時代の遺構と違いⅣ層中で検出しているが、遺構の平面形は4・5号土坑と類似しており、推定であるが縄文時代の遺構と判断した。形状から陥し穴と思われる。

遺構外から出土した縄文土器・弥生土器(第27～29図、写真図版55～57)

調査区北側、V I区～VII J区を中心に縄文土器と、少量だが弥生土器が出土した。出土した土器を層別別に示したものが第6表である。本遺跡で縄文時代に帰属する遺構はV層上面で検出しているので、本来、その上位層であるIV層からの出土量が多いはずであるが、実際の出土量は古代の遺物包含層であるIII層出土が最も多い。これについての具体的な理由は定かではないが、古代面としたIV層が何らかの作用で攪乱を受けたためか、あるいは周辺河川の氾濫による流れ込みの可能性などが考えられる。

出土層位	重量(g)
I～II層	1457.5
III層	5387.5
IV層	543.7
IV～V層	146.1
V層	2879.0
VI層	35.6
遺構への流れ込み	596.7
出土層位不明	718.6

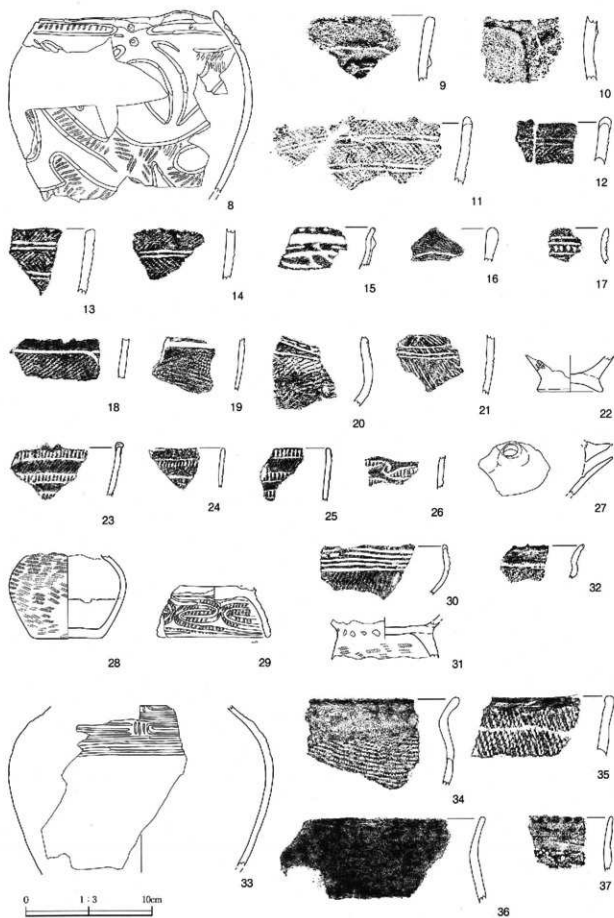
第6表 層別縄文・弥生土器出土量

層位関係なく、文様の顕著なもの57点について図示した。形態を復元できたものは少なく、ほとんどが破片資料である。

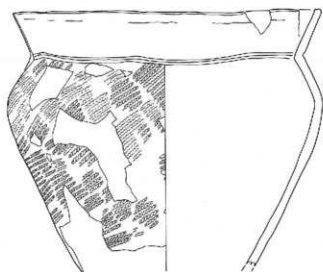
8は口縁部が内湾する深鉢である。口縁部には2カ所円形の刺突文が縦位に施される。胴部には沈線による曲線文が描かれ、縄文が充填される。9・10は同一個体で、口縁部に断面形が三角形の隆帯がつく。いずれも縄文時代後期に比定されるものと思われる。11～14は2条一対の沈線が横位に巡り、その沈線を挟み、縄文が羽状を呈しながら施文される。文様の施文が浅いのが特徴である。15は鉢で、口唇部に押圧が施され、口縁部には沈線文が描かれている。16は深鉢か。波状口縁の波頂部分に当たり、縄文が施文された後、沈線が施される。17は沈線が数条横位に巡り、沈線間に刺突文が充填される。20は胴部片で、無節の縄文と数条の沈線文が施文され、その上部には刺突文が施文される。21は細い無節の縄文が施文された後、沈線が横位に巡る。22は小型の台付鉢の台部分で、沈線が施文される。23～26は箱付土器第4様式に比定される土器群で口縁部に横位の沈線が数条巡り、その間に縦位の短い沈線文が充填されている。23には口唇部に二翼の突起が付く。27は注口土器の注口部分で、無文である。28は縄文のみが施文される壺で、口縁部が欠損する。29は台付鉢の台部分で帯状に縄文が施文される。縄文時代晩期、大洞C2式に比定される。30は浅鉢の口縁部片で、沈線による工字文が施文される。大洞A式に比定される。31は台付鉢か。時期不明。33は壺の胴部片で胴部上半には沈線文が施文される。大洞A式に比定される土器と思われる。34～40は深鉢である。34・37は口縁部が無文となり、胴部に縄文が施文される。35は口縁部から縄文が施文される。38は口縁部と胴部の間に沈線が巡り、文様帯を区画する。口縁部は無文、胴部は縄文が施文される。39・40は沈線による文様帯の区画がない。口縁部が無文、胴部は縄文が施文される。35は後期、34・36～40は晩期に帰属するものと思われる。41は残存部位が少なく、確かなことは定かではないが、口縁部が内湾する深鉢か、壺の胴部片であろう。破片の上端部に沈線が見受けられ、その下には縄文が施文される。

42～44は弥生土器である。いずれも縄文土器などに混ざって見つかっており、出土位置などに特徴はない。42・43は同一個体であるが、接合部が見あたらず、別々にあつかった。底部から外へと開きながら立ち上がり、胴部上半は直立気味、口縁部はやや肥厚し、外へと開く、器面全体は無節縄文を施文し、口縁部には不揃いな刺突文が横位に巡る。口縁部は内面にも無節縄文が施文されている。滝沢村湯舟沢遺跡から出土した湯舟沢2類土器に類似した資料があり、時期は弥生時代中期後半に比定される。44は台付浅鉢の台部分で、外面はミガキ調整が施され、沈線文が施文される。弥生前期、青木畑式に比定されるものと思われる。

45～64は縄文のみが施文されるか、あるいは無文の破片資料である。いずれも時期は不明であるが、縄文時代後期よりは古いものはないと思われる。



第27圖 遺構外出土縄文、弥生土器(1)



38



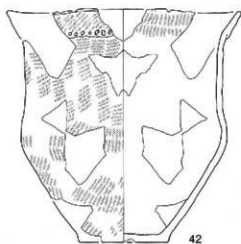
39



40



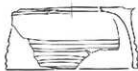
41



42



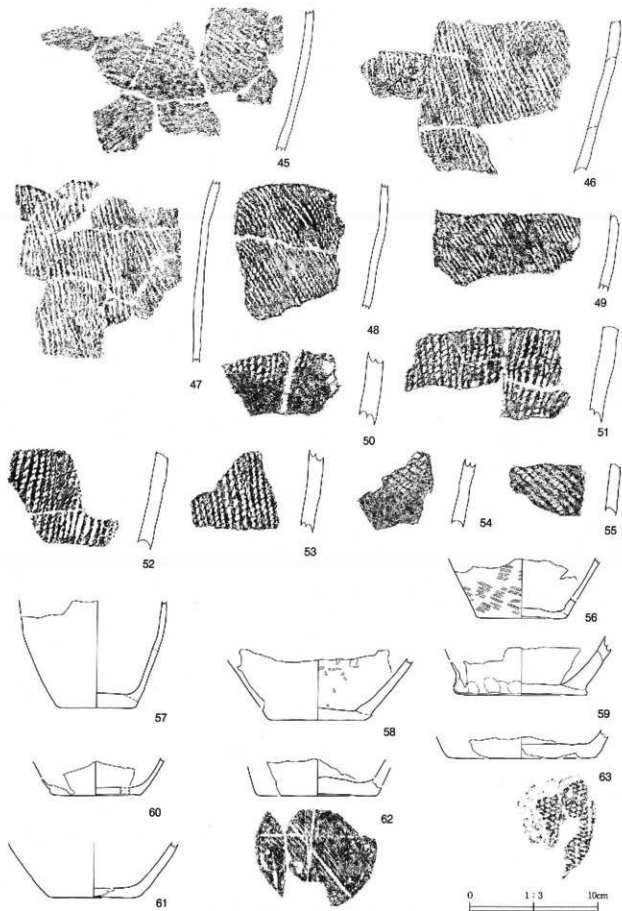
43



44



第28図 遺構外出土縄文、弥生土器(2)



第29回 遺構外出土縄文、弥生土器(3)

遺構外から出土した石器(第30～34図、写真図版58・59)

23点の石器が出土している。出土位置などに主だった偏りは認められない。また出土層位も縄文土器と同じようにⅢ層から出土するものが多かった。古代の遺構に混入するものもいくつか認められたが、それらも含めてこの項で報告する。

64～74は石鏃である。72を除き、すべて頁岩製で、72は赤色頁岩製である。形態の特徴は無茎凹基鏃が8点(64～71)、有茎尖基鏃2点(73・74)に分かれ、72は欠損しているので明確には分らないが、無茎凹基鏃と考えられる。他に特徴としては67の裏表面ともに付着物が認められた。

75は削器と判断した。縦長剥片を素材とし、長辺方向の両面から二次加工を施し刃部を作出している。

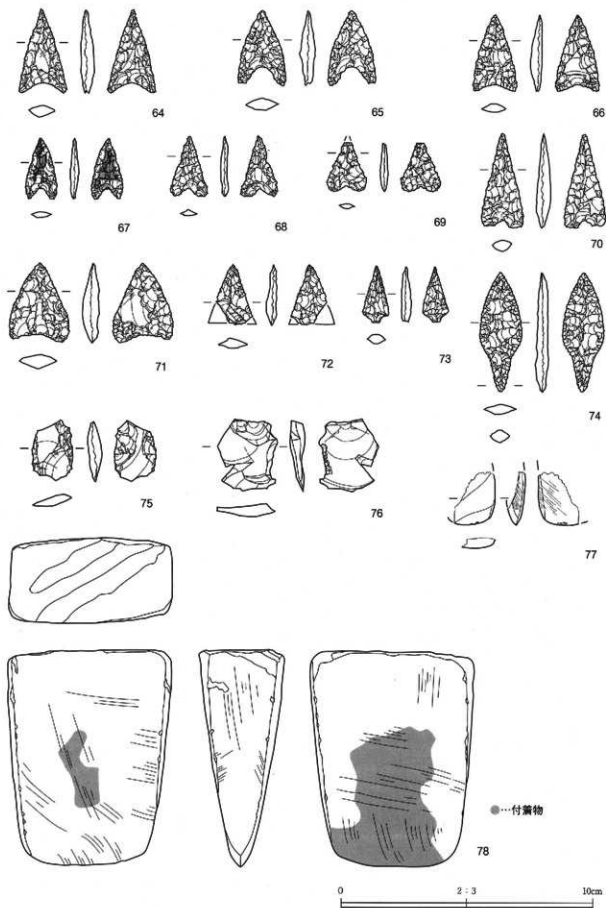
76はフレイクで縁辺の一部に、刃部を作出したかのような二次加工が認められる。ただし、片面のみで縁辺の2分の1にも及ばないので、削器ではなくリタッチドフレイクと判断した。

77～78は磨製石斧である。77は本体から剥離してしまった刃部的一部分である。頁岩製である。78は体部の短い磨製石斧で、やや厚みがあるのが特徴である。裏表両面に付着物が認められる。また刃部とは反対の面には2条の溝条の痕が認められる。デイスサイト製である。

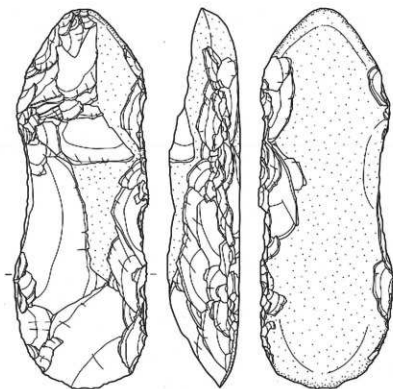
79・80は打製石斧である。どちらも砂岩製である。79はⅢI区でみつかった風倒木痕の埋土から出土している。大型で長軸方向の一辺には両面から二次加工が施されるが、刃部に相当する一辺には二次加工は施されない。80はやや小さい打製石斧で、長軸方向の両辺に二次加工が施される。また刃部は片面のみ二次加工が施される。

81～84は礫器とした。礫の一部に二次加工を施し、それが連続するものである。81はやや長大で、長辺方向の一部片面と両端部の両面に二次加工が施される。82はやや厚みのある礫で、特に側面の一部に両側から二次加工が施されている。どちらも頁岩製である。83は楕円形を呈する扁平な礫の片側両面から二次加工が施されている。ホルンフェルス製。84は三角形の扁平な礫の両端部から二次加工が施されている。砂岩製。

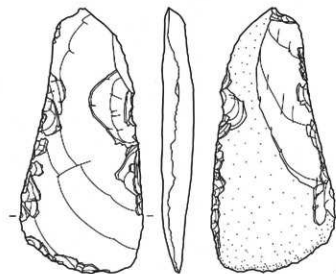
85～88は敲磨器類で、表面に磨痕や敲打痕が認められる礫石器を包括した。85は両面に凹痕が認められる。デイスサイト製である。86は安山岩製であるが、黒色を呈し、所謂「軽石」に近い石材である。両面に複数ヶ所にわたる凹痕が認められる。87は安山岩製。両面に細かい凹痕が複数認められ、また片面の端部に2箇所磨痕が認められる。88も安山岩製。端部の一部が欠損する。両面には凹痕が、また側面には磨痕が認められる。両側面を被熱しており、片方の側面は赤色化し、もう片方の側面は煤が付着している。



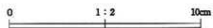
第30図 遺構外出土石器(1)



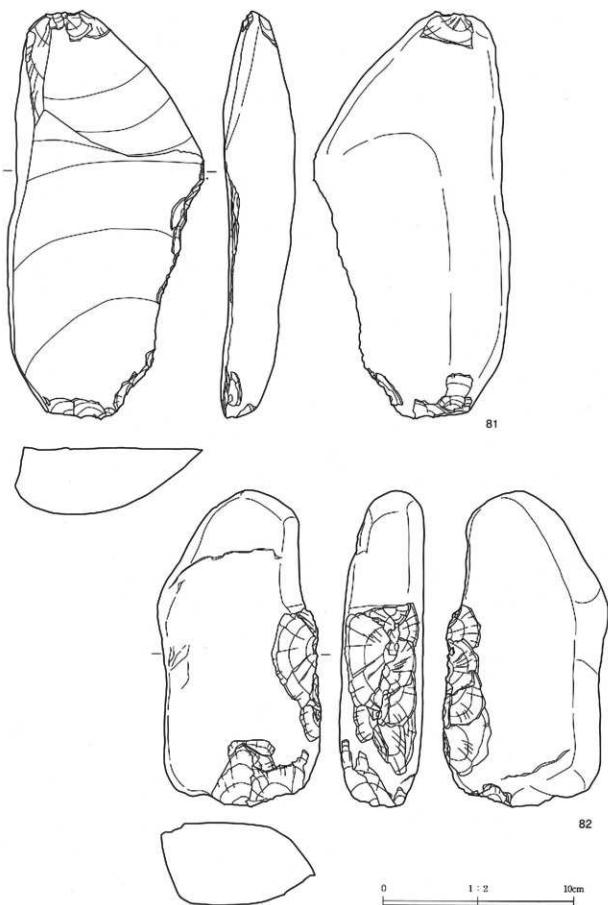
79



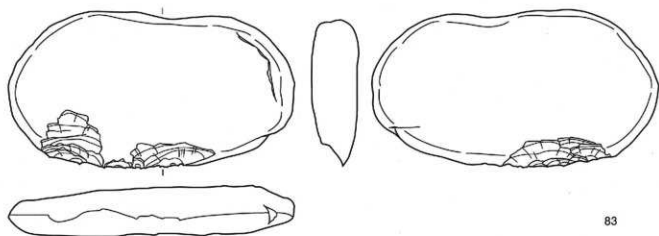
80



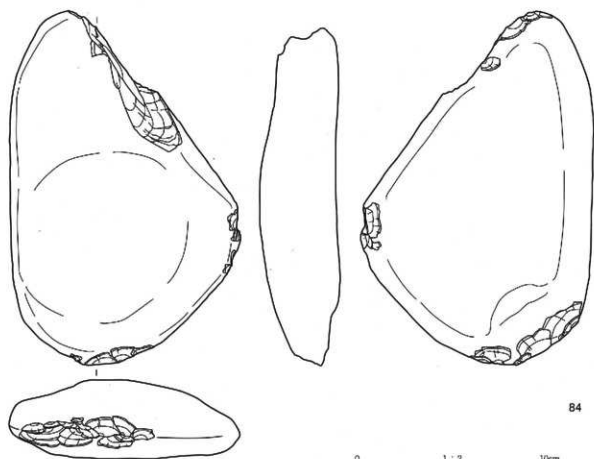
第31圖 遺構外出土石器(2)



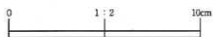
第32図 遺構外出土石器(3)



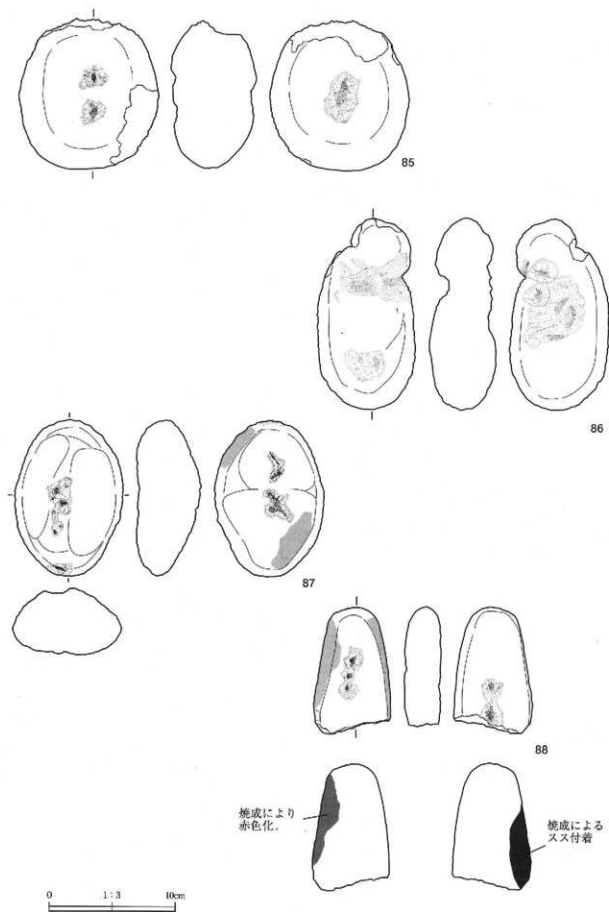
83



84



第33圖 遺構外出土石器(4)



第34図 遺構外出土石器(5)

②平安時代以降

平安時代(9世紀後半)に帰属する竪穴住居跡7棟、住居状遺構1棟、焼成遺構4基、土坑51基、畝間状遺構を検出し、また遺構内からは土師器・須恵器・陶磁器が出土している。遺物出土量の内訳は第7表のとおりである。

竪穴住居跡

1号住居跡(第35・36図、写真図版7・8・60)

<位置・検出状況> WK21a~22bグリッドに位置する。3m南西に7号土坑が隣接する。IV層上面で検出した。木住居跡は西側半分が調査区外に及んでおり、またカマド煙道部の東端は現代の水路により削平されている。

<重複関係> なし。

<住居方向> N-81°-E。北壁を基準としている。

<平面形・規模> 検出できた範囲から方形を呈すると思われる。規模は東壁が4.1m、北壁が検出長2.1mである。深さは最深10cmを測る。

<埋土> 残存状況が悪く、床面直上層(1層)しか残っていない。暗褐色粘質シルトを主体とし、焼土・炭化物が混入する。

<床面・壁> カマド燃焼部を検出した面を床面とした。ほぼ平坦である。貼床はカマド周辺を除き、

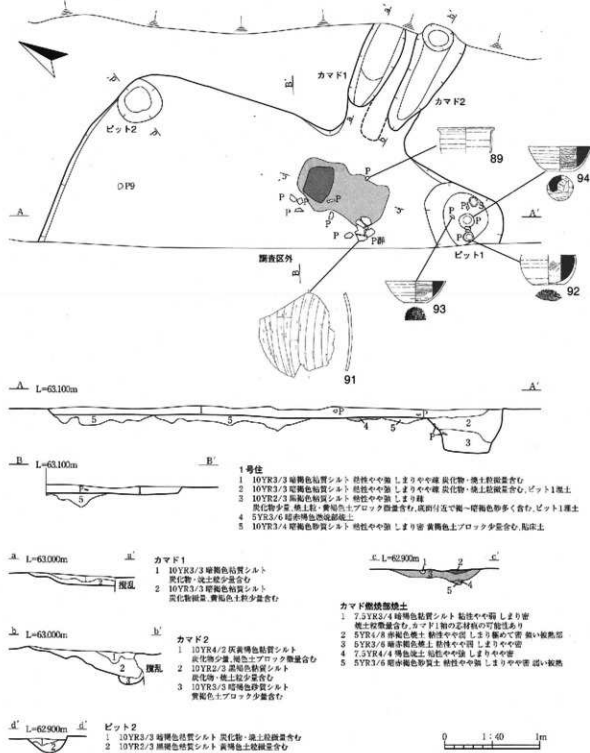
第7表 遺構別遺物重量表

遺構名	土師器	須恵器	陶磁器
1号住居跡	1744.6		
2号住居跡	8389.1	467.4	
3号住居跡	611.3	5650.0	
4号住居跡	4876.0	47.9	
5号住居跡	2091.7	3045.5	
7号住居跡	3885.4	12.4	
1号住居状遺構	2616.8		
1号焼成遺構	211.2		
1・2号焼成遺構	297.5		
2号焼成遺構	40.3		
3号焼成遺構	98.1	10.2	
4号焼成遺構	8.0		
5号焼成遺構	1819.8		
7号土坑	4.6		
8号土坑	264.5		
9号土坑	4.8		
12号土坑	3.8		
13号土坑	6.4		
21号土坑	1540.7		2.1
51号土坑	4.8		24.8
1号溝	21.7		
2号溝	19.9		
4号溝	71.6	158.7	
7号溝	65.0		

遺構名	土師器	須恵器	陶磁器
8号溝	6.1		
9号溝	345.5	126.6	
38号溝	0.9		
39号溝	77.6		
46号溝	12.4		
S K P 19	13.3		
S K P 42	9.2		
S K P 49	1.6		
S K P 50	83.1		
S K P 57	4.0		
S K P 72	3.0		
S K P 73	18.8		
S K P 74	1.0		
S K P 82	2.0		
S K P 87	5.5		
S K P 89	9.0		
S K P 97	24.8		
S K P 99	1.9		
S K P 100	10.1		
S K P 290	2.3		
S K P 338	25.4		
旧河道	12.5	16.8	
遺構外	12894.8	6269.0	310.2

(g)

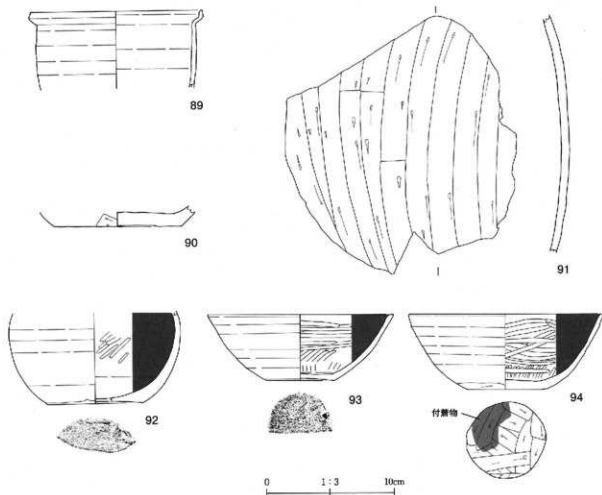
1号住居跡



第35図 1号住居跡

ほぼ全面に施されている。掘り方は最深で10cmでいびつである。粘土埋土は住居埋土に類似する暗褐色砂質シルトである。壁は全体的に残存状態が悪く、カマド周辺と北壁で検出できただけである。緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<カマド> 2基検出した。どちらも煙道と燃焼部のみで、袖は残っていない。したがって2基の新



第36図 1号住居跡出土遺物

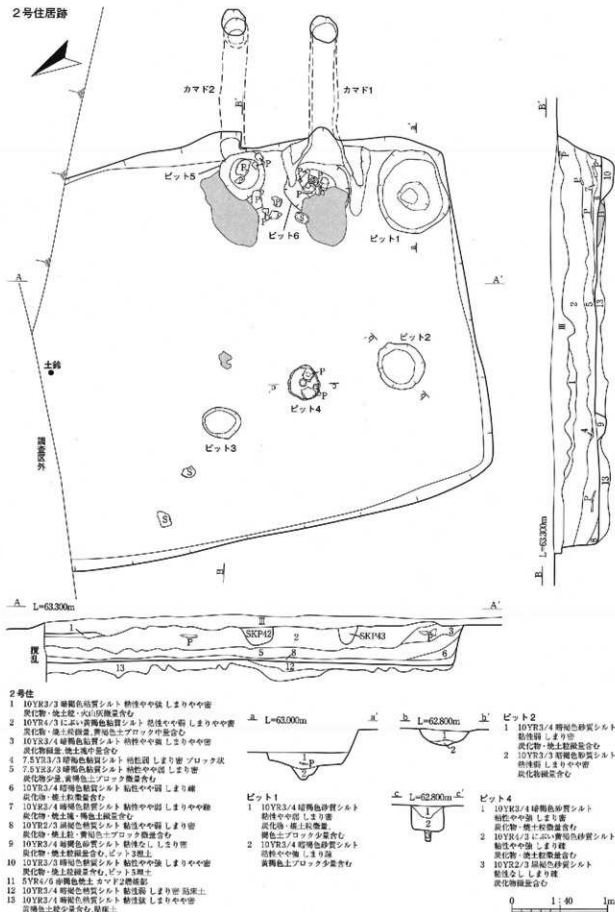
旧関係は判別できなかった。便宜的に北側の煙道を「カマド1」南側の煙道を「カマド2」とした。カマド1は検出長118cm、幅38cmで、深さは最深10cmを測る。底面はほぼ平坦である。カマド2は長さ検出長144cm、幅48cmで、深さ最深21cmを測り、煙出しに向かって下がっている。東端は水路により削平されているが、底面からピットが1基見つかっており、煙出し付近の可能性ある。燃焼部はカマド1・カマド2部分両方が連結している。断面の観察からも両カマドの新旧関係は見いだせなかった。カマド1に近い北側は上面が激しく焼けており、しまって硬くなっていた。

〈付属施設〉 床下土坑(ピット1)1個と柱穴(ピット2)1個を検出した。床下土坑は住居の南東角に位置する。不整な円形を呈し、90×70cm、深さは床面から最深32cmを測る。埋土は2層に分けられる。住居埋土と同様に焼土・炭化物が混入する。底面付近から土師器の坏(第36図92～94)が出土している。ピット2は住居北東角に位置する。円形で径40cm、深さは床面から18cmを測る。

〈出土遺物〉 土師器が1744.6g出土している。主にカマド燃焼部周辺から見つかっている。6点図示した。89～92は土師器甕である。89は口縁部が上へと持ち上がる形態でロクロ整形を施す。91はやや大型の長胴甕の胴部片である。92は内黒の小型甕で、口縁部が欠損する。93・94は内黒の土師器坏で、どちらも胴部が内湾しながら立ち上がる形態である。94は底面に削り調整を加えられており、また炭化物状の付着物が認められる。

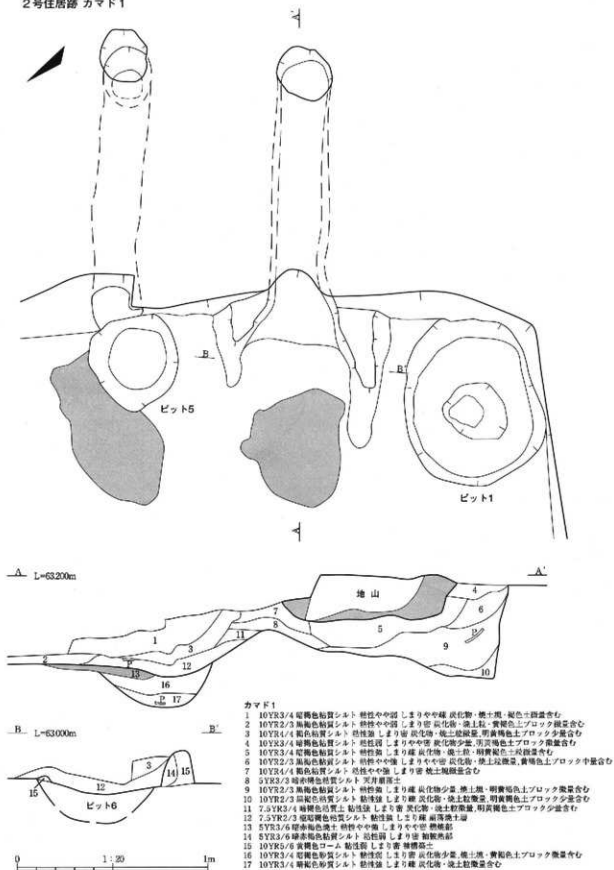
〈時期〉 出土した土師器から9世紀後半と考えられる。

2号住居跡



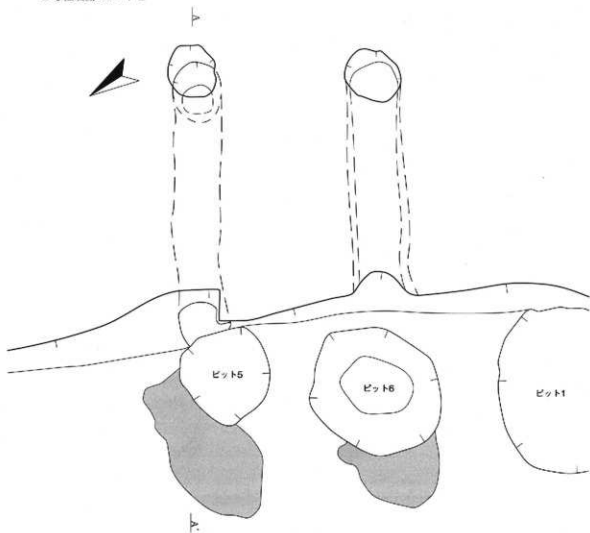
第37図 2号住居跡(1)

2号住居跡 カマド1



第38図 2号住居跡(2)

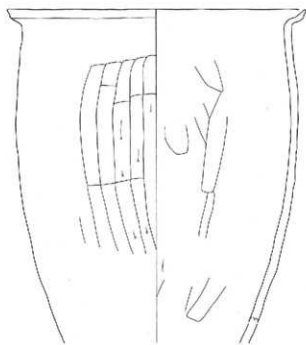
2号住居跡 カマド2



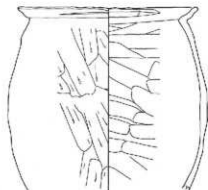
カマド2

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまりやや密 炭化物・焼土塊にふい黄褐色土粒少量含む
- 2 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまり密 炭化物少量含む
- 3 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物・焼土粒・黄褐色土ブロック少量含む
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物・焼土粒・褐色土粒少量含む
- 5 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物・焼土粒少量含む
- 6 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・黄褐色土ブロック少量含む
- 7 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・黄褐色土ブロック少量含む
- 8 5YR3/3 暗褐色粘土 粘性弱 しまりやや疎 層定内部の焼土層
- 9 5YR4/6 赤褐色粘土 粘性弱 しまりやや疎 焼土層

第39図 2号住居跡(3)



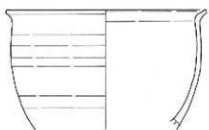
95



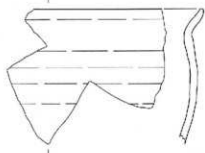
96



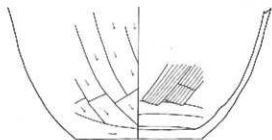
97



98



99



100



101



102



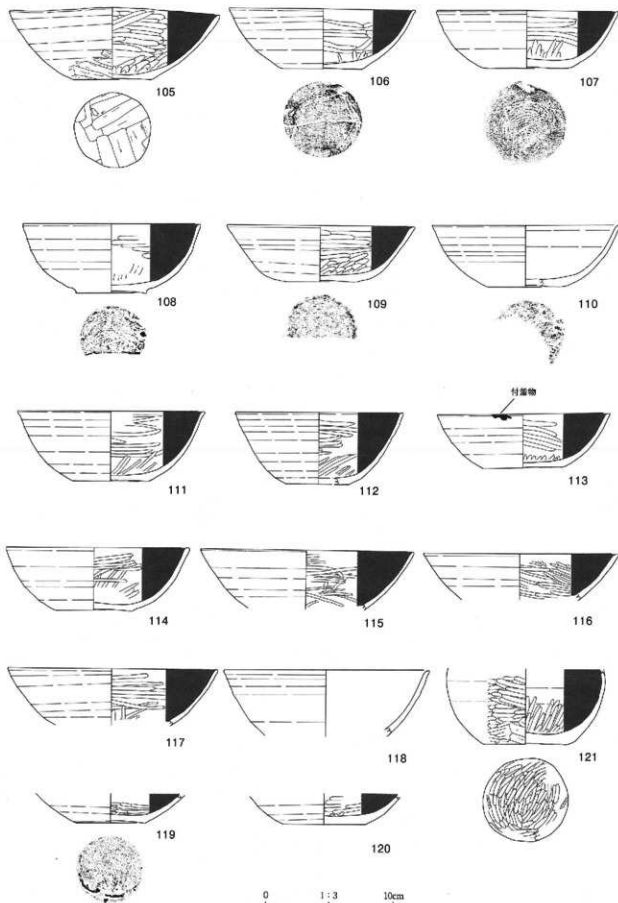
103



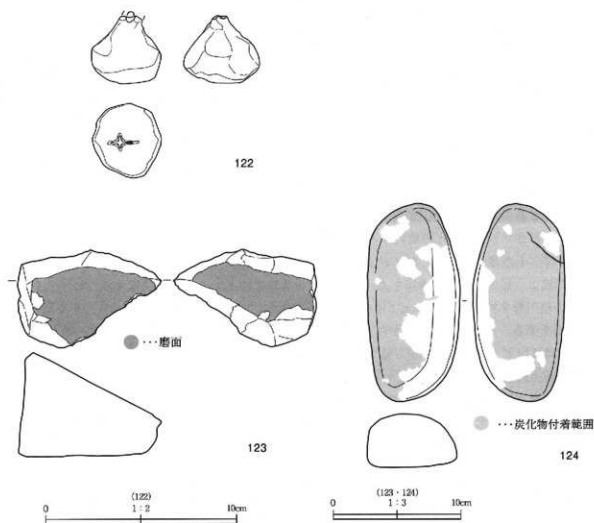
104



第40図 2号住居跡出土遺物(1)



第41図 2号住居跡出土遺物(2)



第42図 2号住居跡出土遺物(3)

2号住居跡(第37～42図、写真図版9・10・60・61)

<位置・検出状況> VII J 14 r～VII J 15 sグリッドに位置する。1m南西に3号住居跡が隣接する。IV層上面で検出した。本住居跡は北端部が調査区外に及び、北東側の一部は現代の水路があるため調査できなかった。

<重複関係> 柱穴状土坑SKP41～43・48と重複する。本住居跡が最も古い。ただし、いずれの柱穴状土坑も深さは本住居跡の埋土上位層にとどまっており、住居の床面は削平されていない。

<住居方向> N-109°-E。南壁を基準としている。

<平面形・規模> 検出できた範囲から方形を呈すると思われる。規模は南壁が3.28m、西壁が検出長4.52mである。深さは最深36cmを測る。

<埋土> 8層に分けられる。埋土上位にはぶい黄褐色粘質シルトが、埋土下位は暗褐色砂質シルトが主体となる。埋土下位には炭化物や焼土が混入する。また1層中に混入する火山灰は基本層序IV a層中の火山灰と同じもので、十和田aテフラと推定される。

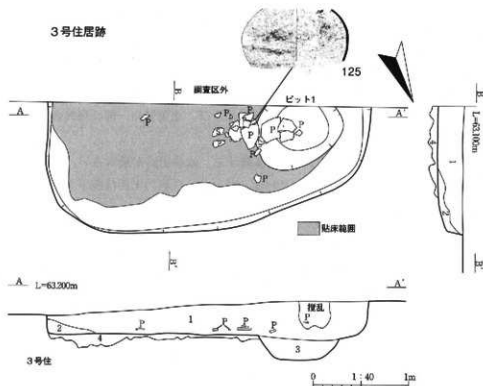
<床面・壁> カマド燃焼部を検出した面を床面とした。ほぼ平坦である。貼床はほぼ全面に施されている。掘り方はいびつで深さも6～20cmまでと均一ではない。貼床埋土は住居埋土下位層に類似する暗褐色砂質シルトを主体とし、混入物の有無で2層に分けられる。壁は検出できなかった北壁を

除き全周する。ほぼ直立気味に立ち上がる。

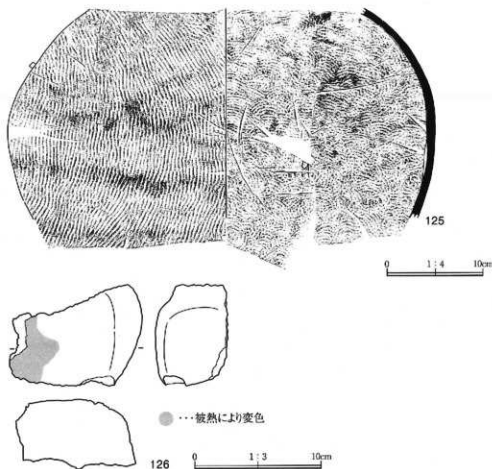
〈カマド〉 2基検出した。1基は東壁の南側寄りに（以下、「カマド1」）、もう1基は東壁ほぼ中央に（以下、「カマド2」）設置される。カマド1は袖部、燃焼部、煙道が残存する。黄褐色砂質シルトで構築され、内側は焼土が堆積する。燃焼部は $62 \times 46\text{cm}$ の不整な楕円形を呈し、約4cm焼土が堆積する。ピット6の埋没後に構築されている。煙道は住居壁から117cmを測り、壁から煙出しへと徐々に下がっている。中軸方向は $N-120^\circ-E$ である。構築方法は割りぬき式である。カマド2は燃焼部と煙道が残存する。燃焼部はピット5によって一部壊されている。 $86 \times 47\text{cm}$ の不整な楕円形を呈し、約5cm焼土が堆積していた。煙道は住居壁から120cmで煙出しに向かってやや下がり、煙出しの直下は掘り穿められている。中軸方向は $N-120^\circ-E$ で、カマド1と同じである。構築方法は割りぬき式である。2基のカマドの新旧関係については、カマド1の貯蔵穴（ピット5）がカマド2の燃焼部を壊し、またカマド2に伴う貯蔵穴であるピット6の埋没後カマド1の燃焼部が構築されていることから、カマド1の方が新しく、カマド2はそれより古いと判断した。

〈付属施設〉 ピット6個を検出した。ピット1・5はカマド1の両脇に位置する。ピット1は $87 \times 66\text{cm}$ の楕円形を呈し、深さ13cmで中央がやや掘り窪む。ピット5は $50 \times 45\text{cm}$ の楕円形を呈し、深さは13cmを測る。どちらも埋土中から土師器が出土しており、カマド1に伴う貯蔵穴と考えられる。ピット6はカマド1の燃焼部下から見つかった。 $75 \times 62\text{cm}$ の不整な楕円形を呈し、深さ15cmを測る。埋土中から土師器が多量に出土している。カマド2に伴う貯蔵穴と考えられる。ピット4は床面中央からやや西寄りに位置する。直径38cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。底面の中央に深さ12cmの小孔が認められる。埋土には土師器片が含まれており、人為により埋められたものと思われる。形状から「ロクロピット」の可能性はある。底面には回転台の芯棒が設置されていたと考えられる小孔が認められる。ピット2・3は柱穴と判断したが、配列が不規則で、主柱穴かどうか定かではない。

〈出土遺物〉 土師器8389.1g、須恵器467.4g、土鈴1点が出土した。今回の調査で見つかった遺



第43図 3号住居跡



第44図 3号住居跡出土遺物

構の中で最も出土遺物が多い。27点図示した。95～104・121は土師器甕である。調整はロクロ調整とケズリ調整どちらも認められる。また口縁部形態は頸部で外反し、そのまま外へと開くものと、口端部が上へと引き上げられるもの両方見受けられる。121は内黒の小型甕で、口縁部を欠損する。内外面だけでなく底面にもミガキ調整を施している。105～120は土師器坏で110を除き、全て内黒である。形態も胴部が内湾するものが主体を占め、109のような直線的に外へと開く形態は少ない。

また土鈴が北西端寄りの床面上から出土した（巻頭カラー写真図版2）。紐部の先端が欠損するのみで、良好な状態で残存している。器面には指頭による整形痕が認められる。下部に設けられた鈴口は鋭利な工具によって細い十字字を作出されている。またX線写真から内部の丸は2個確認された（写真図版61）。

石製品は2点出土している。18は埋土上位（3層）から出土した。楕円形の礫でほぼ全面に、炭化物のような付着物が付く。24は埋土中位から出土した砥石である。いびつに割れており、破砕礫を利用した可能性もある。幅広の2面を磨面としている。

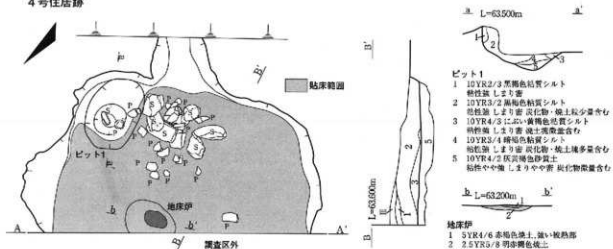
<時期> 出土した土師器から9世紀後半と考えられる。

3号住居跡（第43・44図、写真図版11・62）

<位置・検出状況> W J 16 s～16 t グリッドに位置する。1 m北西に2号住居跡が隣接する。IV層上面で検出した。本住居跡は南側半分以上が調査区外に及んでおり、北壁と東、西壁の一部を検出したにすぎない。

4 検出遺構と出土遺物

4号住居跡

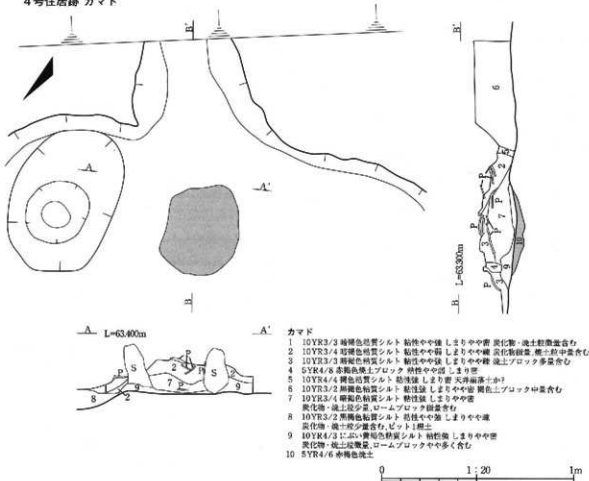


4号住

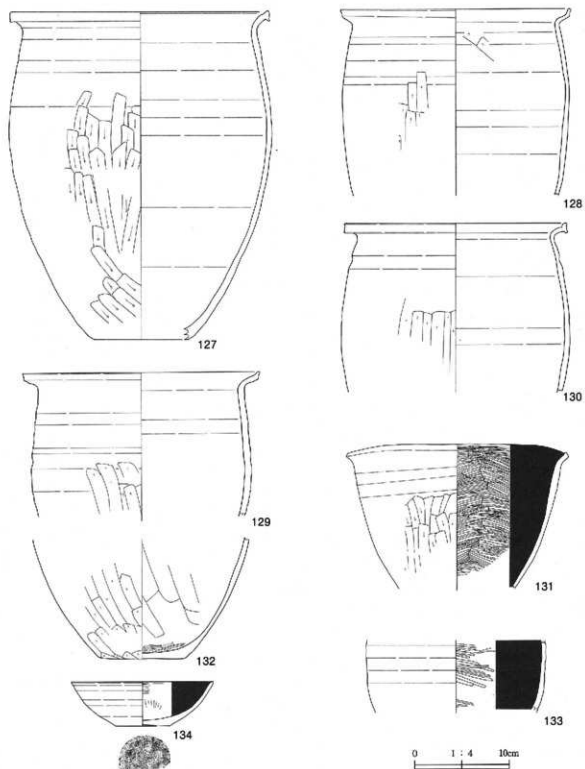
- 10YR4/4 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまり密
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性强 やや密 しまりやや密 炭化物少量・焼土粒・黄褐色粘質シルトブロック少量含む
- 10YR2/3 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物・焼土粒少量含む
- 2.5YR3/8 暗赤褐色焼土
- 10YR3/2 暗褐色粘質シルト 粘性强 やや密 しまり密 炭化物・焼土粒少量・黄褐色粘質シルトブロック少量含む。新練土

0 1:40 1m

4号住居跡 カマド



第45図 4号住居跡



第46図 4号住居跡出土遺物

<重複関係> なし。

<住居方向> カマドを検出していないので、どの壁が主軸方向を向いているか分からないが、検出できた北壁はN-106°-Eである。

<平面形・規模> 検出できた範囲から隅丸の方形を呈すると思われる、北壁はやや外へと膨らんでいる。規模は北壁が2.94m、東壁は検出長1.13mである。深さは最深40cmを測る。

〈埋土〉 暗褐色粘質シルトを主体とする1層が埋土のほぼ全体を占め、床面の壁周辺に黄褐色砂質シルトが薄く堆積する(2層)。したがって土層の様相からすると須恵器大甕の破片の出土状況をみると、床面から約5cm上で器面を床面とほぼ水平な状態にして出土していることから、一度須恵器廃棄面まで埋没した後、その上位面を埋没させた可能性もある。

〈床面・壁〉 硬化面が確認出来た範囲を床面とした。ほぼ平坦である。貼床は住居の中央部を中心に認められる。掘り方は4~13cmと不規則でいびつである。貼床は住居埋土よりも暗い色調を呈する黒褐色粘質シルトで、焼土・炭化物が混入する。壁は全周しており、直立気味に立ち上がる。

〈カマド〉 なし。

〈付属施設〉 ビット1個を検出した。ビット1は西壁寄りに位置する。一部調査区外に及んでいるが、93×79cmの卵形を呈し、深さは床面から最深22cmを測る。本住居跡からはカマドや他の付属施設が見つからないので、ビット1の機能も定かではない。

〈出土遺物〉 須恵器が56500g出土している。前述の通り、須恵器大甕が破片の状態で床面から約5cm上にまとまって出土した。接合した結果、胴部片のみ(125)で、残存状況は良くない。他に被熱により表面が赤色化した礫1点が見つまっている(126)。礫は被熱により破砕している。

〈時期〉 出土した須恵器から9世紀後半と考えられる。

(須原)

4号住居跡(第45・46図、写真図版12・62)

〈位置・検出状況〉 VI J 161~17mグリッドに位置し、検出面はIV a層である。

〈重複関係〉 なし

〈住居方向〉 S-54°-Eである。

〈平面形・規模〉 北西側が調査区外へと続くため全容は不明で、一部崩落が著しいため開口部が歪であるが、隅丸方形を呈するものと思われる、規模は一辺26m前後と推測される。深さは最深25cmを測る。

〈埋土〉 3層に細分される。2層の暗褐色粘質シルトが主体となる。

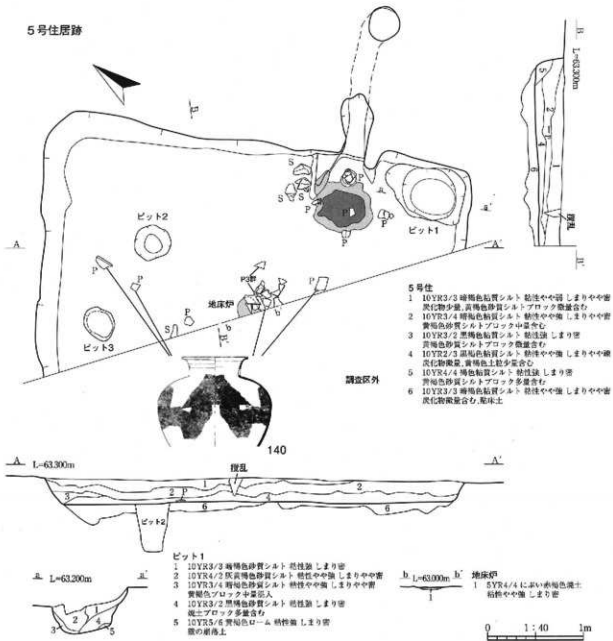
〈床面・壁〉 床面は概ね平坦である。貼床は煙道・ビット1部分を除き、ほぼ全面に施されている。壁は崩落部分では外傾するが、その他の部分では直角に近い角度で立ち上がる。

〈カマド〉 南東壁のほぼ中央に位置する。残存状態は悪く、煙道の先端部は遺存せず、他は燃焼部焼土が確認できるのみである。煙道の残存長は50cm、幅45~60cm、深さ20cmで、ほぼ平坦に先端部へと向かう。現状からは列り貫き式か掘り込み式かの判別は付かない。燃焼部はやや中央部が窪むものの概ね平坦で、45×35cmの楕円状に赤褐色焼土が広がる。検出時には数個の人頭大ほど自然礫が確認できたが、精査の結果、原位置を留めているものはなかった。しかし、いずれも袖の芯材等に使用されたものと思われる、散乱状況からも住居廃絶後破却したものと推察される。

〈付属施設〉 床下土坑(ビット1)1基と地床炉1基が確認された。ビット1は住居東隅に位置し、80×55cmの楕円形を呈する。床面からの深さは最深18cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。埋土には炭化物や遺物が混入する状況から、人為的に埋め戻された可能性が高い。カマド脇に位置することから、貯蔵施設として使用されたものと推察される。地床炉は調査区域の西側中央部に検出した。55×40cmの楕円状に焼土が広がる。中心部は被熱が著しく非常に堅く締まる。

〈出土遺物〉 土師器が48760g、須恵器が479g出土している。主にカマド内及び周辺からの出土が多い。

〈時期〉 出土遺物から9世紀後半と考えられる。



第47図 5号住居跡(1)

5号住居跡(第47～49図、写真図版14～16・62)

<位置・検出状況> VI J 11 j ~ 12 i グリッドに位置し、検出面はIV A層である。

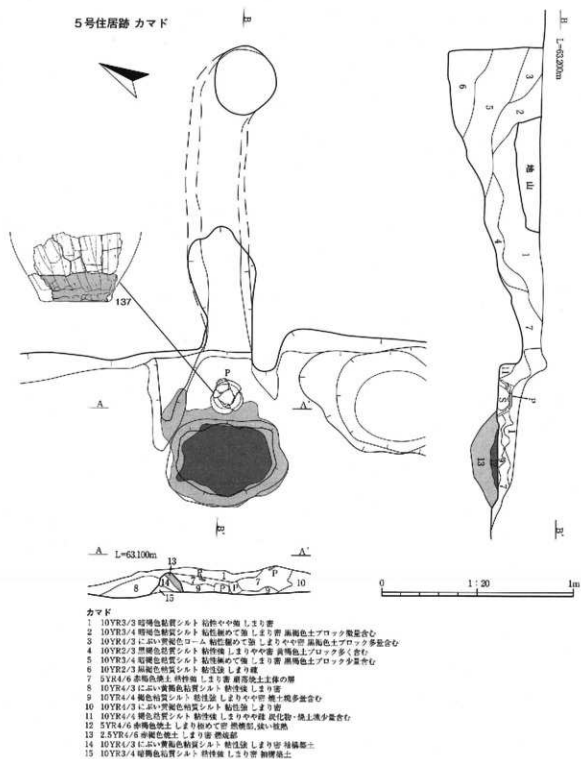
<重複関係> なし

<住居方向> N-61°-Eである。

<平面形・規模> 南西側が調査区外へと続くため全容は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。規模は一辺4.4m前後と推測され、深さは最深28cmを測る。

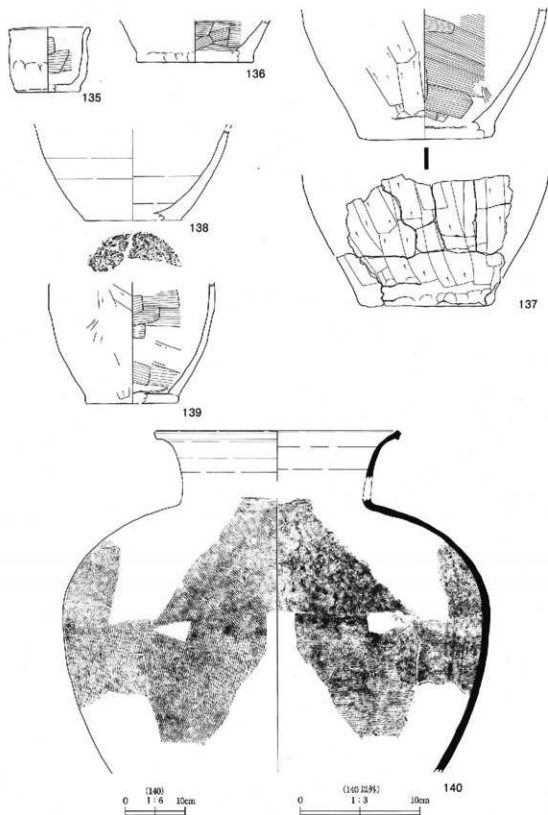
<埋土> 5層に細分される。大別すると上～中位の暗褐色粘質シルト、下位の黒褐色粘質シルト、壁際の褐色粘質シルトから成る。

<床面・壁> 床面は概ね平坦である。貼床はほぼ全面に施されている。壁は上半部で外傾する部分もみられるが、概して直角に近い角度で立ち上がる。



第48図 5号住居跡(2)

<カマド> 北東壁の南寄りに位置する。袖は黄褐色粘土で構築されている。燃焼部は台状に一段高くなっており、約60×50cmの歪な楕円状に焼土が広がる。煙道は床面から一段高い位置に設けられており、長さ1.6m、幅30cmで、煙出に向かって下り勾配となる。遺構全体が上面を削平されているため西側は開口しているが、刺り貫き式と判断される。煙出はほぼ垂直に掘り込まれており、35×30cmの楕円形を呈し、深さは最深50cmを測る。



第49図 5号住居跡出土遺物

〈付属施設〉 床下土坑(ピット1) 1基、柱穴2個(ピット2・3)、地床が1基が検出された。ピット1は住居南東隅に位置する。開口部は80×60cmの不整な楕円形状を呈し、床面からの深さは最深30cmである。カマド脇に位置することから、貯蔵施設として使用されたものと思われる。ピット2は北西側の中央部に位置する。径約40cmの円形を呈し、深さは最深50cmを測る。ピット3は北西側

のやや壁際に位置する。約40×30cmの楕円形を呈し、深さは最深7cm程である。配置状況及び規模等から、ビット2は支柱穴、ビット3は支柱的なものと考えられる。地床跡は住居のほぼ中央の調査区域に位置する。検出部分からは楕円状に焼土が広がるものと思われ、20×20cmの範囲が確認できる。

〈その他〉 カマド内、燃焼部の東側において伏せた状態の土師器の甕(137)が確認された。この内部には15×13cmの台形状の自然石があり、これを覆う形で甕が伏せられている。また、内部からは別個体の土師器の底部片も出土しており、136の一部がこれにあたる。当初は位置的にも支脚として用いられたものと考えていたが、その後接合作業を進めたところ、カマド外から出土のP7と接合し、また、136についても、P9やカマド埋土中出土の破片と接合することが判った。支脚として使用していた土器とその同一個体の破片が同時期内に留まるということは、カマド使用時には考え難いと思われる。よって以上の点から、支脚としての使用より、住居及びカマド廃絶時の祭祀・儀礼的な行為による可能性が高いと考えられる。

〈出土遺物〉 土師器が3091.7g、須恵器が3045.5g出土している。主にカマド周辺と地床炉周辺からの出土が多い。

〈時期〉 出土遺物から9世紀後半と考えられる。

(小林)

6号住居跡(第50図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VII 22 n～22 o グリッドに位置し、検出面はIV a層である。本遺構は西壁部分のみしか検出できず、残りは調査区外に及んでいる。遺物も出土しなかったが、西壁の長さや貼床が認められたことなどから、竪穴住居跡として扱った。

〈重複関係〉 なし。

〈住居方向〉 西壁を基準とするとN-4°-Wである。

〈平面形・規模〉 本住居跡は西壁周辺を検出したに過ぎないが、検出できた部分から方形を呈し、規模は一辺2.8mである。深さは最深32cmを測る。

〈埋土〉 3層に細分されるが、褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉 床面は概ね平坦である。貼床はほぼ全面に認められる。壁はほぼ直立に立ち上がる。

〈カマド〉 なし。調査区外に及ぶと想定される。

〈付属施設〉 ビット1個が検出された。開口部は径35cm円形を呈し、床面からの深さは最深10cmを測る。柱穴と考えられる。

〈その他〉 なし。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物が無いので定かではないが、隣接する7号住居跡と同時期のものとして想定される。

(須原)

7号住居跡(第50～52図、写真図版17・18・63)

〈位置・検出状況〉 VII 24 o～25 p グリッドに位置し、検出面はIV a層である。

〈重複関係〉 なし。

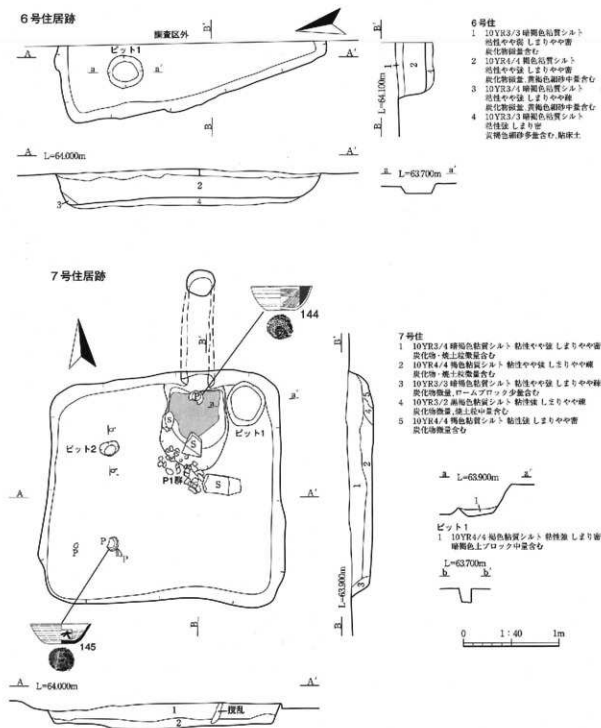
〈住居方向〉 N-5°-Eである。

〈平面形・規模〉 隅丸方形を呈し、規模は一辺2.4mである。深さは最深28cmを測る。

〈埋土〉 5層に細分されるが、上位の暗褐色粘質シルトと下位の褐色粘質シルトの2層に大別できる。

〈床面・壁〉 床面は概ね平坦である。壁は直角に近い角度で鋭く立ち上がる。

〈カマド〉 北壁のやや東寄りに位置する。燃焼部は床面から一段低く掘り込まれており、中央に

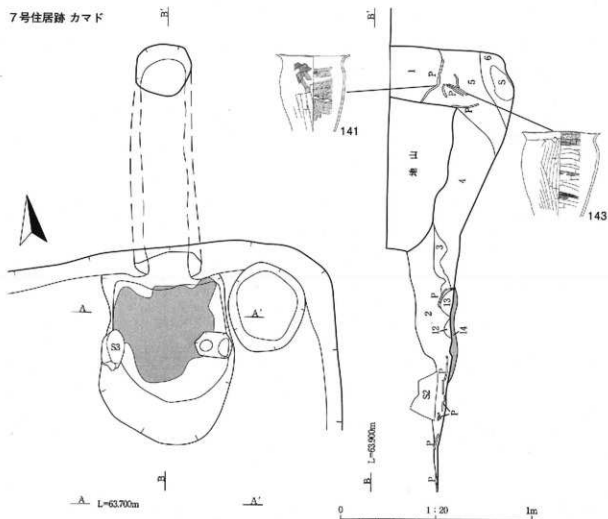


第50図 6号住居跡、7号住居跡(1)

50×50cmの不整な暗赤褐色焼土が広がる。袖は確認できなかったが、S3が立位状態で遺存していることから、芯材として用いられたものと推察される。同様に、燃焼部東側において小ピットが検出されたが、芯材痕と考えられる。煙道は切り貫き式で、長さ1.2m、幅35cm、下り勾配で先端へと向かう。煙出は径30cmの円形を呈し、深さ65cmでほぼ垂直に掘り込まれている。煙出内から多数の遺物が出土していることから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

<付属施設> ピット1とピット2の2基が検出された。ピット1は北東隅に位置する。開口部は

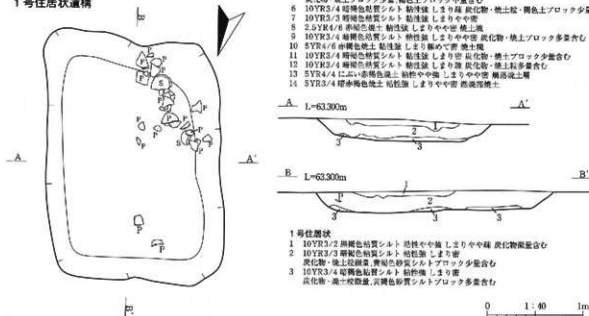
7号住居跡 カマド



カマド

- 1 10YR4/6 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密 炭土ブロック少量含む
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密 炭化物・炭土粒少量含む
- 3 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密
- 4 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭土ブロック多量含む
- 5 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり疎 炭化物・炭土ブロック少量含む
- 6 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり疎 炭化物・炭土粒・褐色土ブロック少量含む
- 7 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密
- 8 2.5YR4/6 赤褐色粘土 粘性強 しまりやや密 焼土塊
- 9 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物・炭土ブロック多量含む
- 10 5YR4/6 赤褐色粘土 粘性強 しまり極めて密 焼土塊
- 11 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・炭土ブロック少量含む
- 12 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・炭土粒少量含む
- 13 5YR4/4 に近い赤褐色粘土 粘性やや強 しまりやや密 焼土塊土層
- 14 5YR3/4 暗赤褐色粘土 粘性強 しまりやや密 焼土埋埋土

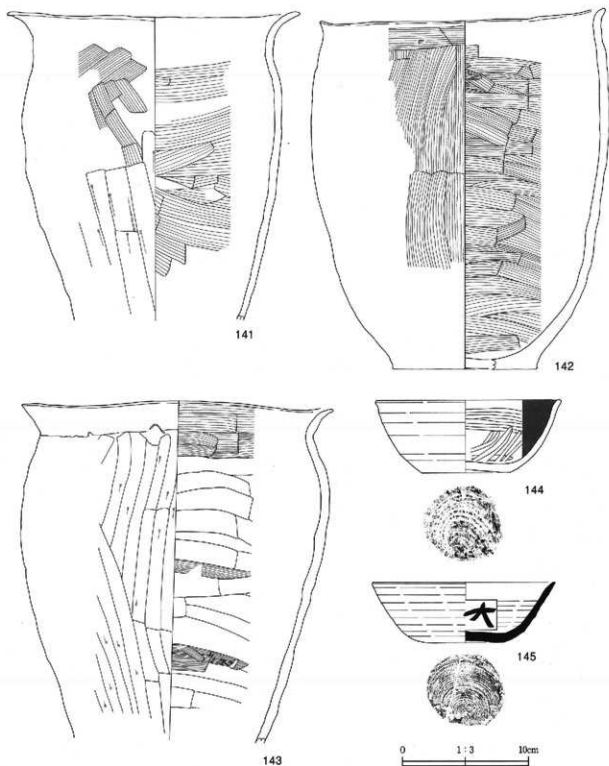
1号住居状遺構



1号住居状

- 1 10YR3/2 黄褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密 炭化物少量含む
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
- 3 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密

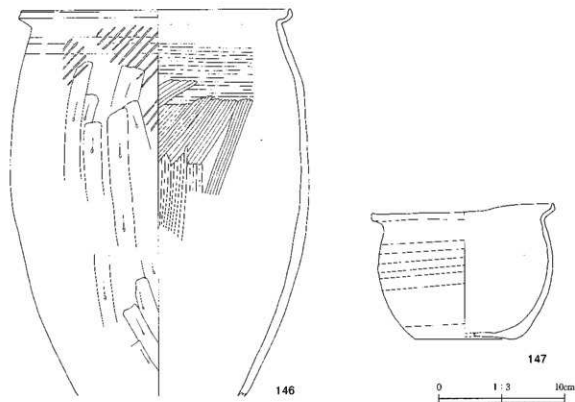
第51図 7号住居跡(2)、1号住居状遺構



第52図 7号住居跡出土遺物

45×40cmの楕円状を呈し、床面からの深さは最深5cmを測る。カマド脇に位置することから、貯蔵施設として使用された可能性が考えられる。ピット2は北西側に位置する。20×15cmの垂な楕円形を呈し、深さは最深15cmを測る。柱穴と考えられる。

<その他> カマド周辺及び煙道内から多数の土器が出土している。P1群とした土器の直上にはS



第53図 1号住居状遺構出土遺物

1・2が置かれており、明らかに人為的に廃棄されたものと判断できる。また、カマド内燃焼部から出土した土師器の坏(144)は、伏せられた状態で検出された。前述した5号竪穴住居跡と同様、カマド廃絶後の何らかの祭祀・儀礼的なものと考えられる。

<出土遺物> 土師器が38854g、須恵器が124g出土している。主にカマド周辺と竈道内からの出土である。また、墨書土器として床面からP2(145)が出土した。

<時期> 出土遺物から9世紀後半と考えられる。

住居状遺構

1号住居状遺構(第51・53図、写真図版19・63)

<位置・検出状況> VI J 17 l・mグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 隅丸長方形を呈し、規模は長辺2.6×短辺1.8mである。深さは最深22cmを測る。

<埋土> 3層に細分されるが、上位の黒褐色粘質シルトと中～下位の暗褐色粘質シルトに大別できる。

<底面・壁> 床面はほぼ平坦である。貼床は確認できない。壁はいずれも緩やかな立ち上がりである。

<出土遺物> 土師器26168gが出土している。埋土中位～床面にかけてのものがほとんどで、主に南西部に集中している。

<時期> 出土遺物から9世紀後半と考えられる。

(小林)

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(第54図、写真図版20)

<位置・検出状況> VII 20 u ~ 21 u グリッドに位置する。3 m西側にSKP210が隣接する。IV層上面で検出した。本遺構の東側は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> 2号溝と重複する。プラン検出の際、本遺構の柱穴(SK P96)が2号溝を切っていたので、本遺構の方が新しいと判断した。

<平面形・規模> 庇付きの側柱掘立柱建物跡である。身舎部は1間(以上)×4間で、建物方向はN-9°-W、ほぼ南北方向に向いている。規模は桁行き8.70 m、梁間検出長3.90 mで、柱間寸法は2.15 m前後を測る。庇部分は南北側の2面に付設される。規模は1間(以上)×1間で、規模は、北側の庇が桁行き1.10 m、梁間検出長5.30 m、南側の庇は桁行き2.30 m、梁間検出長1.30 mを測る。

<柱穴> 12個検出した。そのうち完掘したのは本調査区内に含まれる5個(SK P82・84・89・97・99)である。平面形は円形で、径40 cm、深さは40 cm前後の掘り方である。柱痕跡は認められなかった。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、重複する2号溝が古代以降に帰属するので、本遺構も古代以降と推定される。

2号掘立柱建物跡(第54図、写真図版20)

<位置・検出状況> VI J 21 i ~ 23 i グリッドに位置する。5 m南側に22号土坑が隣接する。IV層上面で検出した。本遺構の西側は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるが、精査段階では気づかず、確認調査区分も完掘してしまった。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 側柱掘立柱建物跡である。1間×2間(以上)で、建物方向はN-84°-W、ほぼ東西方向に向いている。規模は桁行き検出長6.20 m、梁間4.30 mで、柱間寸法は4.30 m前後を測る。

<柱穴> 3個検出した(SK P79 ~ 81)。平面形は円形で、径50 cm、深さは10 cm前後の掘り方である。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトを主体とし、柱痕跡は認められなかった。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、埋土の様相から古代以降に帰属されると思われる。

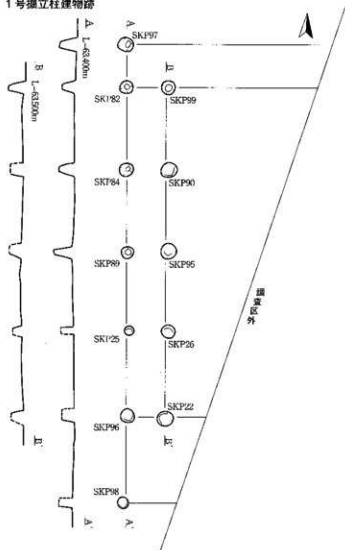
3号掘立柱建物跡(第54図、写真図版20)

<位置・検出状況> VI I 22 h ~ 23 i グリッドに位置する。周辺にはSK P169 ~ 194や畝間状遺構が隣接する。IV層上面で検出した。本遺構は上記のグリッド周辺にのみ多く柱穴状土坑が分布しており、それらの柱穴状土坑群の配置関係を検討して、1棟の掘立柱建物跡と判断した。従って推定の域を出ず、また本遺構以外の柱穴状土坑もあるので、さらに複数棟の掘立柱建物跡がある可能性も考えられる。なお本遺構の南側の一部は調査区外に及んでいるものと思われる。

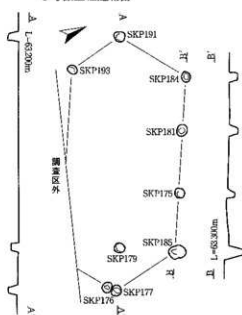
<重複関係> 13号溝と畝間状遺構と重複する。ただし本遺構の柱穴とは重複していないので、新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 亀甲形の掘立柱建物跡である。2間×3間で、建物方向はN-63°-Wに向いている。規模は長軸方向(桁行き)6.70 m、短軸方向(梁間)2.95 mで、柱間寸法は長軸方向で1.50 m前後、短軸方向で1.80 m前後を測る。

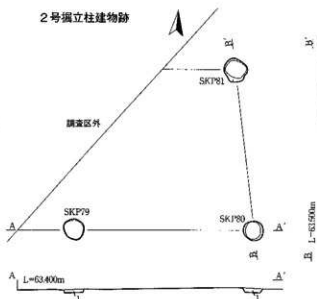
1号掘立柱建物跡



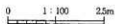
3号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡



- SKP79
1 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト
粘り強しまりやや密
炭化物微量、ロームブロック少量含む
- SKP80
1 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト
粘り強しまりやや密
炭化物微量、ロームブロック少量含む
- SKP81
1 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト
粘り強しまりやや密
炭化物微量含む



第54図 1～3号掘立柱建物跡

〈柱穴〉 8個検出した(SKP175～177・181・184・185・191・193)。そのうち完掘したのは本調査区に含まれる4個(SKP176・177・181・184)である。平面形は円形で、径は25～40cm、深さは20cm前後の掘り方である。柱痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物が無いので定かではないが、重複する畝間状遺構や13号溝が古代以降に帰属するので、本遺構も古代以降に帰属されると思われる。

(須原)

焼成遺構

1号焼成遺構(第55・56図、写真図版21・64)

〈位置・検出状況〉 VII J 6 x～VII J 6 yグリッドに位置する。IV層上面で焼土の分布により検出した。

〈重複関係〉 2号焼成遺構と重複する。両遺構は同一遺構の可能性もあるが、土層の観察から切り合い関係が見いだせるので、別の遺構と判断した。本遺構の方が古い。

〈平面形・規模〉 不整な楕円形を呈し、規模は0.89×0.70mで、深さは最深7cmを測る。

〈埋土〉 2層に分けられる(第55図5・6層が相当する)。暗赤褐色焼土を主体とし、上面(検出面)の南端は激しい被熱のため明赤色化している。

〈底面・壁〉 焼土層(5層)下を底面とした。中央が窪む。壁は外へと開きながら立ち上がる。

〈出土遺物〉 土師器211.2gが出土している。また1号焼土遺構と一括して取り上げてしまった遺物が別に297.5gある。出土した土師器はロクロ調整が施されたものが主体を占める。2号焼成遺構から出土した遺物も含め、5点図示した。148は土師器甕の口縁部片で胴部にヘラナデのような調整痕が施される。149・150は土製品として報告するが、土器の器面の一部である。土器焼成の際、失敗してはじけ飛んだ所謂「剥片土器」の類の可能性もあるが、表面が著しく摩耗しているので、単純に土師器の小片が破砕し、摩滅したものかもしれない。151・152は焼成粘土塊である。

〈時期〉 出土した土師器から古代と考えられ、おそらく、周辺に分布する1～3号住居跡と同時期に帰属するものと思われる。

2号焼成遺構(第55・56図、写真図版21・64)

〈位置・検出状況〉 VII J 6 x～VII J 6 yグリッドに位置する。IV層上面で焼土の分布により検出した。

〈重複関係〉 1号焼成遺構と重複する。両遺構は同一遺構の可能性もあるが、土層の観察から切り合い関係が見いだせるので、別の遺構と判断した。本遺構の方が新しい。

〈平面形・規模〉 不整な楕円形を呈し、規模は1.36×1.22m、深さは最深10cmを測る。

〈埋土〉 埋土は4層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物や焼土が混入する。

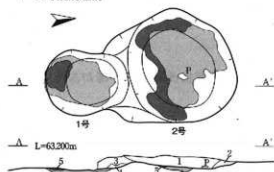
〈底面・壁〉 焼土の広がりや底面とした。ほぼ平坦である。床面のほぼ中央に1m大に焼土が広がっている。焼土は底面から約4cm堆積する。また焼土範囲の南側は特に被熱が激しく明赤色化している。壁は大きく外へと開きながら立ち上がるが、南側に壁はない。すなわち焼土範囲を北、東、西壁が囲んでいるような構造で、1号焼成遺構の位置する所は焼土範囲よりやや低い平坦面となる構造である。

〈出土遺物〉 土師器が40.3g出土している。出土遺物については1号焼成遺構の項に記載した。

〈時期〉 出土した土師器から古代と考えられ、おそらく、周辺に分布する1～3号住居跡と同時期に帰属するものと思われる。

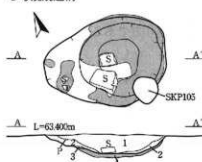
4 検出遺構と出土遺物

1・2号焼成遺構



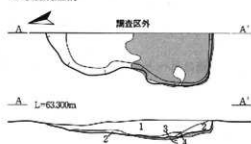
- 1・2号焼成
 1 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性や中強 しまりやや密 炭化物・焼土粒少量含む
 2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 粘性や中強 しまりやや密 炭化物・焼土粒少量含む
 3 10YR3/3 黒褐色粘質シルト 粘性や中強 しまりやや密 炭化物少量含む
 4 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性や中強 しまりやや密 炭化物・焼土粒少量含む
 5 5YR3/8 暗赤褐色粘土 粘性強 しまり密 炭化物少量含む
 6 5YR3/4 暗赤褐色粘土 粘性や中強 しまり密

3号焼成遺構



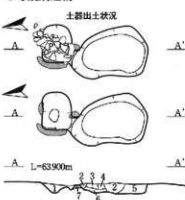
- 3号焼成
 1 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・焼土塊・火山灰ブロック少量含む
 2 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・焼土塊少量含む
 3 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 下に焼土塊混入
 4 5YR3/3 暗赤褐色粘土 粘性強 しまりやや密

4号焼成遺構



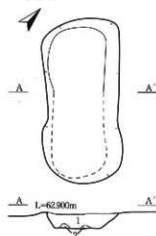
- 4号焼成
 1 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・焼土粒少量含む
 2 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性や中強 しまりやや密 炭化物少量含む 焼土粒少量含む
 3 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 焼土粒少量含む
 4 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物を層状に含む
 5 5YR3/3 暗赤褐色粘土 粘性強 しまり密

5号焼成遺構



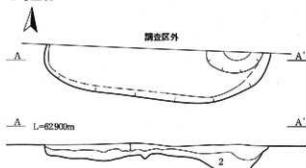
- 5号焼成
 1 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・焼土ブロック少量含む
 2 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・焼土ブロック少量含む
 3 5YR4/6 暗赤褐色粘土 粘性強 しまり密 焼土ブロック
 4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
 5 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・焼土粒少量含む
 6 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物少量含む
 7 5YR3/3 暗赤褐色粘土 粘性強 しまり密

7号土坑

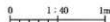


- 7号土坑
 1 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性強 しまり密 火山ブロック少量混入
 2 10YR4/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密

8号土坑

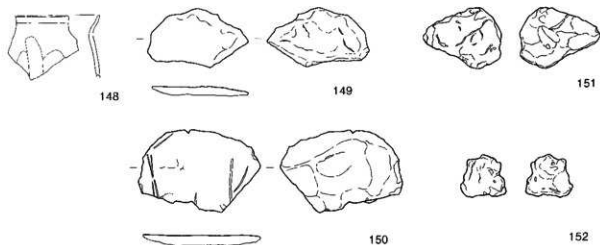


- 8号土坑
 1 10YR3/2 暗褐色粘質シルト 粘性や中強 しまり密 炭化物・にぶい黄褐色土ブロック少量含む
 2 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物・焼土粒・にぶい黄褐色土粒少量含む

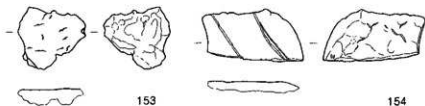


第55図 1～5号焼成遺構、7・8号土坑

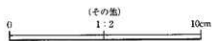
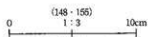
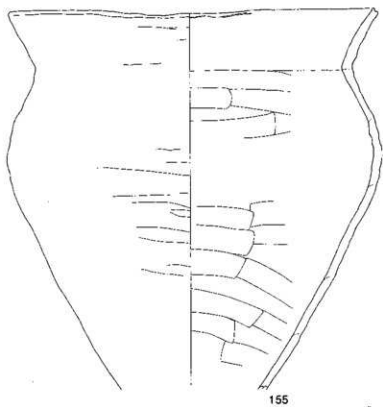
1・2号焼成遺構



4号焼成遺構



5号焼成遺構



第56図 焼成遺構出土遺物

3号焼成遺構(第55図、写真図版21・22)

<位置・検出状況> VII J 25 1～25mグリッドに位置する。IV層上面で焼土の分布により検出した。

<重複関係> 1号掘立柱建物跡、SKP105と重複する。本遺構が最も古い。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は1.29×0.97m、深さは最深20cmを測る。

<埋土> 2層に分けられるが、暗褐色粘質シルトを主体とし、炭化物や焼土が混入する。1層中に混入する火山灰ブロックは基本層序IV a層中に混入するものと同じで、十和IIIaテフラと思われる。

<底面・壁> 焼土の広がりを底面とした。ほぼ平坦である。床面全体から東壁にかけて焼土が広がっている。焼土は底面から約4cm堆積する。壁は全周するが、東側の壁は緩やかに立ち上がるが、西側の壁はスロープ状に大きく広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器が98.1g、須恵器が10.2g出土している。ただしいずれも小片で図示していない。

<時期> 出土した土師器から古代と考えられる。

(須原)

4号焼成遺構(第55・56図、写真図版22・63)

<位置・検出状況> VII J 19 n・oグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へとかかるため全容は不明だが、中央が活れる8の字状を呈するものと思われる。規模は検出部分で1.8m×35～55cm、深さは最深20cmを測る。

<埋土> 4層に細分されるが、いずれも暗褐色土を基調としている。

<底面・壁> 底面は南側がやや窪むが、概ね平坦である。南側にのみ焼土の広がりが確認できる。暗赤褐色を呈し、検出部分で95×55cmの範囲に広がる。壁は南側ではほぼ直角に鋭く立ち上がるが、北側では緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> 土師器片が8.0g出土している。また、埋土中より粘土塊(153)土壁状の小片(154)が出土している。

<時期> 出土遺物から古代と考えられる。

<その他> 埋土中から出土した土壁状の小片は3～4cm程であるが、一面が平らになっているものである。本遺構に構築された部材の一部と推測される。また、埋土中には他にも多くの被熱したブロック土が確認されている。これも構築物の一部と思われ、本遺構廃絶後に流入、もしくは人為的に廃棄されたものと思われる。本遺構は、概して2つの円形が連結したような形状を呈しており、その一方にのみ焼土が広がることから、これを焼成部と捉えることができる。もう一方においては、これに付属する前庭部的な施設と考えられるが、全容が不明なため詳細については判然としない。いずれにしても、以上の点から本遺構は、何らかの構築物を伴う焼成施設であったことが窺える。

5号焼成遺構(第55・56図、写真図版23・64)

<位置・検出状況> VII H 2 gグリッドに位置し、IV a層で検出した。検出時において、土師器が集中して遺存し、焼土が確認できることからカマドと思われたが、精査の結果、不定な形状を成すことから、焼成遺構と判断した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 北側が歪な円形、南側が楕円形を呈し、全体的には両者が連結した8の字状となる。規模は北側が径30～40cm、南側が85×50cmである。深さは北側で最深12cm、南側で最深11cmを測る。

<埋土> 6層に細分される。暗褐色土が主体である。

<底面・壁> 北側はV字状に窪み、南側へと繋がる。南側の底面は概ね平坦で、壁は鋭く立ち上がる。また、北側の壁面から外周にかけて部分的に焼土が確認できる。これにより北側が焼成部、南側がそれに伴う前庭施設と考えられる。

<出土遺物> 土師器が1819.8g出土している。

<時期> 出土遺物から9世紀後半と考えられる。

(小林)

土坑

7号土坑(第55図、写真図版25)

<位置・検出状況> ⅢK23b～23cグリッドに位置する。IVa層下位面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は1.25×0.84m、深さは27cmを測る。

<埋土> 2層に分けられるが、褐灰色粘質シルトが主体で、底面に褐色砂質シルトが点在する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。平坦である。壁は全周する。壁の西側は内湾しながら立ち上がり、東側の壁は大きく外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIVa層であることから古代に帰属するものと推定する。

8号土坑(第55図、写真図版25)

<位置・検出状況> ⅢK5dグリッドに位置する。IVa層下位面で検出した。本遺構は北側半分が調査区外に及んでいる。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 検出できた部分から不整な楕円形を呈するものと推定される。規模は検出長2.47×0.56m、深さは17cmを測る。

<埋土> 2層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、埋土下位には焼土・炭化物粒が混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ややいびつで、底面のほぼ中央がやや高い。壁は検出できた部分では全周した。西側はほぼ直立気味に立ち上がり、東側は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIVa層であることから古代に帰属するものと推定する。

9号土坑(第57図、写真図版26)

<位置・検出状況> ⅦJ6xグリッドに位置する。20cm南東側にSKP50が隣接する。IVa層下位面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置する遺構であり、従って遺構精査も半裁で留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 楕円形を呈し、規模は1.02×0.65m、深さは最深24cmを測る。

<埋土> 2層に分けられる。暗～黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物が混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は確認調査区を除き全周する。北西側の壁は緩やかに広がりながら立ち上がり、北東側の壁は大きく外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIVa層であることから古代に帰属するものと推定する。

10号土坑(第57図、写真図版26)

<位置・検出状況> VII J 5 p グリッドに位置する。3m西側にSKP05が隣接する。IVa層下位面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、従ってプランとサブトレンチ断面の土層確認のみである。

<重複関係> SKP06と重複する。本遺構の方が古い。

<平面形・規模> 検出したプランから不整な楕円形を呈するものと推定される。規模は 2.34×1.71 m、深さは最深29cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。暗～黒褐色粘質シルトを主体とし、褐色粘質シルトが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁はサブトレンチの断面のみであるが、直立気味に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIVa層であることから古代に帰属するものと推定する。

11号土坑(第57図、写真図版26)

<位置・検出状況> VII J 6 n～6 o グリッドに位置する。1.5m東側に2号溝が隣接する。IVa層下位面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半裁に留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は 1.46×1.21 m、深さは最深16cmを測る。

<埋土> 黒褐色粘質シルトを主体とした単層である。炭化物や黄褐色シルトが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。いびつで、中央が窪んでいる。壁は確認調査区分を除き、全周する。緩く開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIVa層であることから古代に帰属するものと推定する。

12号土坑(第57図、写真図版26)

<位置・検出状況> VII J 3 k グリッドに位置する。周辺にはSKP17・45・46が隣接する。IVa層下位面で検出した。

<重複関係> 3号溝と重複する。本遺構の方が新しい。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は 1.34×0.71 m、深さは最深8cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とし、褐色粘質シルトが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。いびつで凹凸が激しい。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

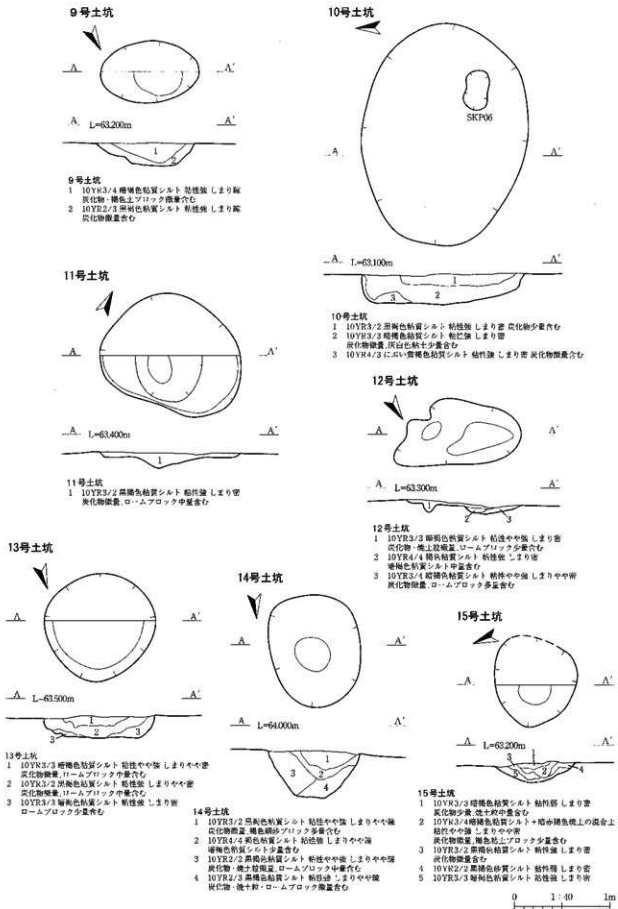
<時期> 出土遺物がないが、検出面がIVa層であることから古代に帰属するものと推定する。

13号土坑(第57図、写真図版27)

<位置・検出状況> VII J 4 i グリッドに位置する。周辺にはSKP11・27～40が隣接する。IVa層下位面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、従って遺構精査は半裁に留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な円形を呈し、規模は径約1.17m、深さは最深23cmを測る。



第57図 9～15号土坑

＜埋土＞ 3層に分けられる。暗～黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

＜底面＞ 基本層序Ⅵ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は確認調査区分を除き全周する。ほぼ直立して立ち上がる。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

14号土坑(第57図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞ ⅢJ 2cグリッドに位置する。本遺構の東から南東側にSKP61～75が隣接する。Ⅳa層下位面で検出した。本遺構は本調査区と確認調査区内にまたがる遺構であるが、全体の半分以上が本調査区内に含まれるので、完掘した。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 不整な楕円形を呈し、規模は1.19×0.95m、深さは最深50cmを測る。

＜埋土＞ 4層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、焼土や炭化物が混入する。

＜底面＞ 基本層序Ⅵ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

15号土坑(第57図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞ ⅦJ 14oグリッドに位置する。3m北側に16号土坑が隣接する。Ⅳa層下位面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半載に留めている。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 不整な楕円形を呈し、規模は0.96×0.79m、深さは最深20cmを測る。

＜埋土＞ 5層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とし、焼土や炭化物が混入する。

＜底面＞ 基本層序Ⅵ層面を底面とした。丸く窪んでいる。壁は確認調査区分を除き全周する。大きく外へと広がりながら立ち上がる。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

16号土坑(第58図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞ ⅦJ 13oグリッドに位置する。1.5m西側に17号土坑、3m南側に15号土坑が隣接する。Ⅳa層下位面で検出した。

＜重複関係＞ 6号溝と重複する。本遺構の方が新しい。

＜平面形・規模＞ 不整な円形を呈し、規模は径約0.88m、深さは最深11cmを測る。

＜埋土＞ 3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、埋土上位には粘土を含む黄褐色粘質シルトが混入する(1層)。

＜底面＞ 基本層序Ⅵ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

17号土坑(第58図、写真図版28)

<位置・検出状況> W J 13 n・13 o グリッドに位置する。1 m西側に18号土坑、1.5 m東側に16号土坑が隣接する。IV a層下位面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は径1.45×0.97 m、深さは最深8 cmを測る。

<埋土> 黒褐色砂質シルトを主体とする単層である。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。大きく広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

18号土坑(第58図、写真図版28)

<位置・検出状況> W J 13 n グリッドに位置する。1 m東側に17号土坑が隣接する。IV a層下位面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半載に留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な円形を呈し、規模は径約0.73 m、深さは最深40 cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。埋土上位は暗褐色粘質シルトを主体とするが、埋土下位は水気を帯び、グライ化している。底面や壁面には酸化鉄を多く含む層(3層)が薄く堆積する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は確認調査区分を除き、全周する。直立気味に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

19号土坑(第58図、写真図版28)

<位置・検出状況> W J 5 h・5 i グリッドに位置する。4 m北西側に20号土坑が隣接する。IV a層下位面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半載に留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 検出したプランは不整な楕円形を呈し、規模は1.72×1.19 m、深さは最深35 cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、埋土上位には暗褐色粘質シルトが偏在する。また底面付近には酸化鉄が堆積している。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は確認調査区分を除き、全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

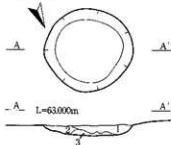
<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

20号土坑(第58図、写真図版28)

<位置・検出状況> W J 4 h グリッドに位置する。4 m南東側に19号土坑が隣接する。IV a層下位面で検出した。本遺構は本調査区と確認調査区内とにまたがる遺構であるが、全体の半分以上が本調査区内に含まれるので、完掘した。

4 検出遺構と出土遺物

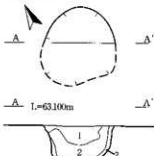
16号土坑



16号土坑

- 10YR4/3 赤い黄褐色粘質シルト 粘性强しまり密 炭化物粘土層下に微量含む
- 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強しまり密 炭化物粘土層を含む
- 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや密 炭化物微量、土器片含む

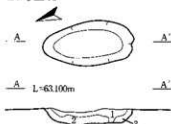
18号土坑



18号土坑

- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性强しまり密 炭化物少量、下に炭化粘土を含む
- 10YR1/1 灰白色粘土(クサイ化) 粘性强しまり密 下に炭化粘土を含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや密 炭化物少量含む

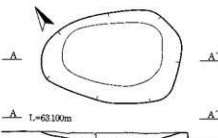
20号土坑



20号土坑

- 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや密 炭化物、粘土粒微量、炭化鉄少量含む
- 10YR2/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまり密 ロームブロック少量含む
- 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性强しまりやや密 炭化物微量含む

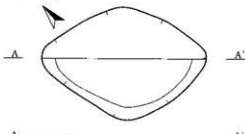
17号土坑



17号土坑

- 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强しまりやや密

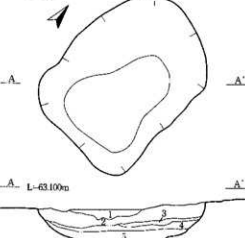
19号土坑



19号土坑

- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性强しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性强しまり密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强しまりやや密 ロームブロックやや多く、炭化鉄少量含む

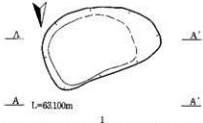
21号土坑



21号土坑

- 10YR4/3 赤い黄褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや密 炭化物、炭土粒微量含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや密 炭化物微量、炭土粒少量含む
- 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや密 炭土ブロック少量、ロームブロックやや多く含む
- 10YR3/2 赤褐色粘質シルト 粘性强しまり密 炭化物、炭土粒微量、ロームブロック少量含む
- 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强しまり密 炭化物微量、ロームブロック少量含む

22号土坑



22号土坑

- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまり密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性强しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性强しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む

0 1:40 1m

第58図 16～22号土坑

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は0.93×0.47m、深さは最深15cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒～暗褐色粘質シルトを主体とし、焼土や炭化物が混入する。埋土上位には酸化鉄が偏在する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

21号土坑(第58・64図、写真図版29)

<位置・検出状況> VII J 2 g グリッドに位置する。5m南東側に20号土坑が隣接する。IV a層下位面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は1.80×0.47m、深さは最深35cmを測る。

<埋土> 5層に分けられる。黒～暗褐色粘質シルトを主体とし、焼土や炭化物、ロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器が1540.7g出土しており、また陶磁器が21g出土している。陶磁器は流れ込みによる混入と思われる。4点図示した。156・159は土師器甕である。156はロクロ調整を施すが、159はロクロ調整が施されず、ヘラナア調整が施される。157は内黒の土師器坏である。158は内黒の高台付坏で口縁部から胴部上半を欠損する。

<時期> 出土した土師器から、9世紀後半に帰属するものと推定する。

22号土坑(第58図、写真図版29)

<位置・検出状況> VI J 24 j グリッドに位置する。12m南側に21号土坑が、5m北側に2号掘立柱建物跡が隣接する。IV a層下位面で検出した。本遺構は本調査区と確認調査区内とにまたがる遺構である。精査段階では遺構の半分以上が本調査区分に占められていると勘違いし、確認調査区分を残さず完掘した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は1.22×0.75m、深さは最深19cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒～暗褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。東側の壁は緩やかに広がりながら、西側の壁は大きく広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

23号土坑(第59図、写真図版29)

<位置・検出状況> VI J 9 g グリッドに位置する。3m西側にSKP110～117が隣接する。IV層F

位面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は1.69×0.93m、深さは最深17cmを測る。

<埋土> 2層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、焼土や炭化物が混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。皿状に窪んでいる。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

24号土坑(第59図、写真図版29)

<位置・検出状況> VI I 13 w グリッドに位置する。本遺構は東側の一部が調査区外に及んでいる。IV a層上面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 検出できた部分から不整な円形を呈するものと推定される。規模は径約0.97m、深さは最深13cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒～暗褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦であるが、北端には径約0.38m、深さ7cmを測るピット状の付属施設が付く。壁は調査区外部分を除き全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

25号土坑(第59図、写真図版30)

<位置・検出状況> VII I 22 n グリッドに位置する。本遺構は西側の一部が調査区外に及んでいる。1m東側に6号住居跡、2.5m南側に26号土坑が隣接する。IV a層上面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 検出できた部分から不整な楕円形を呈するものと推定される。規模は検出長0.98×0.64m、深さは最深41cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。いびつで、中央部分が窪んでいる。壁は調査区外部分を除き全周する。ほぼ直立気味に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

26号土坑(第59図、写真図版30)

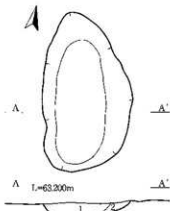
<位置・検出状況> VII I 23 n グリッドに位置する。3m北東側に6号住居跡、2.5m北側に26号土坑が隣接する。IV a層上面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は径約0.74×0.59m、深さは最深12cmを測る。

<埋土> 暗褐色粘質シルトを主体とする単層である。炭化物や酸化鉄が混入する。

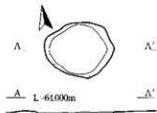
23号土坑



23号土坑

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強しまりや
炭化物・粘土粒少量、黄褐色砂質シルト少量含む
- 2 10YR3/4 暗褐色粘質シルト
粘性やや強しまりやや
炭化物・粘土粒少量、
黄褐色砂質シルトブロックやや多く含む

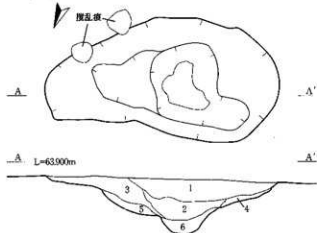
26号土坑



26号土坑

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト
粘性強しまりや
炭化物少量、膠状状少量含む

29号土坑



29号土坑

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや 炭化物少量含む
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性強しまりやや 炭化物少量、ロームブロック少量含む
- 3 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強しまりやや 炭化物・ロームブロック少量含む
- 4 10YR4/1 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや 炭化物・ロームブロック少量含む
- 5 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強しまりやや
炭化物少量、ロームブロック、炭化物少量含む
- 6 10YR4/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや 炭化物少量、ロームブロック少量含む

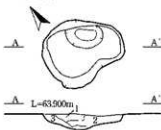
24号土坑



24号土坑

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト
粘性やや強しまりやや
炭化物少量、ロームブロック少量含む
- 2 10YR3/4 暗褐色粘質シルト
粘性強しまりやや
炭化物・ロームブロック少量含む
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質シルト
粘性強しまりやや

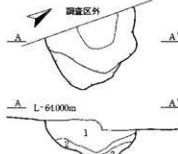
27号土坑



27号土坑

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりやや
炭化物少量含む
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性強しまりやや
炭化物少量、ロームブロック少量含む
- 3 10YR4/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強しまりや
炭化物少量含む

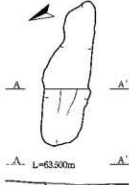
25号土坑



25号土坑

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト
粘性強しまりやや
炭化物・ロームブロック少量含む
- 2 10YR3/1 暗褐色粘質シルト 粘性強しまりや
炭化物少量、ロームブロック少量含む
- 3 10YR4/6 暗褐色粘質シルト 粘性強しまりや
暗褐色粘質シルトブロック少量含む

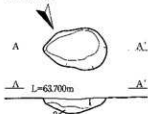
28号土坑



28号土坑

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
粘性強しまりや
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質シルト
粘性強しまりや
灰黄褐色土ブロック少量含む

30号土坑



30号土坑

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト
粘性強しまりや
炭化物少量、ロームブロック少量含む
- 2 10YR4/3 灰黄褐色粘質シルト
粘性強しまりや
暗褐色粘質シルトブロック少量含む

第59図 23～30号土坑

<底面> 基本層序Ⅵ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。ほぼ直立気味に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

27号土坑(第59図、写真図版30)

<位置・検出状況> ⅦI 24 p グリッドに位置する。1 m西側に7号住居跡が隣接する。Ⅳa層上面で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 南側が突出した不整な楕円形を呈する。規模は0.85×0.73 m、深さは最深15 cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒～褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序Ⅵ層面を底面とした。いびつで中央部分が窪む。壁は全周する。ほぼ直立気味に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

28号土坑(第59図、写真図版30)

<位置・検出状況> ⅦI 24 m・24 n グリッドに位置する。北側周辺にSKP147～151が隣接する。Ⅳa層上面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半載に留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な細長い楕円形を呈する。規模は1.57×0.52 m、深さは最深16 cmを測る。

<埋土> 2層に分けられる。灰黄褐色シルトを主体とする。2層は暗褐色粘質シルトが主体であるが、灰黄褐色シルトがブロックで混入する。

<底面> 基本層序Ⅵ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は確認調査区分を除き全周する。緩やかに開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

29号土坑(第59図、写真図版31)

<位置・検出状況> ⅦH 19 q グリッドに位置する。2.5 m西側に30号土坑が、南東側周辺にSKP215～217が隣接する。Ⅳa層上面で検出した。本遺構は本調査区と確認調査区内とにまたがる遺構であるが、全体の半分以上が本調査区内に含まれるので、完掘している。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は2.86×1.29 m、深さは最深57 cmを測る。

<埋土> 6層に分けられる。暗～黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序Ⅵ層面を底面とした。いびつで中央が窪んでいる。壁は全周する。西側の壁は緩やかに開きながら、東側の壁は大きく開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がⅣa層であることから古代に帰属するものと推定する。

30号土坑(第59図、写真図版31)

<位置・検出状況> WH18p・19pグリッドに位置する。25m東側に29号土坑が隣接する。IV a層上面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置する遺構であるが、精査段階では本調査区に位置していると勘違いし、完掘してしまった。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は0.66×0.44m、深さは最深15cmを測る。

<埋土> 2層に分けられる。埋土上位は暗褐色粘質シルト、埋土下位はにぶい黄褐色粘質シルトを主体とし、炭化物が混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。丸く窪んでいる。壁は全周する。緩やかに開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

31号土坑(第60図、写真図版31)

<位置・検出状況> WH17mグリッドに位置する。北側にSKP224が、1m西側に32号土坑とSKP225が隣接する。IV a層上面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置する遺構であるが、精査段階では本調査区に位置していると勘違いし、完掘してしまった。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は1.63×0.45m、深さは最深15cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、底面や壁面に暗褐色シルトが薄く堆積する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。大きく開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

32号土坑(第60図、写真図版31)

<位置・検出状況> WH17l・17mグリッドに位置する。南東側にSKP225が、1m東側に31号土坑が隣接する。IV a層上面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半裁に留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は1.09×0.66m、深さは最深10cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、壁面にロームブロックを含む暗褐～褐色シルトが堆積する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は確認調査区分を除き全周する。緩やかに開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

33号土坑(第60図、写真図版32)

<位置・検出状況> VII H 16 l グリッドに位置する。北東側にSKP226が、1 m 南西側に34号土坑が隣接する。IV a 層上面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置する遺構であるが、精査段階では本調査区に位置していると勘違いし、完掘してしまった。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は1.35×1.04 m、深さは最深34cmを測る。

<埋土> 4層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。円錐状に底部へ向かって細くなる。壁は全周する。北側の壁は直線的に外へと開きながら、南側は大きく開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a 層であることから古代に帰属するものと推定する。

34号土坑(第60図、写真図版32)

<位置・検出状況> VII H 17 k・17 l グリッドに位置する。1 m 北東側に34号土坑が隣接する。IV a 層上面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置する遺構であるが、精査段階では本調査区に位置していると勘違いし、完掘してしまった。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は1.03×0.79 m、深さは最深38cmを測る。

<埋土> 4層に分けられる。褐色粘質シルトと黒褐色粘質シルトが互層をなし堆積する。炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。円錐状に底部に向かって細くなる。壁は全周する。直線的に外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a 層であることから古代に帰属するものと推定する。

35号土坑(第60図、写真図版32)

<位置・検出状況> VII H 16 k グリッドに位置する。1 m 南西側に36号土坑が隣接する。IV a 層上面で検出した。本遺構は本調査区と確認調査区内とにまたがる遺構であるが、全体の半分以上が本調査区内に含まれるので、完掘している。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は1.17×1.00 m、深さは最深16cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物や焼土が混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。いびつで浅い凹凸がある。壁は全周する。緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

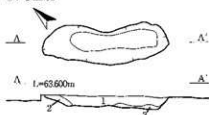
<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a 層であることから古代に帰属するものと推定する。

36号土坑(第60図、写真図版32)

<位置・検出状況> VII II 16 j グリッドに位置する。西側にSKP229が、1 m 北東側に35号土坑が隣接する。IV a 層上面で検出した。本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半蔵に留めている。

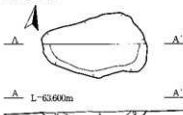
31号土坑



31号土坑

- 10YR3/2 黄褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック中量含む
- 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 暗褐色シルトブロックやや多く含む

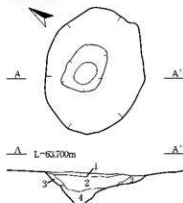
32号土坑



32号土坑

- 10YR3/2 黄褐色粘質シルト 粘性中 しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック中量含む
- 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 暗褐色シルトブロック中量含む

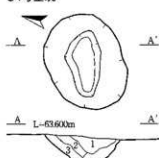
33号土坑



33号土坑

- 10YR3/2 黄褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物微量含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 ロームブロック多量含む
- 10YR3/4 黄褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む

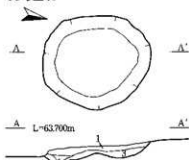
34号土坑



34号土坑

- 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性强 しまり密 炭化物微量含む
- 10YR3/2 黄褐色粘質シルト 粘性强 しまり密 炭化物微量、1層少量含む
- 10YR4/6 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、ロームブロック中量含む
- 10YR2/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、ロームブロックやや多く含む

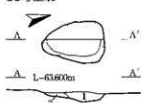
35号土坑



35号土坑

- 10YR3/2 黄褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物 少量少量含む
- 10YR2/3 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物 微量少量含む
- 10YR4/3 上黄褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物微量含む

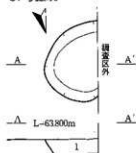
36号土坑



36号土坑

- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、ロームブロック少量含む
- 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 暗褐色シルトブロック少量含む

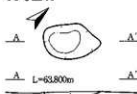
37号土坑



37号土坑

- 10YR3/1 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密

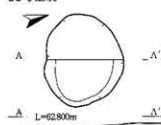
38号土坑



38号土坑

- 10YR4/3 上黄褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密

39号土坑



39号土坑

- 10YR4/3 上黄褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 灰化上

0 1:40 1m

第60図 31～39号土坑

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は0.65×0.44m、深さは最深9cmを測る。

<埋土> 2層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面> 基本層序VI層面を底面とした。いびつで南に向かいやや傾斜する。壁は確認調査区分を除き全周する。緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないが、検出面がIV a層であることから古代に帰属するものと推定する。

(須原)

37号土坑(第60図、写真図版33)

<位置・検出状況> VII H 10 d グリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと続いたため全容は不明だが、楕円形を呈するものと思われる。規模は確認できる部分で0.8×0.7mだが、長軸はこれ以上の長さが推測される。深さは最深15cmを測る。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。壁はやや外傾し直線的に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

38号土坑(第60図、写真図版33)

<位置・検出状況> VII H 8 e グリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> やや歪であるが楕円形を基調とし、規模は0.6×0.35mである。深さは最深12cmを測る。

<埋土> におい黄褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面にはやや凹凸がみられ、壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

39号土坑(第60図、写真図版33)

<位置・検出状況> VII H 10 j グリッドに位置し、IV a層で検出した。本遺構の半分は確認調査区にかかるため、精査は半截にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 円形を呈し、開口部径0.8～1.0mを測る。深さは最深8cmである。

<埋土> におい黄褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

40号土坑(第61図、写真図版33)

<位置・検出状況> VII H 9・10 j グリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと続くため全容は不明だが、楕円形を呈するものと思われる。規模は、確認できる部分で0.55×0.52mだが、長軸はこれ以上が推測される。深さは最深12cmである。

<埋土> 褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

41号土坑(第61図、写真図版33)

<位置・検出状況> VI G 8 v グリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は開口部2.3×1.2～1.5mである。深さは最深20cmを測る。また、西側にはビット状の掘り込みを有する。径0.45mの円形を呈し、深さは22cmである。

<埋土> 6層に細分されるが、大半が黒褐・暗褐色土である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。壁は南北側ではやや外側に開くが、東西側では直角に近い形で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

42号土坑(第61図、写真図版34)

<位置・検出状況> VI H 8 a グリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと続くため全容は不明だが、歪な楕円形を基調とするものと思われる。規模は検出部分で開口部1.5×1.2mであるが、長軸はこれ以上が推測される。深さは最深20cmを測る。

<埋土> 3層に細分される。堆積状況から自然堆積と思われる。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

43号土坑(第61図、写真図版34)

<位置・検出状況> VI H 9 k グリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと続くため全容は不明だが、楕円形を呈するものと思われる。規模は検出範囲で開口部2.3×0.9～1.1mであるが、長軸はこれ以上が推測される。深さは最深48cmを測る。

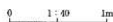
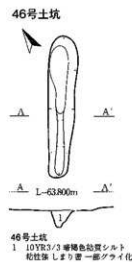
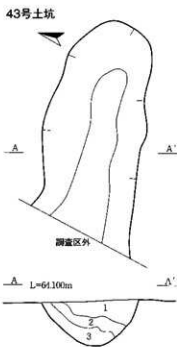
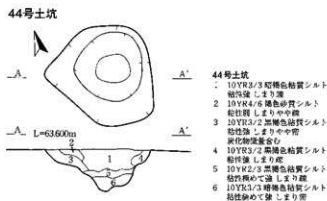
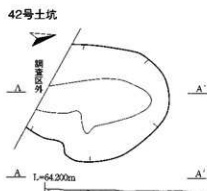
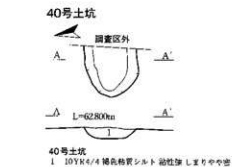
<埋土> 3層に細分される。堆積状況から自然堆積と思われる。

<底面・壁> 底面は丸みを帯びて湾曲し、壁へと緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

4 検出遺構と出土遺物



第61図 40～46号土坑

44号土坑(第61図、写真図版34)

<位置・検出状況> VII14qグリッドに位置し、IVa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な円形を基調とし、規模は開口部径1.0~1.1mを測る。深さは最深44cmである。

<埋土> 6層に細分される。上位の一部に砂質土が入るが、その他は黒褐~暗褐色の粘質土である。

<底面・壁> 漏斗状に中央部が窪む垂な断面形を呈し、中位~上位にかけては緩やか立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

45号土坑(第61図、写真図版34)

<位置・検出状況> VH10wグリッドに位置し、IVa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと続くため全容は不明であるが、円形を呈するものと思われる。規模は開口部径1.1mが推測される。深さは最深24cmを測る。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦で、壁は直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

46号土坑(第61図、写真図版35)

<位置・検出状況> VH9・10yグリッドに位置し、IVa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 長楕円形を呈し、規模は開口部1.5×0.3mである。深さは最深35cmを測る。

<埋土> 暗褐色土の単層で、一部グライ化がみられる。

<底面・壁> 北東側が一段下がるが、いずれも短軸上での断面形は、頂点が丸みを帯びた逆三角形状を呈する。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

47号土坑(第62図、写真図版35)

<位置・検出状況> VI12bグリッドに位置する。IVa層で検出したが、調査区域の断面状況を確認したところ、本遺構の掘り込み面はIII層上面であることが判った。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと続くため全容は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。規模は、確認できる部分で開口部0.55×0.5mだが、長軸はこれ以上が推測される。深さは最深55cmを測る。

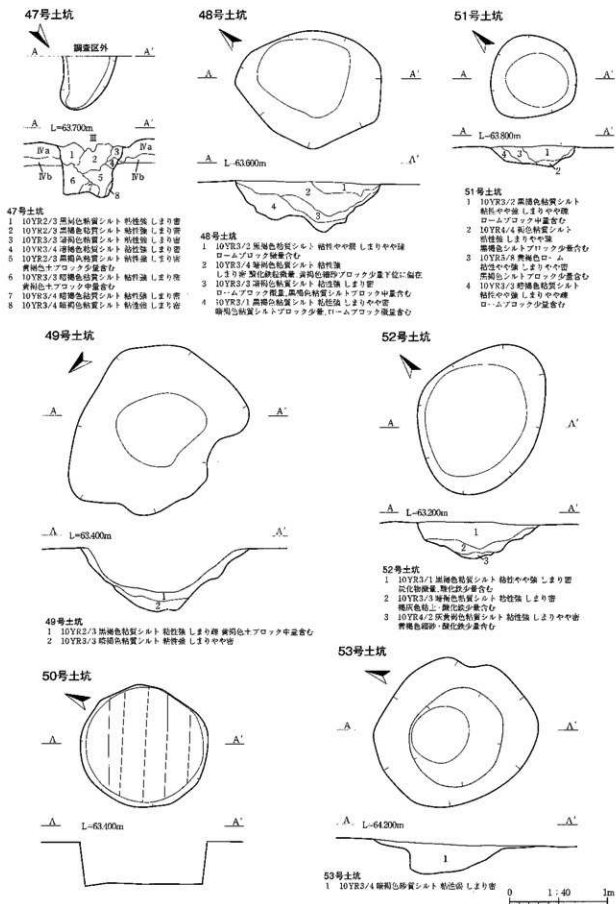
<埋土> 8層に細分される。いずれも黒褐色土または暗褐色土である。

<底面・壁> 底面は北側がやや低くなるものの、概ね平坦で、壁は直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

4 検出遺構と出土遺物



第62図 47～53号土坑

48号土坑(第62図、写真図版35)

<位置・検出状況> V I 16 i グリッドに位置し、IV a 層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> やや不整な楕円形を呈し、規模は開口部1.5×1.2mである。深さは最深55cmを測る。

<埋土> 4層に細分されるが、いずれも黒褐・暗褐色土で、堆積状況から自然流入土と判断される。

<底面・壁> 底面は南東側が一段低くなる。壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

49号土坑(第62図、写真図版35)

<位置・検出状況> V I 18 i グリッドに位置し、IV a 層で検出した。現代の旧水路にかかるため上部は遺存しない。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は開口部1.7×1.3～1.5mである。深さは最深80cmを測る。

<埋土> 2層が確認された。

<底面・壁> 底面には凹凸が認められる。壁は緩やかな立ち上がりだが、所々で垂である。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

50号土坑(第62・64図、写真図版36)

<位置・検出状況> V I 16 i グリッドに位置し、IV a 層で検出した。本遺構は土坑としたが、掘り込み内に桶状の水器を埋め込んだものである。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 円形を呈し、規模は開口部径1.3mである。深さは最深48cmを測る。

<埋土> 断面図の計測は行っていない。精査中の状況を記すと、埋土は黒～暗褐色土系で、木製の部材が大量に廃棄されている状況であった。

<底面・壁> 板状に加工した木材を円筒状に組み上げている。底面は平扱で、壁は直角に立ち上がる。

<出土遺物> 土師器片が4.8g、陶磁器片が24.8g、木椀(160)が1点出土している。

<時期> 出土遺物及び遺構の形態から、近～現代の肥え桶の可能性が考えられる。

51号土坑(第62図、写真図版36)

<位置・検出状況> V I 7 g グリッドに位置し、V 層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 円形を呈し、規模は開口部径0.9mである。深さは最深22cmを測る。

<埋土> 4層に細分される。

<底面・壁> 底面は南側がやや低位となるものの、概ね平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

52号土坑(第62図、写真図版36)

<位置・検出状況> V I 5 d・eグリッドに位置し、V層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 円形を呈し、規模は開口部径0.9mである。深さは最深22cmを測る。

<埋土> 4層に細分される。

<底面・壁> 底面は南側がやや低位となるものの、概ね平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

53号土坑(第62図、写真図版36)

<位置・検出状況> V I G 8 d~9 eグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 円形を呈し、規模は開口部径1.6~1.7mである。深さは最深32cmを測る。

<埋土> 褐色砂の単層である。

<底面・壁> 底面は南側に向かって高位となるが、概ね平坦である。壁は上位では皿状に囲いて立ち上がるが、中位以下では北側でほぼ直角に、南側では緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

54号土坑(第63図、写真図版37)

<位置・検出状況> V I G 9 eグリッドに位置し、IV a層で検出した。なお、本遺構の半分は確認調査区にかかるため、精査は半裁にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 円形を呈し、規模は開口部径1.1mである。深さは最深38cmを測る。

<埋土> におい黄褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面には凹凸が認められる。壁はやや外傾するが直線的である。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

55号土坑(第63図、写真図版37)

<位置・検出状況> V I G 10 d・eグリッドに位置し、IV a層で検出した。なお、本遺構は確認調査区にかかるため、精査は半裁にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な長楕円形を呈し、規模は開口部2.4×0.6~1.1mである。深さは最深23cmを測る。

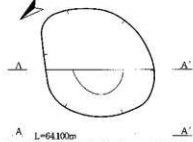
<埋土> 上位の褐色砂質土と下位の暗褐色砂質土の2層に分別される。

<底面・壁> 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

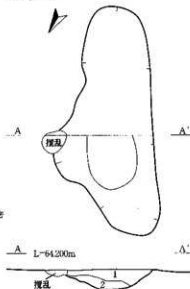
54号土坑



54号土坑

- 1 10YR4/3 赤い黄褐色砂質シルト 粘りやや強 しまり密

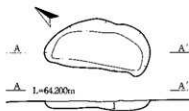
55号土坑



55号土坑

- 1 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性弱 しまり密
2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘りやや強 しまり密

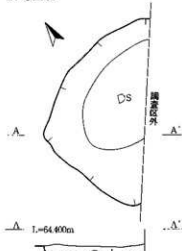
56号土坑



56号土坑

- 1 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
炭化物・焼土粒微量含む

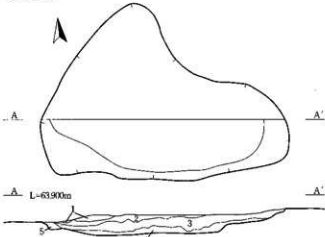
57号土坑



57号土坑

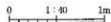
- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘りやや強 しまりや密
炭化物・焼土粒微量含む
2 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりや密
炭化物微量、ロームブロック少量含む

58号土坑



58号土坑

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘りやや強 しまり密 炭化物少量、焼土粒微量含む
2 10YR2/1 灰色 炭化物地層層
3 10YR4/3 赤い赤褐色粘質シルト 粘性強 しまりや密 炭化物微量含む
4 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性強、しまりや密 炭化物微量含む
5 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりや密 炭化物少量含む



第63図 54～58号土坑

56号土坑(第63図、写真図版37)

- <位置・検出状況> VI F 15・16 x グリッドに位置し、IV a層で検出した。
- <重複関係> なし。
- <平面形・規模> 歪な楕円形を呈し、規模は開口部1.1×0.5mである。深さは最深10cmを測る。
- <埋土> 暗褐色土の単層である。
- <底面・壁> 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物> なし。
- <時期> 不明である。

57号土坑(第63図、写真図版37)

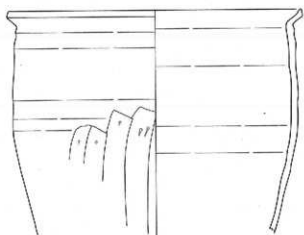
- <位置・検出状況> VI F 19 w グリッドに位置し、IV a層で検出した。
- <重複関係> なし。
- <平面形・規模> 調査区外へとかかるため全容は不明だが、円形を基調とするものと思われる。規模は開口部径約1.4mが推定される。深さは最深24cmである。
- <埋土> 上位の暗褐色土と下位の褐色土の2層に細分される。
- <底面・壁> 底面は概ね平坦で、壁はやや外側に開いて立ち上がる。
- <出土遺物> なし。
- <時期> 不明である。

58号土坑(第63図、写真図版37)

- <位置・検出状況> VI E 4 y グリッドに位置し、IV a層で検出した。なお、本遺構は確認調査区にかかるため、精査は半載にとどめた。
- <重複関係> SKP396～398と重複する。平面状況から、本遺構の方が古いと判断される。
- <平面形・規模> 不整な長楕円形を呈し、規模は開口部2.6×0.9～1.8mである。深さは最深20cmを測る。
- <埋土> 5層に細分される。2層は炭化物堆積する黒色土層である。
- <底面・壁> 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物> なし。
- <時期> 不明である。

(小林)

21号土坑



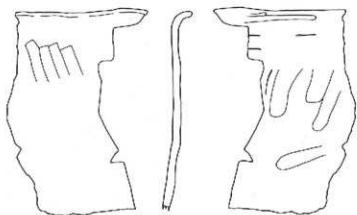
156



157



158



159

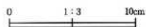
50号土坑



● ……漆



160



第64図 土坑出土遺物

畝間状遺構(第65図、写真図版38・39)

<位置・検出状況> VII 122 f ~ 23 h グリッドに位置する。東側に13号溝が、また周辺にはSKP171 ~ 207が隣接する。IV a層上面で、火山灰が溝状に分布するプランを7条検出した。いずれも軸方向は同一であり、7条間の幅も一定なので、可能性を考えて、ここでは「畝間状遺構」として報告する。なお本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半裁に留めている。北側は調査区外に及んでいる。

<重複関係> SKP183・192・195・196と重複する。本遺構が最も新しい。また3号掘立柱建物跡とも重複するが3号掘立柱建物跡の柱穴と本遺構群とは重複していないので、新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 溝状を呈し、軸方向はN-28°-Eである。規模は検出長が0.72~2.01 m、幅0.07~0.21 mである。深さは3~10 cmである。

<埋土> 火山灰が堆積する層のみである。火山灰は分析の結果、十和田 a テフラである可能性が高いことが指摘されている(第IX章参照)。

<出土遺物> なし。

<時期> 堆積する火山灰が915年に降下した十和田 a テフラである可能性が高いことから、その前後の時期に帰属するものと思われる。

(須原)

溝

1号溝(第65図、写真図版40)

<位置・検出状況> VII J 6 s ~ VII J 8 t グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-33°-Wである。規模は検出長10.0 m、幅0.4 mで、深さは最深8 cmを測る。

<埋土> 黒褐色粘質シルトを主体とする単層である。

<底面・壁> 底面は平坦である。壁はやや開きながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器が21.7 g 出土している。小片で図示していない。

<時期> 出土遺物から古代以降と考えられる。

<その他> 北西の軸線方向に5号溝が位置し、本溝跡と同一遺構の可能性がある。

2号溝(第66図、写真図版40)

<位置・検出状況> VII J 1 k ~ VII J 6 o グリッドに位置する。IV層上面で検出した。北東端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> SKP004・21・31・96と重複する。本遺構が最も古い。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-41°-Wである。規模は一部調査区外に及ぶが検出長25.1 m、幅0.35 mで、深さは最深19 cmを測る。

<埋土> 暗褐色粘質シルトを主体とする単層で、炭化物や焼土が混入する。

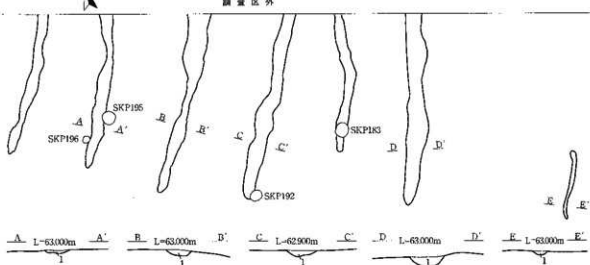
<底面・壁> 底面は平坦である。壁は緩やかに開きながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器が19.9 g 出土している。小片で図示していない。

<時期> 出土遺物から古代以降と考えられる。

<その他> なし。

竅間状遺構



竅間状遺構

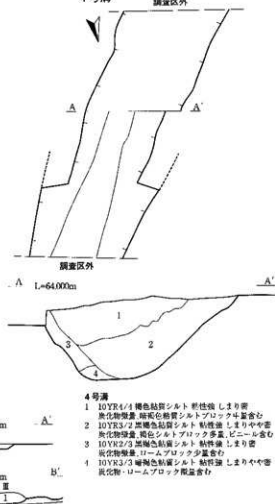
1 10YR4/2 灰青褐色火山灰 粘性强 しまり密 中粗火山灰

1号溝



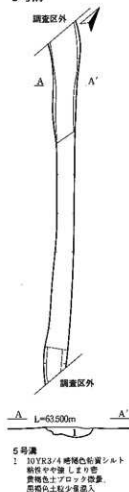
1号溝
1 10YR2/3 灰褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 褐色土ブロック少量混入

4号溝



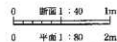
4号溝
1 10YR4/1 褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 灰化物微量 灰化粘質シルトブロック少量含む
2 10YR3/2 灰褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 灰化物微量 褐色シルトブロック多量、ビニール含む
3 10YR2/3 灰褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 灰化物微量、ロームブロック少量含む
4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 灰化物-ロームブロック微量含む

5号溝



5号溝
1 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 灰褐色土ブロック微量、黒褐色土少量混入

第65図 竅間状遺構、1・4・5号溝



3号溝(第66図、写真図版40)

<位置・検出状況> VII J 3 k ~ VIII J 5 l グリッドに位置する。周辺にはSKP17・18・45・46が隣接する。IVa層上面で検出した。北東端は調査区外に及んでいる。

<重複関係> 12号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-43°-Wである。規模は検出長8.3m、幅0.4mで、深さは最深25cmを測る。

<埋土> 黒褐色粘質シルトを主体とする単層で、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面・壁> 底面は平坦である。壁は緩やかに開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、重複する12号土坑が古代に帰属することや検出面がIV層上面であること、また埋土の様相から古代と考えられる。

<その他> 北西の軸線方向に11号溝が位置し、本溝と同一遺構の可能性はある。ただし、11号溝との距離は40mを測り、その間は調査区外であることから、ここでは別の遺構とした。

4号溝(第65図、写真図版40)

<位置・検出状況> VII J 1 b ~ 2 b グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-33°-Eである。規模は検出長5.2m、幅2.3mで、深さは最深84cmを測る。

<埋土> 4層に分けられる褐〜黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物が混入する。

<底面・壁> 底面は平坦である。壁は大きく外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器71.6g、須恵器158.7gが出土している。小片なので図示していない。

<時期> 出土遺物から古代と考えられる。

<その他> 北側の調査区範囲(第16図B区が相当する)からは本遺構は検出されなかった。

5号溝(第65図、写真図版41)

<位置・検出状況> VII J 22 l ~ 24 m グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-33°-Wである。規模は検出長7.2m、幅0.5mで、深さは最深10cmを測る。

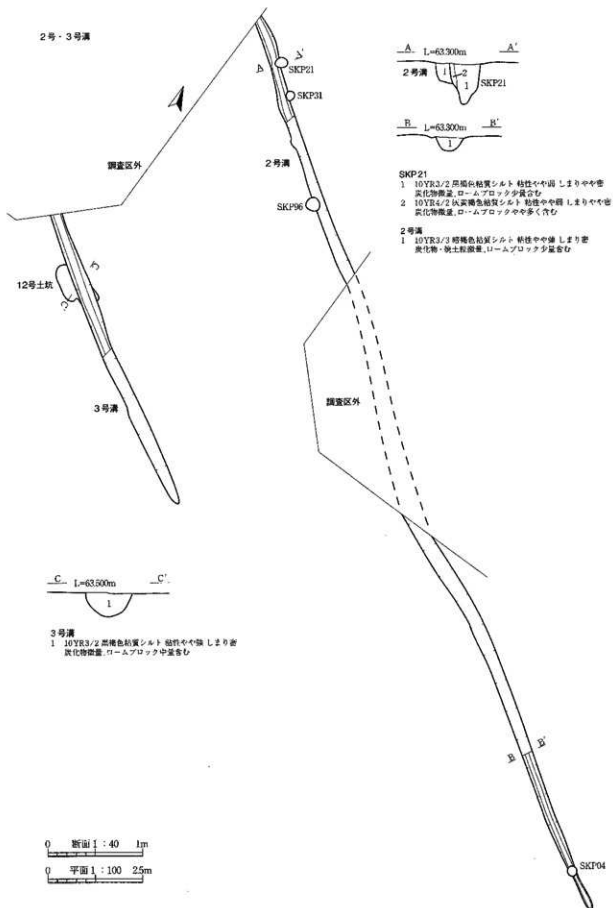
<埋土> 暗褐色粘質シルトを主体とし、黄褐色や黒褐色のシルトブロックが混入する。

<底面・壁> 底面はややいびつで、西側がややあがる。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIVa層上面であるから古代と考えられる。

<その他> 本遺構の延長線上に1号溝と10号溝が位置するので、この3条は同一遺構である可能性がある。ただし遺構間の調査区外範囲が広く、断定は出来ないため、今回は別遺構とした。



第66図 2・3号溝

6号溝(第68図、写真図版41)

<位置・検出状況> VI J 13 m ~ 13 p グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。西端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-79°-Eである。規模は検出長8.7m、幅0.5mで、深さは最深5cmを測る。

<埋土> 暗褐色粘質シルトを主体とした単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

<その他> 中央の調査区(第18図D区)には本遺構の軸線上にのるプランは検出されなかった。

7号溝(第68図、写真図版41)

<位置・検出状況> VI J 18 k ~ 20 l グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。西端は調査区外に及び、東端は現代の水路により削平されている。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-20°-Wである。規模は検出長8.1m、幅1.5mで、深さは最深59cmを測る。

<埋土> 6層に分けられる。暗〜黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物が混入する。

<底面・壁> 底面は軸線上に平行して深く掘り穿められ、薬研状を呈する。壁は直線的に大きく外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器が65.0g出土している。小片なので図示していない。

<時期> 出土遺物から古代と考えられる。

<その他> 北側の調査区(第17図C区)には本遺構の軸線上にのるプランは検出されなかった。従って本遺構の北端はC区に至るまでの調査区外のどこかでとどまるものと推測される。

8号溝(第68図、写真図版41)

<位置・検出状況> VI J 11 i ~ 11 k グリッドに位置する。南側に5号住居跡が隣接する。IV a層上面で検出した。本遺構の南端は調査区外に及んでいる。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-88°-Wである。規模は検出長10.1m、幅0.4mで、深さは最深15cmを測る。

<埋土> 暗褐色粘質シルトを主体とする単層で、炭化物や砂質シルトブロックが混入する。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器6.1g出土している。小片なので図示していない。

<時期> 出土遺物から古代と考えられる。

<その他> 西側の調査区(第17図C区VI J 11 x グリッド付近)には本遺構の軸線上にのる溝は検出されなかった。従って本遺構の西端は調査区外のどこかでとどまるものと推測される。

9号溝(第67・68図、写真図版42・64)

〈位置・検出状況〉 VI J 1 v ~ 2 v グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 やや弧を描いて延びている。軸線方向はN-9°-Eである。規模は検出長7.8m、幅0.8mで、深さは最深16cmを測る。

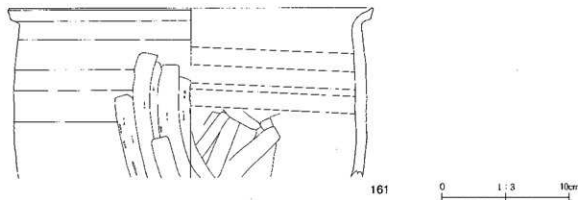
〈埋土〉 黒褐色粘質シルトを主体とする単層で、炭化物や砂質シルトブロックが混入する。

〈底面・壁〉 底面は丸く窪んでいる。壁はほぼ直立的に立ち上がる。

〈出土遺物〉 土師器345.5g、須恵器126.6gが出土している。1点図示した。161は土師器甕で口縁部は外へと向かって広がる形態でロクロ調整を施している。

〈時期〉 出土遺物から古代と考えられる。

〈その他〉 南側の調査区(第18図D~E区)には本遺構の軸線上にのる溝跡は検出されなかった。従って本遺構の南端は調査区外のどこかでとどまるものと推測される。



第67図 9号溝出土遺物

10号溝(第68図、写真図版42)

〈位置・検出状況〉 VII I 23 t ~ 23 u グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 直線的に延びている。軸線方向はN-24°-Wである。規模は検出長3.5m、幅0.4mで、深さは最深8cmを測る。

〈埋土〉 黒褐色粘質シルトを主体とする単層で、炭化物や砂質シルトブロックが混入する。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

〈その他〉 南東の軸線方向には5号溝が位置しており同一遺構である可能性がある。ただし、両遺構間の調査区外範囲が広いので、別遺構とした。

11号溝(第68図、写真図版42)

<位置・検出状況> VII 8 r ~ 9 r グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-28°-Wである。規模は検出長3.6m、幅0.5mで、深さは最深38cmを測る。

<埋土> 2層に分けられる。黒~暗褐色粘質シルトを主体とする。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は直線的に外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

<その他> 軸線の南東方向に3号溝が位置し、同一遺構の可能性が考えられる。ただし、遺構間の調査区外範囲が広いので、断定は出来ないため、今回は別遺構とした。

12号溝(第68図、写真図版42)

<位置・検出状況> VII 9 r ~ 10 q グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-83°-Eである。規模は検出長2.7m、幅0.4mで、深さは最深14cmを測る。

<埋土> 暗褐色粘質シルトを主体とする単層で、炭化物や砂質シルトブロックが混入する。

<底面・壁> 底面は丸く窪んでいる。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

<その他> 軸線方向上にある溝は認められない。6号溝が位置するが、ややずれている。

13号溝(第69図、写真図版43)

<位置・検出状況> VII 22 i ~ 23 h グリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> 3号掘立柱建物跡と重複する。ただし3号掘立柱建物跡の柱穴と本遺構とは重複していないので、新旧関係については不明である。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-28°-Eである。規模は検出長5.0m、幅1.4mで、深さは最深36cmを測る。

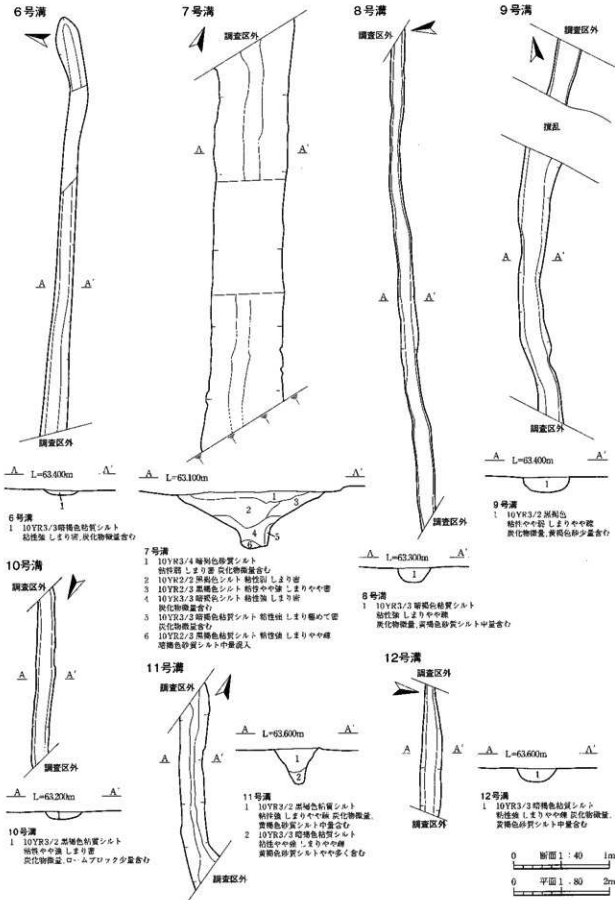
<埋土> 5層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物やロームブロックが混入する。

<底面・壁> 底面は軸線上に平行して深く掘り窪められ、壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

<その他> 北側の調査区(第18図D区)には本遺構の軸線上にある溝は検出されなかった。従って本遺構の北端は調査区外のどこかでとどまるものと推測される。



第68図 6～12号溝

14号溝(第69図、写真図版43)

<位置・検出状況> VII H 20 y ~ VII I 22 b グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> やや弧を描く。軸線方向はN-42°-Wである。規模は検出長7.7m、幅0.7mで、深さは最深6cmを測る。

<埋土> におい黄褐色粘質シルトを主体とする単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

<その他> 西側の調査区(第20図F~G区)には本遺構の軸線上にのるプランは検出されなかった。従って本遺構の西端は調査区外のどこかでとどまるものと推測される。

15号溝(第69図、写真図版43)

<位置・検出状況> VII H 20 u ~ 21 u グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-17°-Eである。規模は検出長5.8m、幅0.7mで、深さは最深23cmを測る。

<埋土> 暗褐色~灰黄褐色粘質シルトを主体とし、黄褐色シルトブロックや炭化物が混入する。

<底面・壁> 底面はややいびつで、中央部分がやや窪む。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

<その他> 北側の調査区(第17図C区)には本遺構の軸線上にのるプランは検出されなかった。従って本遺構の西端は調査区外のどこかでとどまるものと推測される。

(須原)

16号溝(第69図、写真図版43)

<位置・検出状況> VII H 19 s ~ 21 t グリッドに位置し、IV a層で検出した。本溝跡は確認調査区にかかるため、精査は半裁にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではやや弧状をとるものの、概ね直線的な形状を呈する。軸線方向はN-33°-W、規模は検出部分で長さ8.1m、幅40~80cm、深さは最深25cmを測る。

<埋土> 3層に細分される。

<底面・壁> 底面は概ね平坦で、壁は東側では直線的に、西側では外側に向けて立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

17号溝(第69図、写真図版44)

<位置・検出状況> VII 113 h ~ 14 j グリッドに位置し、IV a 層で検出した。本溝跡は確認調査区にかかると、精査は半載にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では直線的な形状を呈する。軸線方向はN-73°-W、規模は検出部分で長さ5.7m、幅40~50cm、深さは最深25cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は上位で外側に大きく開くが、直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の西方延長線上に18号溝が位置している。規模・形状等からも本溝跡と同一遺構である可能性が高い。

18号溝(第69図、写真図版44)

<位置・検出状況> VII 112 c・d グリッドに位置し、IV a 層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では直線的な形状を呈する。軸線方向はN-83°-W、規模は検出部分で長さ2.8m、幅40~50cm、深さは最深24cmである。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦で、壁は直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の東方延長線上に17号溝が位置している。規模・形状等からも本溝跡と同一遺構である可能性が高い。

19号溝(第69図、写真図版44)

<位置・検出状況> VII 112 i・j グリッドに位置し、IV a 層で検出した。本溝跡は確認調査区にかかると、精査は半載にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では直線的な形状を呈する。軸線方向はN-61°-W、規模は検出部分で長さ5.8m、幅25~40cm、深さは最深12cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は上位で外側に大きく開くが、直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

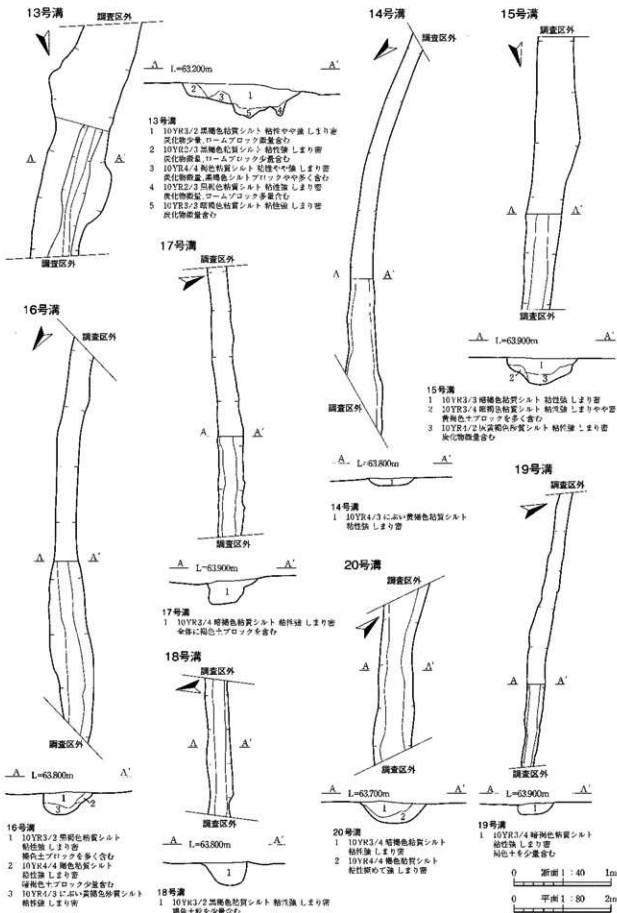
<時期> 不明である。

20号溝(第69図、写真図版44)

<位置・検出状況> VII 111 d グリッドに位置し、IV a 層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では直線的な形状を呈



第69図 13～20号溝

する。軸線方向はN-45°-W、規模は検出部分で長さ3.4m、幅65～80cm、深さは最深23cmである。

<埋土> 上位の暗褐色土と下位の褐色土の2層に分別される。

<底面・壁> 底面は南東に向かって低くなる。壁は深皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

21号溝(第70図、写真図版45)

<位置・検出状況> VII H 11 i・jグリッドに位置し、IV a層で検出した。本溝跡は確認調査区にかかるため、精査は半截にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-57°-W、規模は検出部分で長さ6.2m、幅0.8～1.2m、深さは最深52cmである。

<埋土> 3層に細分されるが、上位の暗褐色土と下位の褐色土に大別できる。

<底面・壁> 底面は北西に向かってやや低位となる。壁は中位で外側に大きく開くが、直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の北西方向延長線上に22号溝が位置している。規模・形状等からも本溝跡と同一遺構と考えられる。

22号溝(第70図、写真図版45)

<位置・検出状況> VII H 8 eグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> SKP256と重複する。平面状況から本遺構の方が古いと判断される。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-61°-W、規模は検出部分で長さ3.1m、幅80cm、深さは最深35cmを測る。

<埋土> 4層に細分されるが、上～中位の暗褐色土と下位の褐色土に大別できる。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。壁は北側では直線的に、南側では外側に開く形で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の南東方向延長線上に21号溝が位置している。規模・形状等からも本溝跡と同一遺構と考えられる。

23号溝(第70図、写真図版45)

<位置・検出状況> VII H 6 f～7 eグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-45°-E、規模は検出部分で長さ6.1m、幅45～65cm、深さは最深21cmを測る。

<埋土> 2層に細分されるが、暗褐色土を主体としている。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は部分的に中位で外傾するが、概ね直線的に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期>不明である。

24号溝(第70図、写真図版45)

<位置・検出状況> VII 4 k・1グリッドに位置し、IV a層で検出した。本溝は確認調査区にかか
るため、精査は半裁にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 西側が調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に
延びる。軸線方向はN-73°-W、規模は検出部分で長さ5.2m、幅35cm、深さは最深10cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

25号溝(第70図、写真図版46)

<位置・検出状況> VI H 17 n・oグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。
軸線方向はN-67°-W、規模は検出部分で長さ1.9m、幅30~35cm、深さは最深19cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は北西に向かって低位となる。断面形はU字状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

26号溝(第70図、写真図版46)

<位置・検出状況> VI H 17 oグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。
軸線方向はN-78°-W、規模は検出部分で長さ2.2m、幅25~35cm、深さは最深7cmである。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

27号溝(第70図、写真図版46)

<位置・検出状況> VI H 13・14 jグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。
軸線方向はN-16°-W、規模は検出部分で長さ3.8m、幅40~55cm、深さは最深11cmである。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物>なし。
<時期>不明である。

28号溝(第70図、写真図版46)

<位置・検出状況> MH11 j ~ 12 k グリッドに位置し、IV a 層で検出した。
<重複関係> なし。
<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-45°-W、規模は検出部分で長さ3.5m、幅2.0m、深さは最深50cmを測る。
<埋土> 4層に細分されるが、黒褐色土と暗褐色土を主体とする。
<底面・壁> 底面は南東に向かって低位となり、壁は緩やかに立ち上がる。
<出土遺物> なし。
<時期> 不明である。

29号溝(第70図、写真図版47)

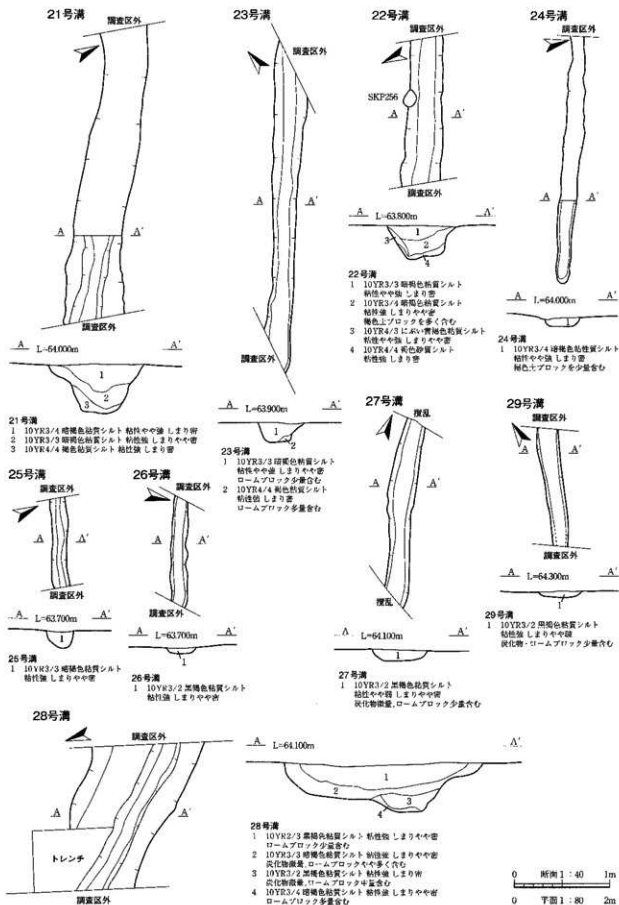
<位置・検出状況> VII 8・9 c グリッドに位置し、IV a 層で検出した。
<重複関係> なし。
<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-25°-W、規模は検出部分で長さ2.5m、幅45cm、深さは最深7cmを測る。
<埋土> 黒褐色土の単層である。
<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。
<出土遺物> なし。
<時期> 不明である。

30号溝(第71図、写真図版47)

<位置・検出状況> VI 6 q ~ 9 r グリッドに位置し、IV a 層で検出した。間に調査区外部分を挟むため北側と南側に分かれるが、同軸線上にあることから同一遺構と判断した。
<重複関係> なし。
<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-11°-W、規模は検出部分で長さ10.8m、幅30~45cm、深さは最深7cmを測る。
<埋土> 暗褐色土の単層である。
<底面・壁> 底面は南に向かって低位となる。壁は北側では皿状に、南側ではU字状に立ち上がる。
<出土遺物> なし。
<時期> 不明である。

31号溝(第71図、写真図版47)

<位置・検出状況> VI 5・6 r グリッドに位置し、IV a 層で検出した。
<重複関係> なし。
<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では概ね直線に延びる。軸線方向はN-14°-W、規模は検出部分で長さ4.1m、幅55cm、深さは最深29cmを測る。
<埋土> 暗褐色土の単層である。



第70図 21～29号溝

<底面・壁> 底面はほぼ平坦で、壁はU字状に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

32号溝(第71図、写真図版47)

<位置・検出状況> VH25s・VH1sグリッドに位置し、IVa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-22°-W、規模は検出部分で長さ3.3m、幅50~70cm、深さは最深37cmを測る。

<埋土> 上位のふい黄褐色土と下位の暗褐色土の2層に分かれる。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁はU字状に緩やかに立ち上がるが、上位では外傾する。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

33号溝(第71図、写真図版48)

<位置・検出状況> VH2b~1dグリッドに位置し、IVa層で検出した。本溝跡は確認調査区にあるため、部分的な精査にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-72°-E、規模は検出部分で長さ10.3m、幅35~90cm、深さは最深35cmを測る。

<埋土> 上位のふい黄褐色土と下位の暗褐色土の2層に分かれる。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁はU字状に緩やかに立ち上がるが、上位では外傾する。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

34号溝(第71図、写真図版48)

<位置・検出状況> VH25d~24fグリッドに位置し、IVa層で検出した。本溝跡は確認調査区にあるため、部分的な精査にとどめた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではやや弧状となるものの、概ね直線的に延びる。軸線方向はN-71°-E、規模は検出部分で長さ10.6m、幅35~60cm、深さは最深15cmを測る。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の北東延長線上に35号溝、さらに同延長線上に36号溝が位置している。可能性の示唆にとどめておくが、本溝と同一遺構の可能性はある。

35号溝(第71図、写真図版48)

<位置・検出状況> VH22n・oグリッドに位置し、IVa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-70°-E、規模は検出部分で長さ3.7m、幅30~40cm、深さは最深8cmを測る。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は北東に向かって僅かに低位となる。壁は直線的に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の南西延長線上に34号溝、北西延長線上に36号溝が位置している。可能性の示唆にとどめておくが、本溝と同一遺構の可能性はある。

36号溝(第71図、写真図版48)

<位置・検出状況> VH19t・uグリッドに位置し、IVa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではやや蛇行するものの、ほぼ直線状に延びる。軸線方向はN-68°-E、規模は検出部分で長さ2.2m、幅45~50cm、深さは最深20cmを測る。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁はU字状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

<その他> 軸線の南西延長線上に35号溝、さらにその延長線上に34号溝が位置している。可能性の示唆にとどめておくが、本溝と同一遺構の可能性はある。

37号溝(第71図、写真図版49)

<位置・検出状況> VH20oグリッドに位置し、IVa層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 北東側が調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分はやや北側に膨らむ弧状を呈する。軸線方向はN-66°-E、規模は検出部分で長さ2.7m、幅35~50cm、深さは最深7cmを測る。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

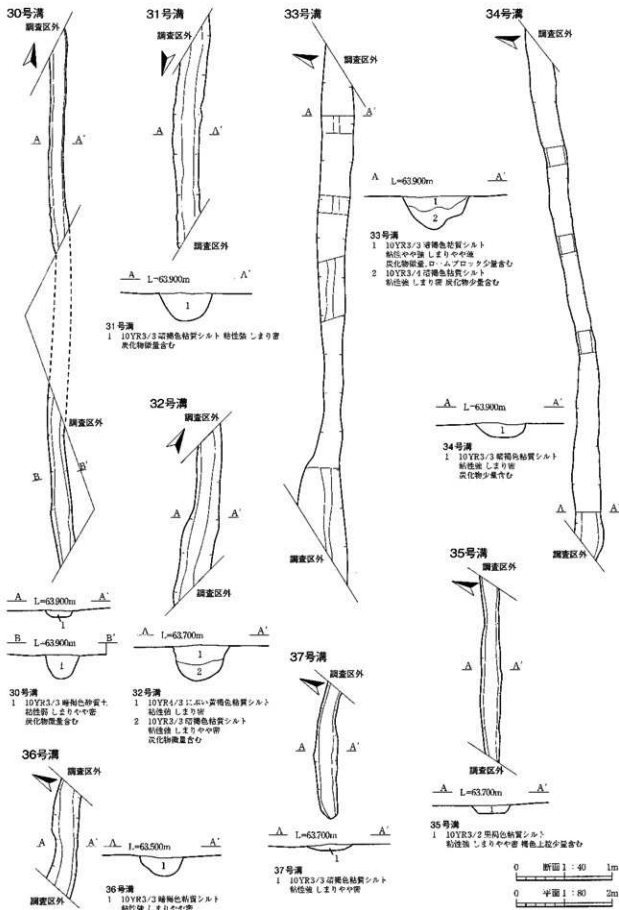
<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は血状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

38号溝(第72・73図、写真図版49)

<概況> 個別に検出された3本の溝跡を38号溝とした。走向方位は異なるものの、規模・形態が共通することから同一遺構と判断した。これを第72図に推定図として図示した。38号-1から38号-2にかけて、走向方位が屈曲するものと推察される。また、北方の野沢I遺跡分においても同規模



第71図 30～37号溝

の溝跡が確認されている（1・6号溝）。本溝跡と同一遺構であるとするならば、方形または長方形に全周する可能性も考えられるが、調査区外を跨ぐため詳細は不明であり、ここでは可能性の示唆にとどめておきたい。以下、各溝跡の詳細を記す。

38号溝-1

<位置・検出状況> VII 16～18 p グリッドに位置し、IV a 層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 確認された部分ではほぼ直線状に延びる。軸線方向はN-16°-W、規模は検出部分で長さ6.0m、幅1.5～1.8m、深さは最深88cmを測る。

<埋土> 8層に細分される。1層暗褐色土が上～中位を占める。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は台形状を呈し、上位で外傾するものの直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> 土師器の小片が埋土中から3点出土している。

<時期> 不明である。

38号溝-2

<位置・検出状況> VII 11 w グリッドに位置し、IV a 層で検出した。検出ブランから土坑と考え精査を行ったが、底面が一定の方向に直線的に延びることから溝跡と判断した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 確認された部分ではほぼ直線状に延びる。軸線方向はN-67°-E、規模は検出部分で長さ3.0m、幅1.2～1.5m、深さは最深95cmを測る。

<埋土> 11層に細分される。黒褐色土と暗褐色土が主体である。

<底面・壁> 底面は中央部が窪んでいる。断面形は楕円状を呈し、やや外傾するものの直角に近い角度で立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

38号溝-3

<位置・検出状況> VI 13 f～14 d グリッドに位置し、IV a 層で検出した。

<重複関係> 1号土坑、SKP431～435と重複する。1号土坑については、本遺構の方が新しい。SKP431～435については、精査段階での検出となったため新旧関係については不明である。

<平面形・規模> 確認された部分ではほぼ直線状に延びる。軸線方向はN-66°-E、規模は検出部分で長さ7.3m、幅1.2～1.5m、深さは最深53cmを測る。

<埋土> 5層に細分される。暗褐色土と褐色土が主体である。

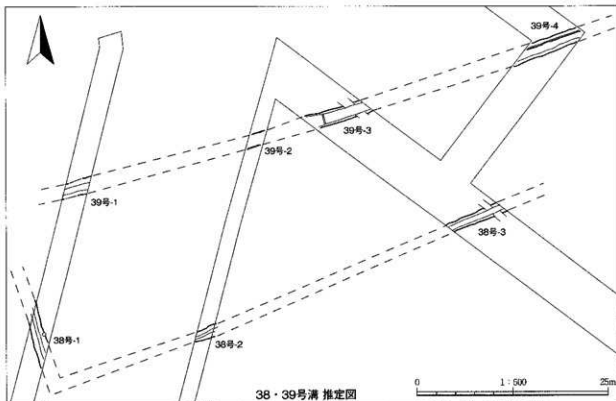
<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は台形状を呈し、やや上半で外傾するものの直線的に立ち上がる。

<出土遺物> 土師器の小片1点が埋土中より出土している。

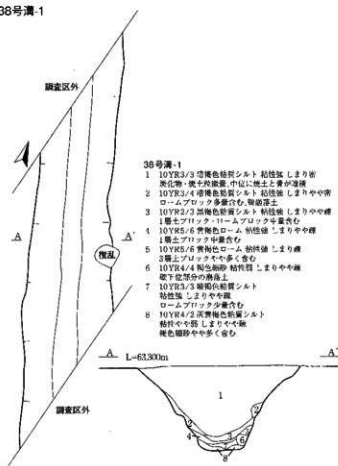
<時期> 不明である。

39号溝（第73図、写真図版49）

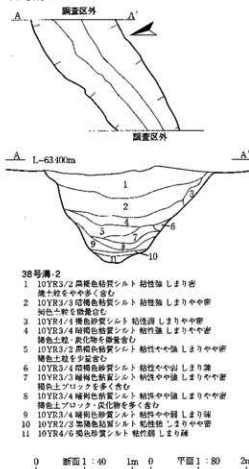
<概況> 個別に検出された4本の溝を39号溝とした。走向方位や規模が共通することから同一遺構と判断した。これを第72図に推定図として図示した。前述の38号溝と並行することから関連があるものと推測される。以下、各溝についての詳細を記す。



38号溝-1



38号溝-2



第72図 38号溝

39号溝-1

<位置・検出状況> VH12・13qグリッドに位置し、IV a層で検出した。中央には試掘トレンチが開けられている。

<重複関係> SKP423と重複する。試掘トレンチ内で検出したため、新旧関係については不明である。

<平面形・規模> 確認された部分では直線状に延びる。軸線方向はN-75°-E、規模は長さ3.4m、幅2.1m、深さは最深39cmを測る。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

39号溝-2

<位置・検出状況> VH11wグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 確認された部分では直線状に延びる。軸線方向はN-75°-E、規模は長さ1.7m、幅1.7m、深さは最深11cmを測る。

<埋土> 3層に細分される。主体は3層黒褐色土である。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

39号溝-3

<位置・検出状況> VH10x~VI10bグリッドに位置し、IV a層で検出した。遺構東側に調査区と平行する旧水路があり、若干の範囲が攪乱を受けている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 確認された部分では直線状に延びる。軸線方向はN-72°-E、規模は長さ7.2m、幅2.0m、深さは最深46cmを測る。遺構西側は一段高位となり、この部分の深さは25cm程である。

<埋土> 3層に細分される。暗褐色土が主体となる。

<底面・壁> 底面は概ね平坦である。断面形は台形状を呈し、直線的に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

39号溝-4

<位置・検出状況> VI7h~8iグリッドに位置し、検出面はV層である。

<重複関係> 3号土坑、46号溝と重複する。両者よりも本遺構の方が新しいと判断した。

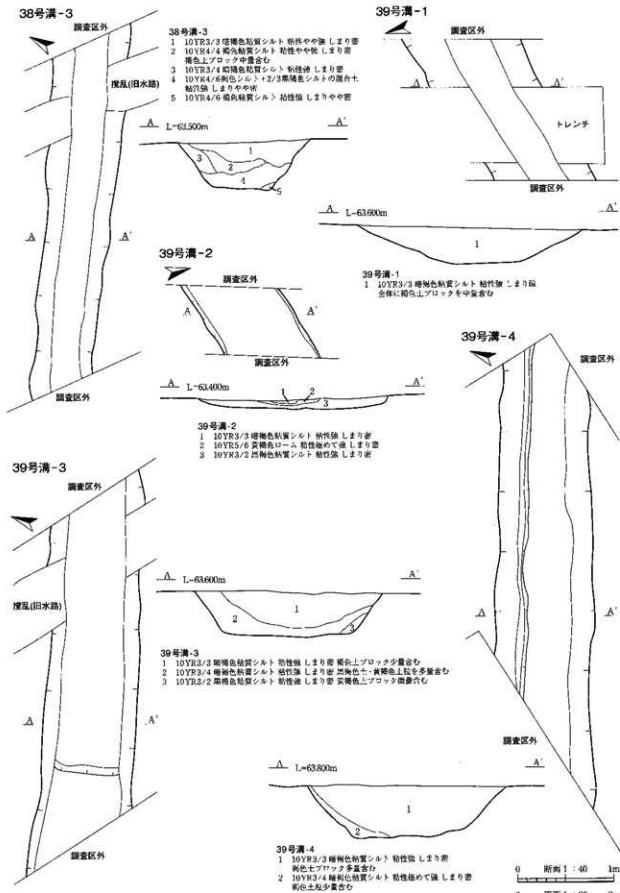
<平面形・規模> 確認された部分では直線状に延びる。軸線方向はN-70°-E、規模は長さ8.3m、幅2.0m、深さは最深55cmを測る。

<埋土> 2層に細分される。暗褐色土が主体である。

<底面・壁> 底面北側は数cm程低く掘り込まれているのが確認された。その他はやや凹凸がみられるものの、概ね平坦である。断面形は椀状を呈し、やや外側に開きながら立ち上がる。

<出土遺物> 土師器片が77.6g出土している。いずれも埋土中位以上からの出土である。

<時期> 不明である。



第73図 38・39号溝

40号溝(第74図、写真図版50)

<位置・検出状況> V H 15 p・qグリッドに位置し、IV a層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではやや蛇行するものの、ほぼ直線状に延びる。軸線方向はN-57°-E、規模は検出部分で長さ4.3m、幅15~30cm、深さは最深5cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は南西に向かって低位となる。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

41号溝(第74図、写真図版51)

<位置・検出状況> V I 11 c~13 dグリッドに位置し、V層で検出した。

<重複関係> 1号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

<平面形・規模> 南東側が調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-24°-W、規模は検出部分で長さ9.1m、幅40~55cm、深さは最深13cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は南東に向かって低位となる。壁は緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

42号溝(第74図、写真図版51)

<位置・検出状況> V I 14 g~17 hグリッドに位置し、V層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では旧水路部で湾曲するものの、概ね直線状に延びる。軸線方向はN-22°-W、規模は検出部分で長さ13.2m、幅15~50cm、深さは最深10cmである。

<埋土> 地点によって異なる。中央付近ではにぶい黄褐色砂質土、南側では暗褐色土となるが、いずれの部分でも単層である。

<底面・壁> 底面は南に向かって低位となる。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

43号溝(第74図、写真図版51)

<位置・検出状況> V I 10 e~11 fグリッドに位置し、V層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではN-26°-Wの軸線方向をもつ主軸から、南西及び北東方向に分岐する部分をもつ。主軸部分の検出長は5.4m、幅35cmで、深さは最深11cmである。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は南東方向に向かって幾分低位となる。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

44号溝(第74図、写真図版52)

<位置・検出状況> V I 10 e・fグリッドに位置し、V層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分では北東側にやや張り出した弧状を呈する。軸線方向はN-26°-W、規模は検出部分で長さ3.4m、幅20~25cm、深さは最深5cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は南東に向かって低位となる。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

45号溝(第74図、写真図版52)

<位置・検出状況> V I 9・10 fグリッドに位置し、V層で検出した。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-28°-W、規模は検出部分で長さ5.4m、幅30~35cm、深さは最深7cmである。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は南東に向かって低位となる。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 不明である。

46号溝(第74図、写真図版52)

<位置・検出状況> V I 5 f~8 gグリッドに位置し、V層で検出した。

<重複関係> 39号溝-4と重複する。断面状況から、本遺構の方が古いと判断した。

<平面形・規模> 調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認された部分ではほぼ直線に延びる。軸線方向はN-22°-W、規模は検出部分で長さ13.7m、幅40~70cm、深さは最深8cmである。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<底面・壁> 底面は南東に向かってやや低位となる。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

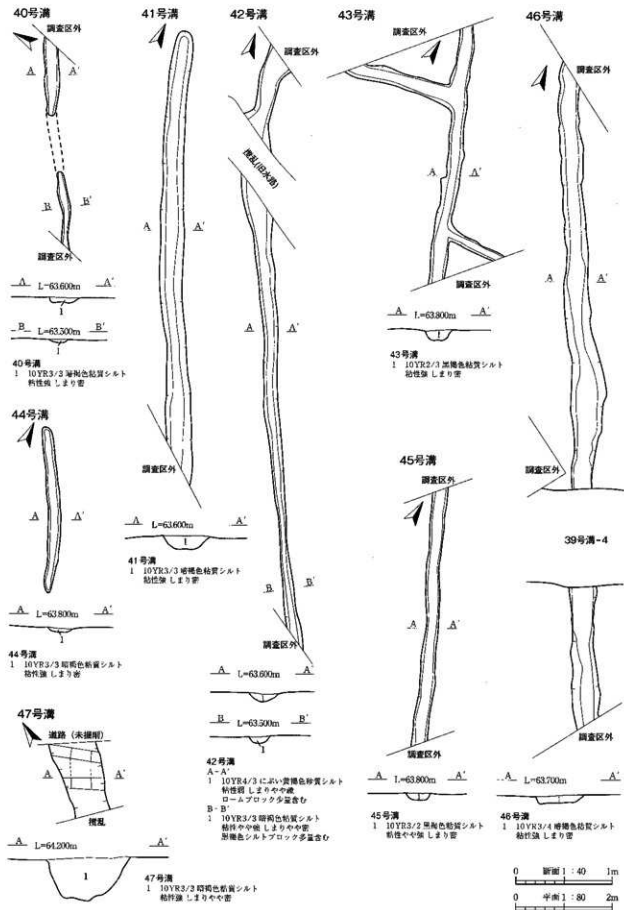
<出土遺物> 土師器が124g出土している。

<時期> 不明である。

(小林)

47号溝(第74図、写真図版52)

<位置・検出状況> V I G 3 uグリッドに位置する。IVa層上面で検出した。北端は調査区外に及び、また南端は一部確認調査区に含まれる上、攪乱が激しく、ブロン検出もままならない状態であり、精査出来た部分は僅かであった。



第74図 40～47号溝

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びると思われる。軸線方向はN-20°-Eである。規模は検出長1.6m、幅0.9mで、深さは最深45cmを測る。

<埋土> 暗褐色粘質シルトを主体とする単層である。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦で中央部分がややいびつである。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代と考えられる。

<その他> 本遺構は両端ともその軸線方向が今回の調査範囲に含まれていないので、本遺構の形態などの様相は窺い知れない。

48号溝(第75図、写真図版53)

<位置・検出状況> VI G 12 b ~ 14 b グリッドに位置する。IV a層上面で検出した。本遺構の南側は確認調査区に含まれ、また電柱があり、可能な限りプランを検出するに留めた。南端は調査区外に及ぶものと推定される。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-0°-Eである。規模は検出長8.8m、幅0.2mで、深さは最深11cmを測る。

<埋土> 黒褐色粘質シルトを主体とする単層で、炭化物や黄褐色シルトブロックが混入する。

<底面・壁> 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層上面であることから古代以降と考えられる。

<その他> 本遺構は両端ともその軸線方向が今回の調査範囲に含まれていないので、遺構の形態などの様相は窺い知れない。

49号溝(第75図、写真図版53)

<位置・検出状況> VII F 17 v ~ 18 x グリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 直線的に延びている。軸線方向はN-62°-Wである。規模は検出長8.8m、幅0.6mで、深さは最深31cmを測る。

<埋土> 3層に分けられる。黒~暗褐色粘質シルトを主体とし、炭化物が混入する。また底面付近には水性堆積による酸化鉄や灰白色粘土ブロックが混入する。

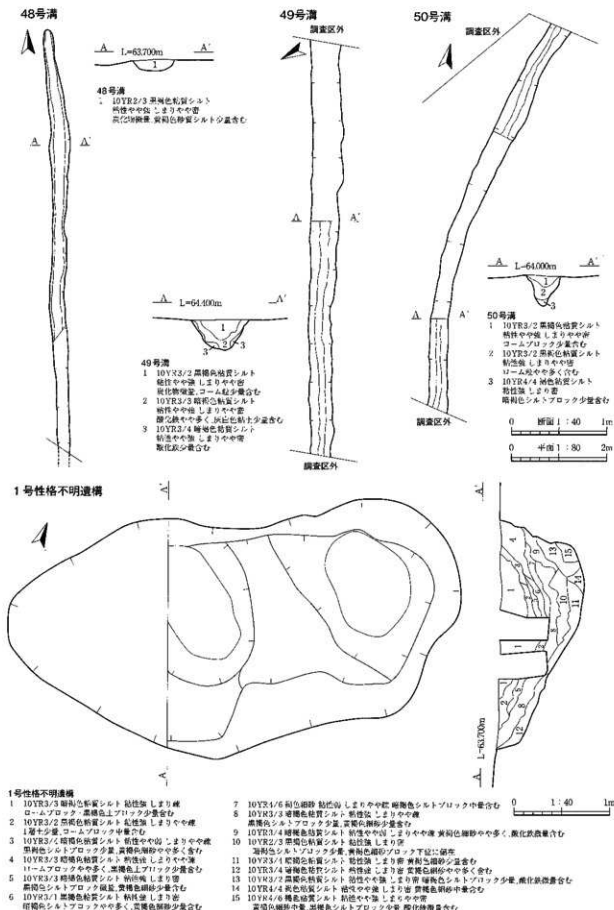
<底面・壁> 底面はややいびつで北側に傾く。壁はほぼ直線的に外へと広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIV a層であることから古代以降と考えられる。

<その他> 西側の調査区(第23図I区)には明確に本遺構の軸線上にのる溝は検出されていない。

4 検出遺構と出土遺物



第75図 48～50号溝、1号性格不明遺構

50号溝(第75図、写真図版53)

<位置・検出状況> VE3v～5wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構の両端は調査区外に及んでいる。また一部確認調査区に含まれるので、その部分はプラン検出に留めた。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> やや弧を描く。軸線方向はN-5°-Eである。規模は検出長8.4m、幅0.5mで、深さは最深31cmを測る。

<埋上> 3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、ロームブロックが混入する。

<底面・壁> 底面は狭く丸みを帯びて窪んでいる。壁はほぼ直線的に外へと広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物が無いので定かではないが、検出面がIVa層であることから古代以降と考えられる。

<その他> 中央の調査区(第20図F区)には本遺構の軸線上にのる溝跡は検出されていない。したがって遺構の様相は窺い知れない。

(須原)

性格不明遺構

1号性格不明遺構(第27・75図、写真図版54・56)

<位置・検出状況> VH21g～22gグリッドに位置する。7m南側に34号溝が隣接する。IVa層上面で検出した。プラン検出時には、堅穴住居跡であることを想定していたが、精査が進むにつれ、底面や壁の様相から別の遺構であると判断した。後述する通り、形状は不規則で、他の土坑とも類似しない。また風倒木の可能性も考えたが、埋土の様相を観察すると風倒木にみられる埋土の様相とは異なる。したがって、便宜的に「性格不明遺構」として、ここでは報告する。なお、本遺構は確認調査区内に位置しており、遺構精査も半蔵に留めている。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈し、規模は4.76×2.59m、深さは最深85cmを測る。

<埋土> 15層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とするが、黒褐色シルトや黄褐色細砂が多く混入する。また下部には酸化鉄が堆積している。

<底面・壁> 底面はいびつで安定しない。東西2箇所に大きな窪みが認められる。壁も安定せず、北側は直立気味に立ち上がり、南側は大きく外へと広がりながら立ち上がる。

<出土遺物> 縄文土器片1点(25)出土している。ただし流れ込みと思われる。

<時期> 不明である。

(須原)

旧河道(第76図、写真図版54)

調査区内を数条の旧河道がはしっているのが認められた。特に顕著なのがVIJ8oグリッドから12mグリッド周辺とVIIグリッド周辺で検出された旧河道で、両者はつながっており、南東から北西にはしり、南側の北上川に連結するものと推定される。幅6～7m、深さ約2mをはかる。VIJ8oグリッド周辺で断面観察用にサブトレンチを掘ったが、遺物の混入は認められなかったので、それ以上精査は行っていない。埋土は暗褐色粘質シルトを主体とする。混入物はほとんど認められず、土器などの遺物もない。おそらく住居跡などの構築された古代(9世紀後半ごろ)には埋没していたものと思われる。



第76図 旧河道断面

柱穴状土坑群(第15～24図、第8表、写真図版54)

今回の調査で、500個に及ぶ柱穴状土坑を検出した。調査区全域に広がっているが、いくつかの集中区も認められた。VII J 25u～VII J 2uグリッド(第15図)、VI I 1v～I yグリッド(第17図)、VI I 5y～11xグリッド(第17図)、VI I 23t～VI I 3sグリッド(第18図)、VI I 22g～VI I 24nグリッド(第19図)、VII H 7j～9kグリッド(第20図)、VII H 3f～5fグリッド(第20図)、V H 18o～19oグリッド(第22図)、VI G 11c～VI F 25qグリッド(第23図)がそれに相当する。柱穴は直径20～50cmで、深さも4～62cmと、一様ではない(第8表)。従って規則性などは見いだせず、中には3号掘立柱建物跡のような建物を想定できたものもあるが、それ以外については建物として認定できたものはなかった。埋土は暗褐色粘質シルトを主体とした単層のものがほとんどである。遺物の混入については、第6表に示した通り、16個の柱穴状土坑から主に土師器片が出土している。いずれも摩滅の激しい小片で、遺構に伴うものというより、流れ混みの可能性の方が高い。従ってこれらの遺構の時期も不明と言わざるを得ない。

第8表 野沢Ⅱ遺跡 SKP計測表

SKP名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	SKP名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	SKP名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
SKP01	57	55	12	SKP51	18	18	16	SKP103	34	—	24
SKP02	21	18	15	SKP52	45	42	27	SKP104	39	38	62
SKP03	15	15	13	SKP53	27	25	29	SKP105	30	25	29
SKP04	28	21	14	SKP54	23	22	19	SKP106	40	36	16
SKP05	33	30	26	SKP55	27	18	24	SKP107	38	31	14
SKP06	42	25	8	SKP56	25	23	22	SKP108	63	52	21
SKP07	25	22	29	SKP57	27	25	29	SKP109	68	64	22
SKP08	25	21	29	SKP58	32	29	10	SKP110	24	16	22
SKP09	21	19	20	SKP59	18	15	20	SKP111	26	20	9
SKP10	34	32	20	SKP60	26	19	21	SKP112	36	29	12
SKP11	71	67	16	SKP61	25	19	24	SKP113	23	16	18
SKP12	32	25	28	SKP62	20	19	16	SKP114	21	17	5
SKP13	44	37	32	SKP63	26	23	38	SKP115	47	37	10
SKP14	25	37	23	SKP64	30	27	18	SKP116	23	21	14
SKP15	38	34	48	SKP65	19	19	14	SKP117	19	17	10
SKP16	43	38	33	SKP66	21	20	12	SKP118	43	36	24
SKP17	34	32	46	SKP67	39	23	17	SKP119	26	23	23
SKP18	20	17	—	SKP69	20	16	18	SKP120	27	20	22
SKP19	50	40	33	SKP70	23	19	16	SKP121	24	22	17
SKP20	56	42	38	SKP71	19	16	24	SKP122	19	18	20
SKP21	31	29	36	SKP72	25	23	12	SKP123	22	18	10
SKP22	41	40	34	SKP73	35	24	33	SKP124	27	21	20
SKP23	45	37	33	SKP74	79	66	20	SKP125	30	21	22
SKP24	37	33	32	SKP75	24	23	30	SKP126	34	29	24
SKP25	24	30	35	SKP76	31	27	38	SKP127	34	32	61
SKP26	35	34	28	SKP77	27	24	44	SKP128	29	26	21
SKP27	42	28	16	SKP79	59	53	10	SKP129	31	27	31
SKP28	38	34	16	SKP80	55	52	13	SKP130	25	21	24
SKP29	28	26	15	SKP81	65	61	19	SKP131	21	18	17
SKP30	24	21	13	SKP82	36	34	35	SKP132	25	21	10
SKP31	26	21	18	SKP83	29	28	18	SKP133	30	24	22
SKP32	32	31	28	SKP84	38	34	42	SKP134	31	28	18
SKP33	47	44	12	SKP85	20	19	20	SKP135	26	21	25
SKP34	29	27	8	SKP86	24	21	14	SKP136	27	24	32
SKP35	39	31	8	SKP87	26	23	28	SKP137	26	25	15
SKP36	32	31	20	SKP88	29	25	17	SKP138	31	25	23
SKP37	31	28	44	SKP89	33	32	45	SKP139	24	17	16
SKP38	31	27	14	SKP90	44	39	34	SKP140	37	30	16
SKP39	32	31	33	SKP91	31	—	28	SKP141	28	26	28
SKP40	26	25	28	SKP92	26	22	23	SKP142	28	25	12
SKP41	29	27	36	SKP93	31	24	30	SKP143	29	19	34
SKP42	33	—	22	SKP94	28	24	26	SKP144	29	26	16
SKP43	22	—	17	SKP95	42	40	31	SKP146	53	46	15
SKP44	38	32	42	SKP96	38	37	33	SKP147	38	29	21
SKP45	22	19	30	SKP97	41	37	50	SKP148	44	37	16
SKP46	25	22	16	SKP98	31	28	38	SKP149	40	35	12
SKP47	27	24	30	SKP99	37	35	49	SKP150	38	26	11
SKP48	23	—	18	SKP100	30	29	47	SKP151	43	31	13
SKP49	28	24	16	SKP101	24	22	12	SKP152	42	27	14
SKP50	63	55	20	SKP102	23	21	16	SKP153	52	44	9

4 検出濃度と出上遺物

SKP名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	SKP名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	SKP名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
SKP154	27	23	16	SKP204	28	26	23	SKP254	21	21	22
SKP155	53	48	18	SKP205	33	29	32	SKP255	22	20	16
SKP156	39	34	18	SKP206	22	22	10	SKP256	37	26	34
SKP157	55	47	12	SKP207	24	22	12	SKP257	26	24	16
SKP158	20	16	16	SKP208	43	29	24	SKP258	25	23	19
SKP159	27	24	15	SKP209	45	35	20	SKP259	17	16	22
SKP160	26	24	14	SKP210	46	36	28	SKP260	23	21	20
SKP161	21	21	10	SKP211	43	37	24	SKP261	20	17	22
SKP162	23	18	16	SKP212	47	39	17	SKP262	16	15	13
SKP163	23	20	15	SKP213	58	-	19	SKP263	26	21	16
SKP164	27	26	12	SKP214	28	26	8	SKP264	19	18	24
SKP165	24	23	14	SKP215	32	24	15	SKP265	21	19	10
SKP166	42	40	13	SKP216	32	29	16	SKP266	26	25	12
SKP167	39	30	13	SKP217	29	26	14	SKP267	26	25	10
SKP168	20	17	14	SKP218	59	43	37	SKP268	20	20	18
SKP169	26	21	50	SKP219	26	19	8	SKP269	25	20	7
SKP170	32	30	14	SKP220	27	18	11	SKP270	27	25	18
SKP171	33	32	30	SKP221	20	18	17	SKP271	29	25	25
SKP172	36	35	31	SKP222	23	19	20	SKP272	35	29	20
SKP173	49	-	24	SKP223	22	21	23	SKP273	19	16	24
SKP174	32	27	31	SKP224	31	29	9	SKP274	23	21	22
SKP175	29	27	21	SKP225	55	51	9	SKP275	25	23	13
SKP176	29	23	15	SKP226	48	27	20	SKP276	21	19	22
SKP177	30	26	26	SKP227	41	36	11	SKP277	17	15	14
SKP178	27	26	27	SKP228	38	33	19	SKP278	17	17	20
SKP179	29	26	21	SKP229	27	19	22	SKP279	24	21	13
SKP180	21	18	11	SKP230	46	40	18	SKP280	24	20	20
SKP181	33	27	26	SKP231	44	40	15	SKP281	26	22	15
SKP182	29	25	15	SKP232	47	43	24	SKP282	20	16	18
SKP183	31	28	15	SKP233	23	23	14	SKP283	22	20	12
SKP184	31	26	24	SKP234	60	55	22	SKP284	27	24	9
SKP185	46	35	51	SKP235	32	30	13	SKP285	23	17	14
SKP186	26	22	18	SKP236	30	24	10	SKP286	29	23	13
SKP187	37	32	15	SKP237	17	15	8	SKP287	24	18	16
SKP188	58	47	42	SKP238	33	30	14	SKP288	18	15	16
SKP189	27	25	28	SKP239	63	56	18	SKP289	30	26	21
SKP190	26	22	17	SKP240	27	23	28	SKP290	21	16	31
SKP191	31	28	29	SKP241	30	27	32	SKP291	20	-	19
SKP192	26	22	12	SKP242	23	20	20	SKP292	16	12	5
SKP193	27	22	14	SKP243	26	21	24	SKP293	21	18	21
SKP194	23	22	19	SKP244	30	28	37	SKP294	20	16	6
SKP195	29	27	37	SKP245	21	19	30	SKP295	24	21	13
SKP196	17	15	8	SKP246	25	23	32	SKP296	25	20	24
SKP197	31	28	15	SKP247	21	21	29	SKP297	27	23	17
SKP198	21	19	28	SKP248	25	21	21	SKP298	19	17	18
SKP199	25	22	19	SKP249	20	16	21	SKP299	29	23	16
SKP200	23	21	10	SKP250	21	20	32	SKP300	38	-	13
SKP201	43	30	16	SKP251	19	17	24	SKP301	25	20	10
SKP202	33	30	22	SKP252	35	31	24	SKP302	36	31	11
SKP203	24	20	22	SKP253	28	25	25	SKP303	18	16	8

SKP名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	SKP名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	SKP名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
SKP304	35	28	32	SKP356	35	31	12	SKP407	33	27	23
SKP305	34	32	24	SKP357	19	19	13	SKP408	25	24	26
SKP306	22	19	19	SKP358	28	22	4	SKP409	22	20	19
SKP307	26	26	16	SKP359	18	18	11	SKP410	39	34	24
SKP308	20	20	10	SKP360	66	43	16	SKP411	23	18	15
SKP309	26	25	14	SKP361	32	24	19	SKP412	30	29	15
SKP310	31	30	10	SKP362	29	23	27	SKP413	17	15	11
SKP311	19	17	14	SKP363	29	20	12	SKP414	22	19	15
SKP312	24	19	16	SKP364	28	27	16	SKP415	30	28	14
SKP313	23	20	12	SKP365	53	38	16	SKP416	17	14	10
SKP314	21	16	6	SKP366	21	19	19	SKP417	19	17	7
SKP315	20	19	8	SKP367	21	19	39	SKP418	21	19	35
SKP316	42	36	20	SKP368	19	17	14	SKP419	40	25	13
SKP317	37	33	13	SKP369	19	19	14	SKP420	28	26	10
SKP318	27	26	15	SKP370	21	19	12	SKP421	20	15	7
SKP319	37	33	16	SKP371	22	17	16	SKP422	32	27	12
SKP320	34	32	22	SKP372	24	22	19	SKP423	27	22	16
SKP321	27	22	26	SKP373	22	19	12	SKP424	33	27	13
SKP322	20	16	8	SKP374	25	25	16	SKP425	47	37	19
SKP323	23	22	17	SKP375	24	22	16	SKP426	21	18	12
SKP324	23	22	11	SKP376	21	19	27	SKP427	37	33	52
SKP325	15	14	12	SKP377	56	50	29	SKP428	20	16	16
SKP326	18	18	15	SKP379	26	24	13	SKP429	24	20	16
SKP327	22	19	22	SKP380	17	17	12	SKP430	23	19	14
SKP328	27	22	10	SKP381	32	30	33	SKP431	18	17	16
SKP329	26	23	18	SKP382	28	23	15	SKP432	15	12	12
SKP330	25	-	19	SKP383	26	20	14	SKP433	36	25	14
SKP331	16	15	8	SKP384	24	23	10	SKP434	27	23	24
SKP332	17	13	4	SKP385	22	19	10	SKP435	28	24	27
SKP335	27	25	9	SKP386	25	22	15	SKP436	18	16	10
SKP336	22	20	13	SKP387	25	22	13	SKP437	71	68	22
SKP337	22	19	22	SKP388	22	20	12	SKP438	69	64	23
SKP338	63	58	19	SKP389	26	24	22	SKP439	22	20	9
SKP339	25	24	16	SKP390	18	16	27	SKP440	54	48	10
SKP340	22	20	15	SKP391	22	17	16	SKP441	27	21	19
SKP341	18	17	10	SKP392	21	20	30	SKP442	41	34	13
SKP342	20	18	20	SKP393	20	19	11	SKP443	43	39	24
SKP343	23	22	16	SKP394	18	16	11	SKP444	27	22	20
SKP344	23	19	9	SKP395	17	16	14	SKP445	26	21	12
SKP345	20	20	22	SKP396	13	13	7	SKP446	21	19	13
SKP346	20	14	11	SKP397	21	11	12	SKP447	22	19	10
SKP347	15	13	8	SKP398	19	12	8	SKP448	26	24	21
SKP348	18	14	11	SKP399	32	29	16	SKP467	35	28	24
SKP349	20	16	8	SKP400	46	40	24				
SKP350	26	20	16	SKP401	24	21	23				
SKP351	28	25	26	SKP402	20	17	20				
SKP352	19	18	12	SKP403	26	23	13				
SKP353	24	21	12	SKP404	28	21	16				
SKP354	18	18	6	SKP405	43	25	21				
SKP355	19	16	10	SKP406	22	19	12				

遺構外出土の古代土器(第76図、写真図版64・65)

遺構外からは土師器12788.1g、須恵器6250.9g、陶磁器3008gが出土している。出土層は主にⅢ層である。出土地点は主に住居跡が位置する周辺が多い。特にⅦJ130グリッド周辺やⅥI4yグリッド周辺から多く出土している。ただし遺物が出土した場所の地形はほぼ平坦地であり、捨て場という意味の「包含層」ではない。出土した土器は小片が多く、残存状態が悪くほとんどが接合せず、また接合しても、全体の様相の分からないものであった。

12点図示した。162は土師器甕でロクロ調整が施されている。163・164は内黒の高台付杯の台部片である。165・166は土師器杯で胴部が内湾しながら立ち上がる形態である。167は須恵器杯で内湾しながら立ち上がる形態である。168・169・171～173は須恵器甕の破片である。170は須恵器壺の頸部片である。

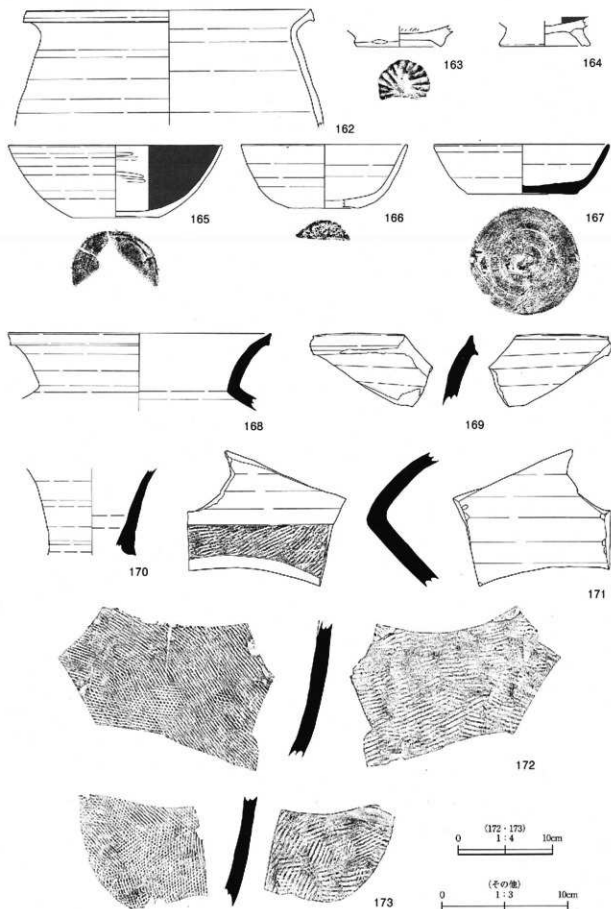
5 ま と め

調査の成果は、主に縄文時代と古代とに分けられる。

まず縄文時代については土坑が見つかっており、そのうち3基は陥し穴であった。本遺跡が縄文時代には狩猟場であったことが想定される。陥し穴には遺物が伴われなかったが、周辺の土坑から縄文時代後期の土器片が出土しており、同時期の可能性が高い。本遺跡の4km南東に位置する八天遺跡は縄文時代中期後半から後期の集落遺跡であり、両遺跡に関連があったことが想定される。また遺構はみつからなかったが、縄文時代晩期、弥生時代の土器も出土しており該期の遺物包蔵地であることが分かった。

古代では9世紀後半の堅穴住居跡が7棟見つかっている。今回調査範囲が細長く狭いので、全容は定かではないが、各堅穴住居跡が離れて分布していることから、かなり広範囲にわたる集落であったものと想定される。またそれらに伴うと思われる焼成遺構は、第Ⅹ章でも触れるが、土器焼成に関わる遺構である可能性が高く、土器製作を考える上で、貴重な資料となり得るだろう。

他に近世に帰属するものと思われる掘立柱建物跡3棟が見つかった。したがって野沢Ⅱ遺跡は古代9世紀後半をピークとし、その前は縄文時代から、後は近世江戸時代までの複数の時代にまたがる遺跡であることが分かった。



第77図 遺構外出土土師器、須恵器

第9表 縄文土器観察表

掲載番号	出土地点 層位	時期・器種	部位	調整技法		焼成	色調	備考
				内面	外面			
1	2号土坑 埋土中	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷：縄文(LR横)	やや良好	橙	
2	2号土坑 埋土中	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷：縄文(LR横)	やや不良	明黄褐色	
3	2号土坑 埋土中	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷：縄文(単軸結条体L縦)	不良	明黄褐色	同一個体
4	2号土坑 埋土中	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷：縄文(単軸結条体L縦)	不良	明黄褐色	
5	2号土坑 埋土中	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷：縄文(単軸結条体L縦)	不良	明黄褐色	
6	2号土坑 埋土中	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷：縄文(単軸結条体L縦)	不良	明黄褐色	
7	3号土坑 埋土中	縄文深鉢	胴部片	ナデカ	刷：縄文(LR縦)	やや不良	橙	
8	VJ 5m~n II層	縄文深鉢	口~胴下1/4	ナデ	口~胴:刺突、沈線、縄文(LR)	不良	橙	
9	VH 9y II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデカ	口:隆帯	良好	明黄褐色	
10	VH 9y II層	縄文深鉢	胴部片	ナデカ	刷:隆帯	良好	明黄褐色	
11	VG 5y II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	唇:突起 口:沈線、羽状縄文(LR・RL)	不良	にぶい褐	
12	VG 5y II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	唇:突起 口:沈線、羽状縄文(LR・RL)	不良	にぶい褐	
13	VG 5y II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	口:羽状縄文(LR・RL)、沈線	不良	にぶい黄褐色	
14	VG 5y II層	縄文深鉢	胴部片	ナデカ	刷:羽状縄文(LR・RL)、沈線	不良	黒褐色	
15	VI 13n IV層下位	縄文鉢	口縁部片	ナデ、沈線	唇:突起 口:突起、雲形文	やや不良	にぶい黄褐色	
16	VI 31 V層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	口:縄文(RL斜)、沈線	不良	橙	
17	VI 31 V層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	口:沈線、刺突文	不良	にぶい赤褐色	
18	VI 13n IV層下位	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷:沈線、縄文(LR横)	やや不良	暗褐色	
19	VI 5m II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷:沈線、縄文(LR縦)	不良	にぶい褐	
20	V 18h II層	縄文深鉢	胴部片	ケズリ	刷:刺突、沈線、縄文(無筋I斜)	不良	にぶい黄褐色	
21	5号住居 埋土下位	縄文深鉢	胴部片	ナデ	刷:縄文(RL横)、沈線	不良	黒褐色	
22	SK 53 埋土中	縄文台付鉢?	台部片	ナデ	刷:沈線	やや不良	にぶい黄褐色	
23	VI 2e II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	唇:突起 口:沈線、縄文(LR横)	不良	透黄褐色	窟付土器第4種式
24	VI 2e II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	唇:突起 口:沈線、縄文(LR横)	不良	透黄褐色	窟付土器第4種式
25	VI 2e II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	唇:突起 口:沈線、縄文(LR横)	不良	透黄褐色	窟付土器第4種式
26	VI 2e II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	唇:突起 口:沈線、縄文(LR横)	不良	透黄褐色	窟付土器第4種式
27	VI 13o IV~V層	縄文注口土器	注口部	ナデ?	注口:無文	良好	明黄褐色	
28	VI 24m V層	縄文壺	胴~底	ナデ?	刷:縄文(LR)	良好	明赤褐色	晩期
29	VI 2w II層	縄文台付鉢	台部片	ミガキ	工字文(縄文→沈線)	良好	にぶい黄褐色	大河C2?
30	VI K 4g Ia層	縄文鉢	口縁部片	ナデ、沈線	口:工字文 刷:縄文(LR斜)	不良	にぶい黄褐色	大河A
31	VI 51 V層	弥生?台付鉢	台部片	ケズリ	台部:縄文(LR縦)	不良	橙	
32	VI H 6f II層	縄文鉢	口縁部片	ナデ	唇:押圧 口:無文 刷:縄文(無筋I横)	不良	黒	
33	VI 61 II層	弥生壺?	胴1/4	口~胴下: ナデ	口:沈線	やや不良	橙	中期?
34	VI 14o II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ?	口:無文 刷:縄文(LR縦)	やや不良	透黄	

掲載 番号	出土地点 層位	時期・器種	部位	調整技法		焼成	色調	備考
				内面	外面			
35	VI J 4 h II~III層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	口：燃糸文(L縦)	不良	にぶい橙	
36	VI K 7 b II層	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	口：無文	不良	にぶい黄褐	
37	1号性格不明 透櫛	縄文深鉢	口縁部片	ナデ	底：押圧 口：無文 胴：縄文(LR?)	不良	にぶい黄褐	
38	VI J 6 I II層	縄文深鉢	口~胴下2/3	ミガキ	底：沈線 口：無文 胴：縄文(LR)	良好	にぶい黄橙	晩期 容量(6.59ℓ)
39	VI J 5 I V層	縄文深鉢	口~胴上1/4	ナデ?	口：無文 胴：縄文(LR)	不良	灰黄褐	晩期
40	VI J 13 o IV層下位	縄文深鉢	口~胴下1/4	ナデ?	口：無文 胴：縄文(RL)	不良	にぶい黄橙	晩期 容量(5.17ℓ)
41	VI 12 v II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ	胴：沈線、縄文(LR横)	不良	にぶい黄橙	晩期
42	VI J 7 e II層	弥生甕	口~底1/2	口：縄文(無筋I) 胴：ケズリ	口：縄文(無筋I)、刺突 胴： 縄文(無筋I)	やや不良	にぶい褐	湯舟沢II類併 行(中層後半) か
43	VI J 7 e II層	弥生甕	口縁部1/5	縄文(無筋I)	口：縄文(無筋I)、刺突	やや不良	にぶい褐	79と同一個 体
44	VI J 4 k V層	弥生台付浅鉢	台部片	ナデ?	台部：ミガキ、沈線(工字文?)	やや不良	明赤褐	前期 資本掘試か
45	VI 12 v II層	縄文深鉢	胴部片	ケズリ?	胴：縄文(LR斜)	不良	にぶい黄橙	
46	VI J 14 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ	胴：燃糸文(L縦)	不良	にぶい橙	
47	VI J 14 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ	胴：燃糸文(L縦)	不良	にぶい橙	
48	VI J 14 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ	胴：燃糸文(L縦)	不良	にぶい橙	
49	VI 18 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデカ	胴：縄文(L縦)	不良	橙	
50	VI 18 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ	胴：燃糸文(L縦)	不良	橙	
51	VI 18 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデカ	胴：燃糸文(L縦)	不良	橙	
52	VI 18 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデカ	胴：燃糸文(L縦)	不良	橙	
53	VI 18 h II層	縄文深鉢	胴部片	ナデカ	胴：燃糸文(L縦)	不良	橙	
54	VI H 24 m II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ?	胴：縄文(RL斜)	不良	明褐	同一個体
55	VI H 24 m II層	縄文深鉢	胴部片	ナデ?	胴：縄文(RL斜)	不良	明褐	
56	VI J 5 I V層	縄文鉢?深 鉢?	胴下~底	ケズリ	胴：縄文(LR)	不良	明赤褐	
57	VI H 4 k II層	縄文深鉢	胴下~底	ケズリ	胴：無文	不良	にぶい黄褐	
58	VI J 6 I II層	縄文深鉢	胴下~底	摩滅	摩滅	やや不良	明黄褐	
59	VI J 4 k V層	縄文深鉢	胴下~底1/2	ナデ?	指頭による變形痕	不良	にぶい黄橙	
60	VI J 8 I IV層	縄文鉢?甕?	底部片	ナデ?	底：無文	やや不良	にぶい黄橙	
61	IV G 5 y II層	縄文深鉢	底部片	ナデ	胴：縄文(LR)	不良	にぶい黄褐	
62	VI J 5 m V層	縄文深鉢	底部片	ケズリ	底：無文	不良	橙	
63	VI J 4 k V層	縄文深鉢	底部片	ナデ?	底：無文 底面：網代痕	やや不良	にぶい黄褐	

容量で()の
ものは推定値

第10表 石器観察表

掲載番号	種別	出土地点 層位	分類	残存状態	石材	産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
64	石鏃	VI 1 24 k V層	無茎凹基	完形	頁岩	北上山地 古生代	33.03	19.02	5.32	2.25	
65	石鏃	S K 53 埋土中	無茎凹基	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	29.69	18.69	5.87	2.04	
66	石鏃	VI 1 15 m II層	無茎凹基	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	30.35	17.38	4.47	1.72	
67	石鏃	VI J 6 j V層	無茎凹基	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	24.19	12.27	3.30	0.65	両面に付着物
68	石鏃	VI 1 21 w II層	無茎凹基	完形	頁岩	北上山地 古生代	23.14	14.34	2.96	0.74	
69	石鏃	VI J 2 c II層	無茎凹基	先端部欠損	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(19.17)	15.55	2.99	(0.67)	
70	石鏃	2号住居 埋土上位	無茎凹基	基部欠損	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	37.17	16.31	5.32	2.06	
71	石鏃	S K P 80 埋土中	無茎凹基	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	30.54	23.97	6.27	3.47	
72	石鏃	VI J 4 k V層	無茎凹基?	基部欠損	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(23.74)	(14.23)	3.81	(0.90)	
73	石鏃	VI G 20 y II層	有茎尖基	基部欠損	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(22.18)	10.32	3.86	(0.56)	
74	石鏃	VI 1 18 l ・m IV層	有茎尖基	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	47.17	16.42	4.09	2.82	
75	柄鏃	VI J 3 e II層	柄鏃	完形	頁岩	北上山地 古生代	23.65	16.29	4.98	1.95	
76	R フレイク	VI 1 24 m II層	—	—	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	27.91	23.42	5.65	2.80	
77	磨製石斧	VI J 25 m IV層	—	刃部片	頁岩	北上山地 古生代	(20.95)	(16.85)	(5.93)	(2.04)	
78	磨製石斧	環水路	—	完形	デイサイト	奥羽山脈 新生代新第三紀	85.21	64.48	33.82	237.93	
79	打製石斧	風能木	—	完形	砂岩	北上山地 古生代	201.50	69.68	38.88	681.05	
80	打製石斧	VI J 13 o V層	—	完形	砂岩	北上山地 古生代	138.81	63.94	16.03	164.82	
81	礮器	耕土中	—	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	215.00	98.75	34.91	912.93	
82	礮器	VI J 7 e V層	—	完形	頁岩	北上山地 古生代	167.50	81.42	43.58	906.75	
83	礮器	VI J 1 l IV層	—	完形	ホルンフェルス	北上山地 古生代に堆積、中生代白亜紀に変成	81.64	148.13	24.78	513.86	
84	礮器	VI J 6 p II層	—	完形	砂岩	北上山地 古生代	186.50	118.86	37.56	1188.52	
85	敲磨器類	2号住居成 埋土上位	—	端部欠損	デイサイト	奥羽山脈 新生代新第三紀	(117.82)	107.93	65.16	1193.66	
86	敲磨器類	1号住居状 遺構埋土下 位	—	一部欠損	安山岩	岩手山 新生代新第四紀	151.17	75.52	53.57	416.39	
87	敲磨器類	1号土坑 埋土上位	—	完形	安山岩	岩手山 新生代新第四紀	123.93	84.36	50.35	562.22	
88	敲磨器類	VI H 1 n II層	—	完形	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(100.97)	59.76	29.02	284.54	磨熟している

第11表 古代土器観察表

発掘番号	出土地点・層位	種別・形状	部位	分類	法量 (cm)				調査技法			焼成	色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	断面				
89	1号住居床土中	土師器 甕	口～胴上1/3	C	(13.4)	—	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ	—	良好	橙		
90	1号住居床面上	土師器 甕	底部片	—	—	—	—	—	—	—	良好	浅黄橙		
91	1号住居床面上	土師器 甕	胴部片	—	—	—	—	ヘラナデ?	ヘラケズリ	—	良好	黄	にぶい黄	
92	1号住居床面上	土師器 甕(内裏)	胴下～底1/3	—	—	(7.4)	(7.2)	ミガキ	回転ナデ	糸切り	やや良好	明赤橙		
93	1号住居床面上	土師器 甕(内裏)	口～底1/2	B	14.5	5.3	5.2	ミガキ	回転ナデ	糸切り	良好	にぶい黄	容量(0.45ℓ)	
94	1号住居床面上	土師器 甕(内裏)	口縁 2/3欠	B	15.2	6.2	6.0	ミガキ	回転ナデ	糸切・ヘラケズリ	良好	にぶい黄	表面に付着物。容量0.88ℓ	
95	2号住居力マド埋土	土師器 甕	口～胴下1/2	C	(23.2)	—	(26.5)	ヘラケズリ	回転ナデ・ヘラケズリ	—	不良	にぶい黄	容量(7.52ℓ)	
96	2号住居力マド埋土	土師器 甕	口～胴上1/4	A	(14.1)	—	(14.6)	ヘラケズリ	ヘラナデ	—	やや良好	灰黄橙	容量(2.28ℓ)	
97	2号住居力マド埋土	土師器 甕	口～底2/3	A	(11.0)	6.1	6.2	ミガキ	ヘラナデ(?)	—	やや良好	浅黄橙	容量0.55ℓ	
98	2号住居力マド埋土	土師器 甕	口～胴上1/4	B	(15.6)	—	(6.5)	回転ナデ	回転ナデ	—	良好	浅黄橙	容量(1.29ℓ)	
99	2号住居力マド埋土	土師器 甕	口縁部	B	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	—	良好	浅黄橙		
100	2号住居床面上	土師器 甕	胴下～底	—	—	9.8	(10.5)	回転ナデ・ハケメ	ヘラケズリ	糸切り	やや良好	黄	カマド1の床面出土土器片と結合	
101	2号住居床土中	土師器 甕	胴下～底1/4	—	—	(10.7)	(6.1)	ヘラナデ	ヘラケズリ	—	良好	浅黄橙		
102	2号住居床土中	土師器 甕	底部片	—	—	(8.2)	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	やや不良	橙	内面に炭化物付着	
103	2号住居床土中	土師器 甕	胴下～底	—	—	7.8	(3.8)	不明	不明	—	良好	浅黄橙		
104	2号住居力マド埋土	土師器 甕(内裏)	底部片	—	—	7.6	(4.0)	—	ヘラナデ	再調整(ヘラケズリ)	良好	橙		
105	2号住居力マド埋土	土師器 甕(内裏)	口縁 1/3欠	B	16.3	6.0	5.7	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ・ヘラケズリ	再調整(ヘラケズリ)	良好	橙	容量0.56ℓ	
106	2号住居力マド埋土	土師器 甕(内裏)	略定形	B	14.5	6.2	4.8	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	再調整(ヘラケズリ)	良好	にぶい黄	容量0.40ℓ	
107	2号住居床土中	土師器 甕(内裏)	口～底2/3	B	14.1	6.5	4.6	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	再調整(ヘラケズリ?)	良好	橙	容量0.39ℓ	
108	2号住居床土中	土師器 甕(内裏)	口～底1/3	B	(13.8)	5.5	5.5	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	糸切り	やや良好	にぶい黄	容量0.47ℓ	
109	2号住居床土中	土師器 甕(内裏)	口～底1/2	A	14.7	5.4	4.5	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	糸切り	やや良好	浅黄橙	容量0.37ℓ	
110	2号住居力マド埋土	土師器 甕	口～底1/2	B	(14.0)	(6.2)	4.9	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	良好	にぶい黄	容量0.43ℓ	
111	2号住居力マド埋土	土師器 甕(内裏)	口～底1/2	B	14.7	5.8	5.6	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	再調整(ヘラケズリ)	良好	橙	他の土器よりも赤い(二次焼成による変色か)。容量0.44ℓ	
112	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	口～底1/4	A	(13.1)	(4.8)	5.7	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	再調整(ヘラケズリ)	良好	にぶい黄	容量0.39ℓ	
113	2号住居床土下	土師器 甕(内裏)	略定形	B	13.5	6.0	4.3	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ・ヘラケズリ	再調整(ヘラケズリ)	良好	橙	口縁部外面に付着物(漆?)。にぶい黄	
114	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	口～底1/2	B	13.8	6.0	5.0	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	再調整(ヘラケズリ)	良好	にぶい黄	容量0.51ℓ	
115	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	口～胴下2/3	B	(16.7)	—	(4.7)	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	—	良好	にぶい黄	容量(0.61ℓ)	
116	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	口～胴上1/3	B	(15.2)	—	(3.7)	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	—	良好	浅黄橙	容量(0.39ℓ)	
117	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	口～胴下1/2	B	(16.5)	—	(4.5)	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	—	良好	にぶい黄	容量(0.57ℓ)	
118	2号住居床土中	土師器 甕	口～胴下1/3	B	(16.2)	—	(5.3)	回転ナデ	回転ナデ	—	やや良好	橙	容量(0.65ℓ)	
119	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	胴下～底	—	—	5.4	(2.3)	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	糸切り	やや良好	にぶい黄		
120	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	胴下～底	—	—	6.5	(2.4)	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ	再調整(ヘラケズリ)	良好	にぶい黄		
121	2号住居床面上	土師器 甕(内裏)	胴下～底	—	—	6.5	(6.0)	回転ナデ・ミガキ	ヘラケズリ	再調整(ミガキ)	やや良好	浅黄橙		
125	3号住居床面上	土師器 大甕	胴部	—	—	22.4	—	タタキ	タタキ	—	良好	灰白		
127	4号住居力マド埋土	土師器 甕	口～底1/3	D	(27.0)	(10.0)	34.7	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	—	良好	にぶい黄	1号住居床状遺構埋土上と結合。容量13.81ℓ	
128	4号住居力マド埋土	土師器 甕	口～胴上1/4	C	(24.3)	—	19.8	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	—	良好	浅黄橙	埋土下位出土の土器片と結合	
129	4号住居床面上	土師器 甕	口～胴上1/4	C	(25.0)	—	(15.3)	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	—	良好	にぶい黄		
130	4号住居力マド埋土	土師器 甕	口～胴上1/3	D	(23.4)	—	(17.9)	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	—	良好	浅黄橙		
131	4号住居床土上	土師器 甕(内裏)	口～胴上1/2	B	23.4	—	(15.3)	ミガキ	回転ナデ・ヘラケズリ	—	やや良好	黄	カマド出土土器片と結合。にぶい黄。容量(3.65ℓ)	
132	4号住居力マド埋土	土師器 甕	胴下～底	—	—	9.1	(7.7)	ヘラナデ・ハケメ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	浅黄橙		

第11表 古代土器観察表

編年番号	出土地点 層号	器別・ 器種	部位	分類	法量 (cm)			調整技法			焼成	色調	備考
					口径	底径	高さ	内面	外面	底面			
133	4号住居埋土下位	土師器 甕(内底)	胴1/2のみ	-	-	-	(7.8)	回転ナデ→ミガキ	回転ナデ	-	良好	浅黄褐色	1号住居状遺構埋土中→下位の土師片と接合
134	4号住居床面上	土師器 杯	口→底1/3	B	(15.0)	(5.6)	4.7	回転ナデ→ミガキ	回転ナデ	糸切り	やや不良	にぶい黄褐色	容量0.39ℓ
135	5号住居埋土中	土師器 小形甕	口→底2/3	A	6.6	(5.0)	5.3	ハケメ	指痕による整形痕	不明	やや不良	にぶい黄褐色	容量0.11ℓ
136	5号住居カマド支脚	土師器 甕(内底)	底面1/2	-	-	9.5	(3.5)	ハケメ	指痕による整形痕	不明	やや不良	灰	カマド出土の土師片と接合
137	5号住居カマド支脚	土師器 甕	胴下→底1/3	-	-	11.0	(11.0)	ハケメ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	やや不良	にぶい黄褐色	
138	5号住居カマド敷板下	土師器 甕	胴下→底1/2	-	-	(8.0)	(7.6)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	良好	浅黄褐色	
139	5号住居家内	土師器 甕	胴下→底1/2	-	-	(7.6)	(10.1)	ハケメ	ヘラケズリ	不明	やや良好	にぶい黄褐色	
140	5号住居床面上	須恵器 大甕	胴部	D	-	-	23.4	タタキ	タタキ	-	良好	灰白	カマド埋土出土土器片と接合
141	7号住居カマド埋土内	土師器 杯	口→胴下1/2	A	(23.1)	-	(24.4)	ハケメ	ハケメ→ヘラケズリ	-	良好	浅黄褐色	容量(5.90ℓ)
142	7号住居床面上	土師器 甕	口縁欠損	A	22.6	11.4	28.7	ハケメ	ハケメ	ケズリ	良好	浅黄褐色	容量7.93ℓ
143	7号住居カマド埋土内	土師器 杯	口→胴下2/3	A	24.5	-	(26.5)	ハケメ→ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	良好	浅黄褐色	容量(8.42ℓ)
144	7号住居カマド埋土内	土師器 杯	口→底2/3	C	14.6	6.7	5.8	回転ナデ→ミガキ	回転ナデ	糸切り(再調整あり?)	良好	にぶい黄褐色	容量0.55ℓ
145	7号住居床面上	須恵器 杯	口→底2/3	B	14.5	5.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	やや不良	浅黄	器蓋「大」/生掛け灰味。容量0.39ℓ
146	1号住居状遺構埋土上	土師器 甕	底部欠損	C	21.3	-	(30.6)	回転ハケ→ハケメ	回転ナデ→タタキ、ヘラケズリ	-	良好	浅黄褐色	容量(9.88ℓ)
147	1号住居状遺構埋土下位	土師器 甕	碗状形	C	14.4	7.8	10.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	良好	浅黄褐色	容量1.12ℓ
148	2号住居状遺構埋土中	土師器 甕	口縁部片	-	-	-	-	ヘラナデ?	ヘラナデ	-	良好	明黄褐色	
155	5号住居埋土上位	土師器 甕	底部欠損	A	28.9	-	(30.2)	ヘラナデ	ヘラナデ	-	良好	浅黄褐色	容量(13.07ℓ)
156	21号土坑埋土上位	土師器 甕	口→胴下1/4	C	(23.2)	-	(12.8)	回転ナデ	回転ナデ→ヘラケズリ	-	やや良好	黄	
157	21号土坑埋土上位	土師器 杯(内底)	碗状形	B	16.7	6.1	5.9	回転ナデ→ミガキ	回転ナデ	糸切り→再調整?	良好	黄	容量0.56ℓ
158	21号土坑埋土上位	土師器 高台杯(内底)	胴下→台	-	-	7.8	(2.7)	ミガキ	回転ナデ	指おさえ	良好	にぶい黄褐色	
159	21号土坑埋土上位	土師器 甕	口→胴下1/5	A	-	-	(16.2)	ヘラナデ	ヘラナデ?	-	やや不良	にぶい黄褐色	
161	9号清浄埋土中	土師器 甕	口→胴上1/3	C	(28.6)	-	(13.5)	回転ナデ→ヘラケズリ	回転ナデ→ヘラナデ	-	良好	にぶい黄褐色	VI11ログッド田舎出土の土師片と接合
162	VI J 12-13号土層	土師器 甕	口→胴上1/3	D	(22.6)	-	(9.1)	回転ナデ	回転ナデ	-	良好	にぶい黄褐色	
163	VI I 20号土層	土師器 杯(内底)	高台部	-	-	6.6	(1.5)	ミガキ	回転ナデ	指おさえ	やや良好	にぶい黄褐色	
164	VI J 1号土層	土師器 高台杯(内底)	高台のみ	-	-	7.2	(2.2)	ミガキ	回転ナデ	指おさえ	良好	黄	
165	VI I 1号土層	須恵器 杯(内底)	口→底1/4	B	(16.9)	(6.8)	5.8	回転ナデ→ミガキ	回転ナデ	糸切り	やや良好	黄	VI11ログッド田舎出土の土師片と接合。容量0.60ℓ
166	VI J 2号土層	土師器 甕	口→底1/4	B	(13.2)	(5.6)	5.1	回転ナデ	回転ナデ	糸切り(再調整あり?)	良好	浅黄褐色	容量0.35ℓ
167	VI H 14号土層	須恵器 杯	口→底2/3	B	14.0	8.7	4.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	良好	灰白	容量0.32ℓ
168	VI J 9号土層	須恵器 甕	口→胴部1/3	-	(29.7)	-	(6.1)	回転ナデ	回転ナデ	-	良好	灰白	
169	VI I 1号土層	須恵器 甕	口縁部片	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	良好	灰	
170	VI I 1号土層	須恵器 甕	胴部片	-	-	-	(6.8)	回転ナデ	回転ナデ	-	良好	灰白	
171	VI I 2号土層	須恵器 甕	胴部片	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ→タタキ	-	良好	灰	
172	VI I 1号土層	須恵器 大甕	胴部片	-	-	-	-	タタキ	タタキ	-	良好	灰	
173	VI I 1号土層	須恵器 大甕	胴部片	-	-	-	-	タタキ	タタキ	-	良好	灰	

法量と底径の():推定値
 高さの():残存値

容量で()のものは推定値

第12表 土製品観察表

発掘番号	出土地点	層位	種別・器種	残存状態	重量(g)	調整技法	焼成	色調	備考
122	2号住居	床面	土鈴	破断欠損	17.0	手捏ね	良好	にぶい黄褐色	丸は2個 鈴口は「十」字
149	1・2号焼成遺構	1層	土師器片	—	6.3	—	良好	橙	断面が割れたもの。
150	1・2号焼成遺構	1層	粘土塊	—	3.2	—	良好	橙	土器片か
151	1・2号焼成遺構	1層	土師器片	—	12.3	—	良好	淡黄褐色	断面が割れたもの。
152	2号焼成遺構	埋土中	粘土塊	—	12.6	—	良好	橙	—
153	4号焼成遺構	埋土中	粘土塊?	—	6.8	—	やや良好	明黄褐色	遺構の壁が崩れたものか。
154	4号焼成遺構	埋土中	粘土塊	—	7.1	—	良好	淡黄褐色	—

第13表 木製品観察表

発掘番号	出土地点	層位	種別	残存状態	材質	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
160	50号土坑	埋土中	椀	胴下～底	不明	—	4.5	(2.8)	内外面に漆が塗布されている

第14表 石製品観察表

発掘番号	出土地点 層位	層位	種別	残存状態	石材	産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
123	2号住居	埋土中位	礫石	—	凝灰岩	轟羽山脈 新生代新第三紀	60.22	115.90	84.72	626.31	—
124	2号住居	3層	不明石片	完形	頁岩	北上山地 古生代	157.50	71.51	43.55	479.27	炭化物付着
126	3号住居	床面上	不明石片	—	凝灰岩	轟羽山脈 新生代新第三紀	(60.92)	(105.27)	53.17	300.10	被熱している

第15表 鉄製品観察表

発掘番号	出土地点	層位	種別	時期	残存状態	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
174	2号住居	埋土中位	刀子	古代	完形	82.95	15.8	3.39	8.7	写真のみ
175	—	—	金具	不明(近代?)	完形?	49.6	43.9	14.37	37.6	写真のみ。ベルト金具か

VI 戸 桜 遺 跡

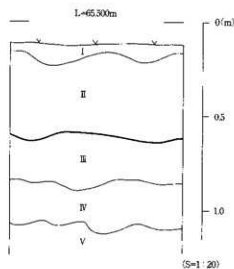
1 遺 跡 の 立 地

遺跡は北上市役所の北東約6.5kmに位置し、北上川左岸の微高地に立地する。遺跡の標高は65m前後で、調査前の現況は水田・宅地である。調査区北西側には大量の川砂利が堆積しており、調査区の一部は河床・河岸となっていた時期があると考えられる。

2 基 本 層 序

I G 22 g グリット北東側壁面を基本土層とした。第I層は現在の耕作土であり、第II層は近世以降の旧表土と考えられる。第III層からはわずかながら縄文土器片が出土し、第IV層以下からは遺物の出土はない。調査区はほぼ平坦でほとんどの地点で土層は同じ様相を呈しているが、III H 7 e グリットより南東の調査区では第II～IV層は残っておらず、第I層の下はすぐ第V層となっている。

- 第I層：10YR3/2 黒褐色土 粘性なし
しまりなし 層厚4～12cm
- 第II層：10YR3/2 黒褐色土 粘性なし
しまりあり 層厚34～48cm
- 第III層：10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり
しまりあり 層厚21～30cm
- 第IV層：10YR2/2 黒褐色土 粘性あり
しまりあり 暗褐色土(10YR3/4)を
3%含む
第III層より薄色 層厚16～26cm
- 第V層：10YR3/4 暗褐色土 粘性あり
しまりあり

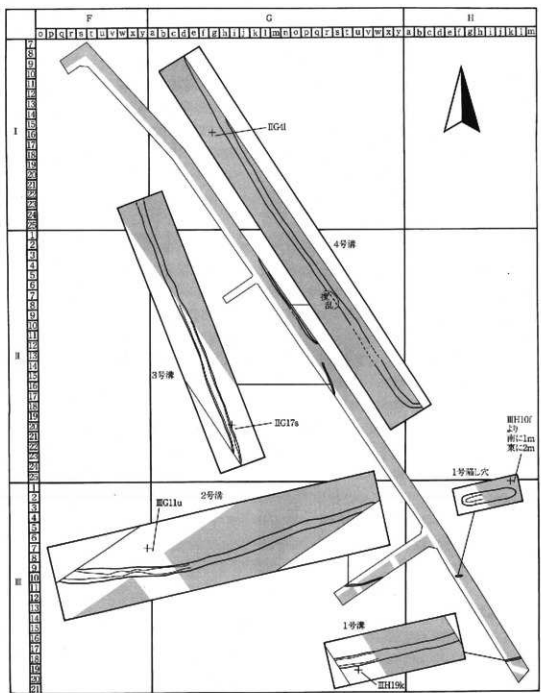


第78図 基本土層

3 調 査 の 概 要

本遺跡は平成12年に新規発見、平成14年に範囲拡大をしており、縄文・弥生・平安・近世の散布地として周知されている。事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査でも、今回の調査区を含む遺跡内に、該当する時期の埋蔵文化財が確認されたため本調査・確認調査が実施されることとなった。調査区は遺跡の南端部分に当たる。調査区の総面積は2,295㎡であり、内本調査区が935㎡、確認調査区が1,360㎡である。

検出された遺構は溝4条と陥し穴1基で、このうち溝1条は確認調査区内にあり、他は本調査区と確認調査区にまたがる。出土した遺物は、縄文土器少量、須恵器1点、近世陶磁器1点である。



■ 確認調査区

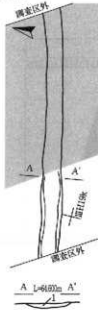
全体図 0 1:1,500 50m

箱上穴 1~3号溝 0 1:200 5m

4号溝 0 1:400 10m

第79図 遺構配置図

1号溝



1号溝

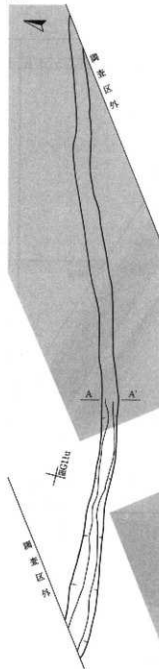
- 1 10YR2/3 黒褐色 砂質土
粘性なし しまりあり
暗褐色和灰土(10YR3/4)
10%含む。



2号溝

- 1 10YR3/2 黒褐色土
粘性あり しまりあり

2号溝



3号溝



3号溝

- 1 10YR3/2 黒褐色土
粘性あり しまりあり



4号溝

- 1 10YR2/3 黒褐色土
粘性のやあり しまりあり
暗色土灰(10YR4/4 程度)
1%含む。

4号溝



1~3号溝 0 1:100 6m

4号溝 0 1:200 10m

断面 0 1:40 2m

第80図 1~4号溝

4 検出遺構と出土遺物

(1) 溝状遺構

4条検出した。埋土の状況から近世以降の遺構と考えられるが、遺構内から遺物は出土しておらず、詳細時期は不明である。

1号溝(第80図、写真図版67)

<位置・検出・重複関係> III H 18 j ~ 18 l グリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。

表土除去後に第V層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> ほぼ東-西に直線の形状をなし、両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは6.44m、幅は38~56cm、深さは3~8cmである。

<底面> 残存がわずかであるため、形状は不明である。

<埋土> 単層で、暗褐色土を含む黒褐色砂質土である。

2号溝(第80図、写真図版67)

<位置・検出・重複関係> III H 11 s ~ 10 w グリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。

表土除去後に第III層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> ほぼ東-西に直線の形状をなすがやや南に湾曲する。両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは16.20m、幅は29~72cm、深さは5~10cmである。

<底面> ほぼ平坦である。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

3号溝(第80図、写真図版67)

<位置・検出・重複関係> II G 14 q ~ 17 s グリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。

表土除去後に第III層で検出した。重複する遺構はないが、北端は攪乱に中断される。

<平面形・規模> ほぼ南-北に直線の形状をなし、南端は調査区外に延び北端は攪乱に中断される。検出部分の長さは14.24m、幅は43~73cm、深さは8~16cmである。

<底面> ほぼ平坦である。

<埋土> 黒褐色土の単層である。

4号溝(第80図、写真図版67)

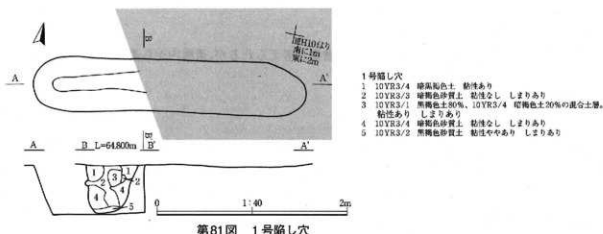
<位置・検出・重複関係> II G 3 k ~ 12 q グリッドの確認調査区に位置する。表土除去後に第III層で検出した。重複する遺構はないが一部攪乱に切られている。

<平面形・規模> ほぼ北西-南東に直線の形状をなすが、北西端はII G 7 m グリッド付近よりやや北になだらかに湾曲し調査区外に延びる。南西端はグリッド付近で約45°西に折れ調査区外に延びる。

検出部分の長さは40.25m(北西端~II G 7 m グリッドの湾曲部16m、II G 7 m グリッドの湾曲部~II G 12 q グリッドの屈折部23.32m、II G 12 q グリッドの屈折部~南東端-93cm)、幅は38~56cm、深さは15~18cmである。

<底面> 確認調査区であるため、セクション部分だけの把握であるが、中央部よりやや南西側が深くは平坦である。北東側から南西側に向かって緩やかに傾斜して下っている。

<埋土> 褐色土の小粒をわずかに含む黒褐色土の単層である。



第81図 1号陥し穴

(2) 陥し穴状遺構

1基検出した。縄文時代の遺構と考えられるが、遺物を伴わないため詳細な時期は不明である。

1号陥し穴(第81図、写真図版66)

<位置・検出・重複関係> III H10 e・10 f グリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。表土除去後に第V層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> 東端が北方向、西端が南方向に10度傾き、溝状の形を呈する。規模の詳細は東半が確認調査のため不明だが、精査の及んだ状況においては開口部径284×55cm、底面幅15～21cm、深さ50cmを測る。

<底面・壁面> 底面はほぼ平坦、側面は、西側は直線的に傾斜して、南北側はやや外反気味に立ち上がる。東側の側面は確認調査区のため不明である。

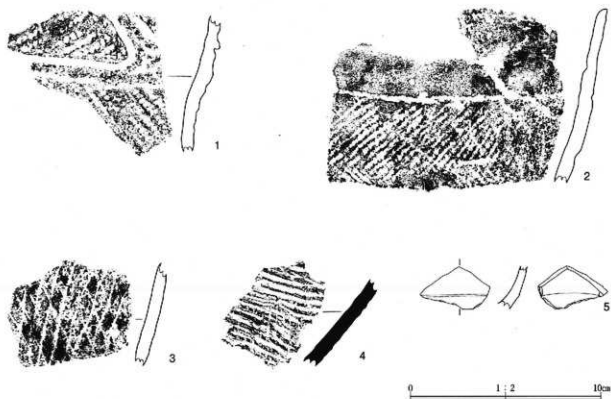
<埋土> 自然堆積で5層からなる。黒褐色と暗褐色の砂質土を主体とする。

(3) 遺構外出土遺物(第82図、写真図版71)

遺構外出土の遺物も遺構に伴う遺物と同様極めて希薄で、縄文土器は総重量約920gが出土し、他に須恵器片1点、近世陶磁器片1点と掲載したものが全てである。縄文土器はいずれも破片のため詳細時期は不明であるが、1が中期、2が中～後期に属すると思われる。3の時期は不明だが胎土や内面調整等に1との共通点が見られる。4・5はいずれも原位置をとどめない流入によるものと思われる。

5 まとめ

遺跡面積の約3%に当たる今回の調査では、溝状の陥し穴が検出されたことからこの区域が縄文時代の狩り場であったこと、遺構外より出土した遺物から縄文・平安・近世の遺物散布地であることは確認できたが、溝の属する時期や性格は判明せず、遺跡の全容を明らかにするには至らなかった。



第82図 出土遺物

第16表 遺物観察表

No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	文様・装飾		備考
						外面	内面	
1	II G 17 a	II層	編文土器	深鉢	口縁～胴部	L R 胴部は縞帯と沈線で区画	ナデ	粘土に砂粒含む
2	II G 14 r	II層	編文土器	深鉢	口縁～胴部	口縁部(無文)と胴部(羽状文)をR L押圧で水平に区分	ナデ ミガキ	粘土に砂粒含む
3	III H 2 b	II層	編文土器	深鉢	胴部	縞目状	ナデ	粘土に砂粒含む
4	II G 16 a	表土	須恵器	甕	胴部	タタキ		
5	III H 4 c	雑瓦	近世陶磁器	靴	胴一底部			肥前産

Ⅶ 舟渡 I 遺跡 (県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)

1 遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約6.0kmに位置し、北上川左岸の微高地に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田・宅地である。

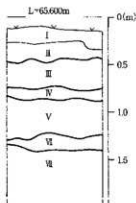
2 基本層序

調査区は、大グリッドAからEに連続する部分と離れてⅡEグリッドを中心に位置する部分に二分されており、前者のうちA・Bグリッド内の範囲をA区、C～Eグリッド内の範囲をB区、後者をC区と便宜上呼称して調査を進めた。

土層が地点により異なり、各層の対応関係も明らかにできなかったため、A区ではⅤA4vグリッドの北東側壁面、B・C区ではⅢD8iグリッドの南西側壁面を基本土層とした。2つの基本土層において、第Ⅰ層は現在の耕作土、第Ⅱ層は近世以降の旧表土、第Ⅲ層はわずかながら土師器・須恵器が出土することから古代の土層と考えられる点は共通している。それより下位については、A区では第Ⅲ～Ⅶ層より縄文時代後・晩期、縄文時代晩期末～弥生時代の土器、古代の土師器・須恵器が混じって出土するため各層共時期の特定はできない。これらの遺物は、河川の影響により様々な時代のものが混じり合って流れ込み堆積したものと思われる。B・C区では第Ⅳ層から縄文土器が出土しているがこちらも流入したものようである。Ⅴ～Ⅸ層からの遺物の出土はない。

基本土層の詳細については第83図のとおりである。

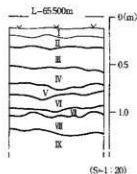
A区基本土層



A区基本土層

第Ⅰ層: 10YR3/1 黒褐色土 粘粒ありしりあり 層厚0～12cm
 第Ⅱ層: 10YR3/3 暗褐色土 粘粒なししりあり 層厚0～15cm
 第Ⅲ層: 10YR2/2 暗褐色土 粘粒ややありしりあり 層厚20～32cm
 第Ⅳ層: 10YR3/2 黒褐色土 50%と10YR4/4 褐色土50%の混合土層 粘粒ありしりあり 層厚8～16cm
 第Ⅴ層: 10YR3/2 黒褐色土90%と10YR4/4 褐色土10%の混合土層 粘粒ありしりあり 層厚34～45cm
 第Ⅵ層: 10YR3/4 暗褐色砂質土 粘粒ややありしりあり 層厚5～18cm
 第Ⅶ層: 10YR4/3 に近い黄褐色土 粘粒ありしりあり 10YR6/6 明黄褐色土 粘土質土多アロクで場合含む

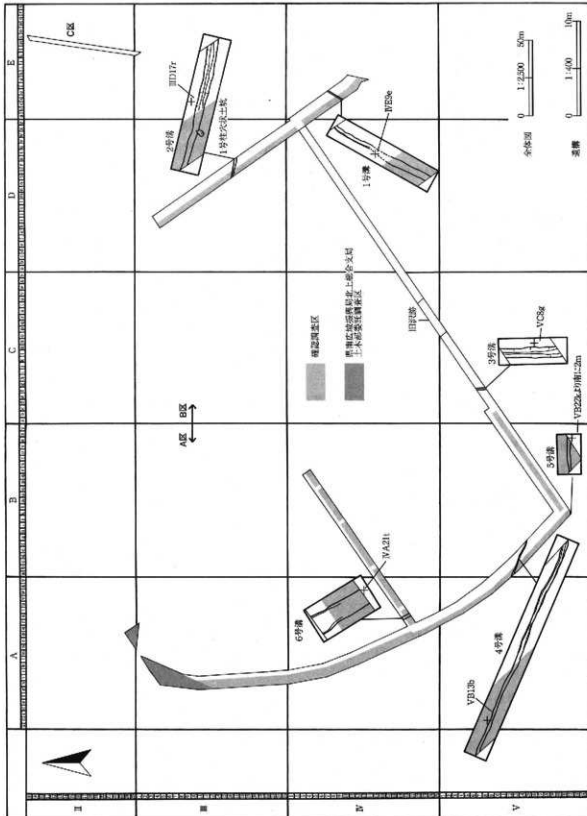
B-C区基本土層



B・C区基本土層

第Ⅰ層: 10YR3/1 黒褐色土 粘粒ありしりあり 層厚20cm
 第Ⅱ層: 10YR2/2 暗褐色土 粘粒なししりあり 層厚10～15cm
 第Ⅲ層: 10YR2/1 暗褐色土 粘粒ややありしりあり 層厚20～28cm
 第Ⅳ層: 10YR2/1 暗褐色土 粘粒ややありしりあり 黒褐色土(10YR3/3)含む 層厚12～25cm
 第Ⅴ層: 10YR4/4 褐色土 粘粒ありしりあり 層厚5～13cm
 第Ⅵ層: 10YR3/4 暗褐色土 粘粒ありしりあり 層厚10～15cm
 第Ⅶ層: 10YR4/4 暗褐色砂質土 粘粒ややありしりあり 層厚3～10cm
 第Ⅷ層: 10YR3/4 暗褐色土 粘粒ありしりあり 層厚13cm～22cm
 第Ⅸ層: 10YR4/4 暗褐色砂質土 粘粒ややありしりあり

第83図 基本土層



第84図 遺構配置図

3 調査の概要

本遺跡は平成12年に新規発見され、縄文・平安の散布地として周知されている。事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査でも、遺跡内に該当する時期の埋蔵文化財が確認されたため今回の調査が実施された。

今回の調査は、本調査面積3,990㎡、確認調査面積3,160㎡の計7,150㎡である。検出された遺構は溝6条、柱穴状土坑1個、土坑1基であり、このうち柱穴状土坑と溝1条は確認調査区内に位置し、溝5条は本調査区と確認調査区にまたがる。出土した遺物は縄文時代後・晩期の土器、縄文時代晩期末～弥生時代の上器、古代の土師器・須恵器、近世陶磁器合わせて大コンテナ1箱分である。

4 検出遺構と出土遺物

(1) 溝状遺構

6条検出した。遺物を伴わないため詳細時期は不明であるが、埋土から1～5号溝は古代、6号溝は近世以降に属すると思われる。

1号溝(第85図、写真図版69)

<位置・検出・重複関係> IV E 8 e～11 dグリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。表土除去後に第IV層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> 北北東-南南西にはほぼ直線の形状をなし、両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは11.11m、幅は24～80cm、深さは2～9cmである。

<底面> 残存がわずかだが、ほぼ平坦だと思われる。

<埋土> 暗褐色土を含む黒褐色土の単層である。

2号溝(第85図、写真図版69)

<位置・検出・重複関係> III D 17 p～18 sグリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。表土除去後に第III層で検出した。1号柱穴状土坑と重複し同遺構より古い。

<平面形・規模> ほぼ東-西に直線の形状をなし、両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは13.44m、幅は48～108cm、深さは31～47cmである。

<底面> U字形である。

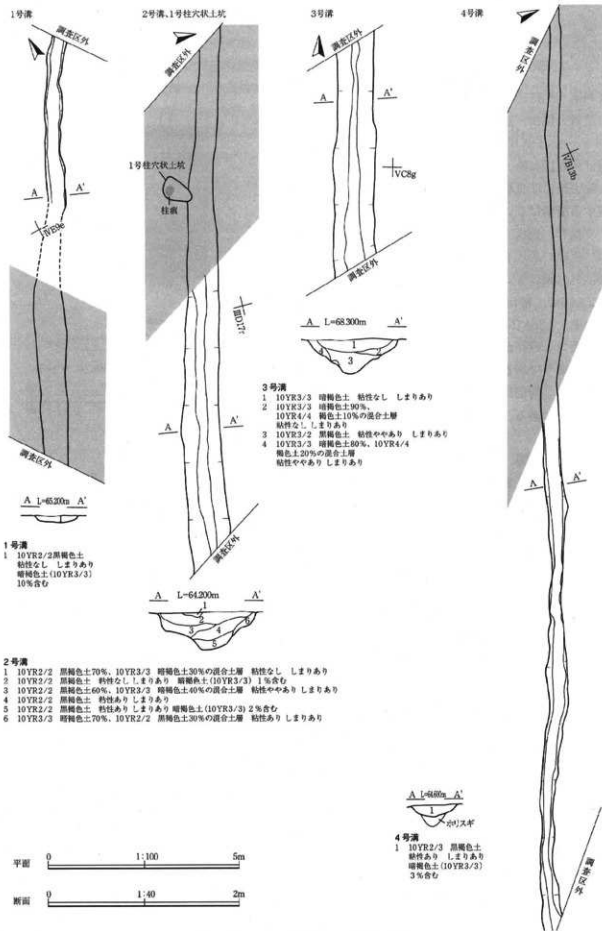
<埋土> 6層からなり、暗褐色土を含む黒褐色土を主とする。

3号溝(第85図、写真図版69)

<位置・検出・重複関係> VC 7 f～8 fグリッドの本調査区に位置する。表土除去後に第III層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> ほぼ南-北に直線の形状をなし、両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは5.94m、幅は92～110cm、深さは20～42cmである。

<底面> U字形である。



第85図 1～4号溝、1号柱穴状土坑

<埋土> 4層からなり、上位は暗褐色土、下位は黒褐色土を主とする。

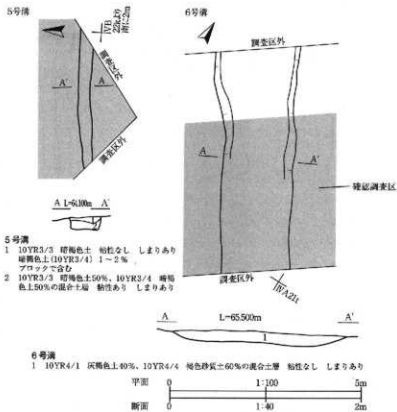
4号溝(第85図、写真図版70)

<位置・検出・重複関係> VB 13a～16fグリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。表土除去後に第Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> 西北西-東南東に直線の形状をなし、両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは24.16m、幅は18～54cm、深さは4～12cmである。

<底面> 残存がわずかだが、U字形のようである。

<埋土> 暗褐色土を含む黒褐色土の単層である。



第86図 5・6号溝

5号溝(第86図、写真図版70)

<位置・検出・重複関係> VB 22k～1グリッドの確認調査区に位置する。表土除去後に第Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> ほぼ東-西に直線の形状をなし、両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは344m、幅は25～35cm、深さは3～8cmである。

<底面> 確認調査区であるため、セクション部分だけの把握であるが、ほぼ平坦である。

<埋土> 2層の暗褐色土である。

6号溝(第86図、写真図版70)

<位置・検出・重複関係> IV A 19r・19s・20s・20t・21sグリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。表土除去後に第Ⅵ層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> 北西-北南東に直線の形状をなし、両端は調査区外に延びる。検出部分の長さは587m、幅は175～218cm、深さは4～12cmである。

<底面> ほぼ平坦である。

<埋土> 灰褐色土と褐色砂質土の混合土層による単層である。

(2) 柱穴状土坑

1個検出した。単独での検出であるが、調査区境界に近い一連となる柱穴が調査区外に存在する可能性もある。確認調査区にあるため、規模・時期等の詳細は不明である。

1号柱穴状土坑(第85図、写真図版69)

<位置・検出・重複関係> III D 17pグリッドの確認調査区に位置する。表土除去後に第Ⅲ層で検

出した。2号溝と重複し、同遺構より新しい。

<平面形・規模> 掘り方は北東-南西に長い楕円形で83×56cm(最大値)を測る。柱状は直径24cmの円形で、掘り方の南に寄る。検出のみの調査のため深さは不明である。

<埋土> 検出面で観察される埋土上位は、掘り方が暗褐色土、柱状が黒褐色土である。

(3) 遺構外出土遺物(第87～89図、写真図版71・72)

今回の調査で出土した遺物は全て遺構外からの出土である。B区からは縄文土器、土師器・須恵器・近世陶磁器、C区からは縄文土器が出土しているが、いずれも小片である。近世陶磁器はB区を巡る現代の水路に伴うもののため不掲載とした。

A区では現在の堤防沿いに位置する旧沢跡の埋土や旧河道縁部を中心にある程度まとまって遺物の出土があった。特にⅣA5j・ⅤA6uグリット周辺に集中しているが、複数の時代の遺物が1つの層から出土したり上位出土の遺物より新しい遺物が下位から出土したりしたため、出土遺物の多くは原位置をとどめない流入したものと判断した。

1～14は縄文・弥生時代の土器である。破片が多く、完形の3分の1以上復元できたものはわずかに4点で、1・2は縄文後期、3・4は晩期、5～12は晩期末から弥生時代前期にかけての時期に属すると思われる。13・14の詳細な時期は不明である。

5～12には文様や装飾等に該当時期の特徴が表れているが、やや略式の手法で制作された感がある。6には変形四角文が描かれているが、細い沈線で規則性に乏しい。7は鋸歯状の文様があるが、やはり規則性に乏しく小ぶりである。並行する鋸歯状文に挟まれる区画は縄文で充填されるのに対し、それを補助する区画は刺突により充填されている。10も細い沈線による鋸歯文だが、1つ1つがそろわず平行する2本も片方が中断したり、鋸歯文が尖らず扁平になったりして、もはや鋸歯文とはわかないほど崩れたりした部分も見られる。

15～18は古代の土師器・須恵器で15・16は同一個体とも思われる。19～21の石器のうち19は他の遺物とともに出土したが、20・21の2点は接近して出土し、他の遺物とは地点・層位が異なる。19は磨石・敲石どちらにも利用されている。

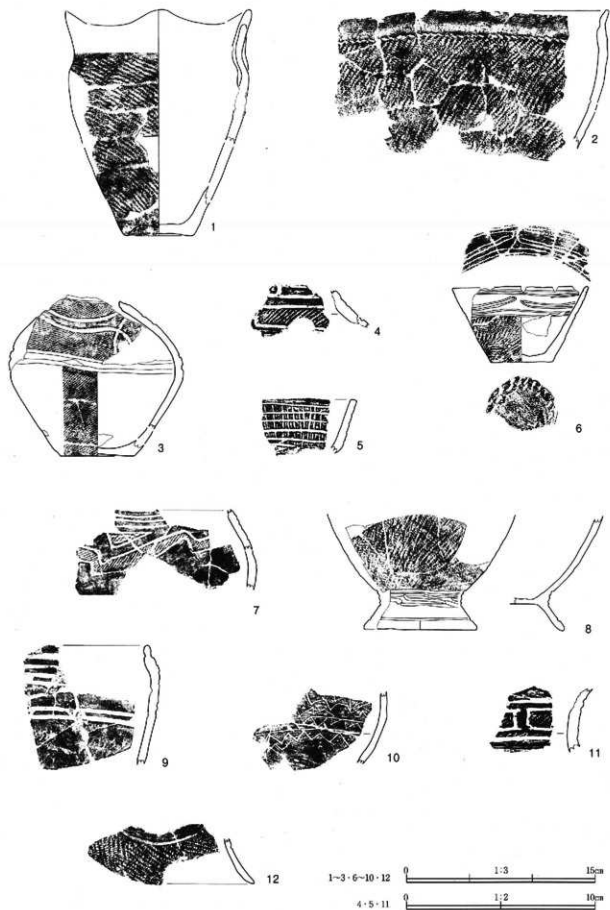
5 ま と め

今回の調査では、縄文時代後・晩期、縄文時代晩期末～弥生時代前期、古代の遺物が出土し、周知されてきたとおり本遺跡が縄文・平安時代の遺物散布地であることを再確認するとともに、縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺物散布地でもあることを明らかにした。

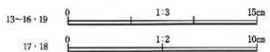
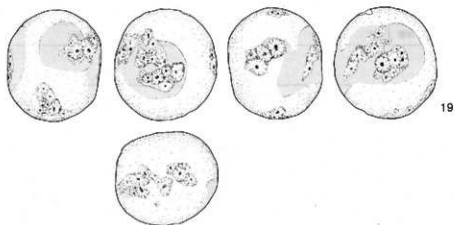
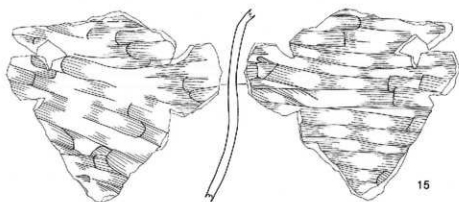
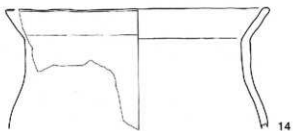
遺物出土地点は旧沢跡の埋土や現堤防付近の旧河道縁部を中心とする。各地点で堆積状況が異なる点、1つの土層から様々な時代の遺物が出土する点、上層より新しい時代の遺物が下層から出土する例がある点等から、この地点では土砂の流入・堆積が比較的頻繁に繰り返され、その土砂に混じり原位置を移動した遺物がこの地点より出土しているものと思われる。

遺物が出土する以上、移動可能な程度の付近に遺物の属した時代の集落等が存在すると思われるが、検出されたのは溝状遺構とわずかな柱穴状・坑のみであり、遺跡面積の約5%にあたる今回の調査からは、遺跡の主体及び全容は明らかにならなかった。

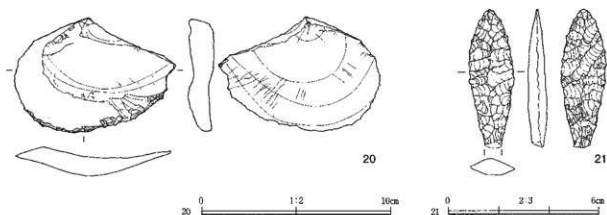
今回の調査成果が、周辺や後世の遺跡調査の成果と比較検討され、位置づけられることに期待したい。



第87図 出土遺物(1)



第88圖 出土遺物(2)



第89図 出土遺物(3)

第17表 縄文・弥生土器

No.	出土地点	層位	器種	部位	文様・模様		備考 ()は推定値
					外面	内面	
1	A区 VA 6u	V層	深鉢	口縁~底部	口縁部は突起4単位で無文帯、体部R L	ナデ	口径(25.0cm)、底径5.7cm 胎土に砂粒含む
2	A区 VA 7v	V層	深鉢	口縁~体部	口縁部無文帯と体部L Rを水平にL R押圧で区分	ナデ	口径(37.6cm) 胎土に砂粒含む
3	A区 VA 22p	V層	豆	体~底部	Lの地文、水平平行・ループ状の沈線に区画されたすり消しの無文帯	ナデ	底径6.0cm
4	A区 VA 8u	V層	注口土器?	頸~肩部	Lの地文に沈線文、沈線区画の工字文	ミガキ	胎土に砂粒含む
5	B区 III D 24w	III層下	鉢	口縁部	格子状に平行沈線文(前後方向の後水平方向)	ミガキ	
6	A区 VA 6u	IV層	鉢	口縁~底部	口縁部に細い沈線による縮縮な変形区画、体部L	口縁部に沈線、ナデ	口径(13.2cm)、底径5.3cm 底面に工具痕
7	A区 VA 6u	V層	鉢	頸~体部	頸部は平行沈線、L R地文後沈線で縮縮状の区画区画外はすり消し、補助区画は斜線で充満	ミガキ	
8	A区 VB 17g	V層	台付鉢	体~台部	体部L 底部と台部の接合部に連続S字沈線文 台部下位に3~4本の沈線文、最下位配線	ミガキ	台部底径(9.0cm)
9	A区 VA 4u	IV層	鉢	口縁~体部	沈線による変形工字文	口縁部に平行沈線 ナデ	
10	A区 VA 5j	旧沢跡埋土	鉢	体部	縮縮状の文様	ナデ	
11	A区 VA 6u	V層	深鉢?	口縁~頸部	頸部L地文後沈線で工字文状に区画し文様帯上下に平行沈線文	ミガキ	
12	A区 VA ??	V層	台付鉢	台部	上依より下依へ無文帯→沈線→R L	ミガキ	台部底径(11.6cm)
13	A区 VA 5j	旧沢跡埋土	甕	口縁~肩部	口縁部R L 口縁部L R 頸部上下に平行沈線、 頸~肩部無文	ナデ	口径(13.8cm) 胎土に砂粒含む
14	A区 VA 5k	旧沢跡埋土	深鉢	口縁~体部	ナデ	ナデ	口径(36.6cm)

第18表 古代土器観察表

No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	調整		備考 ()は推定値
						外面	内面	
15	A区 VA 4j	旧沢跡埋土	土師器	甕	体部	ヨコナデ	ヨコナデ	16と同一致体?
16	A区 VA 5j	旧沢跡埋土	土師器	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	口径(17.8cm) 15と同一致体?
17	A区 VB 13o	III層	須恵器	甕	体部	タタキ	ナデ	
18	A区 VA 17x	旧沢跡埋土	須恵器	甕	口縁~体部	ロクロナデ	ロクロナデ	口径(11.6cm)

第19表 石器観察表

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	
19	A区 VA 5s	IV層	磨石類	5.95	8.15	7.5	806.12	デイサイト	新生代新第三期	鳥羽山脈	磨石として6使用
20	A区 III A 17h	V層	剥片	6.1	8.6	1.3	62.78	頁岩	新生代新第三期	鳥羽山脈	刃部あり
21	A区 III A 17h付近	V層	尖頭部	[5.7]	1.8	0.6	[6.03]	頁岩	新生代新第三期	鳥羽山脈	基部わずかに欠損

[]は推定値

VIII 舟渡 I 遺跡 (県南広域振興局北上総合支局土木部)

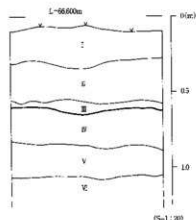
1 遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約60kmに位置し、北上川左岸の微高地に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田である。

2 基本層序

Ⅲ A 24 o グリットの北西側壁面を基本土層とした。遺構は検出されず、第Ⅳ層から遺物が出土しているものの流入であるため、各層に対応する時期は不明である。

- 第Ⅰ層：10YR3/1 黒褐色土 粘性あり しまりあり
耕作土 層厚18～28cm
- 第Ⅱ層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり
層厚20～30cm
- 第Ⅲ層：10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりあり
層厚4～18cm
- 第Ⅳ層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり
10YR3/4 暗褐色土を20%含む 層厚20～26cm
- 第Ⅴ層：10YR3/4 暗褐色土70%と10YR2/2黒褐色土30%の
混合土層 粘性なし しまりあり 層厚20～24cm
- 第Ⅵ層：10YR4/4 褐色砂質土 粘性なし しまりあり



第90図 基本土層

3 調査の概要

本遺跡は平成12年に新規発見され、縄文・平安の散布地として周知されていた。今回の調査区は、もともと登録されていた遺跡範囲より北に位置していたが、調査に先立って行われた県教育委員会による試掘調査の結果、この地点からも縄文土器片が数点出土したため本調査が行われることになった。調査区は東西2か所に分かれており、総面積は453㎡である。

4 検出遺構と出土遺物

第Ⅳ層より総重量約360gの縄文土器片が出土したが、遺構は検出されなかった。遺物はいずれも摩耗が激しく、接合しても小片にしかならない。詳細記事の特定等も困難である。流入したものと思われる。

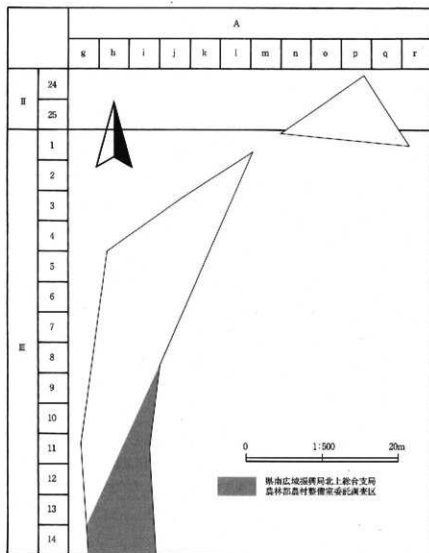
5 まとめ

本調査区付近に当たる遺跡北側に重点をおいた平成19年2月の試掘調査では、堤防西に遺構、堤防の東西に遺物が確認された。これらの遺物はそれぞれ距離を置いて点在することから、原位置をと

どめていない流入によるものとの推定されている。またこの地点以北からの遺物の出土はない。

本調査区の南側には県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室委託の調査区が隣接しており、本調査に先立って調査が行われた。この調査では縄文時代の後期から弥生時代及び平安時代の遺構・遺物が確認されているが、本調査区付近に遺構はなく、本調査区に向かって北上するに従って遺物の出土が減少する傾向が明らかとなっている。

試掘調査では調査区付近を遺跡の北限と推定しており、今回の調査はそれを裏付ける結果となった。



0 1:2 10cm

第91図 調査区全体図・出土遺物

第20表 縄文土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	部位	文様・調整		備考
					外面	内面	
1	ⅡA 5 j	Ⅱ層	鉢類	底部	地文LR 平行する2本の波線文とそれに斜めに添う方向の波線	ナデ	胎土に砂粒わずかに含む
2	ⅡA 5 k	Ⅱ層	鉢類	底部	LR	ナデ	胎土に砂粒含む

IX 自然科学分析

1 野沢Ⅱ遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

野沢Ⅱ遺跡は、岩手県北上市更木17地割69(北緯39°20'09"、東経141°09'01")に所在する。遺跡は北上川支流の広瀬川によって形成された河岸段丘面に位置する。測定対象試料は、2号住居跡貯蔵穴内埋土中から出土した炭化物(No.1:IAAA-81943)、5号住居跡カマド構築土中から出土した炭化物(No.2:IAAA-81944)、1・2号焼成遺構埋土中から出土した炭化物(No.3:IAAA-81945)である。

2 測定の意義

遺構および遺構出土遺物の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA: Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで、酸化炭素(CO₂)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(%)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.0較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

6 測定結果

^{14}C 年代は、2号住居跡貯蔵穴内の炭化物が $1240 \pm 30\text{yrBP}$ 、5号住居跡カマド構築土中の炭化物が $1280 \pm 30\text{yrBP}$ 、1・2号焼成遺構埋土中の炭化物が $1220 \pm 30\text{yrBP}$ である。試料採取では、いずれも樹皮に接する最外年輪が確認されなかったことから、年輪に応じて伐採年代よりも古い年代となること(古木効果)を考慮する必要がある。試料の炭素含有率は、すべて70%前後であり、十分な値であった。暦年較正年代(1σ)は、No. 2とNo. 3には時期差があり、No. 1が両者の時期幅に重なる中間の年代である。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-81943	No.1	遺構：2号住居 位置：貯蔵穴内埋土中	炭化物	AAA	-25.30 ± 0.35	$1,240 \pm 30$	85.71 ± 0.32
IAAA-81944	No.2	遺構：5号住居 位置：カマド構築土中	炭化物	AAA	-28.21 ± 0.47	$1,280 \pm 30$	85.24 ± 0.31
IAAA-81945	No.3	遺構：1・2号焼成 位置：埋土中	炭化物	AAA	-25.55 ± 0.44	$1,220 \pm 30$	85.94 ± 0.32

[#2570]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81943	$1,240 \pm 30$	85.65 ± 0.31	$1,238 \pm 29$	693AD - 749AD (37.9%) 784AD - 782AD (12.8%) 789AD - 811AD (13.3%) 847AD - 856AD (4.2%)	667AD - 875AD (95.4%)
IAAA-81944	$1,340 \pm 30$	84.68 ± 0.30	$1,282 \pm 29$	679AD - 721AD (40.1%) 741AD - 770AD (28.1%)	663AD - 779AD (95.4%)
IAAA-81945	$1,230 \pm 30$	85.94 ± 0.31	$1,217 \pm 29$	773AD - 871AD (68.2%)	653AD - 748AD (17.1%) 765AD - 889AD (78.3%)

第21表 放射性炭素年代測定結果

[参考値]

7 調査員のコメント

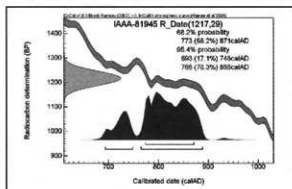
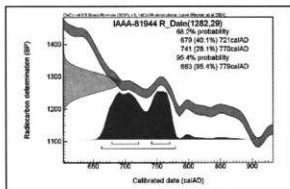
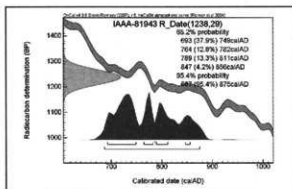
野沢Ⅱ遺跡の竪穴住居跡群とその周辺に分布する焼成遺構の時期を知るために、住居跡2棟(2・5号住居跡)と焼成遺構1基(1・2号焼成遺構)に伴う炭化物の分析を依頼した。

分析対象となった遺構群の周辺には十和田aテフラが分布しており、遺構群はそれらを切っているのので、遺構の年代も西暦915年以降であろうと推測し、また遺構出土遺物からもそれを裏付けていた。したがって、調査担当者として、今回の分析結果は妥当なものと考えている。

またそれぞれの位置に近い2号住居跡と1・2号焼成遺構との年代結果が近かったこと、またそれらと比べると、5号住居跡にはやや時期差が認められる点など興味深い結果であった。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考] 暦年較正年代グラフ

2 野沢Ⅱ遺跡における火山灰同定分析鑑定

(株)火山灰考古学研究所

1 はじめに

東北地方岩手県北上市とその周辺には、焼石、栗駒、岩手、鳴子、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、阿蘇、始良など北海道や九州など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺構が認められた北上市野沢Ⅱ遺跡でも、発掘調査担当者により採取されたテフラ試料を対象に、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定および主成分化学組成分析を行って、テフラの検出と指標テフラとの同定を実施し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。分析の対象となった試料は、試料1（基本土層Ⅳa層）、試料2（畝間5）、試料3（基本土層Ⅶ層）の3点である。

2 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラ粒子のうち、火山ガラスは大規模な噴火の際に、鉱物などとともにマグマの破片として大量に生産噴出され。しかもその比重や形態などの関係で、とくに遠方まで到達する。さらに、マグマの多様性を反映して、形態や色調さらに屈折率、主成分化学組成などに特徴があり、さまざまな分析により特徴を把握しやすい。このことから、テフラを過去の時空指標として利用する火山灰編年学分野では、とくに火山ガラスの特徴把握が重視される。そこで、最初に3試料に含まれる火山ガラスの色調・形態別比率を求める火山ガラス比分析を実施した。火山ガラス比分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料20gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4～1/8mmおよび1/8～1/16mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mmの250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図1に、その内訳を表1に示す。試料3に含まれる火山ガラスの比率はさほど高くなく、分厚い中間型ガラス（1.2%）のほかに、無色透明のバブル型、淡褐色のバブル型、そして繊維束状に発泡した軽石型の火山ガラスが少量ずつ（各0.4%）含まれている。その最大径は、0.2mmと非常に細粒である。

試料2に含まれる火山ガラスの比率はかなり高く（38.4%）、比率が高い順に繊維束状に発泡した軽石型（24.4%）、スポンジ状に発泡した軽石型（6.0%）、無色透明のバブル型（5.2%）、そして分厚い中

間型ガラス (28%) が含まれている。この試料に含まれる火山ガラスの最大径は、0.8mmである。また、試料1にも比較的多くの火山ガラスが含まれている (16.4%)。この試料には、比率が高い順に繊維束状に発泡した軽石型 (9.6%)、スポンジ状に発泡した軽石型 (2.8%)、無色透明のバブル型 (2.4%)、そして分厚い中間型ガラス (1.6%) が含まれている。試料1の軽石型ガラスの最大径は、0.9mmである。このように、試料2と試料1では含まれている比率は異なるものの、火山ガラスの組成や最大径はよく似ている。

3 火山ガラスの屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

3 試料に含まれる1/8～1/16mmサイズの火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置 (古澤地質社製MAIOT) を利用して、屈折率 (n) の測定を実施した。

(2) 測定結果

測定結果を表2に示す。試料3に含まれる火山ガラス (19粒子) の屈折率 (n) は、1.499-1.508とrangeが広い。この中では、n:1.499-1.505のものが18粒子で多く、n:1.508が1粒子のみ認められた。試料2に含まれる火山ガラス (30粒子) の屈折率 (n) は、1.499-1.508である。一方、試料1に含まれる火山ガラス (27粒子) の屈折率 (n) は、1.505-1.511である。

4 火山ガラスの主成分化学組成分析

(1) 分析試料と分析方法

3 試料に含まれる1/4～1/8mmサイズの火山ガラスを対象として、指標テフラとの同定精度をさらに向上させるために、波長分散型エレクトロンプローブX線マイクロアナライザー (以下、WDS型EPMAとする) により主成分化学組成分析を実施した。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01 μ A、ビーム径5 μ mの条件で行った。補正法はOxide ZAF法を用いた。

(2) 分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表3に示す。試料3 (12粒子) では、少なくとも6種類の多様な火山ガラスが検出された。一方、試料2 (11粒子) と試料1 (13粒子) においては、試料1の1粒子以外で傾向が非常によく似た火山ガラスが検出された。

5 考 察

試料3に含まれる火山ガラスの比率が低いことや、主成分化学組成分析で多様な火山ガラスが検出されたことから、本試料はガラス質テフラの一次堆積層からは採取されていないらしい。

試料3で分析対象となった火山ガラスのうち、1C (08E-28) の火山ガラスNo.2、No.8、No.12の3

粒子は、その組成から十和田火山起源の火山ガラスと考えられる(表4)。屈折率(n)が1.508の火山ガラスが含まれていることを考えると、これらの火山ガラスは約3.2万年前以前に十和田火山から噴出した十和田大不動テフラ(中川ほか, 1972, 大池・中川, 1979, Hayakawa, 1985, 松山・大池, 1986, 町田・新井, 1992, 2003)、あるいは約1.2~1.3万年前⁴⁾に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ(To-H, 早川, 1983a, Hayakawa, 1985, 町田・新井, 1992)に由来すると思われる。淡褐色のバブル型ガラスや中間型ガラスが含まれていることや、Al₂O₃およびCaOの傾向などを考慮すると、前者の可能性がより高いのかも知れない。

十和田大不動テフラは、下部の十和田ビスケット1降下帯石(To-BP1)と、上位の大不動火砕流堆積物およびそれに関連する降下火山灰(合わせてTo-Of)から構成されており(町田・新井, 2003など)、To-Ofに関しては岩手県南部での検出例もある(火山灰考古学研究所, 未公表資料)。

また、火山ガラスNo.11については、約1.3~約1.4万年前⁴⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)、あるいはそれとほぼ一連の浅間草津黄色軽石(As-K, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 2003など)に比較的類似している。このことは、屈折率測定結果とも矛盾はしない。このテフラは、最近山形県北部や岩手県南部でも見つかっている(火山灰考古学研究所, 未公表資料)。

さらに、屈折率(n)が1.499-1.501の火山ガラスが含まれていることは、日本列島のほぼ全域で検出されている約24~2.5万年前⁴⁾に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 2003, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995など)の混在を示唆するものかも知れない。

以上のことから、試料3については少なくともTo-Of降灰後に形成された堆積物から採取されたもので、その形成年代については後期更新世末期頃の可能性も十分考えられる。

試料2に含まれる火山ガラスは、比較的粗粒であること、火山ガラスの比率が非常に高いこと、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスを比較的多く含むこと、火山ガラスの屈折率、さらに火山ガラスの主成分化学組成などから、915年に十和田火山から噴出した十和田aテフラ(To-a, 大池, 1972, Hayakawa, 1985, 山田・井上, 1990, 町田ほか, 1981, 町田・新井, 1992, 2003)と考えられる。テフラの一次堆積層か台かの判断は、分析のみでは難しいが、火山ガラスの比率が高いことなどから、純度は良いものと思われる。一方、試料1に含まれる火山ガラスについても、同じ根拠からTo-aに由来すると考えられる。ただし、試料2に比較すると、主成分化学組成分析で傾向の異なる火山ガラスが検出されたように、純度はやや劣るようである。

火山ガラスの屈折率をみると、純度がより高い試料2より値がやや高く、この試料に約5,500年前⁴⁾に十和田火山から噴出した十和田中振テフラ(To-Cu, 大池ほか, 1966, 早川, 1983b, 福田, 1986)起源の火山ガラスが混在しているように思われる。

6 ま と め

北上市野沢Ⅱ遺跡において採取された3試料を対象に、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定および主成分化学組成分析を実施した。その結果、試料3(基本土層Ⅷ層)から、十和田大不動テフラ(To-BP1およびTo-Of, 約3.2万年前以前)あるいは十和田八戸テフラ(To-H, 約1.2~1.3万年前⁴⁾)に由来する可能性のある火山ガラスなどを検出できた。したがって、その層位はTo-Ofより上位で、年代については後期更新世末期の可能性も考えられる。試料2(畝間5)および試料1(基本

土層IV a層)からは、十和田aテフラ (To-a, 915年)に由来すると考えられる火山ガラスが多く検出された。

*¹⁴C放射性炭素(¹⁴C)年代。AT, As-YP, To-H, To-Cuの暦年較正年代については、順に約2.6～2.9万年前、約1.5～1.65万年前、約1.5万年前、約6,000年前と考えられている(町田・新井, 2003)。

7 調査員のコメント

今回、古代の遺構が検出したIV層と、縄文後期の遺物が出土したVII層から検出した火山灰について、分析を依頼した。分析結果をみると遺構の構築年代からIV a層の火山灰が十和田aテフラ由来という結果は妥当であると思われる。ただしVII層の火山灰が十和田大不動テフラあるいは八戸テフラであるという結果は、出土遺物との層位的な矛盾は認められないが、縄文時代後期以前の遺物が検出しなかったため、火山灰層とその上位から検出した遺構・遺物の年代とは著しくかけ離れていると言わざるを得ない。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部の第四紀礫年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地研専報, no.45, 65p.
- 福田友之(1986)考古学からみた「中御淨石」の降下年代。弘前大学考古学研究, 3, p.4-15.
- 早川由紀夫(1983a)火山礫石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰。火山, 28, p.25-40.
- 早川由紀夫(1983b)十和田火山中御テフラ層の分布。程度編成。年代。火山, 28, p.263-173.
- Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.
- 池田晃子・奥野 亮・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州。始良カルデラ起源の大隅降下礫石と 入口火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義一。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981)日本海をわたってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.
- 松本英二・前田保夫・竹村憲二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の¹⁴C年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
- 松山 力・大池昭二(1986)十和田火山噴出物と火山活動。十和田火山博物館, 4, p.1-62.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 貞・安田尚登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いた AT火山灰噴出年代の再検討-タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代。地質雑, 99, p.787-798.
- 中川久夫・中島教光・石田琢二・松山 力・七崎 修・生田康司・大池昭二・高橋 一(1972)十和田火山 発達史概要。岩井淳一教授記念論文集, p.7-17.
- 大池昭二(1972)十和田火山東麓における完新世テフラの歴史。第四紀研究, 11, p.232-233.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米合伸之(1966)馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀 研究, 5, p.29-35.
- 大池昭二・中川久夫(1979)地形並びに表層地質調査。「三戸地域広域農業開発基本調査報告書」。東北農 政局, 103p.
- 山田一郎・井上克弘(1990)東北地方を覆う古代の珪長質テフラ-十和田-大湯淨石-の同定。第四紀研究, 29, p.121-130.

X 調査の成果

1 野沢Ⅱ遺跡から出土した古代土器の分類と遺構の時期について

はじめに

今回の野沢Ⅰ・野沢Ⅱ・戸桜・舟渡Ⅰ遺跡の調査で、最も遺構・遺物が多かったのは、野沢Ⅱ遺跡である。野沢Ⅱ遺跡では主に古代の竪穴住居跡やそれに伴う土師器、須恵器が出土しており、古代集落としての性格を見出せた。ここでは野沢Ⅱ遺跡の竪穴住居跡、および住居状遺構から出土した古代土器を分類し、その年代的な位置づけを行い、あわせて各遺構の時期的な位置づけと変遷を概観する。

古代土器の分類について

野沢Ⅱ遺跡の竪穴住居跡から出土した古代土器には土師器杯、高台付坏、甕、須恵器坏、甕、壺がある。分類については各種別のうち、比較的出土量の多い坏と甕を対象として行う。なお、分類にあたっては、形態を指標として、以下のような項目を設定した。

(1) 坏

形態

- A: 胴部が直線的に外へと開くもの、若干、内湾気味になるものも、断面形が逆台形を指向するものは、この分類に含める。
- B: 胴部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は直線的、あるいはやや内湾気味を呈するもの。断面形が碗形を指向するものはここに含める。
- C: 胴部が内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反するもの。
- D: 底部側縁で一度屈曲し、口縁部へと内湾しながら立ち上がるもの。

(2) 甕

形態

- A: 調整にロクロを使用せず、口縁部は外反するもの。
- B: 調整にロクロを使用し、口縁部は外反するもの。
- C: 調整にロクロを使用し、口縁部が外反しながら立ち上がり、端部が上方に引き出されるもの。
- D: 調整にロクロを使用し、口縁部が外反しながら立ち上がり、端部が上下に肥厚するもの。

上記の基準を元に、竪穴住居跡、および1号住居状遺構から出土した土器を分類し、集計した。報告書掲載遺物の分類については、観察表(第11表)に記載した。加えて不掲載遺物についても集計した。なるべく同一個体と思われるものは避け、小片でも口縁部の形態などが分かる資料は集計対象とした。掲載・不掲載両方の集計結果は第23表の通りである。

まず坏についてはB類を主体とし、各遺構から出土している。B類は対象とした7棟から86点出土しており、全体の8割以上を占めている。一方、A類、C類は少ない。どちらも全体の1割以下であり、3号住居跡、5号住居跡、1号住居状遺構にいたっては、B類以外出土していない。A類とC類を少ないなかで比較した場合、A類は1号住居跡と2号住居跡とでしか出土していないが、一方C

類はその他に4号住居跡と7号住居跡からも出土している。また1号、2号住居跡からの出土量を比較するとA類よりもC類の方がやや多い。これらを踏まえると、野沢Ⅱ遺跡においては坏B類はC類との関連性の方が高いものと思われる。D類については、後述する西川日・塚向Ⅱ遺跡から

第23表 古代土器口縁部計測表

	坏				合計	罎				合計
	A	B	C	D		A	B	C	D	
1号住居	2	13	4		19	3		6		9
2号住居	2	58	8		68	17	10	14	1	42
3号住居		3			3	3	3			6
4号住居		3	1		4	1	4	5	4	14
5号住居		2			2	4	3	3	1	11
7号住居			6	1	7	4				4
1号住居跡			1		1			2		
合計	4	86	14			32	20	30	6	

ら出土した土器群との比較から設定した分類項目であるが、野沢Ⅱ遺跡からはみつからなかった。

罎については全体的にみてA～C類が多く、ただしいずれかが突出するというわけではない。遺構ごとにみてはA類が多かったり、C類が多かったりと、一様ではないことが伺える。したがって罎の形態的特徴は地域的なものや時期を反映したものではないと考えられる。

これらの点を踏まえ、坏の形態から野沢Ⅱ遺跡出土土器の時期を考えてみる。

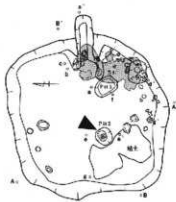
西澤正晴氏は奥州市水沢区中半入遺跡から出土した古代土器を検討し、本報告書で示した分類でいうところの「A→B・C→D」への変遷を示した（岩埋文2004第443集）。その上で西澤氏は北上市西川日・塚向Ⅱ遺跡から出土した古代土器を検討し、A・B・C類のみの時期（西川日・塚向Ⅱ1期）と少量だが内黒にD類が含まれるようになる時期（西川日・塚向Ⅱ2期）についてを9世紀後半に位置付けている（岩埋文2005第464集）。西川日・塚向Ⅱ遺跡と野沢Ⅱ遺跡とは約10kmの位置にある。野沢Ⅱ遺跡から出土した上述の土器群は西澤氏の言うB類が多く、西川日・塚向Ⅱ1期の土器群に類似する。したがって、野沢Ⅱ遺跡の土器群は9世紀後半に位置づけられるものと思われる。また野沢Ⅱ遺跡から出土した坏の組成比についてみてみると、遺構ごとに比較した場合、大きな差異は認められない。したがって土器の出土しなかった6号住居跡は定かではないが、そのほかの竪穴住居跡・1号住居跡遺構についてはほぼ同時期に存在していたものと考えられ、今回の調査でのみの結果であるが、野沢Ⅱ遺跡の古代集落は9世紀後半の範囲でのみ存在した集落であることが推定できる。

2 ロクロ・ビットを伴う竪穴住居跡について

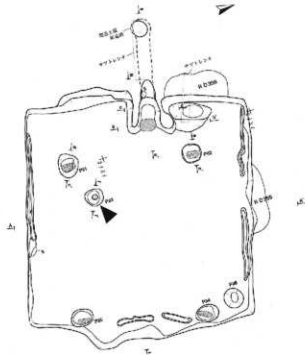
野沢Ⅱ遺跡の調査で床面にロクロ・ビットを伴う竪穴住居跡が1棟（2号住居跡）見ついている。ロクロ・ビットは土器製作の際に回転台を支えるために設置された施設と考えられ、床面に掘りかたを掘り、回転台の心棒を埋め込む細い穴が認められる。ここでは、野沢Ⅱ遺跡から見つかったロクロ・ビットを伴う住居跡について、岩手県内にみられる同様な事例との比較検討を行い、その特徴についてみていく。

北上市野沢Ⅱ遺跡（第93図）

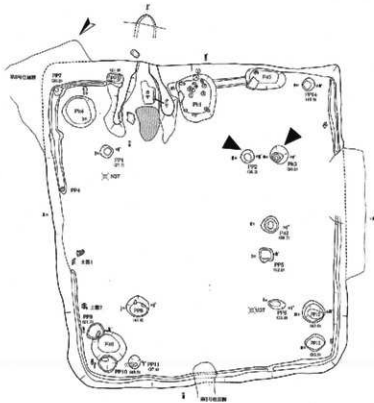
9世紀後半の竪穴住居跡7棟のうち、1棟（2号住居跡）の床面からロクロ・ビット1個を検出した。今回の調査区は細長く設定されており、検出できた各竪穴住居跡もそれぞれが離れて位置するため、集落内での2号住居跡の空間的な位置づけが定かではない。20m南西には4号焼成遺構が位置し、他の遺構と比べると近い位置にあるので、関連性が伺える。2号住居跡は一辺4.5mの方形を呈し、形態、規模は他の住居と大差ない。しかし出土した遺物量は、見つかった竪穴住居跡のなかでもっとも多い。また出土遺物の中では床面上からは土鈴が1点見ついている。この住居内から土鈴とロク



久慈市鼻館跡 E 4-f 住居跡



盛岡市細谷地遺跡 15 次調査 RA153



盛岡市芋田Ⅱ遺跡 6 号住居跡

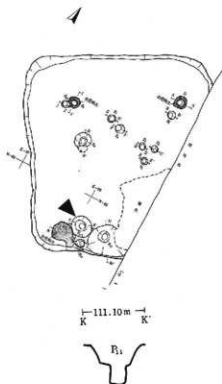
▲ …ロクロピット

住居平面 : 1 : 100

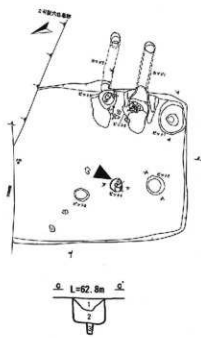
ロクロピット断面 : 1 : 50

第92図 ロクロ・ピットを伴う竪穴住居跡(1)

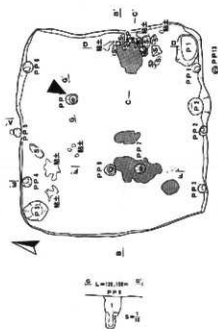
2 ロクロ・ピットを伴う竪穴住居跡について



紫波町杉ノ上Ⅱ遺跡B J 56住居跡



北上市野沢Ⅱ遺跡2号住居跡



北上市榎孫遺跡Ⅳ B 5号住居跡

▲・・・ロクロピット

住居 : 1 : 100

ロクロピット断面 : 1 : 50

第93図 ロクロ・ピットを伴う竪穴住居跡(2)

ロ・ビットとが一緒に見つかる事例は比較的認められることが判明している(岩埋文2007第498集)。ロクロ・ビットは床面の中央からややカマドへ南西方向へ寄った場所に位置する。直径38cm、深さは24cmを測り、さらに底面には心棒をさし込んだ小孔が認められる。埋土中には土器片が多量に混入されているが、心棒の痕跡は無く、抜いた後に埋没したものと思われる。

盛岡市芋田Ⅱ遺跡(第92図)

8世紀から10世紀初頭まで続いた集落遺跡で、なかでも9世紀後半から10世紀初頭の竪穴住居跡は18棟見つかり、そのうち1棟(6号住居跡)からロクロ・ビット2個が見つかり、6号住居跡は一辺7~8mの方形を呈し、見つかった住居群のなかでは大型に属する。出土した遺物量は他の住居と比べて多く、出土土器には墨書土器や刻書土器も含まれる。ロクロ・ビットは床面の中央からカマド側の南西寄りに2個並んだ状態で見つかり、直径が35cmと50cm、深さは50~60cmを測る。埋土中には心棒の痕跡は認められないので、抜いた後に埋没したものと思われる。

盛岡市細谷地遺跡(第92図)

古代の大規模集落で、平成18年度までに150棟以上の竪穴住居跡が調査されている。主に9世紀後半から10世紀初頭に帰属する竪穴住居跡が多い。平成18年度第15次調査においてロクロ・ビット1個を伴う竪穴住居跡1棟(RA153)が見つかった。遺跡から見つかる住居群はほぼ密集しており、したがってロクロ・ビットを伴う竪穴住居跡の空間的な位置づけは定かではない。ただし住居の南側に隣接して焼成遺構の可能性がある土坑群が密集している。住居は一辺6~7mの方形を呈し、他の竪穴住居跡と大差ない。しかし出土遺物は他の住居と比べて顕著に多い。ロクロ・ビットは住居の床面中央からややカマド寄りの南西側に位置する。直径50cm、深さは24cmを測る。埋土に心棒を抜いた痕跡が認められないので、抜いた後に埋没したものと思われる。

久慈市鼻館跡(第92図)

8世紀初頭から10世紀後半まで続いた集落遺跡で、調査により22棟の竪穴住居跡が見つかり、そのうち10世紀に帰属するE4-h住居跡からロクロ・ビット1個が見つかり、E4-h住居跡は一辺3.6~4.1mの隅丸方形を呈する。規模は他の住居跡と大差ない。出土した遺物量は報文中に記載された出土土器一覧表をみる限り、調査された住居跡のなかで最も多い。紡錘車も出土している。ロクロ・ビットは床面中央やや南西寄りから見つかり、直径約50cm、深さは約40cmで、底面にロクロの心棒を設置したと思われる小孔が認められる。心棒の痕跡は認められず、抜いた後に埋没したものと思われる。また小孔の底面には白色粘土が貼り付けられており、心棒のおさえと考えられている。なおロクロ・ビット周辺の床面には灰黄褐色粘土が貼床として敷き詰められ、「土器製作に使用しなかったものを貼り床として用いた」と考えられている。

紫波町杉ノ上Ⅱ遺跡(第93図)

9世紀前半から後半にかけての集落遺跡で、調査から9世紀前半の住居1棟と後半の住居跡2棟が見つかり、そのうち9世紀前半に帰属する竪穴住居跡(BJ56住居跡)からロクロ・ビット1個が見つかり、BJ56住居跡は一部調査区外に及んでいるが、一辺4.41~5.37mの方形基調である。出土した遺物量は同時期に帰属する住居跡がないので、比較できないが、須恵器の大甕が多く出土し、また土鍾や土鈴も見つかり、ロクロ・ビットは住居の南角付近に位置する。おそらくその東側の大きなビットは貯蔵穴と思われ、さらにその東側の調査区外にはカマドがあるものと推定される。従ってカマド脇に設置されたロクロ・ビットの可能性が考えられる。直径55cm、深さ23cmを測り、底面には深さ18cmの心棒を設置する小孔が認められる。土層断面から心棒と思われる腐食土(4層)が認められ、心棒あるいは回転台自体をそのままにして、住居が廃絶されたものと思われ

れる。また1層中には須恵器片が多量に混入していると報告されている。この点では野沢Ⅱ遺跡と類似する。また小孔の底部には白色粘土が敷き詰めてあり、心棒のおさえと考えられる。ロクロ・ピットの周辺には白色粘土が床面上に堆積している。

北上市煤孫遺跡(第93図)

平安時代の竪穴住居跡が13棟見つかっている。そのうちの1棟(IV B 5号住居跡)からロクロ・ピット1個が見つかった。住居跡の周辺には焼土を伴う土坑が数基認められる。遺物が伴わないので、土器焼成遺構かどうかさだかではない。IV B 5号住居跡は5.5×4.9mの方形を呈する。遺物の出土量は「大コンテナ1箱ほど」とあり、他の住居跡と比べても多い方である。ロクロ・ピットは床面中央やや北東寄りに位置する。直径55cm、深さ50cmを測り、底面には回転台を抑える深さ40cmの小孔が認められる。埋土に心棒を抜いた痕跡が認められないので、抜いた後に埋没したものと思われる。周辺には白色粘土がロクロピットは周りを白色粘土で固めてあり、同様な白色粘土は床面上からも検出している。この白色粘土は分析結果から同住居跡から出土した土師器の胎土成分と類似しているようである。

以上のように、ロクロ・ピットを伴う竪穴住居跡を概観してきた。各住居跡の共通項をあげてみると

- (1) 住居の規模や集落内での配置状況に規則性はない。
- (2) 周辺に土器焼成遺構や焼土を伴う土坑が認められる。
- (3) 住居から出土する遺物量は他の住居と比べ多い。
- (4) ロクロ・ピットは床面のほぼ中央に位置する(ややカマドに近い方が多い傾向がある)。
- (5) ほとんどの場合、ロクロ・ピットには回転台の心棒の痕跡は認められない(抜き取られたと考えられる)。
- (6) 床面上に白色粘土が堆積する、あるいは貼床として敷き詰められる。
- (7) 土鈴などの特殊な土製品を伴うことがある。

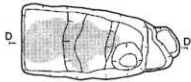
今回、管見に触れた事例は県内では6例にすぎず、古代集落においてロクロ・ピットを伴う住居跡は必ずしも存在するわけではない。ロクロ・ピットを伴う住居跡の機能を「土器製作工房」と考えた場合、その少なさから、通常の土器製作は、屋外を選択されることが多いことが考えられ、ロクロ・ピットを伴う住居跡で製作される土器はやや特別な意味を持つものなのかもしれない。遺構からの土器出土量が多いことや土鈴などの特殊な遺物が出土することがその裏付けとなりうる可能性があるが、いずれ今後、もう少し事例が増えれば、さらに詳細なことがわかるものと思われる。

野沢Ⅱ遺跡2号住居跡は上記の(2)以外の全ての項目に当てはまる。周辺には後述する土器焼成遺構の可能性が高い遺構も分布しており、2号住居跡で土器製作が行われていた可能性は高いが、ここで製作されていた土器が特別なものであるかどうかは定かではない。床面上から土鈴が出土しているが、土鈴については、製作工房に伴う遺物であるという説と祭祀関連の遺物であるとする説がある。いずれにしても、2号住居跡は他の住居跡とはやや異なる位置づけをもった遺構と捉えることができそうである。

立花南遺跡 (8世紀後半～9世紀前半)



SX044



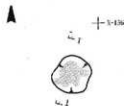
SX005



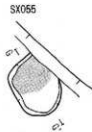
SX016



SX053



SX054

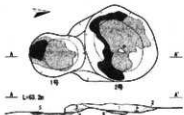


SX055



SX056

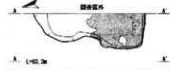
野沢Ⅱ遺跡 (9世紀後半)



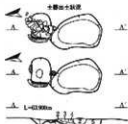
1・2号焼成遺構



3号焼成遺構



4号焼成遺構



5号焼成遺構

縮尺 1:6

3 焼成遺構について

はじめに

野沢Ⅱ遺跡から5基の焼成遺構が見つかった。これは埋土中に多量の焼土粒・炭化物を含み、また遺構底面や壁面の一部が焼成により赤色化した遺構について、他の土坑とは区別し、「焼成遺構」として報告したものである。遺構自体には遺物がほとんど伴わないため、遺構自体には特徴があるのに対し、その機能・用途については判断しづらい遺構と言える。同じ北上市域からは立花南遺跡から同様の遺構が見つかった。今回、立花南遺跡から見つかった焼成遺構と比較し、またその特徴から、その性格を探ってみる。

野沢Ⅱ遺跡から見つかった焼成遺構

野沢Ⅱ遺跡は9世紀後半に営まれた集落遺跡で、今回の調査では該期の堅穴住居跡が7棟見つかった。焼成遺構は5基みつかり、供伴する土器が少ないので、詳細な時期についての判断は難しいが、出土した土師器などからおおむね堅穴住居跡と同じ時期に帰属するものと思われる。

野沢Ⅱ遺跡で見つかった焼成遺構の分布状況は5号焼成遺構が他の焼成遺構とはかなり離れた場所に位置するが、その他の焼成遺構はおおむね堅穴住居跡が分布する範囲から見つかった。各焼成遺構の間隔は20～50mを測り、群集しているとは言いが、今回は狭い調査範囲での遺構検出であり、調査区外にもまだ焼成遺構が存在する可能性がある。

焼成遺構の規模を、長軸方向の長さからみると、重複によりこわされている1号焼成遺構を除き、2～4号焼成遺構では13～18mの範囲に収まり、5号焼成遺構は1.0mである。したがって大きな差は認められない。形態では不正な楕円形(1～3・5号焼成遺構)と方形基調(4号焼成遺構)とに二分される。燃焼範囲についてみると、底面の片側半分とその周辺の壁面で燃焼範囲がやや落ち窪んでおり、燃焼範囲の及んでいる壁面は直立気味に立ち上がるのに対し、その反対側の燃焼範囲が及んでない部分の壁は大きく外へと開く、スロープ状を呈する点が共通する。したがって、大きさや、遺構の構造上に、何らかの規則性があり、それに基づき構築された可能性がある。

出土遺物は土師器の薄片が見つかる程度であるが、2・4号焼成遺構では粘土塊が出土している。

立花南遺跡から見つかった焼成遺構(第93図上)

北上川東岸の自然堤防上に立地し、標高58m前後を測る。野沢Ⅱ遺跡との距離は約6.5kmである。

北上市教育委員会により平成13年、平成15年、平成17年に調査が行われ、報告書が刊行されている(北上市教育委員会2002・2004・2007)。

立花南遺跡は8世紀後半から9世紀前半にかけての集落遺跡であり、該期に比定される堅穴住居跡が合わせて13棟見つかった。焼成遺構は7基みつかり、遺構に共伴する土器が少ないので、細かい時期判別が難しいが、おおむね堅穴住居跡と同時期に帰属するものと思われる。

遺跡内での焼成遺構の分布状況については、おおむね堅穴住居跡の周辺に位置する。特にSX005長軸の方向が、隣接する堅穴住居跡(SI001)のカマド軸方向とほぼ同一方向であることや、SX058とSI051とで出土土器が接合したことから、堅穴住居跡との関連性が窺える。

焼成遺構の規模については、長軸方向の長さが1m前後から2.5mまでと様々であり、形態も方形・長方形を意識したもの(SX044・SX005・SX016・SX056)と不整な楕円形(SX053・054)に二分される。また燃焼範囲はSX054を除き、すべて底面の片側半分とその周辺の壁面である。底面は燃焼範囲が一段高くなるもの(SX044・SX005・SX053・SX055)が多いが、燃焼範囲が低

くなるもの(SX016)や平坦なもの(SX054・SX056)も認められる。

このように立花南遺跡から見つかった焼成遺構は、全体的にみて、堅欠住居跡に関連する遺構であることは確かであろうが、形態や規模に規則性が認められない。また共存遺物は、非ロクロの土器器小片のみである。

2 遺跡から見つかった焼成遺構の機能・用途について

以上、野沢Ⅱ遺跡と立花南遺跡からみつかった焼成遺構について概観した。2遺跡からみつかった焼成遺構を比較すると、①形態が方形と楕円形に二分されること、②燃焼範囲が遺構底面の片側半分に偏ること、③壁の片側がスロープ状であることなど、共通点が認められるので、ほぼ同一の機能を有する遺構であろうと思われる。一方、大きさなどに差異も認められるが、野沢Ⅱ遺跡が9世紀後半であるのに対し、立花南遺跡は8世紀後半から9世紀前半であるので、時期差による差異である可能性も考えられる。

これら焼成遺構の機能・用途についてであるが、形態などの有り様から、通常の上坑とは異なり、いわゆる「土器器焼成遺構(土坑)」の可能性が考えられる。ただし、土器器焼成遺構はその認定が難しく、過去の研究においても意見の分かれるところである。近年、金子昭彦氏は土器器焼成遺構と認定するための一つの方法として、以下のような条件項目とそれぞれの「得点」を設定し、当てはまる項目の合計点で、焼成遺構としての認定の度合いを示している。

土器器焼成遺構認定の条件項目

- (1) 平面形は円形ではない(+1点)
 - (2) 底面にスロープかテラスが認められる(+1点)
 - (3) 遺構の深さが40cm以上である(-1点)
 - (4) 遺構に土器器焼成遺構に使う道具や焼成失敗品が伴われる
(+12点。遺物が不明瞭なら(7)に該当する)
 - (5) 土坑内に灰が認められる(+1点)
 - (6) 遺構内に群集する(+1点)
 - (7) 遺構の周辺20mの範囲から土器器焼成に関連する遺構・遺物(たとえばロクロ、ロクロ・ピット、粘土採掘坑、白色粘土、焼成失敗品など)が見つかった(+6点)
- ・12点以上：土器器焼成遺構と断定 6～11点：土器器焼成遺構の可能性が高い
3～5点：土器器焼成遺構の可能性あり

野沢Ⅱ遺跡の場合、(1)、(2)、(7)に当てはまり、また出土した粘土塊を「焼成失敗品」と考えれば、(4)も当てはまるので、合計点数は20点で、「土器器焼成遺構と断定」できそうであるが、ただし、焼成失敗品をいわゆる「剥片土器」などに限定すると、そのような遺物が出土していないので(4)は当てはまらず、合計点数は8点にとどまり「土器器焼成遺構の可能性が高い」となる。野沢Ⅱ遺跡から見つかった焼成遺構に確定とまでいかないが、高い確率で土器器焼成遺構と考えて良さそうである。一方、立花南遺跡は(1)、(2)、(3)、(6)が当てはまり、合計点数は4点なので、「土器器焼成遺構の可能性あり」ととどまる。ただし、前述の通り、遺構の形態や燃焼範囲のあり方など、野沢Ⅱ遺跡の焼成遺構と共通点も見いだせるので、土器器焼成遺構である可能性も高いものと考えられる。

北上市域では該期の集落遺跡が多くみつかり、今後の調査で、焼成遺構がさらに見つかりければ、より詳細に、この遺構の性格がわかってくるものと期待する。

参考文献

- 岩手県教育委員会 1979 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
(岩手県文化財調査報告書35集)
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1992 『鼻前跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第171集)
1994 『黒糸遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第196集)
2004 『中平入遺跡第2次発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第443集)
2005 『芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第457集)
2005 『西川Ⅱ・塚向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集)
2006 『金附遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集)
2007 『野田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第506集)
2008 『市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川原敷遺跡・六日市遺跡・
八天北遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第543集)
2008 『細谷地遺跡第15次調査発掘調査報告書』
(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第514集)
- 岩手県立博物館 1982 『岩手の土器』岩手県立博物館
- 北上市 1968 『北上市史』第1巻 原始・古代(1)
- 北上市教育委員会 2002 『立花南遺跡』(北上市埋蔵文化財調査報告書第49集)
2003 『立花南遺跡(2003年度)』(北上市埋蔵文化財調査報告書第63集)
2007 『立花南遺跡(2005年度)』(北上市埋蔵文化財調査報告書第82集)
- 北上市立博物館 1984 『縄文人の折り-柳山・八天・九午橋-』(北上川流域の自然と文化シリーズ6)
1986 『古代仏教の霊地 国見山極楽寺』(北上川流域の自然と文化シリーズ8)
2000 『和賀氏一族の興亡』(総集編)「岐路の世界と-所懸命の拠点-城館の時代」(北上川流域の自然と文化シリーズ21)
- 小林 達雄 1989 『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 滝沢村教育委員会 1986 『湯舟沢遺跡』(滝沢村文化財調査報告書第2集)
- 島原弘征・村田淳 2007 『土器・陶磁器の容姿-計測の目的と方法について-』
『紀要』XXVI(財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

写 真 图 版



遺跡全景(南から)



調査区全景(南から)



基本層序(西から)

写真図版1 遺跡全景、基本層序



1号焼土遺構検出状況(南東から)



1号焼土遺構断面(西から)



作業風景



1号土坑断面(南東から)



2号土坑(東から)



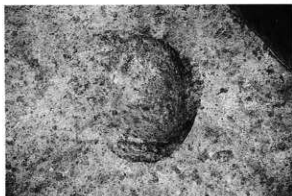
2号土坑断面(西から)



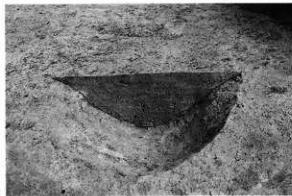
3号土坑(東から)



3号土坑断面(西から)



4号土坑(西から)



4号土坑断面(西から)



5号土坑(南東から)



5号土坑断面(南東から)



1号溝(南から)



1号溝断面(南から)



2号溝(北から)



2号溝断面(南から)



3号溝 (北から)



3号溝断面 (南東から)



3号溝断面 (南西から)



4号溝断面 (北東から)



5号溝断面 (北東から)



6号溝 (北東から)



6号溝断面 (北東から)



7号溝断面 (北から)



調査区全景①(南から)



調査区②(東から)



調査区③(東から)

写真図版 5 調査区



基本層序①(北から)



基本層序②(北から)



基本層序③(南から)

写真図版6 基本層序



写真 (北から)



断面 (北東から)



床面遺物出土状況 (南東から)

写真図版7 1号住居跡(1)



ビット1 遺物出土状況(北から)



カマド発掘(北東から)



カマド断焼部断面(東から)

写真図版8 1号住居跡(2)



完掘 (北西から)



断面 (南西から)



土鈴出土状況 (南西から)

写真図版9 2号住居跡(1)

貯蔵穴土器出土状況(西から)



ロクロビット(東から)



カマド1・2完掘(北西から)



写真図版10 2号住居跡(2)



完掘(南西から)



断面(北東から)



須恵器出土状況(北東から)



完掘(西から)



断面(北から)



カマド完掘(北から)

写真図版 12 4号住居跡(1)



カマド断面 (南西から)



カマド土器出土状況 (北西から)



地床伊検出状況 (東から)

写真図版13 4号住居跡(2)



完掘(南西から)



断面(北から)



土器出土状況(北西から)

写真図版14 5号住居跡(1)



カマド完掘 (南西から)



カマド断面 (西から)



カマド支脚出土状況 (南西から)

5号住居跡地床炉検出状況(北西から)



6号住居跡完掘(東から)



6号住居跡断面(西から)



写真図版 16 5・6号住居跡



完掘(南から)



断面(西から)



カマド完掘(南から)

写真図版 17 7号住居跡(1)

カマド断面(南東から)



カマド土器出土状況(南から)



カマド煙出し土器出土状況(北西から)





先掘 (南東から)



断面 (北から)



土器出土状況 (南から)

写真図版 19 1号住居状遺構

1号掘立柱建物跡完掘(南から)



2号掘立柱建物跡完掘(南東から)



3号掘立柱建物跡完掘(東から)



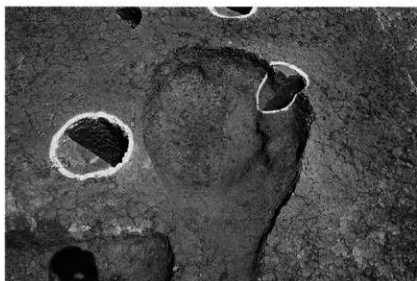
写真図版20 掘立柱建物跡



1・2号焼成遺構完掘(南から)



1・2号焼成遺構断面(南東から)



3号焼成遺構完掘(南西から)

写真図版21 焼成遺構(1)

3号焼成遺構断面(南西から)



4号焼成遺構完掘(北東から)



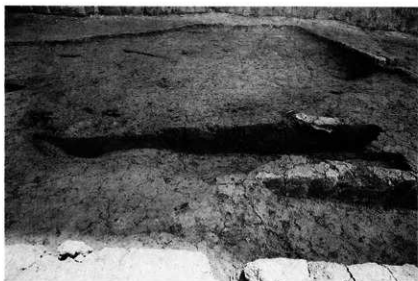
4号焼成遺構断面(南西から)



写真図版22 焼成遺構(2)



5号焼成遺構完損(南から)



5号焼成遺構断面(西から)



5号焼成遺構土器出土状況(南から)

写真図版23 焼成遺構(3)



1号土坑完掘(北東から)



1号土坑断面(北から)



2号土坑完掘(東から)



2号土坑断面(西から)



3号土坑完掘(北から)



3号土坑断面(西から)



4号土坑完掘(北から)



4号土坑断面(南から)



5号土坑完掘(北東から)



作業風景



6号土坑完掘(南西から)



6号土坑断面(東から)



7号土坑完掘(南東から)



7号土坑断面(南東から)



8号土坑完掘(西から)



8号土坑断面(南から)

写真図版25 土坑(2)



9号土坑完掘(東から)



9号土坑断面(東から)



10号土坑完掘(北から)



10号土坑断面(南西から)



11号土坑完掘(東から)



11号土坑断面(南東から)



12号土坑完掘(南西から)



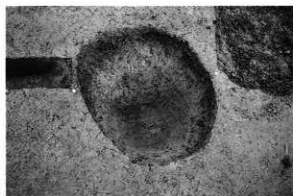
12号土坑断面(北東から)



13号土坑完掘(西から)



13号土坑断面(北から)



14号土坑完掘(北から)



14号土坑断面(北西から)



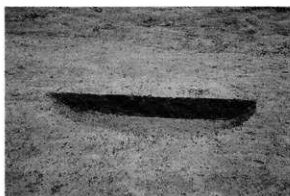
15～18号土坑完掘(北から)



15号土坑断面(西から)



16号土坑完掘(南から)



16号土坑断面(南から)

写真図版27 土坑(4)



17号土坑断面(南から)



18号土坑断面(南から)



19号土坑完観(北から)



19号土坑断面(南から)



20号土坑完観(南から)



20号土坑断面(南西から)



21号土坑完観(北東から)



21号土坑断面(南東から)



21号土坑・ローム土、焼土粒分布状況(南から)



21号土坑土器出土状況(南東から)



22号土坑完掘(東から)



22号土坑断面(北から)



23号土坑完掘(南から)



23号土坑断面(南から)



24号土坑完掘(南西から)



24号土坑断面(南西から)

写真図版29 土坑(6)



25号土坑完掘(南西から)



25号土坑断面(南西から)



26号土坑完掘(南東から)



26号土坑断面(南西から)



27号土坑完掘(南西から)



27号土坑断面(南西から)



28号土坑完掘(西から)



28号土坑断面(西から)



29号土坑完掘(南西から)



29号土坑断面(北から)



30号土坑完掘(西から)



30号土坑断面(北から)



31号土坑完掘(北西から)



31号土坑断面(南から)



32号土坑完掘(東から)



32号土坑断面(南から)

写真図版31 土坑(8)



33号土坑完掘(北東から)



33号土坑断面(南西から)



34号土坑完掘(南西から)



34号土坑断面(南西から)



35号土坑完掘(東から)



35号土坑断面(東から)



36号土坑完掘(南から)



36号土坑断面(東から)



37号土坑断面(北から)



38号土坑断面(南東から)



39号土坑完掘(東から)



39号土坑断面(東から)



40号土坑完掘(東から)



40号土坑断面(西から)



41号土坑完掘(北東から)



41号土坑断面(西から)



42号土坑完掘(北から)



42号土坑断面(東から)



43号土坑完掘(北西から)



43号土坑断面(北西から)



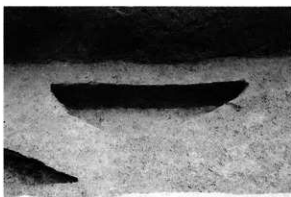
44号土坑完掘(北東から)



44号土坑断面(南西から)



45号土坑完掘(東から)



45号土坑断面(西から)



46号土坑完掘(東から)



46号土坑断面(南西から)



47号土坑完掘(南から)



47号土坑断面(北から)



48号土坑完掘(東から)



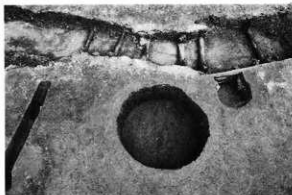
48号土坑断面(南から)



49号土坑完掘(北東から)



49号土坑断面(北西から)



50号土坑完掘(南西から)



50号土坑上板出土状況(南から)



51号土坑完掘(北東から)



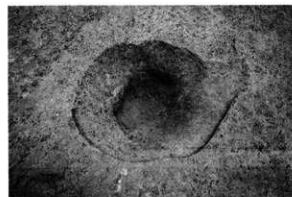
51号土坑断面(南から)



52号土坑完掘(北東から)



52号土坑断面(南から)



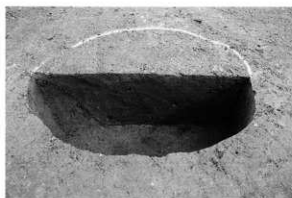
53号土坑完掘(南西から)



53号土坑断面(南西から)



54号土坑完掘(東から)



54号土坑断面(西から)



55号土坑完掘(西から)



55号土坑断面(西から)



56号土坑完掘(西から)



56号土坑断面(南から)

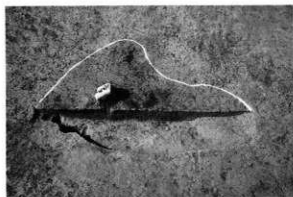


57号土坑完掘(西から)



57号土坑断面(南から)

写真図版37 土坑(14)



58号土坑完掘(南から)



58号土坑断面(南から)



畝間状遺構断面1(北東から)



畝間状遺構断面2(南西から)



畝間状遺構断面3(北東から)



畝間状遺構断面4(北東から)



畝間状遺構断面5(北東から)



畝間状遺構断面6(南西から)



畝間状遺構 1 (北から)



畝間状遺構 2 (北から)



畝間状遺構 3 (北から)

写真図版 39 畝間状遺構 (2)



1号溝完掘(南から)



1号溝断面(南から)



2号溝完掘(南東から)



2号溝断面(南東から)



3号溝完掘(北西から)



3号溝断面(南東から)



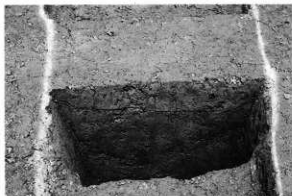
4号溝完掘(北から)



4号溝断面(北から)



5号溝完掘(北から)



5号溝断面(南から)



6号溝完掘(西から)



6号溝断面(西から)



7号溝完掘(北から)



7号溝断面(南東から)



8号溝完掘(南西から)



8号溝断面(北から)



9号溝完掘(南から)



9号溝断面(南から)



10号溝完掘(北西から)



10号溝断面(北から)



11号溝完掘(南から)



11号溝断面(南から)



12号溝完掘(南東から)



12号溝断面(東から)



13号溝完掘(北西から)



13号溝断面(北から)



14号溝完掘(北から)



14号溝断面(北西から)



15号溝完掘(北から)



15号溝断面(北から)



16号溝完掘(北から)



16号溝断面(北から)



17号溝完備(東から)



17号溝断面(東から)



18号溝完備(東から)



18号溝断面(西から)



19号溝完備(東から)



19号溝断面(東から)



20号溝完備(西から)



20号溝断面(西から)



21号溝完掘(東から)



21号溝断面(東から)



22号溝完掘(東から)



22号溝断面(西から)



23号溝完掘(北東から)



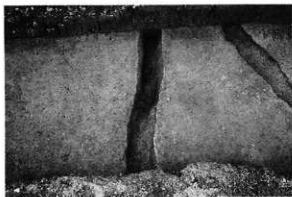
23号溝断面(南西から)



24号溝完掘(東から)



24号溝断面(東から)



25号溝完掘(東から)



25号溝断面(西から)



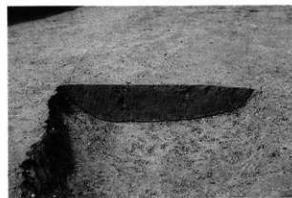
26号溝完掘(東から)



26号溝断面(西から)



27号溝完掘(南東から)



27号溝断面(南東から)



28号溝完掘(西から)



28号溝断面(北から)



29号溝完掘(北から)



29号溝断面(南から)



30号溝完掘(南東から)



30号溝断面(北から)



31号溝完掘(南から)



31号溝断面(北から)



32号溝完掘(南東から)



32号溝断面(南から)



33号溝完掘 (南西から)



33号溝断面 (南西から)



34号溝完掘 (南西から)



34号溝断面 (南西から)



35号溝完掘 (西から)



35号溝断面 (西から)



36号溝完掘 (西から)



36号溝断面 (西から)



37号溝完掘(南西から)



37号溝断面(南西から)



38号溝1完掘(南から)



38号溝1断面(南から)



38号溝2完掘(西から)



38号溝2断面(西から)



38号溝3完掘(西から)



38号溝3断面(西から)



39号溝1完掘(北西から)



39号溝1断面(北西から)



39号溝2完掘(東から)



39号溝2断面(東から)



39号溝3完掘(西から)



39号溝3断面(南西から)



39号溝4完掘(東から)



39号溝4断面(南西から)



40号溝完掘(南西から)



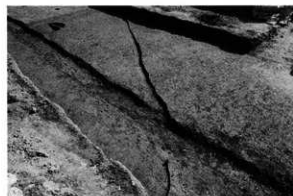
40号溝断面(西から)



41号溝完掘(南から)



41号溝断面(南から)



42号溝完掘(北西から)



42号溝断面(南から)



43号溝完掘(南から)



43号溝断面(南から)



44号溝完掘(東から)



44号溝断面(南から)



45号溝完掘(北から)



45号溝断面(南から)



46号溝完掘(南から)



46号溝断面(南から)



47号溝完掘(南から)



47号溝断面(南から)



48号溝完掘(南東から)



48号溝断面(南東から)



49号溝完掘(西から)



49号溝断面(西から)



50号溝完掘(南から)



50号溝断面(南から)



現地説明会風景



「子供達への招待状」事業



1号性格不明遺構完掘(北東から)



1号性格不明遺構断面(南西から)



旧河道(VII J区・西から)



旧河道断面(南西から)



柱穴状土坑群(VII H区・南西から)



柱穴状土坑群(VII H区・南から)



柱穴状土坑群(VII H区・南から)

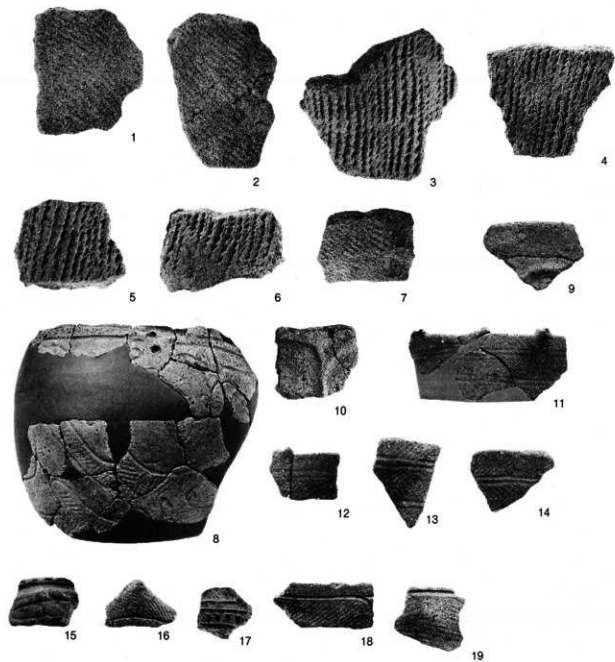


柱穴状土坑群(VII H区・北から)

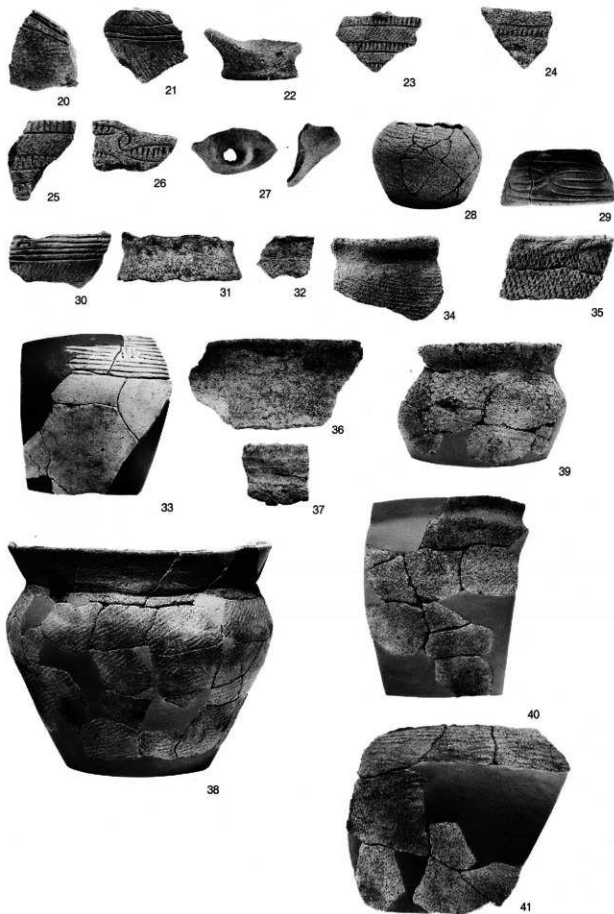
野沢Ⅰ遺跡



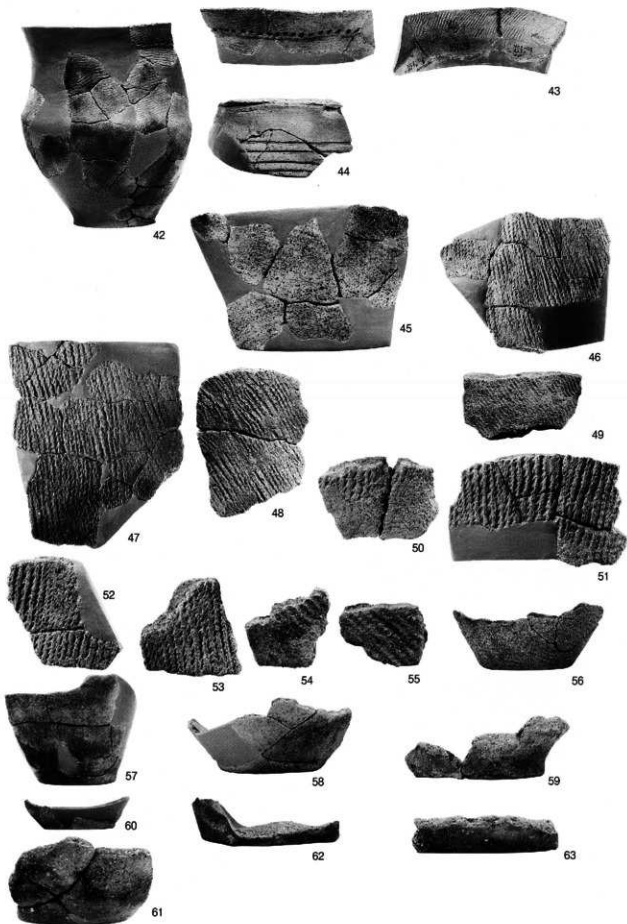
野沢Ⅱ遺跡



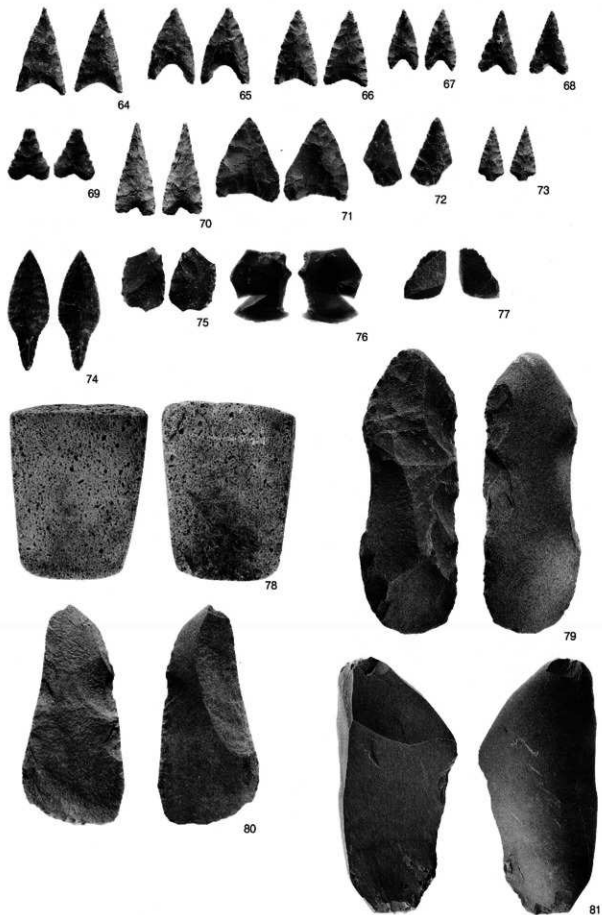
写真図版55 野沢Ⅰ遺跡出土遺物、野沢Ⅱ遺跡2・3土坑、遺構外出土縄文土器(1)



写真図版56 遺構外出土縄文土器(2)



写真図版57 遺構外出土縄文土器・弥生土器



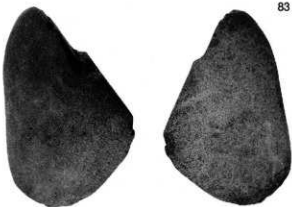
写真図版58 遺構外出土石器(1)



82



83



84



85



86



87



88

写真図版59 遺構外出土石器(2)



89



90



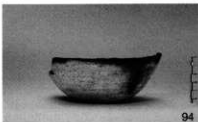
91



92



93



94



97



100



101



102



103



104



105



106



107



108

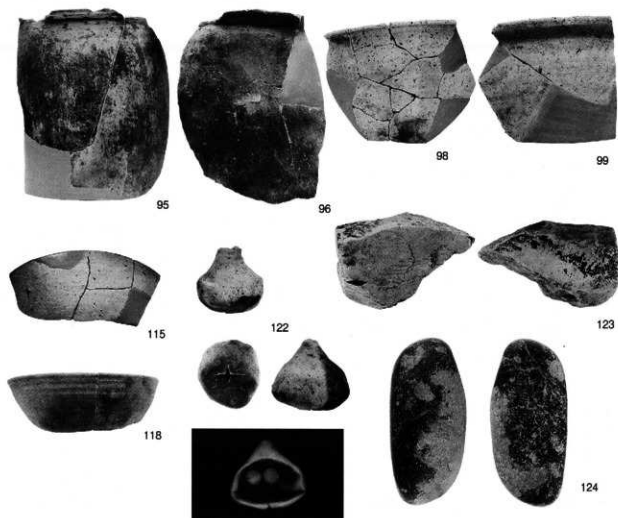
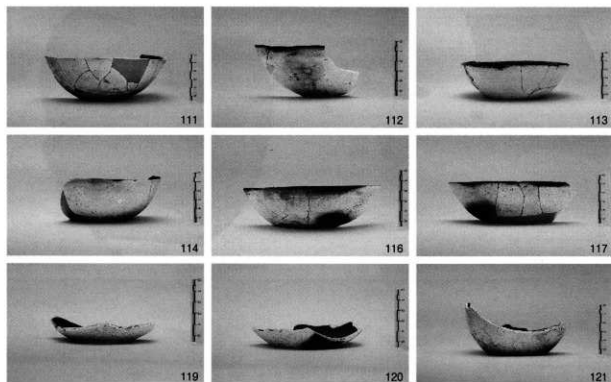


109

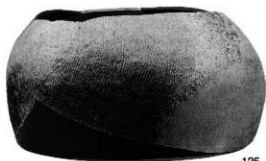


110

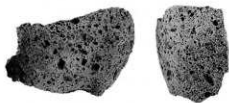
写真図版60 1・2号住居跡出土遺物



写真図版61 2号住居跡出土遺物



125



126



127



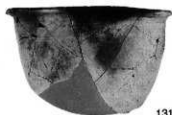
128



129



130



131



132



133



134



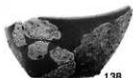
135



136



137



138

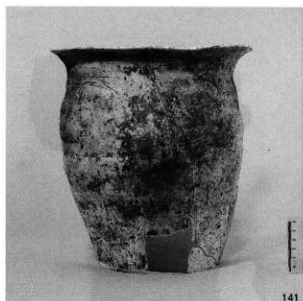


139

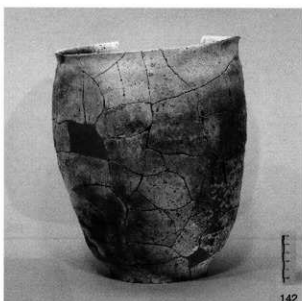


140

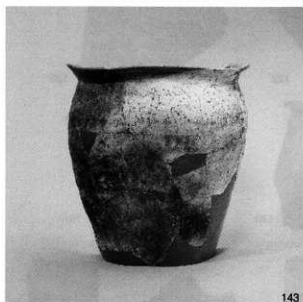
写真図版62 3～5号住居跡出土遺物



141



142



143



146



144



145



147



148



149



150



151



152



153



154

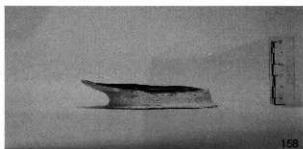
写真図版63 7号住居跡、1号住居状遺構、焼成遺構出土遺物



155



157



158



156



159



160



161



162



163



165



166



167



168



169



170

写真図版64 焼成遺構、土坑、溝、遺構外出土遺物



171



172



173



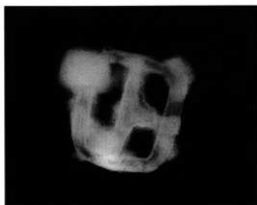
174



174



175



175



調査区全景(上が北東)



調査区現況(北西から)



基本土層



1号陥し穴(北から)



1号陥し穴断面(西から)

写真図版66 調査区、基本土層、1号陥し穴



1号溝 (西から)



1号溝断面 (西から)



2号溝 (西から)



2号溝断面 (西から)



3号溝 (南東から)



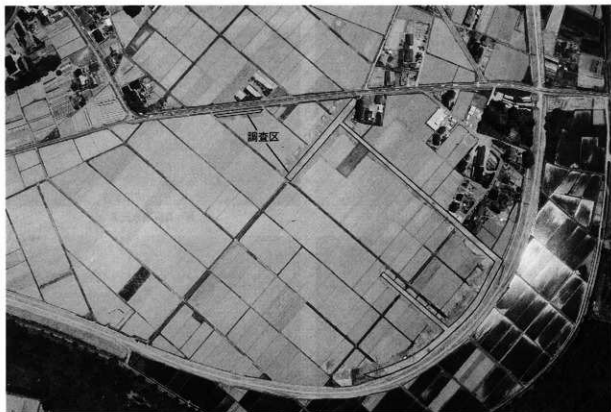
3号溝断面 (南東から)



4号溝 (南東から)



4号溝断面 (北西から)



調査区全景(上が北東)



調査区現況(南西から)



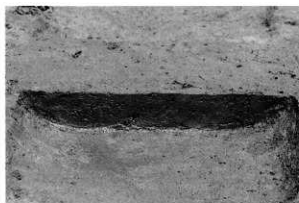
A区基本土層



B・C区基本土層



1号溝(南西から)



1号溝断面(南西から)



2号溝・1号柱穴状土坑(東から)



2号溝断面(東から)



3号溝(北から)



3号溝断面(南から)

写真図版69 基本土層、1～3号溝、1号柱穴状土坑



4号溝(南東から)



4号溝断面(南東から)



5号溝(西から)



5号溝断面(西から)



6号溝(南東から)



6号溝断面(南東から)

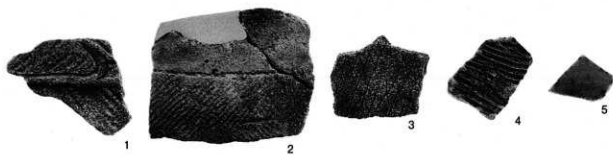


遺物出土状況(南東から)

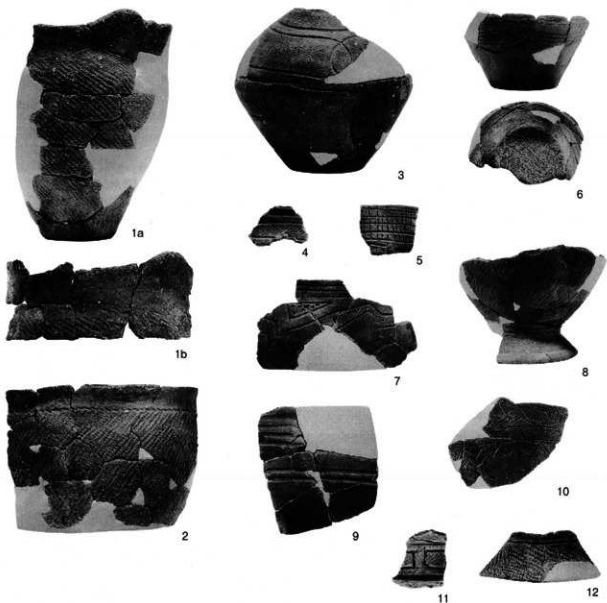


調査風景(南西から)

戸塚遺跡



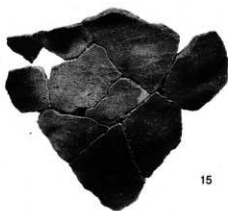
舟渡Ⅰ遺跡



写真図版71 出土遺物(1)



13



15



17



14



16



18



19



20



21

写真図版72 出土遺物(2)



調査区全景(上が北東)



西側調査区近景(南西から)



東側調査区近景(北東から)



基本土層(南東から)



1



2

写真図版73 調査区、基本土層、出土遺物

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名								
編集機関								
所在地								
発行年月日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
のぞか1いせき 野沢Ⅰ遺跡	いわてけんあきたかみしらか 岩手県北上市更木 ちわり 2地割31-1ほか	03206	ME46-1386	39度 20分 18秒	141度 09分 03秒	2008.09.01 ～ 2008.10.16	666㎡	経営体育成 基盤整備事 業更木新出 地区事業に 伴う緊急発 掘調査
のぞか2いせき 野沢Ⅱ遺跡	いわてけんあきたかみしらか 岩手県北上市更木 ちわり 17地割25ほか	03206	ME46-2306	39度 20分 14秒	141度 08分 48秒	2008.04.09 ～ 2008.10.16	11,313㎡	経営体育成 基盤整備事 業更木新出 地区事業に 伴う緊急発 掘調査
のぞか3いせき 戸桜遺跡	いわてけんあきたかみしらか 岩手県北上市更木 ちわり 10地割25ほか	03206	ME46-1354	39度 20分 24秒	141度 08分 53秒	2008.06.16 ～ 2008.07.31	2,295㎡	経営体育成 基盤整備事 業更木新出 地区事業に 伴う緊急発 掘調査
ふなと1いせき 舟渡Ⅰ遺跡	いわてけんあきたかみしらか 岩手県北上市更木 ちわり 6地割16ほか	03206	ME46-1390	39度 20分 14秒	141度 08分 36秒	2008.04.11 ～ 2008.07.04	7,150㎡	経営体育成 基盤整備事 業更木新出 地区事業に 伴う緊急発 掘調査
ふなと2いせき 舟渡Ⅱ遺跡	いわてけんあきたかみしらか 岩手県北上市更木 ちわり 5地割79ほか	03206	ME46-1390	39度 20分 14秒	141度 08分 36秒	2008.06.02 ～ 2008.08.12	453㎡	経営体育成 基盤整備事 業更木新出 地区事業に 伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
野沢Ⅰ遺跡	散布地	平安時代 時期不明	土坑5基、焼土遺構1 溝7条		隣接する野沢Ⅱ遺跡の権限とつながっている。			
野沢Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代	竈し穴4基、貯蔵穴1 基、土坑2基	縄文土器、石器	平安時代の集落跡、ロクロビットが 付属する竈穴住居跡から十鈴1点が 出土。墨書土器川七。			
	集落跡	平安時代	竈穴住居跡6棟、住居 状遺構1棟、土坑58 基、焼成遺構4基、歌 間状遺構7条	土師器、須恵器、土 鈴				
		時期不明	掘立柱建物跡3棟、溝 50条					
戸桜遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴1基	縄文土器	遺物はいずれも流入。			
	散布地	平安時代		須恵器				
	散布地	近世		磁器				
		時期不明	溝4条					
舟渡Ⅰ遺跡 (岩手県南広域 振興局北上総合 支局農林部)	散布地	縄文～ 弥生時代		縄文土器・石器、弥 生土器	縄文後・晩期、晩期末～弥生前期、 古代の遺物が流入により、散布して いる。			
	散布地	古代		土師器、須恵器				
		時期不明	溝1条、柱穴状土坑1個					
舟渡Ⅱ遺跡 (岩手県南広域 振興局北上総合 支局土木部)			なし	縄文土器	遺跡の北限付近と思われる。			
要 約	今回調査を行った更木新山地区の遺跡群は主に古代の集落遺跡で、他に縄文時代の陥し穴や遺物が散布することから縄文時代の狩猟場としての性格をもつことが明らかとなった。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第567集

**野沢Ⅰ・Ⅱ遺跡・戸桜遺跡・
舟渡Ⅰ遺跡発掘調査報告書**

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査
および緊急地方道路整備事業更木地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成22年1月25日

発行 平成22年1月29日

- 編集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
- 発行 岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
〒024-8520 岩手県北上市芳町2-8
電話 (0197) 65-2734
岩手県南広域振興局北上総合支局上木部
〒024-8520 岩手県北上市芳町2-8
電話 (0197) 65-2738
- (財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235
- 印刷 株式会社 富士屋印刷所
〒020-0841 岩手県盛岡市羽場13地割30番10
電話 (019) 637-6391

